

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数六四枚）の記載あり」

目録

電信機及電気・地雷・水電〔電〕或ハ鉾山破裂法創設

齊彬公水戸中納言殿へ御書翰

非藏人日記

大坂木津川安治川二口之守衛ヲ敵ニス

安政紀事抄金銀貨交換事件

〔説小〕
〔安政五年ハルリス渡来ノ事情〕

以友輔仁説

安田助左衛門日記鈔

安政改元布令

茶説

医幣説〔幣〕

漫言一則吉田松陰

愚見書付全上

〔本文中にはなし〕
全上

〔説小〕
〔和蘭人琉球貿易ヲ懇請ス〕

齊彬公大廊下下之御部屋扣之儀承知之布達

水藩武田伊賀ト営中ニ於テ御對話

齊彬公御所御遙拜事实

考証土師庄十郎筆記

藩庁及諸届〔届〕ノ弊習ヲ匡シ玉フ

鎌田出雲紀事抄當中老女小野島密書（実ハ天璋院殿ノ親書）

八二 電信機及ヒ電気・地雷・水雷、或ハ鉾山

破裂法創設

電気ノ用法ハ安政三年丙辰ノ夏、江戸田町邸ニ於テ器械創製セラレ、澁谷邸ニ於テ瓶テ試ミ玉ヒ、同四年丁巳五月、御下国ノ際器械モ御下シ相成リ、尚モ修成シ、数十回ノ試験ヲ経テ、完全ナルニ至レリ、製造法ハ安政二年

乙卯ノ秋緒方弘庵・川本幸民、及ヒ杉田成郷等ニ翻譯ヲ命セラレ、器械ハ宇宿彦右衛門・肥後七左衛門・梅田市藏等田町邸ニ於テ製造セリ、初メハ器械ノ製造法及応用法不完全ナルニ依リ、其巧ヲ見ルコト能ハズ、数十回ノ試驗ヲ経テ、遂ニ其功ヲ顯ハシタリト、而シテ鹿兒島ニ於テ御本丸御休息所ヨリ二ノ丸探勝園、二ノ丸御庭池ノ名御茶屋ニ架線、日々試験シ、其功ヲ見ニ至レリ通信ハ鉛筆ヲ以テ記号スルノ機ナリキ、線ノ長サ凡ソ三百間計ナリ、綱糸ヲ以テ巻タルモノナリキ、同年九月十二日磯御邸へ琉球官吏(在番恩河親方、第 卷琉球密策ノ条参照スベシ)ヲ召サレ地雷・水雷等ノ拝見允サレタリ、地雷ハ二十四斤砲・二十拇臼砲(各)冬一門ニ裝藥シ、地中六尺バカリニ埋メ、水雷ハ木函ニ火藥五十斤バカリヲ納サメ、其ノ上部ニ木材数十箇ヲ縱横ニ層積シ、海中ニ沈メ、御邸内望嶽樓ニ電機ヲ裝置シ、通電セシニ發激ノ響山岳ヲ震動ス、水雷モ同シク發シ、許多ノ木材悉ク空中ニ飛揚セリ、之ヲ大試驗ノ嚆矢トス、而シテ後洋法ニ倣ヒ、鉱山発堀ニ用フヘキ旨命セラレ、山ヶ野金山又ハ谷山錫山、或ハ祇園洲砲台上ノ巖ヲ崩シ試ミ、許多ノ工費ヲ減削ス、此功ヲ見玉ヒ、大ニ御喜悅、益々研究スヘキ旨特命セラレ、而シテ後チ海防ノ為、水雷数十個ノ製造ヲ命セラレ、非常ノ

用ニ供ヘラレタリ、此ノ水雷ハ鹿兒島灣内ノ要衝ニ伏スヘキケ所ヲモ、予メ定メ置クヘキ旨ヲモ命セラレタリ、日本ニ於テ電氣ノ用法開ケタル、是ヲ權輿トス(市來廣貫紀事抄、第 卷琉球ニ於テ汽船買入、其他密策之事実ニ参照スベシ)

因ニ記ス、此時數多ノ水雷機ヲ製造セシメ、海防ノ用ニ供セラレ、集成館ノ倉庫ニ納メアリシヲ、文久三癸亥七月英艦侵入ノ際、櫻嶋ト沖乃小嶋ノ海狹ニ沈メタリシモ、英艦ハ沖乃小嶋ヲ放撃シテ、海狹ヲ通航セサリシ故、之ヲ任用スルコト能ハサリシハ遺憾ナリキ、之ヲ沈カメントスルニ方リ、衆人先公ノ卓見ニ感シタリ、其事実ハ文久三年七月英艦交戦ノ部第 卷ニ詳記ス、

八三 齊彬公水戸中納言殿へ御書翰(是ニ添フ本書ハ逸ス)

〔安政四年三月十五日〕

○この文書の見出しは誤りなり。本文書は安政四年三月十五日付島津斉彬書翰(松平慶永宛)なり。

琉球之義何モ不相分候處、此節飛船參候、去年九月末佛船老艘參候テ、直ニ帰帆之段申來候、兎角約条ニ相違之事色々申掛、以後右様之義有之時ハ、国王之恥辱ニ可相成段、品々申立候ヨシニ御座候、皇国ニテモ御

存知之トオリニハ、何分イタシ方無之候間、約条ニ基キ取計候外有間敷段申遣シ、天守教之事ハ、弥殿重ニ取計候様、急度申遣候事ニ御座候、万事手後ニ相成候得ハ、猶更難題申掛候間、手早ニ下知モ致度候得共、遠海ニテ行届兼、残念ニ奉存候、唐国弥朱氏盛ニ御座候段、評判申来候、賊船益多盛ニ候トノ事、佛人申候ヨシニ御座候、先此段申上候、以上、

別啓

三月十五日
〔旧幕府(戸川安宅)・昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂〕

八四 参考 非藏人日記〔安政四年〕

安政四年正月二日

所司代龍野侍從安宅脇坂朝臣参 内也、午半刻昇車寄而参着、于鶴間両役衆出會、其後更伝奏衆誘引、於候所之事如例、

安政四年四月十七日

蝦夷箱館最寄村々今度新田開発ニ付、從關東御年貢米之初穂進献也(老)但於車寄、自(台)伝奏雜掌受取

安政四年五月三日

學習院讀書之輩炎上以來無何讀書無之様相成、背御趣

意候次第敷ケ敷御事故、於同列若輩モ已前之通讀書可_レ在之、其人品番頭ヨリ可_レ申論相定之上、交名可_レ差出過日被

命、則奥端番々而取調、今度参席相願輩藤島信用・大賀宗敬・松元爲成等之交名并御会日讀書相願人々交名等、此日伝奏建通御御当番故、附進委細申入置之処、尚可及言上間、初参之者並讀書相願者共、来九日御会ヨリ勝手ニ参席并讀書等可_レ致旨被 命也、

八五 大坂木津川安治川二口ノ守衛ヲ敵ニス

大坂木津川・安治川口ノ守衛ヲ敵令ス、是ヨリサキ安政元年九月魯船大坂ニ入、諸侯ニ命シテ警備ス、爾後大坂海岸京地ニ接近スルヲ以テ、同年四月彦根ノ兵ヲ発シテ京師ヲ守リ、十一月又小濱・郡山・膳所・淀・篠山・高槻等ノ兵ヲ以テ京師ヲ守成シ、十月月砲台ヲ紀伊ノ加太、淡路ノ由良・岩屋、播磨ノ明石四所ニ築キ、安政三年七月砲台ヲ大坂木津川・安治川両口ニ築キ、是ニ至テ高松・松江ノ二藩ヲシテ、兩海口ヲ守衛ス、先京師ノ守備ヲ敵ニシ、以テ震襟ヲ安シシ奉ランガ為ナリ、然レトモ京師ハ益關東ノスル所ヲ以テ怯劣トシ、議論激亢、不逞ノ徒

又或ハ之ニ乗シテ、東西ノ離間ヲ謀ル者アリ、水戸納言(徳川齊昭)大ニ之ヲ憂ヒ、屢意ヲ議奏三條納言ニ通シテ、以テ之ヲ(実方)調護ス、其意モト幕府ノ為ニ東西ノ睽離ヲ防クニ在リ、然ルニ幕府ハ疑テ京師ヲ煽動シテ、關東ヲ窺ムル者トス、是後來納言ノ危害ニ陥ル所以ナリ(ママ)(第一卷布達參照)

八六 安政紀事抄(金銀貨交換事件)

五月

下田奉行中村出羽守等更ニハルリスト条約ヲ議定シ、下田・箱館兩港米人ノ居留ヲ許シ、及ヒ金銀ヲ交換スルニ、其名称ニヨラス、量ノ輕重ヲ以テ平等交換スル事ヲ約ス、(ママ)第 卷參照スベシ、

八七 安政五年ハルリス渡来ノ事情(伊達宗城)

公へ質問書(明治廿三年七月)

先年ベルリ渡来之際、処置振、旧幕ヨリ三家始諸侯ノ意見垂問候処、水戸烈公見込余リ手強ク、(徳川斉昭) 冲モ実践難出来、於閣老頗当惑、内々順聖君・(島津吉彬) 春嶽君・(松平慶永) 福井藩主・(老中) 右見込御書面今少々穩便ニ御認改被成候様周所、阿部(阿部正忠)ヨリ煩談有之、三人ヨリ謁烈公陳情候所、終ニ三人之

心付ヲ書入候様熟談整、協議之末御建白案ニ加筆シ、其通り採用候ハ、右ハ嘉永何年何月頃ニテ、(ママ)且烈公建白案ニ三人心付書入候写有之哉、取調分リ居候得ハ、教示之様致度(伊達家御手留鈔)

八八 以友輔仁説(安政四年丁巳兼三亭年十八)

凡人非聖不能無過、但其過也改之為貴矣、人有過則自謂聖賢之事不能当也、区々之過何足為憂乎、是以其過也竟不能改矣、譬如護疾忌医終亡其身、呼不悟之甚矣哉、是所以終身不能克己也、故右之君子者必有争友、而善惡相責長短相資自修之功孜孜無怠焉、健健無息焉、苟有小過則如日月之蝕截然改之矣、乃君子所以有争友而德日進也、曾子有言以友輔仁信哉、交道之重如此、不可不察也、

八九 参考 伊地知季安紀事鈔

○この文書は、本文第四号文書と同文重複により略す。

九〇 参考 安田助左衛門日記鈔(安政四年)

安政四年丁巳正月十四日

内場向瀉肝付表調練武芸為見分、野村彦兵衛(荻野流師)

範、一名新流トモ唱へ、齋彬公御壯年ノ時野村ニ学ハシメ玉ヒシ故、少将様御流儀トモ唱ヘタリ、野村仲左衛門同道出立、諸所廻勤、嶋津刑部正純殿東目（大隅海岸）御請持場御見分ニ付、二月三日志布志ニテ御逢申上、同十九日鹿屋迄相附、廿三日帰府、

安政四年五月十四日

稅所七郎左衛門御軍賦役、田代孫九郎御軍役御家老座書役同列出水へ被遣候、十九日上様御下国ニテ御光着、廿日調練 御視（御覽ノ一名）首尾能相濟、廿五日帰府、

九月

下瀉出水辺ヲ云・西目加世田辺ヲ云フ御備組調練武芸為見分、坂元彦五郎御軍賦・長谷場助七御軍賦書役同道出立、十月十五日帰府、

軍艦ノ儀ハ海防第一ノ要器御座候処、列国御手初ニ御製造被仰付候儀、実以本朝未曾有ノ（符カ）御勲業ト難有次第奉存候、然ルニ本朝海国ニハ候得共、水軍ノ制度古來ヨリ相立不申、土分以上一手ノ將ヲモ海賊ト唱へ、

船乗ヲ卑シメ候国風ニ御座候間、西洋諸國ノ如ク貴威權門海軍ヲ貴ヒ、航海ヲ事トシ候様相成候儀ハ格別御制度不被相変候テハ、千百年ノ風習容易ニ移転仕間敷、西洋ニテハ陸軍ノ將ヨリモ水軍ノ將ヲ頭ニ置候由、海上ハ戦争ノミニ無之、平日風波ノ患モ有之事故、右之通り尤ノ事ニ候、兵士毎月安家銀三十円、又ハ二十円其身月給十円相渡筋見得、給分十分ニ無之候テハ、身命ニ拘候儀ハメツケ（勉務ノ通唱）薄事人情ニ御座候間、海軍ハ其人ヲ尊フシ、其俸ヲ豊ニシ、人氣相進候様十分ノ御宛行有御座度、勿論莫大ノ費用相掛造立相成候大船、空敷繫置候テハ国力疲弊仕、肝要ノ軍艦ナクテ不叶（ト脱カ）申事ハ乍存モ、製造ノ国有御座間敷、然ハ航海通商ハ富国強兵ノ基本ト奉存候間、於公辺旧來ノ御制度御變更有之、通商御免被仰付度御事ニテ、偏ニ御妙策奉仰候、此道相開候ハ、日ヲ遂（遂カ）ヒ、月ヲ重ネ、軍艦盛ニ製造、航海ノ術ヲ練習シ、地球中ヲ縦横仕、武威ヲ海外ニ震ヒ、夷賊畏服仕候様罷成候ハ、皇家無窮ノ御成業ト奉存候、

一軍艦十五艘

兵士千五百人

但老艘ニ百人ツ、ノ賦

年分屯人前四石宛

御切米六千石

但諸家内養料

三人賦ニシテ年分

御賄料米八千百石

但一人前一ケ年五石四斗ツ、

三人賦ニシテ年分

御賄料金貳万七千兩

但一人前一ケ年拾八兩ツ、

右ハ御当国ノ儀、軍艦十五艘製造御願濟(御願書第 卷)

ニ記ス)相成居、琉球島々へ掛専ラ海辺ノ御国柄、殊更

航海之道相開、盛ニ製造成立候ハ、右ノ人数ニテハ御

不足モ可有御座候得共、右ノ通相立置申度候、左候へ

八年分御賄料等当分ノ振合ヲ以テ被下候へハ、腰書ノ

通り相及申候、左候テ貴權ノ重職陸地ニ不劣様無之候

テハ、御制度可難相立奉存候間、水軍統領御一門方、

都督御家老衆、副都督若年寄衆・大目附衆、隊長大番

頭・御小姓与番頭・当番頭ノ内屹ト海軍ノ御役職被仰

付、其外監軍小頭等ノ諸役者被相定、夫々給分等モ御

吟味有御座度奉存候、勿論船製造方并船具・大砲・器

械、其外ノ雜費幾十万金ニ及可申哉、莫大ノ事御座候

付、イツレ航海・通商ノ道相開ケ、交易ノ利益ヲ以テ

相立不申候テハ、御国力ニ及兼可申哉ト奉存候、其内

ハ追々御製造ノ軍艦ニテ、運用方并天文・測量一切ノ

事共致練習、当時ノ御用途相勤居候ハ、御制度御変

更ノ御時節到来可仕奉存候、御領内海辺勝ニ候へ共、

其内甌島・長島・種ヶ嶋・屋久嶋・坊泊・久志・秋目

等ノ郷々ハ水軍ニ御仕立有之、脇本・出水郷ノ内阿久

根・西方、高城郡高城郷ノ内高江・串木野・加世田・

鹿籠・知覽・穎娃・山川・佐多・内ノ浦等ノ内へモ、

兵士ハ勿論其以下ノ者共へ船乗方致練習候様被仰付、

追々御軍艦全備仕候様有御座度奉存候、

右ハ水軍方御取シラヘニ付、差当ノ形行ハ追々表通吟

味申上置候通御座候、然レハ

皇国ノ御安危ニ相掛候海防第一ノ軍艦、御領内数万ノ

士數百年ノ御洪恩ヲ奉蒙居、聊否ヤ奉存訳ハ無御座候

へトモ、航海ノ道相開、御国用充実御宛行十分行届、

其上夫々嚴法ヲ設ケ、威愛并行ハレ、千載ノ龜鑑相成

候様、本朝未幾ノ海軍制度御建被為 在度御事ト乍恐

奉存候、僭越ノ罪千万奉恐入候へ共、猷芹ノ微意不殘
危言仕候間、宜敷御取捨奉希候、以上、

〔安政四年〕
巳十二月

右ハ十二月十一日口達委細相副、〔新納〕駿河殿へ差上置候、

十二月十八日

前日御小納戸ヨリノ御用致承知、今日罷出候処、御
紋付御上下拝領被仰付候、

十二月廿四日

二ノ丸奥向調練罷出致骨折候付、西洋布一反御内々頂
戴被仰付候、

〔石室秘稿にて校訂〕

九一 安政改元布令〔安政元年〕

○この文書は、本文第五七七号文書と同文重複により略す。

九二 茶説

水戸中納言齊昭卿述

人之於礼不可一日無也、大則邦国之經綸、小則閭閻之細
務、有礼則治、無礼則乱、雖小技亦然、余暇日為雲華之
技、其中自有礼節、癡之則事亦不可行也、而其可取者三

焉、可舍者三焉、以易得之器与難得之宝比焉、而不恥者

所以示以富貴交貧賤、其調鹿食為美味者所以示化不肖為
賢也、其聚古物以玩之者所以示慕古也、若夫垢清器、傷

金物、以贗古製者教民偽也、〔審力〕著・碗・蓋・博之千金、〔果

菜魚鳥競致珍異者教民奢也、品評器什極口贊揚者教民諛
也、舍此取彼斟酌以用之可謂善行茶礼者也欤、金玉之為

至宝獨象之為美味人之所同好也、我則不然以瓦木為具、
以芋栗為羞矣、富貴之為卑亦人所同然也、我則不然貴賤

共席不相褒促膝劇淡雖臣子相伍焉、是數者吾技之所独也、
質而雅和而不流君子之交也、孔子曰、礼者与其奢也寧儉

雖小技其庶幾乎、

九三 医弊説

凡事有善有惡、善端或生弊因循苟且必至、於善惡相混有
不可弁者、夫医藥者保命之大具死生存亡之所係也、不可
以不慎焉、記曰医不三世不服其藥其慮深矣、雖然未聞三
世相繼、必為良医者故有特達其術者則雖不三世將用之、
而其世官者亦非可癡、於是医官生員滋多各自為一家、而
其所見亦異矣、嗟不可慎哉、今夫王公大人一有疾、則衆
医會議有司監省、而後調藥以進焉、雖有良医不得一人專

任以施方劑、是其所以尊重而慎敬之者至矣、然其所以尊
 慎而或至于不起者何也、蓋其弊有三矣、衆醫之會議也、
 各尽其心知而充不言矣、然人心之不同猶面也、百醫診之
 則一証為証、是以群議喧然是非蜂起終莫一定、自非傑然
 致身尽忠洞然視垣一方人者不能弁駁異論以濟、其險難今
 任其職者皆斗筭庸醫固非有見識者、当其執七調劑時衆醫
 或点視則左顧右盼頰看遜言欲在此不讒在彼不嘲矣、唯急
 於免身緩於祛疾故、其所謂皆尋常寬藥柔劑、而未疏其原
 除其根、遂使奏理入膏肓能幸而經日弥月、則自以為其驕
 色太言俾晚情慢自稱國手而下敢容衆議、唯有貪賞賜之心
 也、已而變証橫出則危懼戰栗恐辜相及、聳肩屈身退遜辭
 讓或称着他醫欲令其代己以調藥、當是時先醫曰疾少癒後
 醫曰疾太劇其及覆無常如是、此其弊一也、衆醫固非無貪
 賞賜之意、其初各說主張証經弁方以僥倖、万一及其危篤
 則劍枉共手点然而退唯恐有執七調劑之命矣、是其弊二也、
 夫貪欲驕肆与執七顯己功者沈默不敢尽言似有卓識者其心
 庶幾、曠日持久落吾手寢譖調医欺罵左右、而得志則先医
 調劑切对其証、誹謗方端罵詈不已必以他方換之時示其異
 按、及至於大故則或婦咎於氣候或逃辜於後手其甚者曰命
 也、是与所謂刺人曰非我也兵也者何以異哉、是弊三也、

方夫衆醫会集群議沸騰而人不能弁其是非、以謂此中必有
 一是、然不能決其候是以禱諸鬼神、佞諸卜筮及讖緯術數
 無所不至、唯愿得良医以施良藥、籍天之靈幸得良医則其
 慶祥不可言矣、不幸而得庸医則再三而或瀆鬼神、卜筮不
 啻瀆鬼神卜筮或至使有天命者而短折其惑人也甚矣、嗚呼
 王公大人不可疾也、良藥滿筐良医滿堂然而良医不能尽其
 方良藥不能奏其効、當是之時雖欲為孤豚豈可得乎、其所
 以然者何也其所以尊敬重慎者至矣尽矣故疾則必受其弊、
 是其善端或生弊而遂至于善惡相混而不能弁者也不勝歎哉
 若夫士民雖不能得良藥而能全其性命者、無弊故蓋良藥之
 為驗也至蔽矣、故且所施一違則變為毒而其害尤甚矣、老
 子曰民之輕死以其求生之厚、諺曰不用藥勝中医宜哉、嗟
 予与其為庸医之手所翫弄而損其寿、不如飲湯茶以天命焉、
 雖然錄衆医予備不虞之疾也、若有可必用医藥則使其所任
 之一医調藥於目前以煎服焉、可矣不必會議也、

天保七年歲次丙申夏四月

景山

斯書ハ水戸公ヨリ齊彬公ニ旧作ナレトモ云々送致セラレシ
 モノナリト云、

九四 参考 漫言一則 吉田正陰^(松力)揖取素彦所藏

^(頭注)是亦今朝、一則^(一)次^(二)御書亦可被下矣、十九夜、^(松隆一)

天下未曾無忠義之士材能之臣也、但其三々伍々、離群

索居、欲起更有仆之者、欲進更有沮之者、上自 朝廷

之尊、下至幕府列藩、当今無不皆然 吾切憂之 忽觀

堀泉者而得之 凡偏地無不有水焉 然伏流沮洳 安得

灌溉之利乎 有一人焉 掘地得泉 隄之防之 衆渠埒

焉 天水集焉 於是乎汪々千頃陂矣 可以利灌溉也

今吾藩門地素隆 君公又賢銳意于勤王 臣庶之衆 有

忠義焉 有材能焉 是甚易掘之泉也 然猶有一二頑石

朽株 少為梗碍焉 切望四方之忠義材能旁來吾藩 戮

力協心 發石除株 混々發源又從隄防之衆渠所埒 天

水所集 灌溉之及其利博矣 豈独吾藩之私哉 別ニ

愚見

大高此四人トハ兼テ事ヲ議シタルヘシ、如何、大樂源

太郎・赤根武人・傳之輔・和作カ罪ハ、大高ヨリ^(九郎兵衛)

ヘ論シ、早ク免シタキモノナリ、左候得ハ大高モ立ト

コロニ四人ヲ得ルナリ、

大高弥々僕カ議ニ同シ、本藩ノ定論確定ノ上ナラテハ

不帰ト覚悟セハ、同志ノ土追々呼下スヘシ、亦吾党モ

^(采原)良藏ヘ一檄ヲ飛ハシ、九州ノ志士悉ク吾藩ヘ馳集リ候

様周施サセタシ、^(旋力)

右二条国相府肯ンシ可申哉、同志ト御談合可然候、

九五 愚見書付〔安政六年二月頃・文久二年〕

^(九五の一)御上京之上御参府ト云論、固妙、乍併今ノ江戸方ニテ

ハ京ニ退ラス、直ニ江戸ニ下ルコト必然ナリ、伏駢ニ

テ三條・大原其外三十人ノ有志ノ士ニ出合、夜抜カ病

称カ扱々見苦シキ極ナリ、其処ノ処置承タシ、前田^(孫右衛門)

宍戸・來嶋・中村從駕ノ策トモアラハ妙ナレトモ、是

モ恐ラクハ出来サルヘシ、桂ハ如何、内藤・北條ハ依

然ナルヘシ、然ルトキハ一旦御国ヲ離ル、トキハ無策

ト云フヘシ、清水ノ議論如何、^(圖書)

江戸ニテハ事体六ヶ布コトハ追々申如ク、君公様直

ニ井伊・間部・太田扨ト御弁論ハ危シ、江戸当職・江

戸家老・御直目付等直ニ大老・閣老ニ謁スルコト旧例

ハアルヘシ、只今ノ所ニテハ六ヶ敷ハナキカ、外夷ノ

処置ハ如何スルカ^(余カ对策象山ノ取)幕府ノ奸吏ハ如何ス

ルカ、水戸ノ二義士ヲ追返ス位ノ政府ニテ参府セハ、

細川ト万事御相談トモカ上策ト相成ルヘシ、^(可前三之充・三好實之介)

前田・宍戸・來嶋・中村ト内藤・周布・井上・長井・清水ト議論同体カ、同体ナラハ今更論スル迄モナク、長井・井上・周布発程ノ日定算アルヘシ、異論アラハ（議之）今日内藤ヲ論定スルトモ、御参府ノ上、内藤一人ノ力ニテ、長井・井上・周布ヲ論伏センヤ、地方ノ論兎ニ角竿頭ノ鈴ナリ、

僕カ罪ハ両府ノ撰充ヲ論シタカ第一ナルヨシ、然トモ撰充定ラサレハ、国事ハ如何論シテモ空論ナリ、撰充論云、

行相府手元前田、御政務座・手元座御用兼宍戸、御用所來島、御政務座來原・中村

再按スルニ、兼重ハ仍旧モ亦妙、御密用御祐筆桂・内藤、国相手元井上・周布ハ当分江戸邸ノ弊ヲ改ムヘシ、江戸邸ノ俗吏ハ一掃スヘシ、北條ハ早々召返シ、地方御所帯方現勤然ルヘシ、此論行ハレサレハ何ヲ議論シテモ画餅ナリ、且余カ議論ハ已ニ竭セリ、今更云フモ無益ナリ、然レトモ言ハサレハ罪ヲ畏ル、ニ近シ、故ニ言フノミ、此論不当ナラハ、吾大谷ニ於テ磔ニ被仰付度也、

議兩府撰充一篇、來島・桂等ヘ示スヘシ、

九五の二

以急使申遣候、今朝来自同藩之士令承知候処、其許一昨夜頃ヨリ外出、其余同志之衆中糺合存立候次第可有之哉ニ相聞候、右ハ全一挙之儀差定不相分候得共、自然横濱斬夷等之挙ニ於無相違ハ甚令心配候、抑兩使下向之事、誠ニ十年来之

叡慮今日可被

仰出大機會到来ニテ、既ニ令着府、近々入城之期ニ相成、真実於幕府尊攘之臣節立不立ハ既ニ最早一句之間ニ有之候、為臣子者之節儀相励候上、誠ニ幕府之挙動相決候上ニ可有之存候、只今無善惡事ヲ上候テハ、兩使奉

大命、是迄下向之趣意モ不相立、即時ニ外患相発、忽及戰爭候ハ必定之事、左候テハ未

勅命モ不相達、一時ニ事之敗ニ相成、第一播海之備モ無之、不時ニ

朝廷之御動揺ト可相成、痛心此事ニ候、依テ折角之大志暫時被猶予、近日

勅命伝達之上、幕府之挙動見定候テ、儀挙当然之事存候、左無之テハ忽兩使之不覚共相成、辱綸命候様相成

候テハ甚不安存候間、此儀得ト被加熟慮、今度之一舉暫時相止候様有之度、進退適義候者ニ、他日大志ヲ被遂候事必然ニ候間、能々思慮有之度候、仍以急使申遣候、熟慮之上心事可申承候也、

〔安久二年〕
十一月十三日

〔三條實美〕
〔縮小路公知〕

〔秋澤七〕
久坂玄瑞殿

始

九六 和蘭人琉球貿易ヲ懇請ス〔安政四年二月〕

長崎御奉行

荒尾石見守様

於出嶋〔長崎〕千八百五十七年二月廿五日〔安政四年〕
二月二日

一 和蘭領事官義コモドール名官、ペルリー名人琉球国王ト取

結候条約之義ニ付申上候、

一 琉球国王ト同様之条約取結候義、和蘭政府ノタメ至極肝

要之義ニ御座候、

一 右国之政務、薩摩大守并日本政府ニ関係イタシ候趣ニ

付、右国王ト和蘭国同様之条約、日本ニ於テ取結候儀相

叶候儀ト拙者相考申候、

一 依之冀望之次第、江戸高政府并薩摩大守へ御申立被下度謹テ奉願候、且拙者儀和蘭領事官并国王之大全權トシテ、日本ニテ右事柄御判断叶候儀ニ御座候哉、御沙汰被下度奉願候、右恭敬申上候、

於日本和蘭領事官

カヒタン

ドンクル、キユルシユス

右之通和解仕候、以上、

〔巳二月〕

岩瀬彌七郎印
檜林量一郎印

横文字本書一通添

長崎奉行へ達

琉球国王ト条約取結候儀、長崎地ニオヒテ會議条約取結

候義ハ難成、別段使節差向談判之儀モ、彼国之儀ハ日

本ニシタガウ国トイヘトモ、素ヨリ外国ノ事ニテ、条

約筋之儀イツレトモ難及差図候間、右之舍ヲ以テ挨拶

可被及候事、

〔大日本古文書〔幕末外國關係文書〕にて校訂〕

九七 齊彬公大廊下下之御部屋扣之儀承知之布

達〔安政四年〕

○この文書は、本文第六七七号文書の一と同文重複により略す。

陽明殿ニ被為入タリ、此時御滯殿ニテ、竹瀬ヨリ伏見ノヤウ御帰館被成候事、

御拝ノ折ノ仰ニアレ果タルヲ要目トス、

九八 水藩^{〔水〕}武田伊賀ト管中ニ於テ御対話

○この文書の見出しと内容は異なれり。本文書は、「鹿兒島県史料」第二卷の安政四年の部の第五七八号文書と重複する。よつて異なる本文末部の一参考「江夏干城親話記抄」のみを収める。

一〇〇 藩庁及諸局ノ弊習ヲ匡シ玉フ

御家老座

御勝手方御家老座

大目附座

御用部屋

九九 考証 土師庄十郎筆記

○この文書の大半は、「鹿兒島県史料」齊彬公史料」第二卷の安政四年の部の第五七八号文書と重複する。よつて異なる本文末部の一参考「江夏干城親話記抄」のみを収める。

右御座柄(板室ノ局ノ通唱) 江相勤候書役ハ、万端重立候御用向致取扱候、付テハ大家(門閥之通唱)之向ハ勿論、其外無用之方江常々出入等イタス間敷事候、御用之程ニヨリ自然ト及面会候向ハ左モ可有之、其外無益ノ交等決テイタス間敷候、畢竟御用向不洩様ニトノ儀

参考 江夏干城親話記抄

干城ニ拾四歳ノ春、^{〔安政四年五月〕}御下国ノ際、御微行ニテ、伏見ヨリ嵐山ニ被為入タル御趣意ヲ伺ヒ知ル人ナシ、御出立

御野服ナリ、御所ノ周田ヲ御廻リ被成、南門ノ前ニ御

跪キ被成御拜被成、草茫々タリ、ヒトイアレタル大変

草ハヘタリト頻ニ御歎息被遊、今ニ心ニ銘セリ、嵐山

ニ被為入前ノ如ク、干城ニ仰ニ、此秋ニ来ルト、其方

モ可召列、其時華蒔原書ノマ、モスルソト被仰タリ、

今度八十郎モ江夏直義召列トノ仰ナリ、又御立帰り、

無取違堅相守候様可申渡候、

但

町家・商賈ノ通唱之者共、猥ニ出入イタサセ候儀

ハヲノツカラ有間敷事ニ付、是又可申聞置候、

五月

(公密)
筑後川上

(久仰)
駿河新納

一〇一 参考 鎌田出雲紀事抄宮中老女小野島密書
実ハ天璋院殿ノ親書

極御内用先達、又此程モ細々御申上、天璋院殿へノ御書付儘ニ落手致、秘見之上則御内覽ニモ入奉候、先々上々様方御揃被遊、益

御機嫌ヨク被為成候御事、乍恐御メテ度有難奉存候、左様ニ御座候へハ、先達ヨリ度々御一大事(將軍継嗣ノ事ナラム)之御内用、御申上ノ御事ハ委細ニ申上奉、コナタ様(天璋院殿ヲ指ス)ニハ御承知様ニテ、先達ヨリ種々御心配様ニモ被遊候御事ハ、追々申入候トナリノ御事ニテ被為在候処、先月末御国元(鹿兒嶋)ヨリ御直ニ(齊彬公)モ細々御申上被遊、私(小野島自身ヲ云フ)へモ仰越候ニ付、段々御都合御次第ニテ被仰上トノ思召様ノ処、何分旧冬(安政三年)ヨリ色々上(將軍ヲ指ス)ニモ御心配様ノ御容体ニハ、日々御伺被遊候御事ナカラ(天璋院殿將軍へ御直ノ意ナルカ如シ)、コナタ様へハ、別段何故ノ御心配様トノ御咄シ等ハ不

被為在、色々御表方(閣老辺ヲ云フナラム)ニテノ御用向ニテ、御心配被遊候ト計ノ御咄、將軍ノ御話ニ被為在候へトモ、何分風評ニ色々被為聞候間、誠ニコナタ様ニモ被為在候、其御様子モ本様(將軍生母本壽院)御覽被遊候テ、何事モ御伺不被遊候テモ、カヘツテ色々御案事上モ被為在候御事ニ付、本様へ御伺被遊候御事ヲ極御内々御咄シ被遊候半トテ、御同所様ヨリノ御同咄シニハ、アメリカ一条ノ事ト、御表方ニテ色々ノ風評ニハ、水戸老公御事御ムホン、当時俗論派ノ流言ナリント云フノ御志御座候トノ評判等モ御座候由ニテ、右様ノ御事ニテ色々御心配様ハ被遊候御様子ナカラ、ケシテ深く御案事様被為在間敷、諸カウ方モ被為入候へハ、当時左様ノ御事御座候様成候事ハ、有間敷事ニテ候トノ御同咄シ被為在候、其後モ折々本様へハ上ニテ御内用被為在候テ、御人私ノ御事被為在候へトモ、トントコナタ様へハ何事モ御伺不被遊候付、先達ヨリ御申上鎌田カ密上申被成候御事、且又御国元齊彬公當時御在国ヨリモ仰上ノ御事モ御扣被遊被為成候テハ、トフモ仰上候之折御座無候間、殊之外御心配被遊、御直ニ御沙汰ハ御伺不被遊候へ共、前文之通本様ヨリ御伺

被遊候御様子モ被為在候付、先此御一条ハ何分本様へモ得ト御相談被遊候テ、御トモ〜ニ仰上候方御宜シク哉ト思召サセラレ(天壽院殿・本壽院ト俱々ノ意ナルガ如シ)、御沙汰ニ付、早ク御国元ヨリ御差出シニ相成候御書付(齊彬公)モ御返シ被遊候間、右之御書付ヲモ本様へ御覽ニ御入被遊候テ、段々御一大事ノ事故、御直ニ仰上ラレ度思召サセ候趣、且又御書付之通り実ニ尤ト御同意被遊候ハ、御トモ〜仰上置被下度ト細々御申上被遊候処、本様御沙汰ニハ、御書付ハ御尤ト思召、

コナタ様ノ思召ノ所モ、至極上(將軍)ヲ御大事ニ思召サセ、外ニ御事忝思召候ニ付、直ニモ仰上候之様ニ被遊度思召サセノ御事ナカラ、先々々様ニ御書付迄モ御覽被遊候上ノ御事故、上ヨリ御内々御伺被遊候御様子ヲ、得ト仰上ノミ候半トノ御事ニテ御咄シ被遊候ニハ、

実ハ此御事モ先達御伺被遊候、此節ハモツハラ御表(關老辺ヲ云フ)ニテ御評議中ノヨシ、則老中ヨリ先達越前守(慶永公)其外ヨリモ右様ノ書取ヲ以テ申上ラレ候所

上將軍ニテ思召様ニ叶ハセラレス、未タ御年モ(將軍年

齡ヲ云)過サセラレシト、申上候比ニモ不被為在候御事ニ、只今ヨリ御養君様ノ御事ヲ申上候ウヘニ、御年比モ御不似合之御方様(一橋公)ヲ申出候事、トフモ思召ニハ叶ハセラレス、何分

新御殿(天璋院殿ヲ云フ)ニモ、御上リ(御結婚ヲ云)ヨリ未御間モ不被為在候間、其内ニハ御出產モ被為在御事ヲ今シバラク御待被遊候テ、モシ御沙汰モ弥不被為在候ハ、其節御治定被遊候テモ御ヲソクモ不被為在候御事トノ上意ニテ、甚御不快之御様子様ノ所へ、又々堀田關老備中守ヨリ、薩州齊彬公ヨリ御申上ノ御書取ヲ差上

上覽ニ入奉候処、以之外御立服(將軍)様ニテ、薩摩守迄カノ様ニ同意ニ相成書取差上候御事、甚以相濟不申、只今

新御殿入ラセラレ候カク別統柄ノ事故、外々トモ違ヒ候ノヲ、イカ様成存寄之事哉ト御立服被遊、直ニ

新御殿へ御意ニテ、薩州齊彬公へ其事申遣サレ候ヤウト

上意可被遊候ト、誠ニ御立服ノ御様子故、トフモ御直ニ右様之事

上意被為在候テ、

新御殿ニモ御存様ノ御事ニテ被為在候へハ、御宜シク候へ共、何モ御存不被為在候所へ、左様ニ

上意トモ被為在候テハ、御心配ノ程モ被遊候半ト思召ニ付、先其

上意ハシハラク御待被遊候^テ得ト乍恐御考ノ上ニ被遊候様、薩州ニモ只今御近キ御統柄故ニ、御一大事ノ御

事御為筋申上ラレ候半トノ御事ヲ、右様ニ仰被遣候テハイカ、ニテ候半、夫々老中共ニモ得ト仰被為聞、弥

ノ御治定ノ上ニテ

新御殿へモ仰被為聞候御事モチロント思召上ラレ候ト段々本様ヨリ仰上ラレ候付、其後先ツ堀田婦府ノウエニテ、又々得ト

上意モ可被遊候 御沙汰ノ由、何分右様ノ

御立服中ノ御事故、只今此一条ヲ御直ニ又々仰上ラレ候テハ、ケシテ御不都合ト思召上ラレ候へハ、トフモ御宜シクトハ思召上ラレ兼候へトモ、又ケ様ノ御一大事御同遊ハシ候テ御案事上ラレ候、御直ニ仰上ラレ候、御直ニ仰上ラレ度ト思召上ラレ候御厚キ

新御殿ノ思召程モ御尤ノ御事ニテ候へハ、夫ヲ御留モ

被遊カタキ御事ナカラ、

上ニハ前文通りノ御事ニテ被為在候間、モシモ御存込ノ御ヲリニ御カン気モ被為在候間、御立服ノアマリ

御夫婦様（將軍・天璋院殿）御間柄ニモ、御不都合等ニ被為成候テハ、何トモ御案事上ケノ御事故トノ本様（

全上）ノ御サタノ由故、コナタ様仰上ラレ候ハ御尤サマノ事ナカラ、天下ノ御大事ト承リ、御家モ（島津家ヲ云

乎）御同様ノ御事ニ付、仰上ラレ候御事思召叶ワセラレス候テ、御シカリ等御蒙リ被遊候御事ハ、ケシテノ

御イトイ不被遊候間、トフカ一応仰上ラレ候上御直ノ御返答御伺不被遊候テハ、トフモ薩州へモ返答遣シ候事出来カタク候間、御心配モ被遊候ト少シ御ツヨク仰上ラレ候へトモ、何分々々本様ニハ先御留ノ御言葉ノ

ミニテ、先シハラク得ト御考ノ上、今一応御返答遊ハシ候迄ハ御待被遊候様ニ仰上ラレ候間、其日ハ夫切ニテ御帰リ被遊候所、其夜右ノ御書取ヲ一寸御拝借被遊度仰通之事ニ付、本様御方へ被遊候所、シハラクニテ御帰シニ相成リテ、アクル日、本様又々コナタへ被為入候テ御沙汰ニハ、昨日ノ御事夜センモ得ト御考アソハシ候へ共、御一存ニハトフモ御定メ兼被遊候付、極

御内々飯島老女ニハカク別ノ人故、秘見致サセ相談致候処、何事モ私ノ存寄通りニテ、何分ニモ

御立服中故、カレ是御案事申上奉候テ、トフモ此請ハ申上兼候由申上居候付、此上ハ

新御殿御掛リノ事ニ付、歌橋老女へ御相談被遊候テ、

其上歌橋存寄被為聞候、御定メ被遊度ト御返答被遊候

付、イツレモタレへ御相談被遊候テモ、トテモ仰上ラ

レ候様ニト申上候人ハ御座ナクト、思召サセラレ候間、

トヲソ御都合ヲ御伺被遊候テ、仰上ラレ度トモ思召サ

セラレ候御事ナカラ、トント左様ノ御都合不被為在御

コマリ被遊候マ、又歌橋へ得ト仰被為聞候テ、セヒ

トモ一応ハ仰上ラレ度ト思召サセラレ候ヘトモ、本様

之思召旁モ被為在候へハ、御身天璋院殿ハ御井イヒモ

不被遊候御事ナカラ、先同人ノ存寄モ御尋被遊度ト、

細々仰被為聞御相談被遊候テ、尤セヒ御請ハ仰上ラレ

候様ニ申上ラレ候様ニ段々御沙汰モ被遊候ヘトモ、同

人申上ラレ候ニハ、御尤様ノ思召サマナカラ、右様ノ

御事ハ何分御表方夫々ニ御役人等モ御座候テ、細々ノ

吟味モ御座候上ニテ申上候事ニテ、尤此書取モ差上ラ

レ候御事ニテ候へハ、

上(將軍ヲ云)ニモ御承知様ノ御事ニテ、何分思召ニ叶

ワセラレス候へハコソ、本様へモ右様ニ御サタモ被為

在候御事ト存上奉候、尤一印(一橋)之御事ハ先年モ左

様ノ御評議モ被為在様ニモ奉伺候御事御座候ヘトモ、

トカク奥向モ一統婦服イタシ不申(本壽院ヲ始宮中ノ女

中皆同シ、随テ閣老迄モ忌避セリト云フ)、誠ニ御ムツカ

シク被為在御事ニ付、トテモ仰上ラレ候テモイカ、可

被為在候哉、猶是迄モ随分右様ノ御事大名衆ヨリ手筋

ヲ以テ、奥向へ願出ラレ候御事モ御座候ヘトモ、夫ハ

一切御取上相成不申為御事故、思召様ノ所ハ深ク仰上

候ヘトモ、先キ〳〵薩州へモ此御事ハ能々御断仰被進

候方、御宜シク被為在候、何分御充分ノ御評議第一ノ

御事ニテ、ケ様ノ御事ハ奥向ニテハ御存様不被為在方、

御宜シクアラセラレ候間、ケシテ私へハカ様ニ御内々

御伺ワセ被遊候御事モ御サタハ御無用様、私モ是限り

他言ハ致シ不申候間、ヨモヤ上ヨリ此後御尋ノ上意御

座候トモ、御存様不被為在段仰上ラレ候方可然ト、ク

レ〳〵申上ラレ候、誠ニ色々御心配様モ被遊候ヘトモ、

カン心ノ御方様冷向(冷淡ノ意平)トテモ同様ノ人々右

様ノ心得故、万事是レニテ御スイ察被下候、何事モ夫

故ニ御扣目々々ト計ニテ、実ニ御為ニハ相成不申哉ト、
実ニ不存ナカラモ、只々心計モミ居候、

新御殿ニモ未御若年ニハ被為在候ヘトモ、ケ様ノ御一
大事候事ナトハ、御上リ前(御結婚御入城前ヲ云)ヨリモ、
細々薩摩守様ヨリ仰上ラレ候テ、兼テ御身ハ御イトイ
不被遊、万端天下ノ御為メ御家ノ御為コソ御上リ被遊
(御入城前公御訓誡ノ部参照スヘシ)、精々御勤ノ御心得
ニテ、実ニ万端御若年ニハ恐入候御氣生様故、何事ニ
テモ御為筋之御事ハ、御シツカリト御応答モアラセラ
レ候御事ニテ候ヘトモ、何分御上リ後未御年数モ、安
政二年拾二月十一日御入城、同十八日御結婚式奉行、
茲二三年不被為候ヘトモ、殊ニ寄リ候テハトフモ思召
様、ホカニモ御意被遊兼候御事トモ被為在、其上ニハ
上ノ御側向モ御存上ノヲリアヒモ(將軍)御座候間、メ
ツタナ事モ御直ニ仰上ラレ候テ、カヘツテ御不為ニ相
成候様成立トモ取クミ候テハ実ニ御大事ノ御事故、夫
モ案申上候ヘハ、タツテ申上候事モ出来不申、誠ニ身
体実ハクルシミ居候、中々外々ヨリノ思召ノ様ニハ実
ニ参リカネ、残念至極ノ御事様ニテ御座候、私ナトノ
氣生ニテ候テハ、トフモ

上ノ御附(將軍ヲ云フ乎)ニテ御座候ハ、身命ヲナケ
候テ御直ニ

新御殿ノ御名代ヲ申上タテマツリ度ト、山々存上ケタ
テマツリ候ヘトモ、
コナタ天璋院殿ノ御附ニテハ何事モ申出サレ不申、只
々縁ノ下ノ力モチトタトヘノトヨリ、心ニ残念々々ト
計存、実ニ昼夜ヲモシロカラス勤ノミ致シ候様成事ニ
テ御座候、夫ニ付候テモ、只々イトホ様ニテ色々思召
様ノ様ニ不被為在候御事ノミ故、御心配カヒモ不被為
在、誠ニ御心中様ヲ奉恐察候ヘハ、心痛イタシ候
計ニテ御座候、宜シク御察被下、トテモ右通ニテハ奥
向ノ御手入ニテハ参リ不申、差方ヲ何分御統御糺シ御
座ナク候テハ、此(此辺文義不解)御成就ハ御ムツカシ
クト存上タテマツリ候、本様ノ御兄弟衆越前守様(慶
永公)御方ヘハ手統モ存上居候、是ハ随分トフソ早ク、
夫レモ御手入可然ト存上タテマツリ候、御差方ニモ色
々心シテ(文意不解)、何レ水印(水戸烈公ヲ指ス)ヲア
シサマニ上ヘ申上候人御座候御様子ニテ被為在候、夫
レ故ニ別テノ一印(一橋公)ヲ御キラヒ被遊候御事ト伺
ハレ候、色々目ノ前ノ事計存候テ、色々申上タテマツ

リ候御事奉恐入候御次第ト、ナケカワシク存上タテマツリ候、先々右アラマシナカラ御様子ノミヲ申入候間、トフソ先方へ(鎌田ヲ云フナラン)宜シク御申伝へ被下度御頼申入候、御国元へモ追々御様子ハ申上タテマツリ候様奉申上度、前文ノ御通りハ細々申上タテマツリ候、左様御心得可被下候、下文欠、

按スルニ斯書宛名ナキ故、誰ニ送リタル分明ナラスト雖、鎌田カ記事中ニ在ルヲ以テ考フルニ、当時鎌田ハ西郷隆盛ト密命ヲ奉シ、天璋院殿ヲシテ継嗣ノ事ニ尽力シタルカ故、付従ノ老女小乃嶋カ名ヲ以テ、其実ハ天璋院殿ノ御親書ナリト云、其証ハ近衛家所蔵ノ同院ノ御書ニツボネト記シタル數十ノ書翰アリ、筆跡皆同一ニシテ、事柄モ悉ク西丸云々、或ハ御継嗣云々等ヲ以テ証左トス、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数七十五枚）」の記載あり〕

目録

学識アル者ヲ度外ニ措クノ弊ヲ矯正セラレント、折ニ触レテ諸士ノ品行識量等聞キ糺シ、自記セラレシ事実
 後醍醐院眞柱作文諸葛武侯論
 指宿二月田御入湯中ノ形況
 擊劍對抗仕合催サレシ事実
 吉井七郎右衛門へ琉球国ノ事実探訪ノ密命
 戊午ノ夏天下ノ形勢救フニ道ナキニ立到リタル趣西郷隆盛言上セシ事実、及ヒ英断為スコトアラントス

西郷隆盛ニ天下ノ機事密命ノ事実

篤姫君將軍家結婚ノ際国産ノ大硯献呈ノ事実

御近習ノ輩へ荻野流砲術ヲ学ハシメ玉ヒシ事実

高島四郎大夫茂救御懇遇吉井七左衛門・相良常長（旧名助大夫）（後八兵衛）

等ニ入門命セラレシ事実

御懇交ノ大小侯及ヒ有名ナル人士交際セラレシ人名

藏書ノ印章春叢文庫ト彫刻セラレシ因由

四書五經及ヒ左傳等ノ諸書翻刻封内士民ニ恵与シ玉フ

堤長哲卿風船図並詩歌贈進セラレシ事実

松山隆阿彌及ヒ大山綱良密仕セラレシ事実

灰液打紙製造

金銀鉦開掘奨励セラレシ事実

口之永良部島エ甘蔗作式開発之事実

鰯網（網カ）並魚油製造開カレシ事実

日州去川山柞灰製拡弘セラレシ事実

鹿兒島神社其他大社エ黄金製ノ幣奉納セラレタル事実

江戸御在邸中鹿兒島ノ事情探偵セラレシ事実

歐文ヲ学ヒ玉ヒシ事実

水藩武田伊賀ト營中ニ於テ国事ヲ談セラレシ事実

西郷隆盛洋辭云々御諫言ニ対シ御弁解ノ譚

病院創設御目論見ノ譯

〔脱ぶ〕山口不及殿様御直咄覚之記

〔脱ぶ〕造演館揭示

〔脱ぶ〕順聖公齊彬ノ遺事

〔脱ぶ〕田原陶吉記述鈔

〔脱ぶ〕考証江夏干城親話筆記

〔脱ぶ〕池田正藏話筆記

〔脱ぶ〕島津忠寛君親話

一〇二 学識アル者ヲ度外ニ措クノ弊ヲ矯正セ

ラレント、折ニ触レテ諸士ノ品行・識

量等聞キ糺シ、自記セラレシ事実

学制矯正ノ御書取ニ記サレタルカ如ク、学識アル者ハ該

ニ誰某ハ学者ナリ、誰ハ議者議論家ノ通唱通唱ナリトテ度外ニ措キ、

一種異様ノ人物ニ唱へ、或ハ僧侶ト同視セルカ如キノ風

習ニテ、学館ノ外ニ用ヲナサ、ルノ風ナリキ、故ニ学識

アル者寡ク、適々心掛アル者モ隠ニ修学スル等ノ風習ナ

リ、此ノ如キノ風俗ニ陥リタルハ、文化ノ初メ、椀山相馬・

秩父太郎等カ混乱アリシヨリノコトナリ秩父等カ事件ハ文化

タリ、故ニ門閥ノ輩ヲ初メ諸士ニ至ルマテ人材之シク、五年戊辰五月所刑セ

国家枢要ノ事ニ当ルモノナキヲ御歎息、種々御心ヲ竭サ

セラレ、折ニ触レ、事ニ属シテ、人々ノ行状・人望ノ有

無・学識ノ如何シヲ御聞糺シ、御手自ラ筆記セラレント

ナム、或ハ江戸ニ於テハ書生ハ詩文章ノ題ヲ下ケラレ、

毎々試ミ玉ヘリ、御国ニ於テモ造士館其外ヘモ御願ヲ下

ケラレ、和漢文詩歌何ニ依ラス試ミラレタリ、殊ニ安政

五年戊午ノ春二月、造士館其他ヘモ文題御下ケ試ミ玉ヘ

リ、其際後醍院彦十郎ヘハ諸葛武侯侯ノ題ヲ下サレタリ、

後醍院ハ有名ナル皇国学者ニテ、学风一変ノ御趣意ヨリ

シテ、造士館訓導職ニ拜シタリ、御達書ニ館中ノ者国学

不心得ノ向モ有之候ニ付、古事記・日本紀・令義解等説

講スヘキ云々、同三月日詳ナラス、御前ヘ被召出、古事記ノ講解

ヲ命セラレ、終テ国典ノ譚モ聞セ玉ヒシト、其他八田喜

左衛門ニモ萬葉集ノ講解、或和歌詠等命セラレントナム、

皇国学拡張セラレムト、鈴木重胤カ識量ヲモ後醍院・八

田等ヘ尋ネラレ、御召抱ノ御内旨ナリシト云フ後醍院

一〇三 後醍院眞柱作文諸葛武侯論記録

孔明ハ世々漢学ノ地ニ耕シ、漢家ノ沢ヲ蒙リ、賊起リ

漢危キノ時ニ生レ、イカテカ慨然トシテ、興復ノ志ナ

カラムヤ、サレハ地理ノ形勢ヲ精シクシ、八陣ノ方ヲ工夫シテ、天下ノ名士ヲ得テ、是ト俱ニセム事ヲ思ヒ、モシ得サラヌニハ、処士トナリテ性命ヲ全フセムトソヲモヒケム、幸ニシテ劉備ヲ得、コ、ヲモテ羽扇ヲ採テ陸中ヨリ出、丞相ノ位ニ備リ、虎ノ如クニ翺リ、竜ノ如クニ騰リ、政令明肅ニシテ、士民親ミ、孫・曹ノ豪賊弱劉ヲ私スル事アタハサル事二十余年、然ルニ朝儀專ラ安佚ヲコノミ、ナマシヒニ成敗利鈍ヲ論シ、日暮レ時ヲクレ、終ニ北征スヘカラサルヲ悲ミ、忠肝ヲ上表ニアラハシ、鞠躬シテ力ヲ竭シ、上ハ漢恩ニ報ヒ、下人事ヲ究メ、身死シテ後百世ノ師トナル、歴世ノ間、孔明ノ如キハ孔子ヨリコノカタ我未タ是ヲ聞カサルナリ、

是ヲ覽玉ヒ、簡短ニシテ、能ク其情意ヲ尽セリト、御賞詞拝承セリトナム、

一〇四 指宿二月田御入湯中ノ形況

安政五年戊午三月六日、朝六ツ時御供揃、御乗切ニテ指宿二月田へ被為入、御滞在、御入湯、同四月九日又御乗切ニテ御帰殿、

御乗切トハ御馬ニテ御供ノ者モ皆馬上ナリ、常ニ御光越ハ中途御休泊等ノ準備アリテ、沿道ノ各郷夫役其他費用少カラサル故、斯ク簡易ナルニハ幾干カ節儉、且ツ民間ノ幸ナリシヤ知ルベカラス、御滞在中幕府ノ蒸氣船山川港ニ渡來、和蘭人數名乗組、山川ニ於テ御対顔アリシト、而シテ鹿兒島へ回船碇泊中、上陸ノ際少年輩粗暴ノ挙動ニ及ヒタリ、其始末勝氏ノ書ト参照スベシ又ハ御訓諭ノ御書取ハ本紀ニ記ス、

一〇五 擊劍対抗仕合催サレシ事實

安政五年ノ春、二ノ丸演武場ニ於テ擊劍対抗仕合ヲ催サレ、御近習ノ輩其他擊劍修業者ヲ二手ニ分チ、赤白ノ印ヲ付ケ、仕合対実戦ニ擬セラレタリ、古ノ戰爭ハ斯クコソアリツラントノ仰ナリシトソ即チ現今大将禦キト唱フルモノ、如ク敵味方入り乱レテ抗戦スルハ面白キコトナリキ

一〇六 吉井七郎右衛門へ琉球国ノ事情探訪ノ密命

吉井七郎右衛門ハ幼名七郎ト唱ヒ、若年ノ頃ヨリ御近習ニ奉仕シ、後チ屋久島奉行ニ転セラレタリ、御近習ニ奉仕スルコト凡ソ二十余年、為人剛邁不屈忠肝

義胆ノ人トモ謂フモ誣言ニ非サルベシ、幼年ヨリ命ヲ奉シテ蘭学ヲ修メ、或ハ初メ萩野流(萩カ)ノ砲術ヲ学ヒ、後チ高島四郎太夫ニ就テ西洋流ヲ学ハシメ玉ヒ、其瀧奥ヲ窮メタリ、嘉永ノ初メ屋久島奉行ニ転セラレ、該島ニ在勤セリ、当時琉球国へ英佛人在留、覬覦ノ情勢アルヲ深く憂慮セラレ、琉球人或ハ派遣ノ吏員カ申言ノミニテハ、其情実信ヲ措カレ難キヲ以テ、吉井ナル者ニ密命セラレ、先ツ屋久島ニ渡航シ、琉球ノ情ヲ探訪シ、上申スベキ旨命セラレタリト、在島中又ハ在廳中親書ヲ下サレタルコト數十回、其御文中機密ニ係レルハ、悉ク村野村野ハ吉井ニ下サレタル御親書ニ同シク横文ヲ用ヒラレタリカ弟ナリニ下サレタル御親書ニ同シク横文ヲ用ヒラレタリ吉井カ家ニ秘藏セリ、其御親書中琉球ノ情実ハ素ヨリ、藩地一般ノ人情風習ヲモ質問セラレタルコト寡カラス、吉井ハ百方力ヲ竭シテ探訪搜索、毎々上申セシトナム御親書ハ吉井カ家ニ藏セリト雖モ、丁丑兵乱ノ際、雨露ノ為、或ハ土中ニ埋藏シタルカ、故稍破滅ニ垂々タリ、惜ムベシ、屋久島奉行ニ転セラレ、琉球ノ事情探訪命セラレタルハ甚タ迂遠ナルカ如シト雖モ、未タ御知政ニアラス御壮年ノ折、二回御下国、御在国モ近々四五ヶ月ニ過キサリシ故、藩内ノ地理モ詳ニセラレス、琉球・屋久島ハ距離遠カラス、往来モ難カラサルベシトテ、斯ク命セラレタルモノナラムト、村野山人山人ハ伝之丞

カ長カ筆記ニモ記セリ、果シテ然ラン、
 男
 因ニ記ス、吉井ハ其後故アリテ譴責ヲ蒙リ、閑散ノ身トナリシカトモ、密旨ヲ奉シ民間ノ事情探訪ニ力ヲ竭シ、上申セシ事寡カラサリシトナム、而シテ安政五年ノ春頃ヨリ病ニ罹リ、危篤ニ迫マレルヲ聞食、容体ノ如何ヲ御近習伊集院中ニナル者ヲ遣ハサレ問ハセ玉ヘリ、其際御煙草盆ノ抽斗ヨリ御手ツカラ金五十兩御取出シ、藥餌(餌カ)ニ充ツベシト密賜セラレタリト、吉井ハ病床ヲ出テ恩命ヲ拜シ、感涙ヲ流シタリトナン、恩命ノ趣ハ、速ク回愈(愈カ)シテ竭ス処アラムヲ望マセラルトノ趣ナリシトゾ、然ルニ二十余日ニシテ遂ニ鬼籍ニ遷レリト、実ニ安政五年庚午四月ノコトナリ、如此寛厚仁慈ニマシマシ、閑散ニアル者ニモ懇命ヲ下サレ、耳目ヲ広フセラレタル故、衆人身命ヲ擲ツテ竭サムコトヲ望メリ、吉井カ母当年九十余年ナル者存在シテ這事ヲ語ルニ、語波リ、涙ヲ流セリ、此老婆(婆カ)元年記憶強ク、幼年ノ時ヨリノコト大小トナク、年月日ヲモ記臆シ、殊ニ齊興・齊彬ニ公御兩代ノ事実ハ、能ク記シタリトナム、(臆カ)
 其所以ハ長男七郎右衛門ハ、齊彬公ニ、二男村野傳之丞ハ、齊興公ニ奉仕シタルカ故、恩徳ノ厚キニ感シ記

臆殊更ナリ、希有ノ人ト謂フベシ村野山人カ話

一〇七 戊午ノ夏天下ノ形勢救フニ道ナキニ立到

リタル趣西郷隆盛言上セシ事実、及ヒ英断為スコトアラトス脱カ

安政四年丁巳夏五月御下国、同五年戊午ノ秋八月中

御参府ノ予定ナリシカトモ、実天下ノ形勢ニ就テ御猶予ノ御内定ナリシト、其前頃五月中旬トモ云西郷隆盛ハ江戸ニ

在リテ、各藩ノ有志ト尽力スル旨アリシカ、井伊直弼カ彦根藩主

大老職ニ在テ暴威ヲ振ヒ、恣ニ外国ト条約ヲ結ヒ、剩将

軍儲副云々ノ勅命ヲ奉セス、我意ニ募リ、恐多クモ御

讓位ヲ促シ奉ラムト、其他天下ノ形勢危殆ニ陥リ、濟フ

ニ途ナキニ迫リタルヲ奉告センカ為メ、帰国具上シタリ

ト、夫ヨリシテ御参府御猶予大ニ為スコトアラムト、西

郷ヲ福岡ニ遣ハサレ、尋テ江戸・京師ニ出テ各藩ト密ニ

謀リ玉ヒシ旨アリシトナム西郷隆盛・吉井友実・岩下方平・税所篤等へ親話、或ハ鎌田正純日記

一〇八 西郷隆盛ニ天下ノ機事密命ノ事実

弘化ノ末、嘉永ノ初メニ到リテ、外夷ノ憂日ニ月ニ迫リ、

從テ内国ノ人心穩ナラス、幕府ハ因循姑息ニ流レ、益潜潜

上縦恣詐謀權略ニ涉リ、為ニ人心激抗離反ノ状顕然、危急累卵ニ等キカ故、公ハ大ニ憂慮セラレ、国威ヲ保チ、

皇室尊崇之大義ヲ拡充シ、政体ヲ改良シ、同心戮力、国体維持ノ一大英断セラレムト各藩ヲ誘導シ、一致連衡護

国 尊王ノ策ヲ立ラレ、尾張・水戸・越前・土州・宇和島・久留米・阿波・佐賀・福岡等ノ藩々協義、或ハ宮堂

上方ニ氣脈ヲ通セラレ青蓮院・近衛家・三条・中山等、

叡慮ノ在ル処ヲ窺ハレ、而シテ鎌田出雲・西郷隆盛、其他有志本藩ニハ岩下方平・西郷隆盛及ヒ伊地知正治・大久保利通・海江田信義・日下部伊三次・堀中左衛門(今伊地知貞馨)・大山綱良・根山三田(内カ)・久木山泰藏・輩ヲシテ計画セラレタル美玉三平等ノ数名、大ニ竭ス処アリ

ハ威人ノ知ルカ如シ、水戸藩ニハ藤田・武田・鶴飼・安島等ノ有志、越前ニハ橋本・中井・村田等、京師ニ於テ

ハ近衛殿ヲ初メ、三條殿実方、宮家ニハ青蓮院宮、庶士ニハ梁川星巖、清水寺ノ月照、或ハ頼三樹三郎等ノ数十名、

是等ノ人士ト謀リ、内政整理海外対策ヲ立ラレタリ、其順序ノ概目ハ一橋慶喜公ヲシテ將軍ノ儲嗣トシ、水戸烈啓

公ヲシテ大政ニ参与セシメ、而シテ天下ノ人材ヲ網羅シ、花美驕奢ヲ抑ヘ、武備充実等、其他

勅詔ヲ申下シ、而シテ天下ノ人心鼓舞振作セラレシコト、モナリシト云フ、中ニ就テ西郷ハ伊地知治・海江田及

ヒ清水寺ノ月照、或ハ橋木等(本カ)ノ人々ト大ニ謀ル旨アリ、月照ハ近衛殿其外宮堂上方ニ就テ竭力シタリト云フ、是レ安政元年甲寅ノ年ヨリ、同五年戊午ノ夏頃迄ノ事実ナリ、公戊午七月逝後本藩ニ於テハ、尊旨倏チ廢類、江戸ニ於テハ井伊直弼大老ノ職ニ在リテ、將軍ノ幼冲ナルニ乗シ、暴威ヲ逞フシ、宮堂上方及ヒ尾・水・越・土・宇ノ各侯、或ハ各藩有志ノ人士ヲ斬流幽囚シタル等ノ事ニ立到リ、人心恟々、遂ニ西郷・月照ト俱ニ投海ノ參狀(參)ニ及ヒ、幸ニ蘇生シタルモ南海ノ孤島ニ放タレ、其他ノ人心鬱憤ニ沈シ、機ヲ得テ雷発セムト計畫怠ラサリキ、公御滞在中企図セラレシ事実ハ最モ機密ニシテ、本藩士中之ヲ知ル者僅三四名、則チ西郷・岩下・大久保・吉井等ニ過キサリシト云フ、中ニモ戊午ノ秋流使(流)ヲ率ヒテ御出発ノ計畫ハ尤モ秘中ノ秘ニシテ、各藩侯ノ中ニ福岡・南部(福)ノ二侯ニ止マレリト云フ、如斯機密ナリシ故藩内之ヲ聞知スルモノナク、今ニシテ却テ其事実ヲ怪ム者アリ、岩下・吉井ノ言ヲ聞ヒテ信ヲ措クニ至レリ、然ルニ今ヤ灯下闇シトノ諺ノ如ク、他藩人ハ却テ其実ヲ知得シタルハ則チ宮島誠一郎、吉井友實ニ与ヘタル書ヲ以テ証左トスルニ足ラム、就テ見ルベシ(本紀第 卷ニ記ス)

一〇九 篤姫君將軍家結婚ノ際國産ノ大硯獻呈ノ事
事實

篤姫君後天璋院 殿ト稱ス御入興ニ付テ、種々ノ品物獻呈セラレタリ、中ニ就テ有名ナル甌島瀬上村ニ産スル硯石冷泉石ト名リハ石質無比、紋理白斑種アリテ、世ニ賞セラル、ハ僉人知ルカ如シ、然レトモ大硯ノ材料ハ希有ノモノナルニ、適々一大料ヲ得、江戸ヨリ有名ナル彫刻工ヲ傭下セラレ大砲鑄製造場ニ於テ彫刻シ、最良ノ大小二硯ヲ製造セリ、其大ナルモノハ長五尺余、幅三尺余、厚九寸余、目方百八十斤、水三斗余ヲ容レ、四人担キノモノニテ、表裏トモニ別ニ彫粧モナク、自然ノ紋脈斑理龍蛇ノ美麗ナル目ヲ驚カセリ、小ナルモノハ長二尺四寸、幅一尺五寸余、高サ六寸四五分許リ、目方七十斤余、水沓斗五升ヲ容レ、二人ニテ担ケリ、是モ同シク紋斑種々顯ハレ、美觀ヲ極メタリ、大小二硯皆方形ニシテ雅致、而シテ硯ノ蓋台共ニ江戸ニ於テ製造セシメラレタリ、此大小二硯ハ御入興特種ノ獻品ニテ、幕吏モ運搬ノ容易アラサルニハ頗ル困却シ、許多ノ器物・珍器夥多ナルニ、如此重大ノ硯ハ將軍家ニモ未タ藏物ナカリシトナム、御入興ノ前頃御獻品

ノ取調命セラレシニ、普通ノ器物金銀珠玉ヲ以テ粧飾セルモノ、ミナルカ故、此ノ大硯猷セラレムコトヲ 思召付カレタリト、其際ノ御言ニ大小名数多ノモノカ善美ヲ尽シ、我レ劣ラシト争フテ猷スルモノ悉ク些細モノナリ、此度ハ弄物ナカラ雅大ノモノヲ持セ遣ストキハ後世ノ譚ニモナルベシ、又文具ノ一ツナレハ粗末ニ棄置クコトモアルマシ、其上將軍家ニ文学ヲ勸ルノ意ヲ表スルニ足ルベシトノ仰セアリシトナム、

猷呈ノ節ハ白木箱ニ入レ、添ルニ山豚毛ノ大唐筆四本、大唐墨二個ナリシト云フ、如此意表ニ出タルコトモ時トシテナシ玉ヘリ、

一一〇 御近習ノ輩へ萩野流砲術ヲ学ハシメ玉ヒ
シ事實

御近習ニ召仕ハル、吉井七左衛門 後七郎 右衛門・野村彦兵衛等へ、萩野流砲術修業スベキ旨命セラレ、信州高遠藩櫻井大五郎ニ入門シ、大小砲ノ打方及ヒ棒火矢製造、或ハ烟火ノ製作等ヲモ伝授シ、而シテ公ニモ其射式学ハレタリト、中ニモ棒火矢 公御発明、落シ箭ト唱フ、敵營ヲ見テ營製造中ニ落スノ仕掛ナリ、故ニ斯ク名ツク製造ハ当時軍用ノ最タリト、野村等ニ研究セシメ玉ヒ、殊ニ

十刃銃ヲ以テ銃陣編伍ノ法ハ、各流ノ比スベキニアラサルヲ以テ、實用ニ供スベキモノナリトノ尊旨ナリシト、當時全国大小砲術種々ノ流派多シト雖モ、實用ニ供スベキハ萩野・天山二流ノ右ニ出ルモノアラサリキ、茲ヲ以テ御近習ノ輩ニ特命セラレ、一藩ノ軍備ニ供セラル、御見込ナリシト云 新洋式未タ開ケサル時ナルカ故、萩野流銃陣法ヲ大式折衷軍伍編製セラル、尊旨ナリシト云、是レ天保三四年頃ノコトナリシト云

一一一 高島四郎太夫 茂 御懇遇吉井七左衛門・相良常長 旧名助太夫 後八兵衛 等ニ入門命セラレシ事實

高島四郎太夫和蘭新式砲術 初代ナポレオン 式ナリシト云 日本開基ナルハ 僉人知ルカ如シ、天保十二年五月演習ヲ閣老見置キノ命ヲ奉シ 達書ニハ御目付見置キトアリ、是レ幕府ノ例、江戸へ招喚セ規ヲ以テ閣老ノ見置キトハ達セサリシト云フ、高島ノ長男淺五郎、門人山本清太郎・竹内卯吉郎・木本藤十ラレタリ 郎其他二十余名ヲ召列レタリト、山本ハ高弟ニテ有名ノモノナリ、秋村ト号ス、砲、高島カ長崎ニ於テ和蘭人ヨリ伝習シ術書ノ著述寡カラス、高島カ和蘭人ヨリ砲術伝授ノ始末へ、齊興公伝御流儀砲術創建ノ条ニ記ス、古昔ノ術ト同日ノ比ニアラサルヲ聞召シ、江戸ニ着スルヤ間モナク芝之邸ニ召サレ、御親シク砲術ノ要領尋問セラレ 邸内御庭内ノ御茶屋ニ於テ御対給ハリタリト云、刻ヲ遷サレ後御近習ノ輩ニ命セラレ、酒肴ヲ、而シテ後チ吉井全・相良全・竹下 兎 之ニ入 門スベキ旨内命セラレタリ 相良ハ高島カ着府スルヤ、直チニ入門セリト、先キニ友人宇宿彦右衛門

・高木市助等高島出府セハ速ニ入門シ、研究スベシト勸告ヲ受ケタルカ故、先鞭シテ入門セリト、然ルニ入門スベキ内命ヲ奉シ、更ニ吉井ト偕ニ入門ノ式ヲナセリト、東修ノ式モ悉ク藩庫ノ出ス処ナリシト、夫ヨリシテ活眼アルモノハ荻野・天山等ノ諸流ト同日ノ比ニアラサルヲ覺リ、入門シタルハ法元六左衛門・川崎四、高島ヨリ親シク洋式大小砲射擲法、或ハ銃陣運動ノ式、其他西洋実践ノ史話聞召シ、軍備ノ必要ナルヲ感セラレ、御近習吉井・相良・竹下等ニ入門シ研究スベキ旨命セラレシ故、日々高島カ宿所ニ通学セリト、高島父子及ヒ門人等ト石町ノ或ル旅籠屋ニ寓シ、小銃ノ射方ヲ教授シ、後チ本庄ニツ目宗対馬守下屋敷ニ転宿シ銃陣運動ノ操練ヲ開キタリ、故ニ至テ江川太郎左衛門・下曾根、是ヨリシテ、江戸中有志ノ人入門スルモノ多シ、之レヲ江戸ニ於テ和蘭新式大小砲術及ヒ銃陣演習ノ權輿トス相良常長記録

一一二 御懇交ノ大小侯及ヒ有名ナル人士交際セ

ラレン人名

御壮年ノ時分二十七、八、三十、御懇交御往来ノ諸侯方ニハ、
〔黒田齊隆〕〔南部信明〕〔米倉昌忠〕〔上杉齊憲〕〔松須賀春裕〕〔河部正武〕〔前田利直〕〔前田利直〕〔松平慶永〕〔伊藤宗城〕〔齋藤、律藩主〕〔山内豊信〕
 福岡侯・八戸侯・勿論、金澤侯、米澤侯、徳島侯、福山侯、佐倉侯、富山侯、佐賀侯、久留米侯、福井侯、宇和島侯、藤堂侯、高知侯其他小藩侯ハ多数、或ハ旗下有名ナル筒井・川路・岩瀬・羽倉・下曾根・江川・井ノナト云ヘル有力者モ数多参邸、御懇交御交際ノ弘キコト当時ノ大小侯ニ比ナカリシト云フ、其人々悉ク一能一芸アル

カ、或ハ識見卓越名望アル当時有名ナル人士ナリシト云フ、

一一三 蔵書ノ印章春叢文庫ト彫刻セラレシ因由

御手許ノ御蔵書夥多ナル中ニ、殊ニ和漢ノ歴史或ハ野史・日乗ノ類謄写或ハ抜粹命セラレ、或ハ函書集成・小右記・礼義類典等大部ノモノモ謄写命セラレ、或ハ和漢医書・仏書ノ類モ種々、中ニ就テ真言ノ経籍ハ

齊興公御好ミ故、御話シノ節御応答ノ為メニヤ、左迄御信心ナキモ

父公ニ対セラレ努メテ通読セラレ、或ハ能誦ノ本ヲモ御覽御記憶アラセラレタルハ、全ク

齊興公御好ミナルカ故御孝心ノ厚ニアリ、御父子御閑話ノ種トセラレシトナム、全体 御孝道厚カリシコトハ衆

人知ルカ如ク、日々御対顔ノ時モ万事打チ解ケ、四方山ノ御物語リアラセラレ、殿威鄭重御言詞少キ

齊興公モ折節シ御晒譚ヲモナサレタリトナム齊興公ハ容易ニ御晒等ハアラセラレス、殿威鄭重、実ニ御孝道ノ厚キヨリシテ指シテヲ旨トセラレシト云フ

御好ミモナキ仏書、或ハ能誦ノ本ヲモ通読セラレタルハ感シ奉ルニ余リアリ、因テ御蔵書ニハ神・儒・仏ノ書ハ

勿論、小説・筆記・日乗ノ類或ハ洋書翻譯等夥多藏セラ
レノ事実ハ本草録ニ詳ナリ 御近習ノ輩ヘハ絶エズ謄写命セラ
レタリ、御藏書ニハ悉ナ春叢文庫ノ印ヲ捺シタリト、是
レ御雅名春叢又ハ麟州ト御自称ニ由レリト云フ、

○因ニ記ス、毎日四ツ時分午前未ニハ御改服、齊興公

表ヘ當時奥表ノ唱アリ、奥ハ夜分御休息ノ間ヲ

待チ、御後ヨリ御座ノ間ヘ御出、御機嫌窺ハレ、夫レ

ヨリ四方山ノ御物語ニ刻ヲ遷サレタリト、○毎日平服

御上下次キ肩衣ト唱フヲ召サレタルハ御父子御同様ナリシト、

御尊敬御親睦孝道ヲ尽サレタルハ威人ノ知ルカ如シ、

御兄弟ノ御睦シキコトハ素ヨリニシテ、池田齊敏、島津齊彬

ノ御譚ニハ日ノ没スルモ忘レ玉ヒシトナム松平伊予守齊
敏公天保十三

年壬寅正月晦
日逝シ玉フ

一一四 四書五經及ヒ左傳等ノ諸書齶刻封内士民

ニ惠与シ玉フ

四書及ヒ五經ノ上墨ヲ命セラレタルハ弘化二乙巳ノ年ナ
リ、左傳嶽珂本ヲ翻刻セラレタルハ嘉永五壬子年ニシテ、
而シテ御領國中普ク払下トナレリ、廉価ナルノミナラス、
紙質精良ニシテ美本ナリ、元來藩地ハ書籍ニ乏シク、江

戸・大坂等ヨリ購求セシニ、払下トナリテ僉人弁利ヲ得
タリ、而シテ安政四年丁巳六月書肆御開キニナリシヨリ
書肆御開ノ、尚ホ弘ク売弘メ命セラレタリ、四書ノ序文ハ
条ニ詳ナリ、林家、跋文ハ琉球国玉川王子ヘ命セラレタリ、此外国史
類六国史等ヲモ逐次翻刻ノ御趣意アリシトナム、

一一五 堤長哲卿風船図並詩歌贈進セラレシ事實

堤家ハ 齊宣公御実母ノ御統ナルカ故、御上下毎ニ御消
息怠リ玉ハス、適々堤公ハ微行セラレ、伏見駅等ニ於テ
御対顔モアリタリト、嘉永四年五月御下国ノ際伏見駅ヘ
同卿ヨリ御使ヲ以テ御書翰並風船ノ図、及ヒ発明説ノ和
解又ハ詩歌贈進セラレタリ、御返礼書ニ左ノ御詠副ヘラ
レタリト、

海はらを漕ぎ行たにもあやしきを

天津空にもかよふ舟哉

風船図ハ堤卿ノ御自画ナリシト、氷雪山上ニ飛揚スル図
形ニテ、西洋ニ於テ発明又ハ試タル説ヲモ副ヘラレタリ、
翻譯者ハ何人ナリヤ詳ナラス、此ノ図ハ動植館内製煉局
御座ノ間ノ掛物ニ掲ケ置レタリ、御贈リニナリタル時ノ
仰ニ、公家衆ニハ珍ラシキ人ナリ、外国ノ事ニ心ヲ用ラ

ルト見ヘタリ云々ノ御事ナリシトソ
井上正太郎話○此園柳田
童雪ニ写サセ所蔵セシニ
丁丑ノ兵火
ニ罹レリ

一一六 松山隆阿彌及ヒ大山綱良密仕セラレシ
事實

松山隆阿彌ハ文武ノ心掛厚ク忠誠篤行ノ人ナリ、御茶道
職ヲ奉シ、頗ル人望アリ、密々召仕ヘレシコト多カリシ
ト、殊ニ國中諸士其他ノ人物、或ハ行状等取調密命セラ
レシ事モアリシト云フ、大山綱良モ御茶道職ヲ奉シ、松
山カ教育シタル人ナリ、於江戸奥御茶道職ニ拔扱セラレ、
而シテ西郷等ト俱ニ水藩其他有士ノ人士交通、国事ニ尽
力、非凡ナルハ皆人ノ知ルカ如シ、或ハ松山等カ上言、
上ノコト、モ取伝ヘタル事柄尠カラサリトナム大山、松山
親話、松山
ハ学識アリ、殊ニ劍法ニ達シタリ葉丸カ門人、嘉永二年ノ冬山
田・高崎・近藤カ朋党ニ関シ
所刑セラレタリ、事実内証ノ部
ニ記ス、山口不及カ美兄ナリ

一一七 灰液打紙製造

灰液打紙ハ日本古昔ノ遺法ニシテ、延喜ノ頃トカ専ラ製
シタル者ナリシト、有名ナル栗原通唱孫
之丞某カ古書中ニ発見
シタリト云フ、此紙ハ虫喰ノ憂ヒナク、数百歳ヲ経ルト

モ腐朽、虫喰或ハ水湿ヲ引クコトナシト謂フ、依テ御文
書又ハ保存ヲ要セラル、御書類謄写ノ料紙ニ製造セラレ
タリ、其時ノ 仰ニ、世ニ宝トスル者ハ金・銀・珠玉ト
人皆云ヘト、左ニアラス、紙墨ノ二ツヨリ宝ハナシ、幾
百年幾千年ノ後ニ時情・実跡ヲ伝ヘル等、金・銀・珠玉
ノ遠ク及フ者ニアラスト、中山次左衛門拜承シ、初メ江
戸邸ニ於テ製造セシメ、後鹿兒島砲術館内ニ一小局ヲ設
ケラレ製造セリ、而シテ保存ヲ要セラル、御書類ノ謄写
ハ惣テ此紙ヲ用ヒラレタリ、○製造ノ法ハ檜木ヲ焼キタ
ル灰ヲ取り、水ヲ注キ、稠厚ナル灰液ヲ採リ、而シテ美
濃紙百枚許ニ這ノ液ヲ浸シタル紙凡ソ十枚位毎ニ一枚ツ
、ヲ挿ミ、厚紙ニ包封シ、御影石ノ滑尺ナル盤ニ置キ、
木槌ヲ以テ数千回打ツトキハ灰液悉ク浸染シ、滑ニシテ
透徹ナル事油打紙ト同シク稍薄葉紙ニ類ス、灰ハ古書ニ
記ス所椿木ヲ用ルト見ヘタリ、実ニ御言ノ如ク、世ノ至
宝ハ紙墨ヨリ外ナシト云フベシ三原藤五郎話、三原ハ製
造方ヲ取扱ヒシ人ナリ
這紙廣貴カ所蔵ニアリ、殆ント四十年明治廿
五年ノ久シキ
紙質変セス、且ツ虫食ナシ、伊達家ニモ同紙アリ、同
シク損害ヲ蒙ラス、是公カ贈進セラレシナラム、

一一八 金銀鉞開掘奨励セラレン事實

山ヶ野・長野及ヒ鹿籠等ノ金鉞山、近代産額減シ衰頽ニ垂ンタリ、種々御心ヲ用ヒラレシニ、出産稍ク増シタリト雖トモ、資本足ラサレハ充分ニ採掘スルヲ得サルカ故、幕府ヨリ資金御借受ケ拾万兩御借受ケ、産金ヲ、盛大ニ着手セラレタリ、而シテ採掘ニハ電気ヲ以テ土石破裂ノ法ヲモ創行セラレ、破裂法ハ初メ電気点火ノ法ノミナリシ、人工ヲモ減カ、其後今行ハル、簡易ノ法開ケタリ、シテ産額日ニ月ニ増加シ、山中頗ル賑ヒタリ、殊ニ谷山錫山ハ非常ノ産額ニテ、為メニ稼人モ大利ヲ得、富ヲ致セル者モ多カリシ、如此金・銀・錫共ニ非常ニ出産、一般之レヲ伝承シ、賢明慈仁ノ君ナルカ故、天幸福ヲ与ヘラル、ナラント唱ヘタリ、金銀（掘ル）リ歌トテ従来稼人等カ謡ヒシモ、尚ホ 御作ヲ下サレタリ、

金山金掘歌

齊彬公御作

砕セイ心場歌

国も豊に千代万代と山はこかねの花を咲き人の心も豊
になれはむべも富みけりこかねの山年にさかふる宝の
山田民もゆたけき千世の春

金掘歌

今歳より山をつほみの金の花開くる末を頼母しき山吹
の色に出つ、喜を八重にかさねて千代万代々になり行
く時津風真鶴のなかきはしもてほるならはのみ手みち
手の金の花は国栄へ行く宝にて尽せず春こそ久しかり
けり

寄国祝

天地ととも開きて動なき豊芦原の国そ開かる
錫鉞ノ出産多額繁盛ナリシハ、嘉永六七年ヨリ安政四五
年頃ナリキ、錫質純良ナル故大砲製造ノ料ニ適シ、当時
一般海防ニ他事ナキ故、各藩ノ所望続々、殊ニ幕府ヨリ
買上ケアリテ、一時ニ拾余万斤ヲ売出サレタルコトモア
リ、故ニ山中ノ繁盛言ヲ俟タス、中ニ幸福ヲ得タルハ孝
兵衛ト云ヘル一鉞夫、同区域内ニ良鉞脈ヲ発見シ、僅々
数月ノ間ニ條チ富人トナレリ、当時錫山ノ孝兵衛ト唱ラ
ル、ニ至レリ、其各鉞脈悉ク純良多額ヲ産出、加之販路
ニ滞停ナク、価モ随テ貴シ、公モ屢々臨マレ、奨励シ玉
ヘリ、

一一九 口之永良部島エ甘庶作式開発之事実

口之永良部島ハ土地膏沃、何作ニモ培養モナサスシテ、成熟スルノ地味ナリト雖モ、土人耕作ヲ專業トセス、多クハ漁業或ハ船乗りヲ稼職トシ、荒漠ノ地多キカ故、甘蔗栽培ヲ開カレント伊賀倉源四郎貞ナル者ニ命セラレ、開闢栽培ヲ試ミラレタリ、甘蔗ノ種苗ハ大島ヨリ移植シ、一二ヶ年ノ間ニ二十余丁歩町ヲ植付、製糖セシニ、中等ノ上ニ出タル黒糖ヲ製シ得タリ、此ノ業モ御逝去後廢止セリ伊賀倉源四郎

因ニ記ス、伊賀倉ハ源四郎、字ハ隱龍ト号ス、少シク才識アリ、考証学ハ自ラ得タリト誇唱ス、人之ヲ嘲ル、衆ノ知ルカ如シ、中ニ己カ家系ヲ誇唱スルノ名尤モ甚シ、伊賀倉ハ元來伊集院姓ニシテ、祖先代伊集院伊賀倉村ニ居住シタルノ故ヲ以テナリト云フ、然ルニ伊集院姓ハ島津家ノ庶流ナル故、其因由ヲ誇唱セリ、唱フ処、或ハ記ス処、杜撰虚説ノ多キハ悉ク人知ルカ如シ、多弁ヲ要セス、明治十三年ノ頃鹿兒島外史ト云ヘルヲ著シ、其稿本ヲ久光公ニ呈シタリ、公之レヲ一閱シ玉ヒ億説杜撰ナルヲ認メラレ、後日廣貫ニ命シ玉フニ、其杜撰ナルヲ責メ、取消サシムベシトノ御言アリシ、実ニ後世疑惑ノ害ヲ醸シタルカ故、因ニ記シ、後人ヲ

シテ同人カ著書悉ク信スベカラサルヲ弁駁ス、

一二〇 網網カ並魚油製造開カレシ事實

薩隅日ハ日本第一ノ海国ナルニ、他国ニ比スレハ漁業ノ法甚タ拙ク、適々網漁網カスト雖トモ、旧法ニ固泥シ、網漁ノ發明改良ニ注目セス、中ニモ鱈魚又ハ魚油ノ製造開ケス、肥培用ノ干糖糖カモ他国輸入ヲ仰ケルカ故、網網カ等房總九十九里浜漁法ノ製網網カ、或ハ佐藤信淵カ説ニ基カレ、沿海ノ各郷毎ニ会所ヲ設ケラレ、勸奨セラレタリ、其費用及ヒ掛リノ役員等御手許ノ計ヒニテ御試アリシニ、逐年国益モ稍顯レタルニ、御逝去後廢停セリ、元來經濟ノ大旨ヲ得ラレ、熊澤番山又ハ佐藤信淵等ノ説御意ニ叶ヒ、其論旨ニ別ラレ、施行セラレシコト多カリシト云フ山田壯右衛門

一二一 日州去川山柞灰製拵弘セラレシ事實

日州諸縣郡高城・高岡郷ニ跨ル去川山中ニ於テ、陶磁器製造必用ノ柞灰製開カレタリ、以前ヨリ同所、其他各所ニ於テ製シ、肥前或ハ尾張、或ハ京都等ノ各製陶器場ヘ売出シタレトモ、年ニ幾千函ト制限アリテ、需用ニ充ツ

ルニ足ラズ、國製ハ上品ニテ、肥豊ノ産ハ下品ナリトテ
 國産ヲ渴望スルコト切ナリ、特ニ肥前ハ彼ノ藩庁ヨリ冀
 望セラル、事毎々ナリシトソ、故ニ其制限ヲ拵メラレ、
 肥前ヘハ米穀ト交換シ、尾張等ハ陶磁器其他必用ノ品ト
 貿易ノ方法ヲ開カレタリ、其際三原藤五郎ヘ仰ニ、柞灰
 ハ當國ノ名産、肥前其外渴望ノ品ナレハ、年々売出しノ
 制限ヲ定メタルモ悪シキニアラスト雖モ、望ニマカセ産
 額ヲ増シ、肥前ニハ米穀・大豆ニ交易スルトキハ、此方
 不足ノ穀類山中ヨリ生スルモ同シク、一統饑餓ノ憂ナカ
 ラム、柞灰ニテ飢ヲ凌クコトトハ出来サル訳ナレハ、此
 方ノ大益ナリ、尾張其外ハ品物ノ貿易便利ニ従フベシ、
 是迄肥前・尾張ノ陶器輸入ヲ禁^{元來鎖國ノ政務ナリシ故、}
 他國ノ物品輸入ヲ禁シタリシタ
 ルハ經濟ノ道ニ違ヘリ、以來此ノ禁ヲ解キ、勝手ノ商法
 ニ允スベシ、經濟ノ本旨ハ有余不足ヲ融通スルニアリ、
 仮令ハ北國ノ昆布・數ノ子等ハ天度氣候ノ異ナルニ依リ
 テ、西南ノ地ニ生スルモノニアラス、又砂糖ノ如キハ東
 北ノ地ニ産スルモノニ非ス、由テ互ニ交通貿易シテ用ヲ
 足スヲ經濟ノ本旨トス、經濟ハ一國一郡内ニ為シ得ベキ
 モノニアラズ、日本一國ニテモ為シ得サルカ故、支那・
 和蘭・朝鮮トモ通交スルニアラヌヤ、然ルニ聊カ柞灰位

ヲ制限シ、或ハ燒物ノ輸入ヲ禁スルハ、經濟ノ道ニ背ケ
 リトノ仰ナリシトナム、實ニ經國ノ道ヲ得ラレタル御説
 ナリ<sup>三原藤五郎親話○佐賀貿易取組ノ為
 メ、千里大之介其他數名來魔セリ</sup>

一二二 鹿兒島神社其他大社エ黃金製ノ弊奉納^(幣カ)

セラレタル事實

御家督御初入府ニ付、御領内中各大社ヘ 御参拜ノ御例
 規ナリト雖モ、遠隔ノ地ハ御都合ニ依リ御代拜命セラレ
 タリ、而シテ後チ鹿兒島神社^{國分八幡宮}・枚聞神社・新田
 宮・露島神社等ヘ黃金製ノ大幣^(幣カ)長一丈ニ余レリ、此金幣御細工
 所ニ於テテ奉納セラレタリ、古ヨリ御代々御奉納ノ品物多
 シト雖モ、是ニ類スル者ナシト云、特ニ敬神ノ道ニ御厚
 ク、新田宮 御参拜ノ節、宝藏ノ品物或ハ古文書類御覽、
 保護届キ兼タルヲ御憂ヒ、御手許ヘ御取寄セ、悉ク御修
 復、或ハ文書類ハ表粧ヲ改メラレ、返納セラレタリ、其
 時ノ御言ニ新田宮其外露島等ノ大社ハ、勅祭アルベキ重
 キ神社ナレトモ、武家政權ヲ執ルニ至リテ崇敬薄ク、時
 勢已ムヲ得サル訳ナレハ、朝廷ニ代リ奉リテ崇敬シ、
 祭式等閑ナラサル様執行スベシ、堅山武兵衛ヘ命セラレ
 タリ、

豎山八郎ヨリ聞ク、此時ノ仰セニ近年中建言シテ、三年ニ一度位ハ奉^(幣カ)弊使^(幣カ)下向ノ都合ニスベシ、既ニ近衛殿ニハ話シタルコトモアリタリ、公義ノ心付アル様ニ建言セムト思ヒリ云々、^(タ脱カ)

一二三 江戸御在邸中鹿兒島ノ事情探偵セラレシ
事實

嘉永一二年ノ頃ハ未タ御部屋栖ニテ、國中ノ事情、或ハ人々ノ善惡、一般ノ風俗モ分明ニ知シ召サレス、表通りノ事ノミ聞食サル、ニ止リタルカ故、當時

齊興公ノ御近習ニ召仕ハル、村野傳之丞ナル者ニ密命セラレ、毎々上申セシメラレシトソ、其事柄ハ

御親書ヲ以テ命セラレ、機密ニ涉レル廉ハ横文蘭語ヲ用

ヒラレタリ、其御親書教通村野山人秘藏セリ、惜ヒ哉、^(伝之丞子)

去ル丁丑ノ乱ニ際シ散亡センコトヲ恐レ、地中ニ埋メ、^(明治十年、西南戦争)

六七ヶ月ヲ経テ稍ク発掘セシニ、多クハ腐朽シ、適々浅^(浅)

レルハ文字消滅シタルモアリ、然レトモ御文意ハ可ナリ

ニ読ミ得ラル、トナム^{御親書料紙ハ余ナ薄様紙ナリト、}如此未^{村野山人カ筆記、又ハ親話}

タ御知政ナラサルニ御心ヲ用ヒ玉ヒ、風俗人情ヲモ探偵セラレタリ、殊ニ重要緊密ノ事柄ハ歐字歐文ヲ用ヒ

ラレタルカ如キハ、當時未タ外国ノ事情ヲ知人罕ナルノミナラス、大小ノ諸侯ニ至テハ、殊更ニ歐文ナト学ハレタルハ絶テナカリシトナム、公ニハ速ク歐学ヲモ学ハレタルハ、天稟穎敏ニマシマシタリトハ云ヘ御心ヲ用ヒラル、ノ厚キ知ルベキナリ^{村野ナルモノハ吉井七郎右衛門カ実弟ナリ、吉井ナルモノハ公ノ御近習ニ奉仕ス、兄弟共ニ直実ナル者ニテ、}歐学ニ志シ、^{当人ヨリ上申スルニモ、}事柄ノ機密ニ涉レル廉ハ歐文ヲ用ヒタリ、^{斯ク懇遇ヲ蒙リタルカ故、一事柄モ寡ナカラザリシト云フ}○村野ハ齊興公ノ御近習ニ召仕ハレ、御家伝来ノ兵道虎之巻之法ヲ学ハシメ玉ヒ、其修法御預リヲモ命セラレタル者ナリ、故ニ其法式ニ於テハ頗ル得達セリ、然ルニ嘉永二年ノ冬、内訌ニ連リテ譴責ヲ蒙リ、一時遠流ノ苦域ニ座シ、後チ閑散ノ身トナレリ^{事實ハ内訌ノ部ニ詳記ス}

一二四 歐文ヲ学ヒ玉ヒシ事實

歐文ヲ御学ヒアリシハ三十余歳ノ御頃ナリシト、初メ吉

井七郎右衛門御指南勤メタリト云フ、素ヨリ聡明穎敏一

ヲ聞テ十ヲ悟ル天稟ノ御材器マシマセシ故、日ナラスシ

テ大低ノ綴字ハ習熟セラレタリトナム^{吉井ナル者ハ杉田成卿其他ニ就テ勉学セリト}

云フ、○横文ヲ以テ御書信アリシハ戸塚文海へ賜書全ク横書、^{村野伝之丞へ賜書ニハ横文字ヲ交ヘラレタリ、}広貞ニ賜ヒタル棉火薬製造云々ノ

御書ハ横字ナリ、戸塚へ賜書ハ三島通庸ニ一通、^{林徳左衛門へ一通ヲ与ヘタリト、}戸塚文海カ親話(其横文写ハ内訌ニ記ス)

一二五 水藩武田伊賀ト營中ニ於テ国事ヲ談セラ

レシ事實

或ル時御登營ノ際御扣間ニ於テ、御城坊主ヲ以テ武田ヲ御呼ヒ、何事カ御對話、刻ヲ遷サレタリト、何等ノ御譚アリシヤハ詳ナラス、然ルニ城中御座ノ間ハ諸大名ニモ家格、又ハ位官ニ依リテ扣間ノ規定敵ナルモノナルハ兪人知ルカ如シ、然ルニ水藩ノ家老ナリト雖トモ倍臣トシテ薩侯ノ扣間ニ呼ヒ入ラレタルハ例ナキコトナレハ、其筋ノ幕吏氣付キタリト雖モ、薩侯ト水藩家老トノ對話、殊ニ御英名ナル公ノ御呼寄ニナリタル事故、制止スルコト能ハス、氣付カサル体ニモテナシ差置キタリト、武田ハ、格別ナル御間席迄召寄セ玉ヒ、加之天下ニ名望アル薩侯ニ親接シタルハ終身ノ榮譽之レニ過キタルハアラシト深ク感戴シ、御英邁ナルコトハ子テ聞ク処ナリシニ、親ク尊話ヲ伺ヒ、且ツ驚キ、且ツ喜ヒタリトナム、是ヨリシテ一層敬慕シタリト云フ此事他日武田カ西郷隆盛ニ語リシ此事他日武田カ西郷隆盛ニ語リシ水藩ニ於テモ子テ御英邁トハ唱ヘタルモ、左迄敬慕セサリシニ、御親話ヲ聞キ驚キタリト、武田カ西郷ニ語レリト云フ、西郷カ久木山泰藏ニ直話ナルヲ親聞ス。○營中御間席ハ何レト謂フコト詳ナラスト雖モ、大廊下々ノ御部屋ヘ御扣トナリシナラム、

一二六 西郷隆盛洋譬ニ云々御諫言ニ對シ御弁解ノ

譚

西郷隆盛ハ初郡方ノ筆吏ナリシカ、奮然志ヲ立ント、中小姓役ニ転シ、江戸邸ニ在勤シタルニ、御眷顧ヲ蒙リ、御庭方役ニ転セラレ、内外ノ御密用命セラレタルハ感カ人知ルカ如シ御庭方ノ職務ハ卑官ナリト雖トモ、草木鳥獸ノ取扱ヒ、或ル時或ハ御庭向キノ御用ヲ親シク拜聞スルコトヲ得ル御庭口ヨリ拜謁言上スルニ、御前ニハオランダ好キノ癖御癖アラセラルト皆人評判仕、特ニ水戸人ナトモ評ン奉レリ、私ニモ同様奉存旨言上セシニ、公晒セ玉ヒ、手前ニモ左様ニ思フ乎、水戸人ナトカ評判スルハ苦シカラス、遠カラス思ヒ当ル世トナルベシ、如何トナレハ今ヤ世態危急存亡ノ秋ナルハ存通ナリ、二百年來至治泰平ノ弊ヨリシテ、天子ハ在ルカ無キカノ如キノ御有様ニシテ、將軍家ハ花美驕奢ニ長シ、僞潛上ノ所為多ク、朝廷ヲ輕ンジ奉リ、下諸大名ヲ輕蔑シ、武備ニ怠リ、人民ヲ困メ、阿媚諂諛ノ人要路在職シ、威權ヲ振ヒ、諸大名モ從テ驕侈安迭ヲ事トシ、國中疲弊極リタルニ際シ、外国ハ日本武備ノ衰ヘタルヲ見透シ、迫り來リテ、遂ニ今日ノ世態トナレリ、古人ノ言ニ彼ヲ知ルヲ以テ用兵ノ要、交際ノ

本トス、因テ彼ノ長スル処ヲ取り、我ノ短闕ヲ補フハ治
 乱政事ノ要点ナリ、是レ予カ目的ナリ、支那モ日本ヨリ
 謂ヘハ異国ナリ、英国・佛国・米国モ同シク異国ナリ、
 古ヨリ支那ノ礼学文物ヲ採リ、政務ヲ補ヒ、今日ノ如ク
 開ケタルニ非スヤ、仏法モ其宜ヲ採リテ、政事ニ加ヘタ
 ルニアラスヤ、又西洋発明ノ大小砲モ今ハ日本武備ノ要
 トセシニアラスヤ、其外医法・天文モ西洋ノ法ヲ採ルニ
 アラスヤ、支那ニ於テモ天文学ナトハ西洋ノ法ヲ採リ開
 ケタルニアラスヤ、支那モ近代阿片ノ乱ヨリシテ、内外
 ノ此種危急存亡ニ望メルモ、時勢ヲ弁セス、驕慢ノ国風ヨ
 リシテ土地ヲ稍割リ与ヘタルニアラスヤ<sup>上海・香港ノ地ヲ
 割与シタルヲ云フ</sup>
 畢竟彼ヲ知り、己ヲ弁ヘ、彼レノ長ヲ採リ、我レノ短ヲ
 補フノ活眼ナク、今日ノ辱ヲ受ケタルニ由レリ、茲ヲ以
 テ予ハ弘ク宇内ニ耳目ヲ注ケ、支那・天竺^(天竺)・オランダ其
 外歐羅巴諸国何レヨリニテモ、其長スル事、其宜シキハ
 悉ク取り用ヒテ、我国ノ短欠ヲ補ヒ、日本ヲシテ世界ニ
 冠タルノ国トナシ、国威ヲ輝サンヲ眼目ニ思ヒリ、中ニ
 モ砲術・医術・航海術等ハ元来西洋人ノ発明ニテ、世界
 中ニ伝播セリ、今日本ニテ和流ト唱フルハ西洋ノ古流ナ
 リ、此業日本ニ伝リテ間ナク治世トナリ、実場ニ試タル

ハ少ク、諸流僉同シク座上ノ論ニテ流派ヲ立タルモノナ
 リ、西洋ニテハ絶ヘス実場ニ当リ改製、或ハ発明シタル
 モノニシテ、支那・日本ノ及フ処ニアラサルナリ、日本
 発明ノ様ナル荻野流ナトハ心得タルコトナルカ<sup>心得玉ヘ、
 ルヲ云フ</sup>
 西洋近代実験ノ術ト同日ニ語ルベカラス、其他蒸気船ノ
 如キハ兎角採り用ヒスシテハ済マサルニアラスヤ、依テ
 要用ノ事ハ弘ク世界ニ求メテ、日本国ノ用トスルノ見込
 ナリ、水戸人ナトカ其位ノ考ニテハ笑フベキコトナリ、
 何ント評判スルモ苦シカラス、必ス近年心付クナルベシ、
 国中ノ者ヘハ此ノ趣意ヲ示置ケヨ、大事ヲ為ス者ハ目前
 ノ譏譽ヲ顧ルモノニ非ラスト、水ノ流ル、カ如ク論弁セ
 ラレシカハ、西郷モ如此大無偏ナル御論旨ニハ頗ル感
 服奉レリト、後日友人等ニ物語レリト
是安政二三年頃江戸ニ
 於テノ事ナリシト云フ

一二七 病院創設御目論見ノ譚

或時三原藤五郎・福崎助八兩名ニ仰ニ、病院ヲ取建度思
 ヘリ、予テ申聞ル通り、勸農ハ国ノ本ナリ、其本ハ病院
 ナリ、農人共ニ病人多クテハ農業モ力ムル事調ハサルナ
 リ、中ニモ菱刈・眞幸等ノ遠郷ニテハ、藪医者ヤ未熟ノ
 医者カ療治ノ為メ却テ害ヲ受ルモノ多キヨシ、其上田舎

ニハ微毒ノ為メ身ヲ過ルモノモ寡カラサルヨシ、不憫ノコトナリ、病院ハ政事ノ大要ナリ、依テ病院ヲ諸郷々毎ニ取建度思ヘトモ、其入用過分ニ及フベキナレハ、勸農方ノ計ヒニテ入用ヲ調ヘルノ道吟味スベシ、病院ノ方法ハ医者中へ申出サセ、或ハ郡奉行へモ取調申渡スベシ、何分第一入用ノ見込ヲ付ケ申出ベシトノ御言ナリシトソ、是レ安政四年春頃ノ事ナリシト、仰ノ如ク勸農ノ本ハ病院ナリトノ御事、イカニモ其通ニテ僻遠ノ諸郷ニテハ医者モ少ク、越中富山ノ売薬商カ種々丸薬、或ハ振出シ薬等病症モ弁ヘス服用シ、或ハ笑フニ堪ヘサルハ、近隣ノ誰某カ売薬ヲ持チ居ルトテ、夫レヨリ借用シ服スル等ノ甚シキモアリ、或ハ適々医師アリテモ二三年位城下ニ出テ少シク薬品ノ名ヲ記シ、診療ノ手振りヲ知レル位ニ至レハ、帰郷シテ一家ヲ建ツルノ輩ニテ、全ク売薬商ニ異ナラス、是レカ為メ害ヲ蒙レルモノ尤モ多シ、中ニモ微毒ノ害ハ殊ニ甚シク、其療法ハ激薬ヲ用ヒタリヲ用ヒ、遂ニ廃人トナルモノ往々寡カラス、僻陬ノ田舎ニハ該病ノ為メ人少トナリタルモアリ、実ニ勸農ノ本ナルハ仰ノ如シ、此際侍医中へハ病院ノ方法見込言上スベキ内命ヲ下サレタリトナム清水養正譚

一二八 山口不及定殿様御直咄覺之記

一或日 御前齊彬 之御咄ニ、皆々御国許其外国ニテ入湯ト申テ差越候儀有之由、之ハ病人ハ尤ノ儀ナレトモ、間ニハ入湯ト名付、遊ヒニサシ越候モノモ有之、之ハ不可然事候、夫ト云モ兎角人ハ兼テ朝夕隙ナキヲコソ第一トスルモノニテ候得ハ、何ソ遊ヒ杯ニサシ越ト申コ、ロヲナクサムト云事ハ無之筈也、イタヅラニサシ越候モノハ町人ドモカ成ス儀ニテ、士道ニ染トハナキ者ニテ、タ、米錢ヲツイヘ計ナリ、然レ共病氣之儀ハ尤之事也ト、六月五日夕御風呂之折 御咄被遊候、アマリ難有事ニテコ、ロアル人杯ハ右之御咄聞カセ候ハ、左ソ落涙ニモ可及ト存罷在候、難有覺之為メ記シ置モノ也、

一或日御数寄屋高輪御蔵へ有之候墨跡之御懸物御覽可被遊候間、サシ上候様被 仰付候間、則差上候処ニ、右御懸物之内チフホフト云フ極々細字有之、昔ヨリ人々讀ミ兼タル字ニテ、別ニ読セ相添カナ付ニテ有之、未右之読セ不被遊 御覽内ニ御読可被遊候間、私ヘカナ付ヲ見罷在候様被 仰、 御自分様一字モ無相違御読

ミ被遊候、乍不届私考ニハ未 御若年様ニテ中々御読
可被遊儀ハ御調不被遊ト相考居申候、左候テ此文ハ仏
法極意之事ニテ有之候由 御咄被遊候、コレハ六月七
日之事也、

一或日御風呂ニテ何ノ御咄ヨリカ、 上様御上下^{御參府}

ニハ昔ヨリ少々ツ、是非雨降り可申候由、右之コトヲ
存罷在候ヤト、 御咄被遊候、右ニ付テ御先祖忠久公
攝州住吉ニテ御誕生被遊候折、大雨ニテ真クラク、夜
ニテ段々俄カニ四方白日之如ク罷成、稻荷大明神ノア
ハレミタマリテ也、又時雨之御ハタ之儀モ有之、其上
忠久公初テ薩摩へ御入国之時モ雨降リシト云、右之通
之事候間、今以不相替御上下ニ雨降り候由御咄被遊候、
我々カ様ナル愚人ニハ色々御咄等御教被遊難有事也、
之ハ六月十日之御咄也、

一八月二十五日方ヨリ

殿様^{奇形}御尻ノ腹へ御根太^{醫部}腫物ノ御テキ被遊、甚以 御
難儀ニ被為在候、然ルニ同廿七日ニ今里御屋敷へ御鉄
砲御稽古ニ、朝五ツ時ヨリ終日被為 入、同廿九日之
朝五ツ時ヨリ御鉄砲之筈ニテ朝御風呂上候折、右根太
口明キ由候テ、甚以御難儀被遊候様ニ奉見得、然共押

々ニ御鉄砲ニハ終日被為入候、我々如キモノナラハ出
勤サヘイタミ候テデキスモノニテ御座候間、今日ハ御
出御延引之段、御小納戸衆被申上候得共、是非稽古之
事候間可被為入段被仰出、皆々難有御元氣之御事イサ
ミ申候、御帰殿夜五ツ過ナリ、此咄御国許之ニ才^{丁年前}
士^{後ノ社}ヲ衆杯へ相咄候ハ、サソ難有カリ可申、覺之為メ書記
置モノ也、江戸ニテハ鉄砲ハ四月ヨリ七月マテニテ御
座候間、一ツニハ最早当年モ限之事候間被為 入タト
奉察候也、

一七月初方ニテモ候ヤ、或日 御登城之折有馬玄蕃頭様
ヨリ、近日同席両三人被參誓候間、

殿様ニモ御出可被遊段御直ニ玄蕃頭様ヨリ被 仰上、
御受ケ成被置可給ト也、

殿様ヨリ玄蕃頭様へ被仰ニハ、私儀何モサシツカエ不
申罷出可申、然シナカラ取持等ト名付能杯被成事候ハ
、私儀ハ御断ニ御座候、此段へ只今ヨリ左様御聞被
置給度ト也、然ル処ニ外御同席御大名方 兵庫頭殿ニ
ハスケモナイ事ヲ御申被成候ヤ、玄蕃頭ニモ先達テ何
ニモ楽無之候間、能ニテモ家中之者トモヘイタサセ可
申ト、此間被相咄ト被仰候、 殿様被仰ニハ、私儀ハ

御存之通能グライ之者ハ一向スキ不申、左様ナラハ私ハ罷出不申ト御断被遊候、然ルニ外御大名方一言モナク不キヨ之事之由、事相濟候、未御若年ニ被在候テ右様御返答杯被遊儀ハ中々ナルモノニテハ無之、其後大名方御城ニテ、

兵庫殿公御ハ中々我々カ及申ス人ニテハ無之ト、御評判有之候由、薩摩殿ニハ珍敷人ト御咄有之タル由、御城坊主之咄也、右御婦殿之上則今日ハ右様御申被遊候儀御笑被遊候テ、御咄被遊候、女蕃頭様ヘハ其折ハ不被為入候、難有事ニテ書留置モノ也、

一殿様兼テ之御業ニハ、アサカホヲ御好朝頭ハ御晩年モ御好ナリキ被遊候テ、御手ツカラ御植被遊候、春ノ半ヨリ種ヲ御手ツカラ御マキ被遊候テ、鉢ヘ御自分様御植被遊也、鉢数大形二百計モ可有之ヤ、朝コトニ能クヒラキ、見事之儀ニテ御座候、コレハ兼テ之御業也、毎日々々天気サヘ宜候ハ、御鎗・御馬・御弓御稽古被遊事也、折ニハ御歌並ニ雨天杯ノ折ハ御画モ被遊、八ツヨリ内ハ御書物也、御詩作モ被遊候事、

一或日何ノ御咄ヨリカ、上様方被遊事ニハ、吉アシ共ニ諸人イタスモノニテ候、当分白金公齊宣御茶湯

被遊候間、御国許ニテ大小トナク少々ツ、ハ皆イタス由御咄被遊候間、畏入候テ申上候ハ御尤之御咄ニテ、乍恐上様方何ニモヨキ事ヲ被遊候ハ、諸人皆上下ヨキ事ヲ我ヲトラント仕候、又アシキ儀ヲ被遊候ハ、又アシキ事ヲ皆仕モノニテ御座候、夫ト申上モ御沙汰之通茶湯等ハ御国許ニテ我モノト仕候、又只今ハ御前御鎗等御好被遊候間、此江戸三御屋敷中芝・高輪・白金ノ三邸ヲ云、老若共ニ一人モ鎗ヲ不仕モノハ無之様ニ相見候、又御前ハ御能杯ハ御キラヒ之事情間、奥向ノモノトモ御能等之儀ヲ相咄モノモ無之、下々ヨリハ能乍恐御前之被遊通、御マネ申モノニテ御座候ト御咄申上候処ニ、ヲソフタロフト被仰候ト也、

一或日御風呂之折御咄被遊候ハ、此頃ハ雨天ニテ何ノ稽古モ不致、ヘキカイタミテトフモナラスト御咄被遊候、私申上候ハ、上様方ニハ兼テ何ニモアラキ事ヲ不被遊モノニテ御座候間、少々之アラキ事ヲ被遊候折ハ、御ヘキカ御イタミ被遊モノニテ御座候ト申上候処、イヤ〜我ハソフハナク、鎗杯ヲイタシ候ヘハ、ヘキイタミハ直ニ相ナヲリ申ヨト御咄被遊、アマリ難有事ニテ書留置也、

一十月十五日七ツ過之頃 御前へ御用ニテ被 召候処ニ

色々之御咄被遊、何之御咄ヨリカ、シヨクケン職原之御

咄、(不明)之先達(島津重豪)高輪様柴翁公 ヨリ御記録方へ被仰付、何

カ之御跡へ御名書付モノ有之、先之左近衛中将ト書認

サシ上候処、 御意ニ不入、伊木七郎右衛門へ被仰付

候処ニ、左近衛先中将源重豪朝臣ト書認サシ上候由、

其後又曾昌道へ被仰付候処ニ、左近衛先権中将源朝臣

重豪ト書認差上候由 御咄被遊、私ニハイツレ之方カ

宜モノ候ヤトノ御沙汰被遊、ナル程昌道申上ル通先権

中将ト書認申タルカ宜モノヤト乍恐相考、然レ共我ニ

ハ中々右様之儀杯ヲ存スルモノニテハ無之段申上候処

ニ、尤之事也、然レ共権中将ハ武家ニテハ申ニ不及、

皆権中将也、公家ナラハ権中将ノナリノト申儀モ可有

之候間、我カ様ニハ七郎右衛門カ申上タル通、左近衛

先中将源重豪朝臣ト書認申ハ尤也ト被 仰、右様之儀

ハ不存トモ宜キモノニテ候得共、シヨクシヨクケン等

ハタシナミニテ、我カケ様ナル坊主ハ又坊主之方之事

モ有之モノニテ候ト 御意被遊、難有事ニテ書留置也、

一文政十二年丑正月 日、 御忍ニテ品川有馬之蕃頭

様へ為 御鷹野ニ御出被遊候様トノ事ニテ候処、前日

ヨリ事ノ外大雪ニテ、御馬ニテ被為 入筈候間、御小

納戸ヨリ、明朝ハ殊之外大雪ニテ御座候間、御馬ニテ

御出御調不被遊段申上候処ニ、 御沙汰ニハ此位ノ

雪杯ニ馬ニテハトフモナラス杯ト申テハ、被仰御思召

モ可有之候間ト計被 仰、皆々我々共ニ迄御馬之御

出ハ宜シカル間敷杯トヒソカニ申居、其朝七ツ時御目

覚ニテ御膳等召被上候折、今朝ハ 御馬之御出是非御

延引被遊候様被申上、御覽之通加様ニ大雪大形一尺一

二寸余モ積リ候ヤト被申上候得ハ、至極尤之事也、夫

ナラハ御加籠ノ方可被遊ト 御意被遊、皆々安心仕候、

御元氣之上右之通御聞入被遊、難有コトニ御座候間、

書留置候也、

一文政十二年我ノ江戸詰ノ時、殿様齊彬 未廿一歳ニ被成

候折也、公儀其外ニテ申候ハ、

兵庫頭殿ニハ大名ニハラシキ人ニテ候、アレヲ小身之

大名ニシテ御老中ニナシ、天下之国政ヲツカサトラセ

申度事也トヒウハン有之候由、右奉申モ公儀御大広間

等ニテ何事カ大名衆モメ、事有之候ハ、皆々若殿様

へ御相談モ有之候由、左候ハ、直ニ思召被遊通直々御

サハキ被遊候間、公辺ニテモ未若年ニテ中々一通之大

名ニテハ無之トヒウ^{〔評判〕}ハン有之、大名ニハラシキ人物ト皆々奉申候、之モ

御仁徳之難有所也、之ハ文政十二年丑六月廿八日之咄承候間、書留置也、

文政十二年丑七月朔日之夕方也、

一当年ハ御好之朝カホアマリ宜無之、然処ニ我カ様御手ツカラ植サセ給ヒ、其上ヤシナリ等迄モ被遊来候年ハ宜敷出来、拜見可被仰付之御咄被遊候事、

一文政十二年丑七月四日ニ、三日跡ヨリ大奥之御休息所御小座敷御張替被遊度、私並ニ伊集院卯十郎へ被仰付、其通張調相濟、然ル処ニ本御座並ニ御納戸ノ辺御張替等宜敷無之、又候御側役圖師崎源兵衛殿・福崎助七殿見分有之、ナルホド宜敷無之候間、張替候様被申候間、御前へ右之段申上、御取付有之候得共、御作事之方御取締ニ付、張物師等六ヶ敷候間、此節ハ奥御計ニテ御作事之方へハ何モカマハス仕候様トノ事也、御殿ヨリ婦リニ七ツ後福崎助七殿宅へサシ越シ、右御張替事トモ相咄候、右ニ付御張替被遊ハ御尤之事ナレトモ、今日モ御前へ申上候、此節御下使之女マイリ、近々之内ヨリ大奥へ御泊リ可被遊御座杯、折角サシ急キ出来

方申付置候、右ニ付乍恐申上候、只今迄ハ難有表御座へ終日被入、何カ御稽古等ト御出精可被遊候間、御側向ハ不及申、諸人御国中年若キモノ共皆難有奉存候、又此節御召使之女等参リ候間、八ツ後ヨリ大奥杯へ終日御引入等被遊候ハ、諸人何之楽モ無之罷成、其上御仁徳等ウスク罷成モノ御座候間、只今迄之通猶又御慎被遊度分テ申被上候処、

殿様被仰ニハ、至極尤之事也、申上通可被遊候間、左様相心得罷在候様ニ被仰、アマリ難有事ニテ落涙ニ及候ト相咄、我ラコトキ何ニモ不存承候処、不覚落涙イタシ候、此儀人々へハ相咄事ニテハ無之候へトモ御出候ニ付可相咄候間、他言ハ無之様ニト助七殿被申候、其上助七殿被申ニハ色々申上候儀ヲ則御聞被遊、後ニハイカ様成御明君ニ可被成ヤ、我々共ハ老人之事候間乍恐草葉ノ蔭ヨリ拜見可仕、年若キ衆実ニ浦山敷事ト相咄サレ候、私ニモ今日ハ一寸サシ越候処、右之通被相咄罷婦リ候上則書留也、タ、何トナク難有事ニテ一向外之事杯考モ不出様有之候ト也、助七殿当春御納戸奉行ヨリ御側役へナラレ候、年ハ六十三位カ、

一文政十二年丑七月十五日

御前来ル廿六日田町之浜ニテ花火御上可被遊筈ニテ、
 毎日御手ツカラ花火御作り被遊、我々共へモ御手ツタ
 イ被仰付候、八ツ後ヨリ御小姓衆兩三人被仰付、玉カ
 タメ方仕候様、私へモカタメ候様ニト被遊 御沙汰候
 間奉畏候、 御前御沙汰被遊候へ、今日ハイツレモ太
 儀イタシ候間、後程スイクハラ可被下、左様相心得候
 様ニト被遊 御意、皆々難有奉存、七ツ過之頃ニテモ
 ヤ、大奥へ被為入、見小姓一人御列レ被遊、 我様ス
〔イカ〕
 リクハラ二ツ御持出被遊、皆々へ頂戴被仰付候、皆々
 右相濟候上、私ニハ御茶道部屋ニ罷在候処ニ、 被召
 候ト申事候間、則 御前へ罷出候処ニ、後刻御風呂可
 被遊候間、右之ス〔イカ〕リクハラタへヨト被遊 御意、難有
 御次第ニテ頂戴仕候、左候テ則御風呂サシ上候、皆々
 無残頂戴候様ニト被遊 御意候、実ニ難有、此アツサ
 ニ皆々太儀ヲイタシ候ト被思召、右通頂戴仕、何ト無
 ク相考候ハ、其通之事候得共、タ、難有落涙仕候、右
 御小姓永江休之丞殿・中村始殿・早間龜太郎殿・見小
 姓花崎直吉殿・私也、難有事ニ御座候間書留置也、
 一文政十二年丑八月三日酉ノ上刻 於大奥江戸
 御男子様御誕生有之、 御母子様共ニ御機嫌能被遊御

座候、 御前様齊彬公御前様也、一橋ヨリ被為入候 同九日御七夜御祝於大
 奥被為濟候、 御名 菊三郎様ト奉称候、 諸士御祝儀
 之儀ハ御日柄ニ付、同十五日ニ申上候様被仰渡候、御
 屋敷諸人タゞ唱萬歳ヲ難有事也、
 但丑九月十一日巳ノ上刻

御死去被遊候、 兩三日前些御不レイニ被遊候事、

一前々ニモ書調候通

齊彬公兼テ何事ニ寄ラス被遊、〔マ〕一ツトシテ中々難有事
 ニテ、朝三步ヨリ八ツ迄ハ毎日御学文カ、又ハ御歌杯
 カ被遊候、近代ニハ珍敷 御名君ニテ被為在候、右ニ
 付恐ナカラ愚詠イタシ候、
 三国よりうるまをかけて朝夕に君の恵をあをく

る詠人

一或時御咄ニ、前ニモ書調候通、雨天等相ツゞキ候ハ、
 御へキカ御痛被遊候、夫モ色々御稽古杯被遊候ハ、
 左様ニハ不被為在ト度々之御咄被遊候、此頃ハ雨天等
 相ツ、キ候折ハ御座へ御鎗有之、夫ヲ日々度々御スゴ
 キ被遊候、兼テアラキ御鎗杯被遊候間、加様ニ被在候
 也、一日モ何ニモ不被遊事ハ無之、難有御座候間書留
 置也、之ハ丑十月十五日方之事也、

一 五月十五日

殿様被召候間、九ツ前ニテモ候ヤ、罷出候テ 御前ニ
テ色々之御咄等申上候折、御画御書キ可被遊候間、絵
絹サシ上候様 御沙汰被遊候間サシ上候、則御書キ被
遊候、月ニ雲之御画也、左候テ私頂戴可被仰付候間、
左様奉承知候様被仰、難有御礼申上候、外ニ又同シ月
ニ雲ノ図御書キ被遊、其折早川龜太郎御前へ罷在候間、
乍恐忝枚ハ龜太郎へ拜領被仰付候様其通可仰付、則御
銘御印迄モ太々御押被遊、拜領被仰付候、難有事ニテ
候、左候テ則拜領被仰付候間、御用部屋ヨリ御証書相
願、福崎助七殿ヨリ御添書相添、格護イタシ置候事、
一 或時御納戸之人ヲ被 召、若殿様被仰ルハ、此節御
腰物御国許へ被仰付、御出来可被遊候間、木ニテ長サ
二尺五寸之見本出来候様被仰付、左候テ出来之上ハ御
国許ニテタメシ方タメシハ試ヲ云フ、有罪ノ者斬迄モイタシ
候テ、サシ上候様被遊 御沙汰候、右ニ付申被上ニハ
奉畏候得共、御国許ニテタメシ方ハ御免可被遊段申被
上候処、何事ニテ左様可申ヤト被仰付候、右之儀ニ付
テハ兼テ乍恐

殿様ニテ御国許ニハ御仕置斬罪ヲ云フノ儀ハ無之様ニ、

御政道ヲ被遊モノニ御座候間、出来之上爰許ニテ御タ
メシ被遊度、御国許へ被仰付候通申越候テハトガ人無
之候テモ、ワサトトガ人ヲミイタシ候様相成モノニテ
御座候ト申被上候処、 殿様至極尤之事候間出来之上
爰許ニテタメシ方仕候様被遊 御沙汰候ト、右之人直
咄承候間、書留置候也、コノコトハ丑十月廿六日泊リ
之折御殿ニテ之咄也、

一 或日御風呂屋ニテ

殿様御咄被遊候ハ、昨日ハ金定金定ハ斤量ノ誤ナリへ御懸リ被遊
候処ニ、百拾二斤御懸リ被遊候段被遊 御沙汰、私ニ
ハ何斤相懸リ候ヤトノ御咄也、私此八年計後加世田踊
見物ニサシ越候砌、小松原御藏へ知人有之、右御藏へ
両日サシ越、其砌相懸リ候処、百五斤相掛リ申タルト
御咄申上、年ハ何歳位之折ニテ候ヤ、大形廿五位ニテ
モ有之候ヤト申上、我様ハ当御年二拾三歳ニ御成被遊
候、左様ナラハ只今ハ猶以私ヨリ 我様斤目多ク御掛
リ可被遊ト御咄ニテ、御シマンノ御咄也、実以乍恐御
骨(組)与大キク、中々下々ニテモアノ様ニ有之物ニテハ無
之、難有事候間書留置也、之ハ丑十一月朔日之御風呂
之折ナリ、

一今日ハ霞ケ關黒田様長溥公ヨリ鶴ノ御汁被進ニ相成、ア

タ、メ候様御風呂屋ニテ平田友理へ被仰付、先刻ヨリ御三度ニ可召上ト相考アタ、メ置申ト申上候処、御ナ

ベ共持参候様被仰、左候テ外へ一ツ小ナベ取寄候様被遊御沙汰、我様御手ツカラ右御ナベへ御分ケ、コレ

ハ太守様齋眞公へ可進トノ御咄ニテ、大奥へ被為入候折、御持セ被遊被進候、左候テ私へ御ハシニテ、右鶴

ノ汁ヲ御ハサミ被遊可被下候間、アンハイミヨト被仰付、難有手ヲ御前へサシ上候処ニ直ニ被下、ナント

アンハリハ如何可有之ト被遊御意候間、アマリ宜候テ舌迄モモノ行カシソフニ御座候ト申上候処ニ、甚タ

御機嫌能ク御笑被遊候、難有事ニテ書留置也、之ハ丑十月四日夕御風呂ノ折也、

一文政十二年丑何月頃ニテモ候ヤ不覚、殿様へ有馬玄蕃頭様ヨリ御状被進候処ニ、文ノ内へ

当年ノ詰ノ方ハ殿様貴公云トアリニモアマリ御心安キ方無之候間、御案モ有

之間敷、淡州之近眼、筑前之眼クラ抔如何之儀ニテ候ヤ、土州猶以田舎男ニテ候半ト存申候ト書認有之、大

名方之文言古風成モノニテ、アマリ面白有之候間書留

置也、兼テ有馬様ニハ若殿様御心安被仰候間、左様成儀ニテモ候ヤト相考申候、

山口ハ松山隆阿彌カ実弟ニシテ、山口ノ養子トナリ、不及ト呼ブ、御茶道職ヲ以テ公ニ奉侍ス、弘化三丙午十月指宿

郷二月田御茶屋焼亡ノ後、職務上不注意ヲ以テ表御茶道ニ転シ、後嘉永二年内訌ニ関連シ、譴責セラレ、蓄髪シテ及

右衛門ト改ム、実直ノ人物ニテ公ノ耳目トナリ、国事上尽力ノ事蹟少カラス、其事蹟ハ内訌ノ部公ノ賜書中ニ明ナリ

松山三九郎所藏、松山ハ山口カニ男也

一二九 造演館揭示

為学之要在講脩齊治平之道、由五常之本源踐五倫之定分、脩文講武立身仕事、

所尚乎読書者、在以聖賢言語為標準行身施事矣、読万卷之書、不能行之乎身、施之乎事、与不学矣、

心経史弁明義理究與廢治乱之源由以読習実学、為学者不可不通曉時務、近世学者間暗時務不留心世事

迂腐自甘此学之弊也、自本邦支那外博読西洋各国之書知其制度文物風俗、可以審彼我之情状、

安政之初贈従一位權中納言齋彬島津公、親定訓令授

乎造士館演武館、其言真摯切實可以為後代之模範矣、
公天資聰明器宇宏遠、其為世子也好學下士、及嗣位
勵精圖治、勸農桑建常平倉、其治績歷々可觀、嘉永
癸丑米艦之來浦賀也、幕府倉皇不知処^{禮カ}、令列藩問
以方略、公乃条列事宜首陳起水戸老公任辺海之務、
尋請製艦船講航海之術、其所論洞見虜情最切時務、
當時諸侯所陳靡能出公右者、言皆見採納、其在鹿兒
島也博採西法建製鐵所、造器械講兵備百事勃興而其
志每在挽回

皇運擴張、惜哉、惜哉、天不假之年、中道而薨、嗚
呼公之明大義功

王室如此

朝廷追祀公而廟食千載不亦宜乎、公薨之後十有九年
千秋奉命來鹿兒島、尋承乏県令、回想薩之州土風
勇敢自古稱尚武之國、及

維新之際良臣賢將不乏其人者、雖曰因島津氏歷世養
才之有素、抑公教育之功所使然乎、今也國家開明世人
率流浮薄尚文芸而疎武術、先知識而後德行、尚武之
風殆將墜地、此可慨也、於是新設修文講武之場、取
造士演武之義名曰造演館、就公所定訓令摘其要以為

揭示、切望入斯館者思公之威德、入則孝出則弟、尽
職忘身臨危授命、生則為社稷之巨臣死則垂名汗青、夫
如此可謂不負為昭代之民也、後進之士夫勉焉

明治十六年七月

鹿兒島県令從五位渡邊千秋謹識

造演館ハ鹿兒島上町琉球館趾ノ郭内ニアリ、県令渡邊千秋
県吏・警官等カ文武講習ノ為メニ設ケ、名ツクルニ造士・
演武ノ二館ヲ追慕シ名ツケタル者ナリ、其時斯文ヲ撰シテ
館内ニ掲ケタリ、一三年ニシテ經費資セサルカ為メ廢シタ
リ、

一三〇 順聖公齊彬ノ遺事學海居士福地源一郎雅名

徳川幕府ノ時、安政二年六月六日和蘭国ヨリ始メテ汽
船一艘及ヒ小銃ヲ幕府ニ贈レリ、同シキ七月廿九日幕
命ヲモテ勝麟太郎義邦^{今ノ勝}・矢田堀景藏鴻・永持亭次^{今ノ}
郎某等、トモニ汽船伝習ノ為メニ長崎ニ赴ク、コノ時
和蘭^{和蘭}ノ領事ハ、「ドンクル」ト云フモノナリ、永井
玄蕃頭尚志コノ頃目付役ヲモツテ、伝習取締ヲ兼テ伝
習生ヲ督撰ス、長崎出島ノ和蘭館ニテ海軍伝習ノ業ヲ
始メラル、船將次官「ヘルセーキ」ト云フ、教師トシ

テコ、ニ四年ノ星霜ヲ送リシカ、費用夥シク、初メハ
 コノ長崎ノ奉行所ニ積マレタル金拾三万両ホトアリシ
 ヲ用ヒタレトモ、件ノ船ニ用ユベキ帆繩、ソノ余器械
 尽クコレヲ和蘭ヨリ購ハサレハ用ヲ弁セサルニ、十三
 万両ハハヤクモ尽テ、更ニ数万両ニ及ビシカハ、終ニ
 コソ事(ツカ)ヲ罷ラレタリキ、コハ費用ノ故ノミナラズ、堀
 田備中守正睦ガ老中タリシ時ニ始メラレシヲモテ、井
 伊掃部頭直弼國政ニ当リ、當時事ヲ用ヒシ奉行等多ク
 廢セラレヌ、直弼カ人トナリ、西洋説ヲ忌嫌シカハ自
 ラ軍制ナドニ心ヲ用ヒス、奉行等モ其風ヲウケテ、費
 用ツマカズトイヒテ中止セシトゾ聞ヘシ、
 コノ船乗試ヲシケルトキ、勝トカノ蘭人「ヘルセレー
 キ」同行シテ薩州ニ至リ、或ル港山川港ノコトナラムニ入ルトア
 ルトキ、コノ港ハヨキ地形ナレトモ人家ハ三十余軒ニ
 過キス、何ノ神社トヤランノ神主ノ宅ノミ大キヤカナ
 リ、勝ハ海上ヨリ遙カニ見ルニ、何モノニヤアリケン、
 金箔ニテ漆セシ陣笠(戴カ)ヲ載キタル武士、港ノ山際ヨリ馳
 セ出来ル、コレニツ、キテ三騎ハカリ疾風ノ如ク乘リ
 走ラシテ、灣ヲメクリテ、カノ神主ノ家ニ入ルヲ見タ
 リキ、シハシアリケル程ニ端舟三四艘ニ、件ノ武士ナ

ルベシ、ウチ乘リ、コナタニ進ミ来リ、(マカ)アハヒ近クナ
 リシカ一人舟ハタニ立テ、コレハ松平修理太夫齊彬ナ
 リ、イツコノ船ニ候ソ、船將ニモノ申サント云フ、即
 チ勝ハ出テ対面シ、長崎伝習所ニアリテ軍艦乗試ノ為
 メニコ、ニ参リテ候ト云フ、修理太夫齊彬コレヲキ、
 苦シカラスハ船中ニ参リテ一覽セハヤト存ストアリケ
 レハ、「ヘルセーキ」薩摩ハ大国ノ諸侯ナリトカネテ
 キ、シニゾ、大ニ喜ビ、勝ニ命シ船中ニ請シ、饌ヲ出
 シコレヲモテナスコト甚タ慰懃ナリ、島津ハ船將ノシ
 ルヘニツキテ船中ヲ見廻リ、又運用法ナト詳カニ問ヒ
 テ喜フ事斜ナラス、船將ニ云フニ鹿兒島ニ来リ玉ヘ、
 カノ地ニテ饗応セマホシケレ、コ、ハ領内ナレトモ密
 タノ義ヲモテ、温泉ニ浴スル為メニコノ港近キ所ニヤ
 トレリ、サレハ諸共ニハ思ヘトモ家従等多ケレハ、意ニ
 マカセスト云フ、シカハラ鹿兒島ニ趣キ候ナント話シ
 テ纒ヲトキヌ、齊彬ハ陸路ヨリ鹿兒島ニ歸リシナルベ
 シ、ステコノ船約ノ如ク鹿兒島灣ニ入リシニ、薩摩人
 等外国形ノ船トミテ、外人トヤ思ヒケン、或ハ礮ヲ打
 チ、或ハ声ウチ揚ケテ罵リ呼ハヒ、港ノ中ニ入ルコト
 ヲユルサス、勝モ船將モアキレテハ、腹立シケレトモ

セン方ナカリケレハ、ソノ日ハ退キテ海中ニ夜ヲ明ス、
斯テ又明ル日齊彬使者ヲ舟ニノセテ、昨日ノ無礼ヲ謝
シ、コノ舟ヲ案内トシテ、再ヒ港ニ入ル程ニ、齊彬騎
馬シテ、港ニ出迎港ニ出迎ヒタルハ誤レリ、公磯別邸ニ行クノ
途中、城下新橋詰ノ広場ニ幕吏及蘭人上陸シ
テ、公ノ通行ヲ待テ、蘭薄ニ從テ磯邸ニ入ル、公此日尋常ノテ、
御出行ト異ナルハ騎シ玉フノミ、其他平常ニ異ナルコトナシ式
代シ、近侍ノ武士ヲ從テ己ソノ真先ニ馬ヲス、メ、ト
アル別荘ニ趣クニゾ、流石剛性ナル薩摩人モ己ガ主君
ノ斯ク礼遇セラル、ヲミテ、無礼ヲ加フベキニアラネ
バ皆々路上ニ蹲踞シテ敬礼ヲ施シ、恙ナク別荘ニ入り、
又斯テ島津ハ侍臣等ニ命シ、イツノ間ニ用意シケン、
山海ノ珍味ヲツラネテ、厚ク船將及ヒ勝ヲモテナシ、
軍艦ノ事ナド又詳ニ尋ネ聞クコト甚タ信切ナリ、酒酣
ナリシ頃、勝ヲ人無キ所ニ招キ、和殿コノタヒノ航海
ハイズコヲ指シテユキ給フヤ、日本ノ近海ノミニヤ、
或ハ遠ク島々ヲ経回スルニヤト問シカハ、勝ハ答テサ
ン候、海軍伝習ノ為メナレバ、ソノ遠近ハタゞ教師ノ
マ、ナレハ、某ハヨク知り候ハネドモ、マヅ琉球ヨリ
シテ臺灣ノ辺マテムコウナントノ物語候ヒキト云フ、
齊彬ウチナツキ声ヲ低フシ、稽古ノ為メトアランニハ、
サモアルベシ、サレド琉球ニ赴カレントハ、コタビハ

思ヒ止リテタヒテンヤ、実ハカノ地ニ英人二人トゞマ
リ居テ、国ニカヘラス、ヨツテ近頃全ク家從等ニ命シ
テカノ人ニ就キテ外国語ヲ学ハシム琉球大島ニ於テ開
市ノ準備中ヲ云フ又
窃カニ互市ノ事ヲモ謀ルナルニ、本船カシコニ至リ、
コレ等ノヨシヲ見聞シ、江戸ニ洩レ聞ヘタランニハ、
事六ツカシ、コ、ヲ心得テ、今度ノ航海ハ止リ給ハズ
ヤト、余義モナクイハレタリ、勝ハモトヨリ此人ノ幕
府ノ為ニ志厚ク、トモニ開国ノ業ヲトモニス可キ人ト
知り、且サル秘事マテ告ケラル、懇切ノ意ニ感シ、ヤ
カテ船將ニハ他ノ故障アルヨシニコシラへ、琉球ニハ
赴カズシテ、直チニ長崎カヘリントゾ、勝氏ノ物語ニ、
此時薩摩ハハヤクヨリ外交ノ道ヲ開カントシテ、斯ク
マデ心ヲ用ヒタリ、開国ノ首唱トイフトキハ堀田氏ヲ
ハジメト云ヘド、コノ齊彬マシコソ第一トスベケレト
言ハレキ、又コノ人非常ノ豪傑ニシテ、尋常ノ人ノカ
ケラモ及ハス、氣質ヲハシキ父ニテヲハセシ參議齊興、
ヌシノ妾岡田氏ヲ寵セラレテ、三郎久光ヲ生メリ前左
大臣
岡田氏窃カニコレヲ立テントセシカ、事アラハレタレ
ドモ、齊彬此人モトヨリ父ノ為メニ愛セラレタル、三
郎ハ正シク吾弟ナリ、決シテ疎略ニスベカラストテ、

己カ子無キニヨリ、三郎ヌシノ子ヲ養嗣(忠義)久光公ヲ云フトセラレ、又此人始終幕府ノ為メニ力ヲ竭シ、万事ニ就テ幕府ノ為メニ周旋セサル事ナカリキ、サレバ此人ウセテ後朝幕ノ釁隙ニ及ヒ、終ニ大事ニ至リシトナリ、又勝氏密話セラレシ時、勝ニ向ヒ、余カ事ヲ営中ニテ噂セラルベシ、イカンノ事ヲイウヤラン、聞カマホシトアリケレハ、勝氏答テ、サレハ候、薩摩ハ人氣強ク、又近頃兵艦ヲ造リ、武備ヲ修ムルカラハ、徳川氏ニ対シテ、不軌ノ謀ヲ懷クモ凶ルベカラズト申テ候ナルト、憚ル所モナク申ケレハ、齊彬大ニ打喜ビ、サモアラン、サモアラン、コノ事我レ伊勢阿部伊勢守ニイヒツル事ナリ、ヨロシク我マタ伊勢ニヨクイヒ置クベシ、心ニナカケゾト事モ無ゲニ言ヒケルトゾ、勝コノ時伊勢トハ誰ナラント思ヒシカ、後ニ島津氏ハ幕府ノ為メニ力ヲ尽シテ、殊ニ時ノ老中ナントニハ親シクセラレシヨシヲ聞得テ、始メテ伊勢トハ阿部伊勢守正弘ノ事ナリト知りニケル、島津ト阿部トハ親密ノ交アリシトナリ、

テ愉快ニシテ遠見アリ、諸藩陳腐ノ攘夷説ナンド、ハ霄壤ノ別アリテ、殆ント近世有職ノ説ト異ナラス、又繼嗣ノ論モ賢明ノ主ニアラサレハ、カ、ル困難ノ時ニハ当リカタシ、ハヤク一橋刑部卿ヲス、メテ西城ニスベシトアリキ、勝氏ノ物語ト一々符合ス、齊彬ヌシノ心術ヲ知ルベシ、明治二十年十二月六日コノ人ノ弟ナリケル前左大臣久光公薨セラレシニ、報知新聞ニソノ行状ヲノセテ、山内容堂嘗テ高崎五六ニイヘラク、前ノ薩摩守ハ人ヲシテ近ツク可ラサル想アラシムホドノ品高カリシモ、自ラ和氣アリテ、人ヲ感服セシムト、又鍋島閑叟・松平春嶽諸老カ言ニ、若シ維新ノ際薩摩藩主ヲシテ齊彬ナラシメハ、アノ如ク幕府ヲ傷ツケ毀ツコトナクシテ上杉公ノ言ノ如ク、當時幕府ヲ傷ケ倒スカ如ク、キノコトハ為シ玉ハサルノ御思意ナラム平ヨク之ヲ了シタラント言ヒシトナリ、齊彬ノチニカノ國人諡シテ順聖公イヘリ、勝氏ハコノ人ノ事ヲ話スルニ、ソノ名ヲ称セス、順聖公トノミイハレシ、コレ敬愛セラル、ユヘナルベシ、

學海居士カ説事実誤ナキニ非ズト雖モ、大体ノ論ハ勝義邦氏ノ説ニ拠レル者ナルカ故、強ニ抹殺スベカラズ

一三一 田原陶吉記述鈔 本紀二同説アリト雖モ他事ニ連帶セルカ故記載ス

旧幕府此方へ御詔ノ軍艦三艘、載付之大砲二十四磅八砲、十二磅・八磅以上數十挺、装薬彈丸、其外要具一式御式渡有之、尤モ請取之折ハ私ニモ出府仕候、義引カ役ハ川路左衛門尉・松平河内守・井上爲彌・鵜殿民部少輔、大砲方ニハ笹倉桐太郎・濱與新右衛門・鈴藤雄次郎其外与力之輩数人、何モ無異議御引渡相濟、薩役早川五郎兵衛・三原藤五郎、御留守居附役仙波市十郎・長田庄兵衛・私ニテ御座候、右御詔ノ代金此方へ御請取之手続混雜ノ事有之、私登城田原カ登城云々誤レリト思フ弁解之上弥御引渡相究申候、

田原陶翁元名直助

順聖公御用被相勤候覚書ナリ、

鑄製方ニ於テ支那硯石ヲ見本トシ、細工人小牟田直介ニ彫刻被仰付、牛根郷二川石、甌島小島石公冷泉石ト名ツケ玉フヲ以テ彫刻相成、実ニ支那硯石ニ髣髴タルモノ多分ニ出来、其硯石水戸公其他ノ紳縉家ニ被進候、日本ニ於テ支那硯石同様之品製ハ是ヲ手初ト承伝候、民間ノ種ユベキ者ハ五穀ノミナラス、果木ヲ樹ユルモ亦宜シク、広ク栽蓄スベシト、佐多郷・山川郷等ノ荔

枝・龍眼菓木等龍眼、荔子等ハ重豪公ノ栽培セラレタリ、田原カ誤ナルヤ言ヲ俟タス 此末ニ多

分樹付、貧窮ヲ賑救ス可キ

御命令モ被為在、私長崎滞留之折、錫蘭・肉桂又ハ麒麟樹・椰樹・丁子樹和蘭船持渡品取入方被仰付、御附入大迫源七申談、入手之上持帰リ奉差上候、椰樹ハ川上久美式部琉球ニ持渡リ琉球ニハ從來此樹アリ、川上カ、彼地ニ栽培ルル云々ハ田原カ誤ナラム付相成、方今実ヲ結ビ候由、是モ昔シ支那ノ孝衡カ丹陽ノ守ト為リ、千頭ノ木奴栽培ノ事等御考へ被遊、右次第ト承伝候、

近年日本近海へ西洋軍艦出沒致シ、佐多郷・山川郷前海へモ時々乘来リ、後世念遣モ可有之ト深被思召、非常之為メ御城下海岸へ砲台御造築被仰出、専ラ成田正右衛門エ被仰付、次ニ私ニモ同断被仰付、諸所ニ造築仕、其為メ先年英国軍艦内海ニ乘入英国軍艦云々田原ノ記スルハ大ナル誤ナリ、又公御代ニ乘入、レタルコトナシ、慶長以來之大戦争之時節モ其為メ格別之御勝利御座候、

小銃ヨリ小弾ヲ数丸装ノ禽獸ヲ獵スルノ一銃、西洋ニ有之ト、私長崎滞留之砌、井上庄太郎ヨリ問越ニ相成、御附人大迫源七へ申談、和蘭人持合之両眼銃ヲ通詞岩瀬彌七郎へ計ラレ、諸要具相揃へ、一箱御取入相成、

和^{〔私カ〕}婦國之節才領持婦、庄太郎方エ差出、御都合宜ク候

由承得候由、此折迄ハ小銃ヨリ数彈ヲ放發スル事未タ

人々各点不仕ニ、早御着目被遊惑心仕候、私ニモ磯邸

御射場ニテ打試被仰付候、今ニ御格護相成候哉、其架

ニ紅葉ニ鹿ノ彫刻御座候、

公首造軍艦數隻^中、初使^ニ陶猗及花田喜三左衛門到^ニ長

崎^ニ承^レ旨^ヲ窃^ニ問^ニ和蘭船頭某^ニ請^ニ製艦之術^ヲ贊^ニ得^{タリ}其事、

而帰^ニ于^ニ國^ニ詳^ニ上^ニ申^ニ焉^ニ厚蒙^リ獎賞^ニ然後嘉永六年癸丑五月

造船場設^ニ立隅州櫻島漕之浦及牛根郷之両所^ニ、命^ニ御船

奉行長崎勘介・橋口左衛門及御軍賦役陶猗御船頭花

田喜三郎^{〔私カ〕}左衛門、御船大工福崎仲左衛門西郷直次郎其

他船司之吏人若干^ニ、令^ニ督^ニ其事^ヲ一隻同年十二月竣^ル功

矣、亦復軍艦製造之樹木^ヲ為^レ後世^ニ遺^ス樹^ニ于^ニ日州諸県郡高岡

郷去川山中^ニ略^ス

右序文ヲ略抄ス、余ハ公之事実ニ関スル事ナシ、序

田原陶猗謹叙

出水郷エ広地アリ、棄テ久ク、棒莽ヲ成ス、親ラ相度

ヲ為サセ玉ヒ、新田開拓ノ役ヲ興サセ、其監督ヲ中村

新介エ命セラレ、専ラ民百姓ヲ胆養^{〔マメ〕}ノ為メナリ^{〔前卷ニ〕}詳記ス

集成館ハ、初メハ鑄製方^{〔集成館ハ嘉永四年ノ末磯邸構外御取添〕}

レ、広貫等掌リタリ、而シテ安政四年ノ夏館名ヲ付セラレタルハ、別

卷ニ記スルカ如シ、鑄製方ハ本書ノ如ク、弘化三丙午五月創建セラレ

而シテ公御逝去後安政六年ノ夏忠義公鑄製局ヲ廢シ、集成館ニ合併セ

ラレタリ、當時広貫モ其局員タリ、其時田原ハ御軍賦役ニ転シ、其事

実ヲ詳ニセサル故斯ク誤記シタルナラム、○合併ノ際局員ハ竹下清右

衛門・岩下新之丞及広貫其他二三名ナリキ、○此時公御在世ニ比スレ

ハ十分一ノ事業ニモ至ラス、大小砲一局ヲ被召立、弘化三

年丙午五月上町築地弁天社傍へ、齊興公御代^{〔私カ〕}ニ御代

ニ御家老調所廣郷・御趣法方御用人海老原清熙エ其事

ヲ督セラレ、將來御軍備之大砲小銃ノ製造ヲ被仰付、

金・銀・銭ノ出納等ノ事ハ和田八之進エ被仰付、大砲鑄

造小銃製作等ハ成田正右衛門、次ニ私ニ被仰付、其後木

脇權一兵衛、竹下清右衛門エモ同断被仰付候、於其後

公ノ思召ヲ以テ^{〔公ノ思召云々誤レ、磯御仮屋傍ニ被引移玉〕}

ヒテ、集成館ト改局シ、尚盛大ニ御軍備向之器械被為

整、剩エ他藩諸侯方野戰砲之製造所御願有之、多分出

一三三 考証 江夏千城親話筆記

江夏千城二拾四歳ノ時^{〔安政四丁巳四月〕}伏水ヨリ嵐山ニ御乘馬

御供ス、嵐山ニライテ石墨御発見、仰ニ是ハ書ヲ記スル用ノモノナリ、此奥山ニハ必ス産スルナラントテ、其石干城ニ下サレタリ、夫ヨリシテ江夏ハ石ヲ好ムコト、ナレリ、此レ好石ノ因源ナリ、外ニ種々ノ石ニツ三ツ御手ニ入り、文鎮ニ為致トノ御意ナリシ、其墨記今ニ保存セリ、

此時御微行ニテ、伏見ヨリ嵐山ニ入セラレシ御趣意ヲ伺ヒ知ル人ナシ、御出立ハ御野服ナリ、御帰路御所ノ周圀御廻リ、南門ノ前ニ御跪キ御拜被成、其時御築地近地草茫々タリ、ヒドイコトダ、大麥草ハヘタリト、御嘆息被遊タリ、其時ノコト今ニ心ニ銘セリ、嵐山ニ被為入、前ノ如ク干城ニ仰ニ、来秋ハ亦来テ紅葉ヲモ見ルベシ、其方モ可召列ゾト被仰タリ、

今度ハ十郎干城カモ父直義召列ルトノ仰アリ、当夜ハ伏見邸ニ御立歸リ、翌日陽明殿ニ被為入タリ、此時御滯伏ニテ竹瀬舟ヨリ伏水ノヤウ御帰館被成候、此時ノ御供ハ百等行衛・井上新右衛門・中山尚之介・能勢龍五郎・江夏干城・迫水善左衛門等六七人ナリキ、

御幼年ノ折 〔重要〕大信公御慰旁々御子様方御集リ被成、其時金銀諸種ノ器物品々御備被成、此内各數寄ニテ氣ニ

入タルヲ取ラスベシトノ仰アリシ故、皆々様夫々御好ミニマカセ、御頂キ被成シ折、公ニハ黜〔黜カ〕シテ御覽被成タリ、其方大信公仰ニ、何故ニ不取ヤト仰ニ、頂キマストテ、真鍮ノ器物一ツヲ御取り被成タリ、其時大信公仰ニ、大國ノ主トナルベキモノナリト、大ニ御賞讃被遊タリトソ、此話ハ江夏干城曾祖父江夏直義カ養父喜安、待医〔待也〕ニテ其御座ニ在リテ、親數伺ヒシ事ヲ干城伝聞ス、

安政三年ノ秋田町邸ニ被為入、夜ニ入り御帰邸ノ時、御乗物脇ニハ山田壯右衛門・江夏ナリ、山田ハ右ノ方、江夏干城ハ左ノ方ニ附従、其時江夏ニ仰ニ、此辺現今ハ此ヤウノ江戸ナレトモ、近年ノ内ニハ西洋人ノ住居トナルベシ、當時ハ極盛至治ノ世ナルモ、年々變化シテ騒カシクナルベシト仰セラレタリ、

公ノ寛大仁慈ナルハ皆人知ルカ如シ、大地震ノ前比或ル時兒御小姓谷村小吉、御秘藏ノカラスノ灯台御座内ニアリシヲ、誤リテ落シ毀シタリ、大ニ驚ヒテ御託申上シニ、初ヨリ小兒等ニ此様ノアフナイ品ヲ扱ハセルカ好クナイト仰セラレタリ、

澁谷邸ニテ大地震後、大風ノ前比、天璋院様御入興ノ

前方、銀金具ノ煙草盆出来セヨトノ仰アリ、干城持テ走リタリシニ、廊下ニテ落シ、跪キ倒レ毀シタリ、御託申上シニ、何ニ飾屋カ喜ンダゾト仰アリキ、同頃西洋ノ顯大ナルモノヲ、君側ノ輩ニ見セヨトノ御事ナリシカ、干城誤リ其縁ヲ引欠キタリ、其折モ御氣色損セサリシハ幸ナリキ、
磯邸ニテ焼物ノ繪御書キニ、朝貞ノ画ヲ遊ハサレシヲ、夫ヲ悉ク毀シタリシ此時集成館ノヤウ持行、兒玉兒玉雄ヲ頼一、一緒ニ御託申上シニ、此時モ御氣色御損ナカリシ、紅硝子製造ノ時、仰ニ、煤ヲ交セヨトノ仰ナリシニ、過リテ錫ヲ交ヘ製セシニ、終リテ煤ヲ交セルノヲ御前ニヲヒテ、江夏十郎其御品頂キ度言上ス、江夏ノ家ニ保存セリト、其製過リタルハ宇部(宿願カ)彦右衛門ナリントツ、安政五年五月小蒸氣ヨリ指宿二月田ニ被為入、江夏十郎モ同ク御供、其時汐干ニテ神瀨試築ノ仰ニ、此処ニ砲台ヲ立タラハ敵船入ル事難カラム、サクラ島ノ間ニ水雷モ伏スル等ノコトヲ、御帰殿迄ノ内ニ取調ヘヨトノ御言ナリシト、然シテ三昼夜ニシテ、神瀨ノ上ニ少シク形ヲナシタリ、江夏ハ早馬ニテ參リ、御届ニ及ヒシニ、迅速ニ出来セシヲ賞セラレシトナム、

江夏十郎ヲ長崎ニ出サレタルハ、勝安房守ト打合せノ為ナリシト、勝ハ天下ノ大事、公ニ非サレハ為シ得ル人ナシト見込奉リシニ云々アリテ、長崎ニ於テ蒸氣御買入レノコト御依頼アリ、細談ノ為メ松木弘安ト俱ニ出サレタリ、其代価ハ國産ヲ以テ云々、或ハ軍艦揃ノ上東京港ニ開市云々、或ハ幕府ニ御建論後朝鮮征略等ノ云々ナリシト云フ、右ノ諸件勝ト論談中御逝去ノ報ニ接シ、松木ハ早ク帰り、十郎ハ長崎ニヲヒテ大病ナリシ故、松木干城ヘ告ケ、干城看病ノ為メ出崎シタリ、御逝去ノ四日目ノコトナリ、然シテ此密事十郎ヨリ干城カ聞処ハ、川内薩摩山ニ於テ弟善之助ト行途ヒ、承ルニ「ボンペ」長崎在留和蘭医薬ヲ奉ルトテ護送スルニアリ、御逝去故引返シテ阿久根港ニ出タルニ、小舟式拾円ヲ以テ雇ヒ、茂木ニ着キ、十郎ニ面会、十郎立腹シテ直ニ帰ルベキヲ命シタリ、
十郎ヘハ右大事件勝氏ニ断レト、家老中ヨリ申聞越タルニ因テ、「ハントウエン」鹿兒島ニ來リシ和蘭人嘆息シテ曰ク、此君ナケレハ事ヲ為ス能ハシ、
此時ノ事情ハ一大事件故、筆舌ニ尽ス事ヲ能ハスト云フ、

軍艦ヲ買入レラレ大事ヲ為サル、尊慮ハ、全ク天下ノ形勢救フベカラサルニ立到リシヲ以テ御決心被遊、十郎ニ命セラレシ趣アリシト、此源因ハ全ク前年御下國ノ際、於陽明殿

御内勅ヲ被蒙タルニ依レリト、御必生ノ御大事一二アリト云々二二ハ京師御密勅、一ツハ南島ニ於テ外國貿易云々ナリシト云

御逝去ノ前日午後四時比、表ノ方ニテ清水養正曰ク、実ニ御大事恐入奉ル旨承リ驚キタリ、夫迄ハ指シタル御病氣トハ僉人思ハサリキ、此以前東京ニ於テ御病氣ノ折、干城杯申談、鎌倉八幡エ參詣セリ、御快氣後干城国下ノ途中八幡へ參詣御祈申上ケタリ、此度清水ヨリ其事承リ、其假國分八幡宮へ參詣、帰路吉野原ニヲヒテ右松十郎太へ行逢ヒ、是モ參詣スルナリ、白金坂ニヲヒテ家來カ迎ヒニ參リ、当日大雨ナリシカ、直チニ登城シテ拜謁シタルニ御座遊ハサレシニ、おすま、山田杯申ニ、十郎カ帰ルヲ御待被遊ト被申聞、長崎へ被遊シハ前ノ如ク一大事件ナル故ニ、帰ルヲシキリニ御待被遊シヨシ、おすまト申シタリ、御病氣ノ初ハ七月八日砂揚場調練ヨリ御帰リニ、御釣リニ御出被成、其折鱗ノ指身被召上、是カ初リカトノ

御事ナリシトソ、尚夜ヨリ御下痢付キタリト、御醫師ハ坪井芳洲侍医、洋法医ナリ、

干城君側へ御召仕ハ浦賀へ初メテ米艦入津嘉永六、癸丑、其折田町邸ノ警衛ニ出張、島津隼人久芳当、時番頭、其將タリ、其事

終テ南向邸ニ深見休八影石流、師範同宿、擊劍修行セルヲ、村井登庸村井ハ侍医ト云人十郎ト懇意ナルニヨリ往来セ、其時分中小姓ニナリシヲ、側御小姓ニ可被召出村井ヲ

以御沙汰ニ、表方ニ用立モノ誰ナルヤトノ御尋ニ付、當時西郷吉之助モ同役ナリシトゾ、西郷ハ御鳥預被命、干城ハ御小姓ニ被命タリシナリ、

江戸大地震ノ際ハ芝邸ニ被為在タリ、安政三年十月二日ナリ、干城ハ非番ニテ長屋ニ居タリ、夜十時頃前田龍五郎・本田孫九郎等同宿ナリシカ、初ハ大砲ノ如キ音シテエリ出シタリ、長屋崩レテ落チタリ、卒然ノ事ニテ夷艦ノ攻撃シタルカト疑ヒシニ、同宿二階ヨリ早く下レト云ヘリ、直チニ御休息所ニ出タルニ、宿直ノ輩ハ君公ヲ初メ御庭ニ出ラレ、御厚運ニハ、土藏ノ脇ヲ御通りノ跡ニ直ニ崩レ落チタリ、公ニハ御庭ニ御出ノ時ハ枕鎗ヲ御杖キナリ八幡大菩薩ト、銘シタルモノ、御庭ノ築山ニ御登リ被成タリ、其折仙水ノ水モ皆ナハネ出シタリ、

仰ニ見ヨ、無程江戸中皆火ニナルベシト、無程出火數十ヶ所ニ起レリ、火ノ用慎等被 仰出タリ、御座ノ間モ無間崩レ落チタリ、御道具出シ方ニ堅山八郎取片付

ニ御座ニ入りシニ、無程家崩レ落チタリ、

村井前記モ家ノ崩レニ庄死セリ、追々死亡ノ届モアリ、

翌日水戸〔彰〕藤田カ死シタリヲ聞召シ、御嘆惜被遊タリ、

翌日遊谷邸ノ方へ御引越シナリ、一日間ハ御庭内布屋

ニ御住居アリシナリ、

大風ノ時ハ遊谷屋敷ニ被為在タリ、

御初入部ノ時、鹿兒島ノ役員川内川ニ網ヲ打テ入御覽〔綱カ〕

タリシニ、其後御側役へ何か御用被仰付ノ折ノ仰ニ、

川内川ノ鯛ノ魚取ル様ナ事ハ致スナヨト被仰シニ、二

三年後ノコトナルニ驚縮セリトシ嘉永四年ノ初夏御初入部ノ際、久見崎ニ於テ、綱引御覽、鯛漁事件ヲ云、當時ノ部ニ記ス

東郷源四郎持重カ磯山ノ御狩御供被仰付、東郷ハ弓ヲ以

テ御供仕度願ヒシニ御免被成、弓ヲ携、御鹿垣ヨリ間

モ無キ処ニテ、鹿ノ鳴声スルニ依リ、干城行テ見シニ、

鹿ノ足ヲ射テ、矢ハ折レテ、鹿ハ刀ヲ以テ留ヲ指シテ

居リタリ、鹿カ谷ヲ渡ル処ヲ射タリトシ、公大ニ御

満悦被遊タリ、公ニハ七頭程御打留ニ成レリ、干城

ハ一頭打留タリ、干城モ一緒ニ放発シテ射タリト御眷ナリ、其時ノ山奉行ハ高城六右衛門ナリ、山奉行ハ御鹿垣ニ相詰候規則ナリ、

其時白鹿見ヘタルヲ打テト被仰、干城打タリ、白鹿ハ

山方ノ作法ニテハ不打モノ、ヨシ、符倉ハ重富郷ノ水

陣ト云所ナリ江夏干城所有ノ順聖公御親筆御書狀八通本日持参拜見ス、外ニモ有之ヨシ、其内ニ蒸氣船方ニライテ

廣貴等カ折田八郎兵衛ト及議論候次第ヲ御氣ノ毒ニ被思召被仰下候一件モ記サレタリ、竹乃一葉ト名ツケタル一書ハ、

賢聖院殿ノ御伝及ヒ御言行ヲ記シタル者ナリト、是ハ旧幕臣川路左衛門尉ノ妻カ著シタルヲ、左衛門氏カ、奇彬公へ奉呈セシト、御藏書中

ニアルナラン、又同頃水戸烈公へ歌文ナト呈セシ事モアリシト、才学アリテ、貞操ノ女ナリシト云フ、○左衛門尉ハ聖護ト云フ、維新ノ際

自殺セシ人ナリ〔其妻ナル人ハ明治十七年十月十二日八十一齡ニテ物故セラレシトシ、辞世ノ歌ニいとなく思ひしるとも限りある我世の夢も今はさめぬる、左衛門尉

聖護ノ長男ハ川路寛堂ト云フ〕

一三三 池田正藏話筆記

齊彬公下瀉 御巡見被遊候ニ付、加世田ニ於テ、郷土

踊士踊御覽、鹿兒島二オトモ余多差越居候処、御サン

キノ下へ呉座御敷セ拜見被仰付候、ミナノ難有段申

事ニテ候、指宿ニテハ農業ニ百姓出候テ、折角ト相働

候処ニ、御出テ被遊、段々難有御意共御座候テ、後ニ

御持被遊候御煙草入御手ツカラ右之者へ被下候由、又

百姓共集居候〔不明〕飯ナトタへ候処、我ニモ可只ト被遊

御意、御自分様ニモ被召上候、右之事共承り落涙仕候、近年珍敷難有儀ニ候間、書記シ置ナリ、亦御帰リ之時分被遊候 御歌、

かちに行く 供人いかに さむからん こしの内さ
え さゆる嵐に

郡元村海辺へ水車御造立ノ下支配人私へ被 仰付、此水車ハ上方ヨリ棉作人御雇下、同村又ハ各郷へ棉作御開ノ御趣意ナリ、又棉実ノ油ハ攝・河・泉ノ三四ヶ国ニヲイテ、燈用又ハ田地虫除キノ必用ナルニ付、差向実棉ニテ御買下シ、其実ヲ以テ製油被 仰付候、御国ハ一体棉作不開ニテ、此様テハ不相濟トノ御事ヨリナリト、掛り役ハ山田壯右衛門其外御徒目付等ヨリ兩三人被仰付、棉実油搾リ立ノ上、諸郷ノ田地虫除キニ試ニ御渡相成、其効アリ、殊ニ従来種子油代価ヨリ遙ニ易ク、イツレモ難有存シタルニヨリ御払下ケ相成候、其時分ニ山田へ仰ニ、棉実油ハ第一大切ナル田地虫除キ、第二ニ棉作引進メノ為メ、第三種子油ヲ田地又ハ燈用ニ用イル補ニモ可相成、第四ニ種子油ハ産物ノ要品ナレハ少シニテモ多ク大坂等へ売出サハ、国益ナルベシトノ御事ナリシト、山田ヨリ承リタリトソ、

同水車場ノ内ニ米搗水車モ御取建被 仰付、御軍用ノホシイ米ノ搗方被 仰付、年々三百石ツ、先ツ差向キ五ヶ年ノ御試ト被 仰出候由、五ヶ年御国被試ノ上、虫付等無之、御弁利相成ニヲヒテハ、猶石数モ可被相嵩、此ホシイ米ハ御軍役御用ノ賦ナリ、然シテ五ヶ年目ヨリ御田替可被 仰付、其古物ハ菓子屋中へ御下ケ相成、型菓子其外何菓子ニテモ可相用トノ御目論見ナリシトソ、ホシイ米ハ御台所ニヲイテ製造被 仰付候、菓子屋赤石屋大兵衛江戸ヨリ罷下リ、鹿兒島ニテ江戸風ノ諸菓子製造相開候、夫迄ハ全ク田舎風ノ製造ノミナリキ、故ニ其時分赤石屋菓子ト唱へ珍重セリ、此モノ右ホシイ米ノ古物ハ、型菓子其外ニ可相用旨上申セリトソ、道妙寺米粉ノ製造モ被相開、右赤石屋製造セリ、餅米ノ搗方ハ池田へ被 仰付候、右米粉製造致シ、江戸へ赤石屋ノ手ヲ以テ売出シタリトソ、其後田上村ノ内へ幅広織物水車御取建、初ハ一反幅ヨリ試織リ、遂ニ五反幅迄ノ^(機心)械製造被 仰付候、此^(機心)械ノ製造ハ大和国ヨリ御雇下ノ卯吉郎ト申モノ、工夫ニ出タリ、棉・絹兩様見事ニ織物出来、高名ナル品ナリ、大幅ノ絵絹モ織方被 仰付候、此処ハ

再度御鷹野先ヨリ御入被遊、御腰掛トテ小サナ御仮屋出来相成、初御入り被遊シハ、安政四年ノ冬十二月初ノ事ナリシトソ、

御腰掛台ハ十二枚敷ニ六枚ノ土間作りニテ、御野腹(服カ)ノ俚御腰ヲ被為掛候御仕掛ニ出来候、

御鷹野御召服ハ金巾ノ御野羽織立揚袴ニテ、御召物モ金巾ノ小紋形付ニテ、惣テ御服棉地ノミナリシ由、腰御弁当ニテ小サナ柳コウリニ御入付、漬物一ツノ御添ナリシトソ、其時池田ヨリ唐芋・里芋ノ蒸シ立、并ニ

櫛柑一籠進上セシニ、殊ニ御満足、数個被召上タリトソ、其時分御近習ノ輩ヘ仰ニ、百姓共ハ朝夕皆唐芋ヲ常食トスルヨシ、誠ニ可愛想ナモノナリ、習ヒト云ヒ

ナカラ無是非コトナリ、今日ハ弁当モ不用、此芋ニテ為濟可試トノ御事ナリシヨシ、

其節ノ仰ニ、国中ノ大小船敷ヲ取調ヘ、此機ニテ帆布綿ヲ織リ、用弁スル様ニ致度、機ノ製造モ可為試トノ御事ナリシヨシ、其後御船奉行ヘ相セラレ、大小船敷取調ヘシニ、大小五千三百余艘、其用ル所ノ帆布皆上

方ヨリ買下シ、代価夥敷キ金高ナリシヨシ、追々織方相開ル事トナリシニ 御逝去、其事廢絶セリトゾ、

帆布綿織ノコトニ付仰ニ、糸ノ引キ方ニハ士族困窮モノ共ノ女房娘杯ヘ為致可然、生活ノ足シ、野菜ノ代足シニモ可相成ト仰モアリシトソ、又仰ニ兎角ナンデモ仕事ヲ為致、昼寝杯不致様ニセネバナラヌトノ御言モアリシトゾ、

鹿兒島下町人濱崎太平次越通船中浜方次郎カ製シタル形ノ運輸船二三艘、御試ニ為造候様ニトノ御内命、其帆ニモ国製ノ帆布綿可相用トノ御沙汰アリシト、当時大坂

ヨリ買下シ帆布綿ハ上品一尋代価三貫二百文、御国製(軍カ)織リ水軍機ニテハ一尋ニ付、一貫八百四十八文余ニ付タリト是ヲ払下ニハ一割五歩ノ利ヲ掛ケ、其内五文丈ケハ池田ヘ遣ヨトノ御事ナリシヨシ、

此帆布ハ大筋木綿糸八筋ニ合セ幅二尺ニ織立タリ、此用年々木綿一万五千本ツ、御買下相成タリ一本ハ六貫、四百目入り是ヲ以テ国用丈ケハ可相弁トノ予算ナリシヨシ、則大

小船舶五千三百余艘分ノ用ナリ、郡元村ヘ木棉ノ植試初ラレシハ安政四年ノ春ナリ、雲州ノ人仲助・利八ト申兩人御雇相成リ、池田ハ下見廻

人被命タリ、御手綱方(綱カ)ヲモ池田ヘ掛被命、初九十九里浜辺ノ綱製御

取寄セ相成、御試ニ郡元村ヨリ荒田村・谷山脇田村等

ノ海辺ニ植試ノ節、多クノ雜魚・鯛類(網カ)モ網ニ入り、則

磯御茶屋ノ様持參差上シニ御喜悅、曳網(網カ)ノ次第共詳ニ

言上被仰付候、然シテ御拡張相成、初近在二十四ヶ村

ニ占糟田島ノ肥シ様ニ弘メ方被 仰付候、其時分兒玉

助右衛門ト申モノモ、池田同様掛被 仰付候尻玉ハ和州高島藩士、故アリテ脱藩鹿島ニ仮居ノ人也

故アリテ脱藩、鹿島ニ仮居ノ人也

占メ糟拾貫目代価三貫二百文、鰹建拾貫目二貫八百文

拾ヶ月延納、村内ノ名主立会引受、拝借被 仰付候、

御種人鮮人參一名朝鮮人參植付方雲州ヨリ伝習被 仰付、御試植

被 仰付候、追々御取弘メノ筈ナリシカ、御逝去後、

其事廃絶イタシ、其後同人小林・飯野郷へ相開キ、稍

産物ノ端緒ヲ開キタリ、廢藩置県後廃絶セリト、

池田ハ元來市來湊浦ノ商估ニテ、幼年ヨリ鹿兒島下町濱

崎多平次カ僕ニ使ハレ、琉球・大坂ニ往来シ、唐物密商

ヲ事トシ、數回入獄、黠商ノ名アリシ者、後川上龍衛カ

家來トナリ、実業ニ就キ織業、其他棉作或ハ朝鮮人參栽

培ニ従事シ、小林郷堤村島津主殿カ所有地内ニ、上町商

賣柿木彦左衛門ト栽種シ、大ニ其業ヲ起セリ、明治維新

ノ後、東京ニ出テ大蔵省或局ノ属官ニ奉職シ、明治二十

年頃病死セリ、

一三四 島津忠寛君親話

佐土原旧侯島津忠寛君、照國公ノ御言行譚ニ曰ク、芝

公ノ御高恩ヲ蒙シ事ハ、拙者ニライテハ、親ヨリモ深

キ御高恩ヲ奉蒙レリ、幼少ノ時ヨリ二三日越ニ上リ、

政事向ノ御教育ヲ請、或ハ読書モ何々ヲ読メト、就中

貞觀政要・四書五經・孫子・通鑑綱目等、其外頂戴致

シ、今ニ秘藏セリ、貞觀政要頂戴被仰付候時、政事ニ

就テハ先ツ手近ク是カ宜シ、是ヲ目的ニシテ政事ヲ為

ス時ハ越度ハ無之、太祖モ闕失アル人ナレトモ、其宜

キヲ取り、手本ニ可致、我等モ其心得ナリトノ仰杯ハ

殊更今ニ身ニ浸ミテ記憶セリ、又或時ノ御沙汰ニ、其

方ハ小身ナレトモ、大身ノ心得ヲ以テ政事ノ稽古スベ

シ、追々薩隅日ノ政事手伝モセネハナラス、ナレハ其

心得アルベシト被仰聞候事モ有之候、

御逝去ノ前々年頃ト覚ユ、或時ノ御沙汰ニ、世ノ中ケ

様ニ異國船騒ニ成立タルハ、全ク日本武備ノ衰ヒタル

ヨリノ事ナリ、武備ノ衰ヒタルハ大小名ノ怠リニアリ

テ、人材少キヨリケ様敷ケ敷世トナリタリ、然レトモ

我等カ深キ所存モアレハ、一兩年中目ヲ驚シ、肝ヲ禿ス様ナ事ヲイタシ、日本ノ玄機ヲ引起シ、日本ノ日本タル所ヲ示サントノ心得ナリ、因テ是迄ノ心得ニテハ不相濟、何トカ下知スル時ハ無遲滯尽力セネハナラヌゾ、昔ノ征久・家久・豊久杯ノ如ク心得、万事無油斷御家ノ為メ心配致スノ心得肝要ナリトノ御沙汰被為在、如何ニモ難有奉畏旨申上候、サウシテ和漢洋世ノ盛衰沿革ノ事共御咄被為聞タル事アリタリ、其時ノ事ハ殊更ニ肺肝ニ銘シテ、御咄ノ次第旁ヲモ思ヒ出スコトナリト、

或時御咄ニ、今小身大名中、国家ニ用立ベクトヲモフモノ甚タ少シ、其方カ見ル処ハ随分用立モノアリヤ否ヤトノ御尋ニ付、御沙汰ノ通、私付合仕モノニ、別ニ是ハト存候モノ相少シト申上シニ、果シテ其通ナルベシ、(政憲)筒井肥(駿河)川路左(衛門)前守、(衛門)川路左(衛門)前守、杯カ云フ処モ同様ナリ、大身ノ内ニモ可用立人ハ尾張・宇和島・越前・高知・會津・米澤・佐賀・徳島ナトカ大藩ニハ其通少シハ居ルカ、何分小身ト云ハ、胸ノ小サキモノ故、大國ノ大身・家老共杯程ニモ氣分アルモノハ少カラント云々、或時ノ仰ニ、佐土原ノ家老共ハ氣ノキ、タルモノモア

レトモ、少シモ家老ト云フ様ナ氣象アルモノ無キヤウニ見受タリ、國ノ側役ヤ用人位ノモノナラン、其心得ヲ以テ、専ラ武事ヲ引進メ、文弱ニ不流様ニセハ、随テ正直ニ忠臣モ出来ルモノナリ、佐土原ハ三ヶ國ニ比フレハ文学ハ開ケタルヤウアレト文弱ナリ、鹿兒島ハ無学ノモノ多ケレトモ、万一乱世ニナラハ、忠義ヲ尽スモノ沢山アルベシトヲモヘリ、是レ全ク正直ヨリ出ル諷ナリ、佐土原モ昔ハ鹿兒島同様ノ事ナリシ故、此後忠義ノ家来沢山出来ルヤウニ心掛クベシト仰アリシ、御製ノ短銃拝領被仰付候時ノ仰ニ、兎角以來ノ軍用ニハ西洋風ノ銃ニ非ラサレハ用立ス、手練可致、軍用ノ大小砲ハ皆鹿兒島ニテ出来致置候間、其方ニハ家来共ヘ修練ヲ第一ニ可為致、小身ニテ銃器・彈藥迄調モノニアラズ、普通リ此方ニテ佐土原家来中カ用分丈ケハ為拵置候トノ御事ナリキ、其時ハ誠ニ難有奉存、大小砲ノ事ニハ大ニ心痛イタシ、大砲ノ拾挺位モ追々々製造方奉願度ト、家来共ヘ吟味モ為致候折カラノ事故、退出ノ後直ニ家老共呼出シ御沙汰ノ趣申聞候処、皆共難有安心致候事有之候、

巳年御下國安政四丁巳ノ前、拙者ニハ參府涯ニテ御立差掛候

故、着ノ翌日御老中廻リモ不致内ニ、御屋敷へ御機嫌奉伺候処、早着ニテ御満悦ノ御沙汰ニテ、若中途ニテ行逢カトモ存候トノ御事ニテ、段々御咄アリ、御老中廻リ為相濟、帰リニ又可參トノ御事ナリシ故、仰ノ如ク相仕舞重ネテ罷出候処、御膳頂戴等被仰付候テ、後ニ御小座ノ様被召寄、御沙汰ニ、此節下国、来春ヨリ初夏ニ掛ケテ疏人召列、参府ノ筈ニ候、其折ハ大坂へ二三十日ハ例ノ通り疏人ノ着相待事候、其間ニ用向モ果シテ可有之候間、時宜次第呼ヒニ可遣候間、其時ハ何ハ差置キ早々大坂へ可參、ソウシテ伏見・京都辺ノ見物、又ハ近衛殿へモ召列参殿可致、是ハ深キ見込アル故、決テ其都合可成ト存スレハ、大頭内々申聞置候、決テ言外ハ致間敷、公辺向ノ都合ハ此方ヨリ如何様ニモ取計可遣トノ御事承知致、難有事ナカラ如何ナル御用向カト不審ニ存候、然レ共何カ格別ナル思召可被為在ト存シ、口外モ不致罷在リシ事アリ、今ニシテ考ルニ、京都へ御出張ノ御内意、其時分ヨリ被為在候トノ御事トモ思当居リ候、深遠大図ノ御方ナリトノ御咄アリタリ、

島津忠寛氏ハ初メ〔ママ〕淡路守ト呼ヒ、幼年ヨリ公薰陶

セラレ、小諸侯ノ中ニハ当時屈指人ナリキ、惜ヒ哉、小藩ノ悲サ、気慨ナク、勇為ニ乏シク、文久二壬戌ノ春久光公御上京ノ挙ヲ開キ、〔開カ〕恐懼シテ因循説ヲ立ラレタル事実アリ、畢竟臣下ニ其人ナキニ因レリト云フベシ、其顛末ハ舊邦秘録ニ詳記ス、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数七七枚)」の記載あり〕

目録

- 綿火薬創製水戸公へ進呈シ玉フ
- 齊彬公勝安房守ニ与フル御書翰
- 参証 世子哲丸公御嫡子御届
- 士族給地高売買價格制限
- 藩庫収納米制度
- 給地高売買直成並米代ヲ差引計算
- 齊彬公伊達宗城公ニ与フル書牘
- 柴山良助橋口傳藏等ニ与フル書

橋口彦四郎柴山〔良カ〕 助へ与ル書

考証 黒岩賢藏家記抄

〔脱之〕
〔史談会速記録鈔第四十号〕

一三五 綿火薬創製水戸公へ進呈シ玉フ

綿火薬(洋名シキード・カッソン、又ハ「シキードボール」ト云) 嘉永四年丁巳〔マツ〕ノ夏廣貫等奉命、動植館内御花園製煉所ニ於テ創製セリ、製式ハ松木弘安〔寺島宗則〕へ蘭書ノ抄訳命セラレ、容易ノ試験ニシテ功ヲ見タリ、其彈力尋常ノ火薬ニ異ナラス、或ル日二ノ丸内ノ御射場(射擲場通唱)ニ於テ、「ゲベール」改製ノ雷管機銃ヲ以テ試撃命セラレ、初メ十五間ノ距離ヨリ五十間迄ニ試ミ、而シテ御手自モ六七発試ミ玉ヒ、井上庄太郎ニモ三四発ヲ試ミ、後又五寸角ノ厚板ヲモ試ミシニ、彈力火薬ニ戻サリシカハ大ニ御喜悅、綿塩硝トテ人々怪ミタリシカ、究理ノ術ハ感心ナリトノ御沙汰被為在タリ、其後同年夏(七月)頃一函ヲ量目三百日水戸公ニ進呈セラレタリ、製造ノ方法ヲモ記シテ取添ラレ、其文ハ廣貫記シ入御覽レシヲ御添削、文末ニ彼ノ長ヲ取り、我短ヲ補ヒ武備充実、
〔領註〕水戸侯御書翰參看一
皇威宇内ニ赫々云々ノ旨御加ヘアリテ、磯永喜之介清書

シタリ、草稿ハ廣貫頂戴セリ、去ル十年ノ兵火ニ焼失ス、
(綿火棗製造法ヲ記サレタル横文ノ御書ハ今ニ保存ス、○市來
廣貫御事蹟上申書鈔)

一三六 齊彬公勝安房守ニ与フル御書簡

幸便ニ付致啓上候、其後愈御安康奉賀候、然ハ先日ハ
俄之事ニテ何ノ風情モ無之、殘念ニ存候、(奉脱カ)シカシ寛々
拜話、蘭人ヘモ質問等イタシ大慶奉存候、然ハ其節内
話申上候通り、イツレ来五月ハ蒸氣船并伝習之家来モ
差出候様相考申候間、其節ハ奉行・目付等之処宜敷希
申候、且又兩三年前ヨリ、注文申立置候劍付筒五百挺
(ミニールノ開ケタルハ此際ナリ)、今以テ御渡無之候
(長崎奉行ニ願ヒタリ)、慰之為ニモ無之、武備手當之為
ニ候処、余リ御捨置ト存候、如何程手當被仰出候トモ、
右様之事ニテハ折角ト存候テモ不相叶、人氣ニモ相拘
リ候間、少シモ早目御渡ニ相成候様イタシ度、只今ノ
姿ニテハ、手當ハ不致候テモヨロシキユエカト存申候、
宜敷御勘考之上其筋へ被仰談候テ、御取計希申候、
一極内京都之御様子モ御承知ト存候、此節承候へハ再度
御三家始諸大名存慮可及言上、其上

勅答可被 仰出段、三月廿日備中(堀田)へ御達ニ相成
候ヨシ、左候へハ御不承知ト奉伺候、外国之事情モ不
存、時ト位ヲ不弁、

神州之御恥辱ト一凶ニ相考、必勝之見居ヘモ無之、色
々申立候モノ、又ハ浪人共立身ノ為、口ニ任カセ申立
候事ヲ御取用相成候テハ、誠ニ可敷事ト存候、公家
之面々如何程議論(當時ノ情況如此)被申候トモ、現事
ニ臨ミ候へハ武家ニ御任セ之之外有間シク、万一此未弥
御不承知ニテ打払ニ相成候ハ、血氣無謀ノ面々競立
可申候ヘトモ、一兩度手強キ目ニ逢候ハ、第一和親ト
申立候ハ必定、其上之和親ニテハ、猶更

御国威モ相立兼、御恥辱弥増(米・魯・英・佛ノ条約ハ城
下ノ盟ニ等シカリシヲ云)可申ト、実ニ心配ニ存申候、御
尋モ御座候ハ、十分ニ所存可申上ト心得罷在候、右ノ
通ノ御時節ユヘ別シテ海防第一ノ事ト存候間、劍筒等
ノ事ハ勿論、軍備之事ニ付注文等申立候品ハ、早々御
渡ニ相成候方可然事ト存申候、実ハ奉行(長崎奉行)へ
モ可申入ト存候へ共、万事江戸御差図ト存候間、心配
被致候計ニテ、詮立申間敷ト存シ扣申候ヘトモ、余リ
不得其意事ユヘ、内々心中申上候、宜敷御勘考可被成
(實カ)

下候、且又此後当城下へ御出被成候ハ、前以内々伺度、先日ノ如キ見物人(壮年輩カ暴行ヲ云)ニテハ甚タ心配

ニ(取締可申付ト存候、且圖書殿(木村圖書頭)ニモ御

出可被成哉、此儀モ内々為御知可給候、且台場等之図

(神瀬其外ノ砲台)モ近々可差廻候間、蘭人へ御質問可

被下候、尚追々家来ヨリモ(寺島宗則・江夏十郎)可申

上候、先ハ要用可申述早々如斯ニ御座候、恐々頓首、

四月十二日

薩州(齊彬公)

勝麟君

猶々、御自愛專一ニ存候、伊澤氏(長崎奉行伊澤美作

守)御帰府ノヨシ、左候ハ、貴公ハ御滞崎ニ候哉、

伺度存候、以上、

(願聖公年譜(東大史料編纂所所蔵)にて校訂)

〔勝義邦記事鈔〕

○この文書は、本文第十一号文書と重複するにより略す。

一三七 参証 世子哲丸公御嫡子御届

御使番勤

江田平藏

右ハ 哲丸様御事今般

御前様御養 御嫡子之御願被為濟候付、御用向致取扱

候様被仰付候条、先例之向ヲ以テ取調得差図候儀共、無延引申出候様可申渡候、

四月

駿河新納

右安政五年午四月廿四日、御側御用人友野市助殿御

取次ヲ以被仰付候事、

公ハ第(マ)子ナリ、御子様順次ノ部ニ記ス(第(マ)卷参看)

一三八 士族給地高売買價格制限

嘉永元申御改正ノ節給地高売買直成、左ノ通被定置候、

一上高老石 貳拾貳貫文

一中高老石 貳拾貫文

一下高老石 拾八貫文

右之通被定置候処、近年米価高料不被行、吟味中御家

老座ヨリ取シラへ申出候様致承知、左ノ通申出候、

給地高売買并取納ノ儀付テハ、去ル戌年直段上中下三段

ニ御治定被居置御趣意ニ基キ為致引続、直段付ニ時々見

届、相違無之処ニテ、高直ノ首尾合仕事御座候、然処在

直成ニテハ永代売渡候儀難渋ノ趣相聞へ申候間、高老石

ノ前代銭利分并ニ取納米ノ算当仕候処、別紙ノ通過分ノ

利分ニ相廻リ、売主迷惑ノ方ニ相見得申候間、当分売買

ノ振合内々聞合申候へハ、御定直外ニ密々増分拾貳三貫文内外取替仕哉ニ御座候間、篤ト吟味仕候処、上高菘石ニ付三拾貫文ノ御定直被居置、中下ノ高へ至候テハ在直成ヨリ内ニテ、相對売買候様有之候テハ何様可有御座哉、売主ノ儀ハ江戸詰他借等追屯、其外不時ノ災殃旁無抛持高売払儀ニテ、少シハ余勢無御座候テハ相弁申間敷、買主ノ儀モ在直成ニテハ八分内外ノ利銭相廻シ候間、迷惑有御座間敷、取納借ノ儀モ右ニ被準、致取遣候テハ何様可有御座哉、諸士ノ儀他借追屯又ハ不明災殃ニ付テハ外ニ手段モ無之候付、一統難有可奉存、直段余リ過上ノ様ニモ御座候へトモ、当分ノ振合ニテハ少々ノ直増被召替候迄ニテハ、又候内分ノ増分等致取替候儀案中御座候間、一統御定直相守、往々最通候様有御座度、算當書相添、此段申上候、以上、

高奉行寄

橋口彦次

別紙算當書

一上高菘石

代銭貳拾貳貫文 御定通

利銭貳貫六百四拾文

但十二ヶ月ニ割

諸出来差引

在所務米三斗六合起

先柀ニシテ三斗六升七合二勺

但二合ノリ

代銭三貫六百七拾貳文

給地主菘石起

柀目菘石貳斗

起菘石ニ付拾貳貫文

但菘升百文当リ

右当分永代売切、上高菘石貳拾貳貫文トシテ、菘ヶ月

利銭一割三分九合九勺ニ廻ル、

一中高菘石

代銭貳拾貫文右同

利銭貳貫四百文

但書同断

右所務米右同断

代銭三貫三百六拾六文

但菘石ニ付拾菘貫文

但菘升ニ付八拾文当リ

右同断一ヶ月利分壹割四分式勺五才ニ廻ル、

一下高壹石

代銭拾八貫文右同

利銭貳貫百六拾文

但書同断

右所務米右同断

代銭三貫六拾文

但起壹石ニ付拾貫文

壹升付八拾文当リ

右同断一ヶ月利銭壹割四分壹合六勺六才六々ニ廻ル、

右当分永代売切御定、

一上高壹石

代銭貳拾貫文 取納借御定

利銭貳貫四百文

但書同断

右所務米同断

代銭三貫六百四拾貳文

但起壹石ニ付拾貳貫文

右取納借高壹石貳拾貫文トシテ、一ヶ月利銭壹割五分

三合ニ廻ル、

一中高壹石

代銭拾八貫文右同

利銭貳貫百六拾文

但書同断

右所務米右同断

代銭三貫三百六拾六文

但起壹石ニ付拾壹貫文

右同断一ヶ月利銭壹割五分五合八勺三才ニ廻ル、

一下高壹石

代銭拾六貫文

利銭壹貫九百貳拾文

但書同断

右所務米右同断

代銭三貫六拾文

但起壹石ニ付拾貫文

右同断一ヶ月利銭壹割五分九合三勺七才五々ニ廻ル、

右当分取納借御定直

一上高壹石

代銭三拾貫文

利銭四貫八拾文

但十二ヶ月分耆割利

諸出米

右所務米三斗六合起

先枳ニシテ三斗六升七合貳勺

但貳合ノリ

代錢三貫六百七拾貳文

給地米耆石起

枳目耆石貳斗

起耆石ニ付拾貳貫文

右相場三拾四貫文高トシテ、利耆ヶ月九分ニ廻ル、

一同耆石

腰書同断

右所務米右同断

代錢三貫三百六拾六文

起耆石ニ付拾耆貫文

右同断三拾四貫文高トシテ、利一ヶ月八分貳合五勺ニ

廻ル、

一同耆石

腰書同断

右所務米右同断

代錢三貫六拾文

起一石ニ付拾貫文

右同断三拾四貫文高トシテ、利錢一ヶ月七分五合ニ廻

ル、

右ノ通三段ニ算当仕為御見合差上申候、以上、

十一月廿五日

高奉行勅

喜入九郎

高奉行寄 橋口彦介

右安政四年已後五月再同家差出候事、

一 永代売切上高耆石貳拾貳貫文、米耆石起代錢拾貳貫文

替一ヶ月利錢耆割三部九合不明

中高耆石貳拾貫文トシテ同断耆割五分三合、下高耆石

拾八貫文トシテ同断耆割七分ニ廻ル、

一同起耆石拾耆貫文替ニテ、上高耆石貳拾貳貫文トシテ

一ヶ月利錢耆割貳分七合五勺、中高耆石貳拾貫文トシ

テ同断耆割四分貳勺五才、下高耆石拾八貫文トシテ同

断耆割五分五合八勺三才ニ廻ル、

一同起耆石拾貫文替ニテ同断、上高耆石貳拾貳貫文トシ

テ、一ヶ月利錢耆割耆分五合五勺九才宛、

中高老石式拾貫文ニ同断老割式分七合五勺、

下高老石拾八貫文ニシテ、老割四分老合六勺六才六々

ニ廻ル、(上中下ト記シタルハ田畠ノ地味精粗ニ因リテ、收
穫ノ多寡アルカ故、価ノ高下アリ)

右之通^(マ)立候算当書相添差出候趣致承知、三行ノ通仕
立、已後五月前文一緒ニ差出候事、

一四〇 給地高売買直成并米代ヲ差引計算

一上高老石

代錢式拾貳貫文 御定直

利錢貳貫六百四拾文

但十二月分老割利

一中高老石

代錢貳拾貫文 右同

利錢貳貫四百文

但書同断

一三九 藩庫収納米制度

一真米三俵 三斗入

九斗六升起

老俵三斗貳升

先老石八合

一下高老石

代錢拾八貫文 右同

利錢貳貫百六拾文

但書同断

一真米五俵 貳斗入

老石六斗六升六勺六才五起

斗枘老盃老斗六合六勺六才

先トシテ老斗老升貳合

但貳入

諸出米差引

所務米三斗六合

先米トシテ三斗六升七合五勺

但貳合ノリ

老俵貳斗老升三合三勺三才三々

先老石老斗老升九合九勺九才

一代錢三貫六百七拾貳文

但給地米起老石枘目老石貳斗、老石ニ付拾貳貫文

替、老枘付百文ニ当ル、

一同三貫三百六拾六文

利銭貳貫四百文

但書同断、起老石拾老貫文替、老升付八拾八文ニ

一中高老石

当ル、

代銭拾八貫文 右同

一同三貫六拾六文

利銭貳貫百六拾文

但書同断、起拾老貫文替、老升付八拾文ニ当ル、

但書同断

右ハ当分永代売切上高老石貳拾貳貫文、米老石起貳分

一下高老石

拾貳貫文替、老ヶ月利銭老割三分九合九才、中高老石

代銭拾六貫文 右同
利銭老貫九百貳拾文

貳拾貫文、同断老割五分三合、下高老石拾八貫文、同

断老割七分廻ル、

但書同断

一前条同断起老石拾老貫文替ニテ致算当候へハ、上高老

右所務米前条同断

石貳拾貳貫文トシテ老ヶ月利銭老割貳分七合五勺、中

代銭前条同断

高老石貳拾貫文トシテ同断老割四分貳勺五才、下高老

但書同断

石拾八貫文トシテ同断老割五分五合八勺三才ニ廻ル、

右当分取納借上高老石貳拾貫文、米老石起代銭拾貳貫

一前条同断起老石拾貫文替トシテ同断、上高老石貳拾貳

文替ニテ老ヶ月利銭老割三合、中高老石拾八貫文トシ

貫文トシテ五合九勺飛九、中高老石貳拾貫文トシテ同

テ同断老割七分、下高老石拾六貫文トシテ同断老割九

断老割貳分七合五勺、下高老石拾八貫文トシテ、同断

分老合貳勺五才ニ廻ル、

老割四分老合六勺六才六々ニ廻ル、

一前条同断起老石拾老貫文替ニテ致算当候へハ、上高老

右当分永代売切御定直利銭算当、

石貳拾貫文トシテ老ヶ月老割四分貳勺五才、中高老石

一上高老石

拾八貫文トシテ同断老割五分五合八勺三才、下高老石

代銭貳拾貫文取納借御定直

拾六貫文トシテ、同断老割七分五合三勺老才五々ニ

廻ル、

一前条同断、起老石拾貫文替ニテ同断上高老石式カ五拾貫文

トシテ老ケ月利銭老割式分七合五勺、中高老石拾八貫

文トシテ、同断老割四分老合六勺六才六、下高老石拾

六貫文トシテ老割五分九合三勺七才五々廻ル、

右当分取納借御定直利銭差引算当

一上高老石

代銭三拾四貫文

利銭四貫八拾文

但拾式ケ月老割利

一中高老石

代銭三拾貳貫文

利銭三貫八百四拾文

但書同断

一下高老石

代銭三拾貫文

利銭三貫六百元

但書同断

右所務米前条同断

代銭前条同断

但書同断

右米老石起拾貳貫文替ニテ、上高老石三拾四貫文トシ

テ老ケ月利銭九分、中高老石三拾貫文式脱カトシテ同断九分

五合六勺式才五、下高老石三拾貫文トシテ老割式勺ニ

廻ル、

一前条同断拾老貫文替ニテ、上高老石三拾四貫文トシテ

老ケ月利銭八分式合五勺、中高老石三拾貳貫文トシテ

同断八分七合六勺五才六、下高老石三拾貫文トシテ九

分三合五勺ニ廻ル、

一前条同断拾貫文替トシテ、上高老石三拾四貫文トシテ

老ケ月利銭七分五合、中高老石三拾貳貫文トシテ同断

七分九合六勺八才七、下高老石三拾貫文トシテ同断八

分五合ニ廻ル、

右ノ通ニ御座候間、御見合算当書相添申上候、以上、

巳閏五月十四日

高奉行勳

喜入九郎

高奉行

迫田賢助

張紙

本文米老石拾貳貫文替、上高老石貳拾貳貫文トシテ老ケ月分老貫文ニ付利錢拾三文九字九、中高老石貳拾貫文トシテ同斷拾五文三字、下高拾八貫文トシテ同斷拾七文ニ廻ル、

一拾老貫文替ニテ、上高老石同斷老ケ月分老貫文ニ付利錢拾貳文七字五、中高老石貳拾貫文トシテ同斷拾四文飛式五、下高老石拾八貫文トシテ同斷拾五文五字五八式三ニ廻ル、

一前条同斷拾貫文トシテ、上高老石同斷老ケ月分老貫文ニ付利錢拾老文五字九、中高老石貳拾貫文トシテ七字五、下高老石拾八貫文トシテ同斷拾四文老字六々ニ廻ル、尤此以下ノケ条モ右ノ割ニ御座候(以下欠文)

一四一 齊彬公伊達宗城公ニ与フ書牘(伊達家所藏)

上封 藍山公閣下御直覽 齊彬

幸便ニ付一翰致拜呈候、炎暑ノ節御座候処愈御清福奉恐賀候、然ハ此節越前ヨリノ書面相達候処、其御地ノ光景委細相分申候、貴君ニモ色々御配慮ノ段御心中奉遠察候、此上共ニ天下ノ御為御尽力第一ト奉存候、大

老(井伊直弼)・上閣(松平伊賀守)權威強大ノ由、左候ハ、藤堂ハ大悦ニ候ヤ(井伊同旨ノ人)、先年ノ返報(何事カ知ルニ由ナシ)相違無之、最早閉口ノ外ハ有間敷奉存候、櫻閣(堀田備中守)モ貴君御尽力ニテ御取留メニ相成候ヤ(退役ヲ云乎)、細事何度奉存候、其様子ニテハ橋公ノ事難被行答ト奉存候、越前モ此上余リ手強ニテハ大害ヲ生シ可申哉、甚タ掛念ニ奉存候、何卒天下無事靜謐ノ義偏ニ御精力第一ト奉存候、

一仮条約ノ義、御治定ノ上溜ニテ被仰上候哉ノヨシ、此義如何可相成哉、此上万々一

京都御不滿ノ義御座候テハ不相濟、尊慮ノ程何度候、且マタ

西養(將軍繼嗣)ノ義、紀(紀州宰相)ニ相成候トキハ、両条共 違勅ノ姿ニ相成候、如何ニモ

京ノ御都合掛念至極ニ奉存候、既ニ先日ハ近衛公ヨリ、大坂近海へ異船渡来モ難量、其節ハ防禦御頼ト被仰下候間、其儀ハ御請難申上(表面如斯、其実ハ密ニ奏上アリシト、鎌田出雲家記参照スヘシ)、關東御沙汰ノ事ト御請モ申上候、都合ニテ若々

御不滿ノ節如何成事申參候モ難量、此義誠ニ心痛罷在

候、トカク天下静謐ヲ希候事ユヘ、タトヘ如何ノ事ニテモ再応御良解相成候様申上候心得ニテ御座候、貴君尊慮ハ如何ニ候ヤ、先年御家来(家老松根内藏及ヒ従員三四名)被遣候事モ御座候間、御内々尊慮相伺申候、仮約ノ事モ随分宜敷候ヘトモ、跡ノ御処置第一ニ候処、是迄ノ通り姑息ニテハ此末極々掛念ニ存候、当参府(本年八月ノ内定)迄ニハ、何卒諸事相済候様ニ仕度事ト奉存候、此後ノ処手当等十分ニ取計候方可然ヤ、又嫌疑盛ニ可相成ヤ、此等ノ義モ何度奉存候、先比近衛家へ申上候書面(近衛・三條二公ニ遣サレタル御書、第一卷参照スヘシ)、閩老承知候テ不評ノヨシ、天下ノ為ト存候ヘトモ、當時ノ光景ニテハ致カタモ無之ト奉存候、只今ヨリ掛念ノ義ハ、琉人ニテ長々伏見滞在仕候間(數多ノ御供云々ノ条参照スヘシ)、其内嫌疑可恐事ト奉存候ユヘ、当年ハ参殿等ノ事ハ内々ニテモ御断ノ考ニ御座候(表面ノ処書ノ如シ、其実ハ然ラス、第一卷参照スヘシ)、是又尊慮何度奉存候、道路以目スルノ光景ト越ヘ御内話ノ処考候ヘハ、実ニ心配此事ニ御座候、参府ノ上ハ万事御相談申上度奉存候、水老公へハ益御疎遠ノ考(一橋公継嗣云々水戸侯ト俱ニ謀ル云々ノ世説アリシニ依リテ如此ト云)

伊達公對話書ノ如シ)、双方共宜敷訳カト奉存候、其地ノ様子何卒細事御密示可被下候、表ヨリ呈書如何ト以拾(山崎、当時小納戸職)差上申候、御返事モ右ノ手筋ニテ被下候ヘハ別テ宜敷、屋敷ニモ豊(島津豊後)始奸物多ク候間此段申上候、此節ノ様成トキ寒(奸ノ意)氣有之候ユヘ別テ心配仕候事ニ御座候、先ハ極密申上度如斯ニ御座候、恐惶謹言、

六月十一日 齋彬

天下柱石藍山公閣下

猶々、御自愛專一奉存候、長サキヘ亜船二艘・蘭商船一艘渡来仕候、猶追々可申上候、以上、

一土丹(土岐丹波守)始メ有志其後如何ニ候ヤ、石土御取次如何ノ訳ヤ、御密示可被下候、以上、

此書中ノ意旨伊達宗城公ニ質問説明ハ、第一卷同公對話記参照、

一四二 柴山良助橋口傳藏等ニ与ル書(柴山氏所藏)

一箇奉啓上候、残暑ノ砌御両所様御揃、愈御勇剛御毎勤被為成御座候半、愛度儀奉大慶候、次ニ小子事不替

消光罷在申候間、乍憚御安意思召可被下候、倍兩所
様トモ此内ハ御細状御投与被下候ヘトモ即答不差上、
甚不埒ノ至、先便ハ暑中見舞状等取込、御挨拶而已ニ
テモ却テ存シ乍思相過申候、真平御海容被下度奉希候、
〔道隆、良助ノ弟〕
愛次郎ニモ、当秋御參勤御供被仰付、難有仕合ノ至御座
候、最早立モ無間罷成、老父兄弟ナカラノ旅ハ何彼心
配ト遠察イタシ候次第、留守ニ相成候テモ不相替御心
易ク、万事御指揮被下様御願申上候、樺山氏モ去月廿
五日出府ニテ至極壯健ノ様子、御兩所様トモ益々御盛
ノ咄トモ委細承知安心御座候、且又傳藏兄ニハ近頃御
伉儷愈比翼ノ御契不淺筈千祥万禎目出度奉存候、先ハ
時下御安否御尋問為申上、如斯御座候、恐惶謹言、

七月十日

柴山良助

橋口傳藏様

岩元六右衛門様

参人々御中

尚々、時下御自愛ノ処專要奉存候、扱爰元世勢愈頼
母敷カラン模様、只世間風破ノ如ク何ヲ申上様モ無
御座候、已ニ御聞ヲヨヒモ御座候半、備中守〔正陸、佐倉藩主〕
〔忠實、上田藩主〕
伊賀守〔松平〕退役後、只井伊侯一人ノ權柄ニテ奸謀
〔直躬、彦根藩主〕

心ノ怛、已ニアメリカニハ交易御免、當時名ヲ申程
ノ人ハ皆々被退、去ル六日ニハ水戸老侯〔齊昭〕
〔松平慶永〕
越州侯御慎、尾・越兩侯ハ御隠居ノ上御慎被仰出、
〔佐藤、奥平藩主〕
老中久世大和守・若年寄本郷丹後守御役御免、御側
御用人石河土佐守蟄居、御奏者水野出泉守登城差留、
〔政近〕
〔若丸〕
奥御用筆志賀金八郎自殺〔奥御右筆組頭〕、此人取々
ノ評ニテ〔志賀金八郎為人〕明ニ分兼申候ヘトモ、相応
ノ人物ニテ当勢ニ逆ヒ候事御座候半、夫ハサテ置、
〔家定〕
將軍モ去ル六日病死被致、格別惜カラシ將軍ニハ御
座候ヘトモ、時勢柄尚騒キ相増候、西ノ丸ノ一条ヨ
リ役々細大進退夥シク紛々ノ至御座候、異船ハ亞米
利加・英吉利・魯西亞トモ渡来、英吉利ハ品川沖へ
乗込居、夜入候ハ、鮫川辺へ忍上リ歩行イタシ候由、
〔細丸〕
去ル八日英人芝御屋敷ノ前西應寺へ滞留、魯人ハ愛
宕下ノ寺へ留滞、何レモ所々見物等勝手次第、中々
悪ク敷トモヲロカノ至リ、先日異国奉行ト云フ者出
来、堀織部正・岩瀬肥後守・水野筑前守外々ニ一人
〔利懸〕
〔忠實〕
名相志レ申候、此方へ被仰付、最早万国悉ク交易御
免相成、如此ノ御処置カト被為推考申候、実ニ此内
〔老中、寶始、掛川藩主〕
ハ太田公〔備前守〕杯被挙、少シハ頼母敷相成候半ト
〔後丸〕

樂ニ存候折柄、井侯案内ノ惡計、実ニ此人ハ見存シ
(損ノ誤) 居申候、今ノ勢迎モ太田公杯ニハ頭ヲ押ヘ
ル力ハ無之、尤モ太田侯モ暫時ハ出勤モ無之由、追
日御役御免ニモ可相成トノ評ニ御座候(以下欠失)

一四三 橋口彦四郎柴山〔良カ〕 助〔全上〕ヘ与ル書

一筆致啓上候、暑氣相募候処弥御壯剛御勉学ノ筈、大
慶至極奉存候、次ニ小子ニモ無異每勤仕候間、乍憚御
省念被下度、尤モ御賢弟様〔愛次郎ヲ云〕ニモ不遠御上
リノ由、嘸御楽ミモ弥増候半、折角御待入ノ筈奉推計
候、先ハ荒々御安否御伺申上度如斯御座候、猶期永日
候、恐惶謹言、以上、

尚々、爰元何モ珍敷儀無御座候、

柴山〔良カ〕 助様〔愛次郎兄〕

参人々中

橋口彦四郎〔壯助弟、後吉之丞ト呼〕
兼三

一四四 考証 黒岩賢藏〔堅〕家記抄

御先代様二月田御光越中、所々御手ヲ被為付候〔民政改

良ノ部ニ詳記ス、就中二俣山〔二月田ヨリ西方ニ当リ、五
十余町〕御用水〔池田ノ池水灌漑〕、御茶屋内へ御取入、
其末農家田水ニ被仰付候様、懇々私へ御内命被仰付相
勤申候、右費用ハ私ヨリ仮払仕置候ハ、追テ御下ケ
可被仰付旨被仰付置候ヘトモ、私金ヲ以相弁切申候、
但全体用水乏敷場所柄、始テ水源尋出候節ハ別テ御

満悦ニテ、御前ニモ山ノ絶頂へ御登リニ相成リ、中
々恐縮至極之至奉存候、入費等ハ私ヨリ相弁切ル、

一四五 史談会速記録鈔 第四十号

一島津齊彬公西洋形軍艦ヲ創製セラレタル事实、附
寺師正容氏鹿兒島ニ於テ三本柱西洋形船ヲ製造セ
ラレタル事

齊彬公始テ西洋形船ヲ製造シ、之ヲ伊呂波丸ト命
名アリシ事

宅間喜三左衛門ノ話

皆吉鳳徳ノ話

齊彬公正容氏ノ遺著ヲ子孫ニ求ラレタル事

同公各船ノ図式ヲ参酌シテ乗砲ノ船艦ヲ製造セラ
レタル事

米使到来後大船製造解禁ヲ幕府ニ迫リ、之ヲ採用
アリシ事

幕府ヨリ軍船二艘ノ製造ヲ託セラレ、昇平丸・大
玄丸ヲ作リタル事

製造掛藩吏ノ姓氏
中濱萬次郎ノ話

齊彬公藩老調所笑左衛門ニ海國ノ防備ハ軍船ニ在
ルコトヲ論サレタル事

造船掛吏田原直助日記中ノ記事

當時ノ造船ハ算法ニ則ラス、図式ニ倣ヒ、拙劣ナ
リシ事

齊彬公ノ造船ヲ見聞シ、藩内ノ俗吏^(論カ)之ヲ是非シタ
ル事

大船製造解禁ハ幕吏中猜疑ヲ抱キシ者アリシ事

水戸侯齊彬公ノ英資ヲ忌ミ、阿部閣老ニ戯言アリ
シ事

松平慶永公常ニ齊彬公ノ為メ、他志ナキヲ弁明ア
リシ事

齊彬公幕府ノ嫌疑ニ拘ラス、大船製造ノ稟請アリ
シハ、琉球警備ノ必要ニ存シタル事

同公蒸氣船ヲ創製シテ、江戸湾ニテ試運転セラレ
シ事

同公佐久間修理氏ニ託シテ大砲砲台ヲ田町邸ニテ
創設アリシ事

同公邸内ニ砲台ノ建設アリシハ、出張警衛ノ煩ヲ
避クルニ在シ事

同公水戸侯ヲ誘ントセシニ、幕府之ヲ禁止シテ果
サレサリシ事

市來君藩命ヲ帶ヒ、長崎ニ始メテ伝習生トナリテ
出張セラレシ事

幕府和蘭使節船ヲ所望シ、後國王之ヲ獻シタル事
琉球渡海ハ一歳一度ニ止マリ、南・北風ニテ往復

セシ事

市來君(四郎) 故齊彬カ鹿兒島ニ於テ西洋船模擬ノ三本

柱ノ大船ヲ製造致シ、藩ノ防備ノ為メニシ、又ハ幕府
ニ献上致シマシタ歴史ノ概略ヲ御話シ致シマス、之ニ

付テ先ツ鹿兒島ニ於テ、始メテ西洋模擬ノ船舶ヲ製造
セシ事ヲ御話シ致シマスカ、私カ実父ハ寺師次右衛門

正容ト申シマシタ、文政ノ中頃外国形ノ船ヲ拵ヘタ事
カコサリマス、夫レ抔カ齊彬カ造船ノ材料一端ニモナ

ツテ居リマス、即チ寺師宗徳カ祖父デ、私カ実父テコサリマス、之カ鹿兒島テノ洋式模擬造船ノ始メデコサリマスカ、此概略ノ御話申上ケネハ続キガウルウコサリマスカラ、父カ事ニモ涉ツテ御話シ申シマス、是レハ鹿兒島デ洋式造船ノ歴史ノ続キニナリマスカラ、憚リヲ願ミス混シテ概略ノ御話シ致シマス、

齊彬カ家督致シマシタハ嘉永四年ノ二月始テコサリマス、程ナク御暇下サレマシテ、三月ニ江戸ヲ出立シマシタ、家督後始メテ帰国ヲ初入口ト称ヘマシタ、五月ノ初ニ鹿兒島ニ着シマシタ、其冬ノ十月カラ洋式模擬ノ造船ヲ始メマシタ、船名ハ伊呂波丸ト唱ヘマシタ、其時分迄テハ洋式類似ノ三本柱ノ大船製造ハ、幕府ノ禁スル処テコサリマスカラ、止ヲ得ス琉球船ニ倣ヒマシテ造ラセマシタ、後ニハ琉大砲船ト名ヲ替ヘマシタ、琉球ノ船ハ支那風ノ製造テ、三本柱デ砲門ノ形ヲ画イテコサリマス、砲ハ載セスニ砲門ノ様ニ画ヒテコサリマス、遠方カラ見ルト砲門ノ様ニ見ヘマス、故ニ琉大砲船ト称ヘ、砲門ヲ開キ、三本柱ニ拵ヘ、現ニ大砲ヲ装置シマシタカラスク唱ヘマシタ、初メ伊呂波丸ト名ケマシタハ、幕府ノ制禁ニ対シテ唱ヘマシタ、又伊呂

波丸ト名ケマシタハ、文政五六年ノ頃私ノ実父ト皆吉鳳徳ト云フ者ト図リテ、洋式模擬ノ大船ヲ造リマシタ、之ヲいろは丸ト名ツケタサウテス、此二人カ外国式ノ船デナクテハ、国益民利ヲ起ス事能ハサルト云フ事ヲ覺リマシテ製造シマシタ、其製式ト航海術トヲ親シク聞キマシタハ、高城郡水引郷船間島ト云フ所カコサリマス、之レハ川内川ノ末ニアル川中ノ小島テ、直クニ海ニ出ル所テコサリマス、其小島居住船乗業ノ宅間喜三左衛門ト申ス者、外六七名魯西亜国ニ漂流致シ、彼国ニ居ル事数年ニシテ、後和蘭人ニ護セラレテ帰朝致シタサウテス(コノ漂流ノ記事ハ別ニコサリマス、茲ニハ唯其關係シタル事実ノミヲ陳ヘマス)、此喜三左衛門ト同人弟覺次外三四人彼国ニ居ル中、外国形ノ船製造ノ事ニ注意シ、可ナリ此ノ様ナ製式タト云フ事ヲ心得テ婦リマシタカラ、私ノ父カ此兩人ト調ヘマシテ、雛形ヤ図式ヲ拵ヘ、皆吉其外ト協力致シテ藩庁ニ製造費ノ補助ヲ請ヒ、伊呂波丸ト云フヲ拵ヘマシタソウテス、其船ハ琉球其外諸島ニ遣シテ、運輸ヲ専ラニ致サウト云フ目的デアツタサウデス、此船製造ノ始末ハ御参考迄ニ旁々此卷末ニ附記シマス、

丁野君(遠影) 其御造リニナリマシタ船ノ大サハ、ドノ
位デコサリマシタデス、

市來君 二十間位タト聞ヒテ居リマス、其処テ親爺ト共
ニ拵ヘマシタ皆吉鳳徳ト云フ者ハ、元來医者テ奇人物
ノ名アル人テ、随分金満家テ、親爺ハ貧乏テコサリマス
カラ、資本主トシテ藩庁ニモ請願シ、金貳千兩ノ補助
ヲ得マシテ拵ヘタサウデコサリマス、然ルニ五六遍琉
球其他ノ島々ニ運輸航海シテ、遂ニ難風ニ遇ツテ破潰
シタサウテス、ソレ限リテ爺父モ程ナク病没シマシタ、
其処テ伊呂波丸ヲ寺師・皆吉カ拵ヘタト云フ事ハ、鹿
兒島テハ今ニ人口ニ伝ハリテ居リマス、サウ云フ事実
テコサリマスカラ、齊彬ノ其事ヲ聞カレマシテ、寺師
カ父(宗道ト申シマス)ト私ノ兩人ヘ、近習ノ者ヲ以テ、
其方等ノ父カ先年伊呂波丸ヲ拵ヘタ事カアルソウタカ
ラ、其書類ト絵図面等ノ如キヲ見タイト云フ事ヲ申達
シマシタ、其処テ兄ハ勿論、私ニモ親爺ノ志カ再ヒ世
ニ顯レ、寔ニ喜ヒマシテ、参考ノ一端トモナレハ難有
ト申シテ、絵図及ヒ取調ノ書類沢山コサリマシタカラ、
悉皆手許ニ差出シマシタ、齊彬モ余程喜ハレマシテ眷
メテ呉レマシテ、私共兄弟ニ色々品物及ヒ祭祀料モ具

シマシタ、實ニ父カ積年ノ志望凡二十四五年ノ後ニ顯
レテ嬉シウコサリマシタ、其事実ノ概略ハ此内父カ言
行ヲ、私カ粗ホ記憶ノ俚速記サセテ置キマシタ一冊ヲ、
後ニ付シテ御参考ニ供ヘマス、其処テ齊彬ハ長崎杯ヨ
リ洋船ノ絵図又ハ雛形ナトヲ取寄ラレ、或ハ洋書ヲ翻
訳サシテ、私ナトカ差出シタ伊呂波丸ノ図式ナト折衷
大成シテ、伊呂波丸ト名ケテ製造ヲ申付ケタテコサリ
マス、之カ則チ齊彬ノ軍艦製造ノ発端テ、實ニ嘉永四
年辛亥ノ冬知政初メテ帰國ノ時テコサリマス、其処テ
齊彬カ此ノ伊呂波丸ヲ拵ヘタハ、嘉永五年ノ春知政後
初メテ參府致サレタ其時分ハ、半ハ以上モ出来テ居リ
マシタ、其年ノ秋頃ハ落成シマシテ、砲門ニハ和蘭式
ノカルロンナーデ砲四門ト、自在砲ト申ス小口径砲四
門ヲ乗付ケマシタ、之カ薩摩テ軍艦ノ嚆矢デコサリマ
ス、然シテ鹿兒島灣内及ヒ国内沿海試航ノ後、琉球其
他各島ニモ運輸致サセマシタ所カ、日本流ノ船ヨリ遙
カ堅固テモアリ、且ツ日本船トハ帆ノアヤツリ方カ順
逆ノ時ニ同日ノ話ニナラス様ナ仕掛テコサリマスカラ
大ニ便利ナル故、ソレカラ二三艘引続キ同様ニ製造致
サセマシタ、嘉永六年頃マテニハ大小四五艘製造シマ

シタ、皆大小砲ヲ装置シマシテ、琉球其他運輸ニ供ヘマシタ、然シテ嘉永六年ニ亜米利加船カ浦賀ニ参リテ、天下大騒動トナツテ、太平ノ夢カ醒マシテ、軍艦トカ大砲トカ、俄ニ騒キ出シマシタハ諸君御存シ通りテコサリマス、然ルニ齊彬ハ右様軍艦製造ヲ初メテ居リマスカラ、水戸侯其外各家モ軍艦ハ何レナケレハナラヌト云フ事ニナツテ、御打合せ申ス事ニナツタサウテス、閣老方ニモ公然御話カ出来ル様ニナリマシタ、大船製造解禁論モ公然建言スル事トナリマシテ、軍艦カナクテ砲台計リテハ、頭上ノ蠅ヲ逐フモ同様テ、彼レハ出沒極リナク、実ニ頭上ノ蠅ヲ逐フ様ナ事テアルト云フ建言モ致シタテコサリマス、其前後ニ御懇交ノ御方ト御相談致シテ、大艦製造解禁論モ立マシテ、閣老方ニモ人々ヨリ責立テラレ、其論ヲ容レラル、事ニナツタト見ヘマス、如此必要ニ迫リテカ、同シク六年十月ニ大船製造ノ禁ヲ解カレマシタ、其前ニ幕府ヨリ御沙汰ニハ、軍艦二艘ヲ製造シテ差上ケヨ、入費ノ如キハ御下ケニナルト云フ御達テコサリマシタ、是レ嘉永六年ノ夏ノ事テコサリマス、齊彬ハ不束ナカラ御請ケ致シマシタ、カク容易ニ御受致シマシタハ前ニ御話シ申シ

タル如ク、嘉永四年ノ冬ヨリ製造モ致シテ居リマスカラ、御辞退モ致サス、御請ヲ致シタト見ヘマス、其処テ安政二年ノ春頃齊彬ハ其正月鹿兒島ヲ発シテ、三月六日ニ着府シマシタ、御詔軍艦二艘モ半ハ以上出来テ居リマス、三年ノ春ハ是非江戸海ニ乘廻シ、一艘ハ献上致シ、一艘ハ御沙汰ノ如ク入費ヲ御賞ヒ申ス事トナツテ居リマス、献上致シタノハ昇平丸ト名ツケテ、二十四間テコサリマス、大砲・小銃モ鹿兒島テ製造致シテ備ヘ付ケマシタ、其処テ先日御話シ申シマシタ日ノ丸船印ヲ伺フタカ、江戸海ニ乘廻シマスルカラ、阿部殿ト御話シ申シタ事ト見ヘマス、其昇平丸ト申ス船ハ〔鼠丸〕安政三年ノ春江戸海ニ乘廻シニナリマシタ、其時日ノ丸旗ヲ揚ケテ乘リ廻シタサウテス(図ヲ示サル)、モウ一艘ハ)、安政三年ノ冬江戸海ニ乘廻シマシタ、是ハ製造費及ヒ装置ノ大小砲器等、一切ノ代価三万兩余御下ケニナリマシタサウテス、製式ハ今カラ見マスト拙キ仕方タラフト思ヒマス、実ニ見取細工テコサリマスカラ、拙工ナルモ無理ハナイカト存シマス、之レカ洋式模倣軍艦製造ノ禁ヲ解カレテ、初メテ幕府ニ御備リノ軍艦テコサリマス、然シテ初メ献上致シマシタ昇平丸ノ御褒賞

トシテ、御差ノ大小等ヲ下サレマシタ、後ノ船ハ入費ヲ御賞ヒ申シマシタ、此船ハ大玄丸ト名ツケマシタ、此代金ハ三度ニ御払ヒニ成リマシタソウテス、

岡谷君(繁實) 何程位懸リマシタモノテコサリマスカ、當時テハ大分懸ツタテアリマシヤウ、

市來君 凡ソ二万円程ト申スコトテコサリマシタ、御下ケ金ハ壹万兩御増ニナツテ、三万兩御下ケニナリマシタソウテス、壹万兩ハ特別ヲ以テ下サレタト見ヘマス、先ツソウ云フ事テコサリマス、其構造ハ御詔テハコサリマスシ、又始メテノ事テハコサリマスカラ、長崎ヨリ舟大工ヲ四五人傭ヒ、其外ハ鹿兒島ノ舟大工テコサリマス、船頭ノ花田善三(善三)左衛門・福崎某、大工頭橋口次助、製造掛家老島津豊後・新納駿河、若年寄島津登、(久包)勝手方用人福島助八・三原藤五郎・向井新兵衛、船奉行長崎勘助・橋口左衛門・石原龍助及ヒ田原直助(一)杯ト云フ儕テコサリマシタ、櫻島ト申ス処テ一緒ニ四艘着手シマシタ、鹿兒島テハ大工事テコサリマシタ、木材ハ松・杉・楠・樺ノ類テコサリマシタ、皆領内各所ノ山林ヨリ伐リ出シマシタ、又洋式捕鯨船モ數艘造ラレマシタ、是レハ嘉永五年ノ夏土州ノ中濱萬次郎ト云

フ者カ米國ヨリ琉球ニ送ラレマシタ、夫レカラ鹿兒島ニ送ラレテ丁寧ニ致シマシテ、三四ヶ月計リ止メ置マシテ、航海・捕鯨ノ仕方、鯨漁船製造ノ事ニモ及ヒ、雛形モ造ラセマシタ、其時齊彬ハ永ク鹿兒島ニ止マル様ニ話ヲ致サセマシタケレトモ、ドウシテモ一度ハ故郷ニ帰リタヒト云フテ、止マル意ハナカツタソウテス、ケレトモ三四ヶ月程引張ツテ置キマシテ、雛形ヲモ造ラセマシタ、其雛形ニ因リテ數艘造ラセマシタ、名ケテ越通船ト唱ヘ、鹿兒島灣内ノ運送船ニ用ヒサセマシタ、亞米利加テハホエールボウト、云ツタサウテス、之モ運輸ニハ余程便利テ、近頃迄ソレニ模造シテ商人共カ自造シテ數隻アリマシタ、為メニ多少益カアリマシタ、又長崎ヨリ雇ヒノ舟大工ハ、和蘭船ノ修補ナト致シタ者テコサリマシタ、如此萬治郎カ參リ、或ハ翻譯書ヲ見、或ハ実父カ調々絵圖ヤ書類ナト取雜セテ、尚ホ調ヘテ拵ヘタテコサリマス、何國ノ製造式ト云フハ分リマセヌケレトモ、其時分マテハ造船法モ未開テ止ラ得ヌ事テ、如此種々雜多ナ調ヘテコサリマシタ、然レトモ長崎ニ於テ和蘭人ニ雛形ヲ拵ヘサセ、絵圖ヲ調ヘサセマシテ、之ヲ本ニ致シマシタカラ、先ツ和蘭

式トモ申スヘキテコサリマス、其処テ船製造ニ就テハ
(徳川齊昭) (徳川慶徳) (伊達宗城) (榊原眞吉) (鍋島吉正)
水戸侯・尾張侯・宇和島侯・阿波侯・佐賀侯モ、余程

御調ニナツタ事ト見ヘマス、日ノ丸ノ旗ノ事モ阿部殿
ニ申入マシタ時ノ関係者ノ話筆記カコサリマス、水戸
侯・尾張侯・阿波侯杯ト云フ御名カ見ヘテ居リマス、日

ノ丸ト云フハ御同志中御相談モ致シタ事ト見ヘマス、
一個ノ見込申立タテハアルマイカ、サウイフ統キニ
ナツテ居リマス、造船及ヒ大砲製造方ニ関係致シタ田

原直助ト申ス者カ書キマシタ一小冊カコサリマス、其
書ニ概略記シテコサリマス、齊彬ハ弘化三年琉球外国
事件テ帰国致シマシタ時分ヨリ、軍艦製造或ハ洋式商

船製造ノ事ハ、熱心ニ注意致シタト見ヘマス、軍政改
革ニ就テ家老調所笑左衛門ト申ス者ヘ、分テ申聞ケマ
シタ事モコサリマス、日本第一ノ海国テアルカラ、琉

球諸島ノ防備ハ便利ノ船テナケレハ、寛急相応スル事
ハ出来ナヒ、或ハ富国ノ本ハ海運ノ弁ヲ謀ルニ在リナ
ト申シタ事モ伝ハリテオリマス、

岡谷君 水戸侯ノ造船ハ何ツ頃テコサリマシタカ、何方
カ御覧ヘハアリマセンカ、

佐田君(白茅) 大地震ノ翌々年テアルカト覚ヘマス、其

(合野)
時烈公ノ御覧ニナツタ時分、私モ見マシタガ、烈公ハ
黒八丈ノ御羽織ヲ着テ居ラレタノヲ、遙カニ見上ケマ
シタ、

丁野君 其大サハ何程位テコサリマシタカ、御覧ヘハア
リマセンカ、

佐田君 余程大ナモノデアツタカ、運転カ出来ナカツタ、
進水式モ工合カ悪ルカツタ様子テス、

河瀬君(教文) 船テ引クト云フ事デアリマシタ、何カテ
止テ置テ、水ニ進メルト云フ工合デアツタテコサリマ
シタ、

佐田君 其時分ハ三十石限リノ船テ、其上ノ大船ヘ造ル
(千石)
事ハセステコサリマシタ、

丁野君 檣ノ木ハ船材ニ宜イト云フ事テコサリマスカ、
如何テコサリマシタカ、

市來君 檣ノ木ハ鹿兒島ニ少クナイ所テコサリマス、用
アル時ハ大阪カラ取寄セテ使フ位ナ事テコサリマシタ
又軍艦製造ニ係リテ居マシタ田原ト申ス者カ、概略ノ

記録カコサリマス、此記録ニ就テ説明話ヲ致シマス、
嘉永四年ノ十月伊呂波丸ト名ツケマシテ、帆前軍艦ノ

試ミ製造ヲ致サセマシタ、其時ノ係用人三原藤五郎ヘ

下ケマシタ洋書ヲ調ヘタ田原カ日記様ノモノテコサリマス、此ニ大概ノ事ハ載セテアリマス、亦家老共ニ親書ヲ以テ、当時軍艦ノ必要ナル事ヲ毎々申聞ケマシタト見ヘマス、其処テ家老共ニハ直書ヲ以テ厚ク申付ケマシタカラ、取調ヘモ急テ着手致シテ、余程差急ヒテ製造セヨトノ趣テ、經費モ莫大テコサリマスカラ、外々ノ經費ヲ省キ、専ラ此方ニカヲ入レサセマシタカラ、一年余有ノ間ニ、稍々進水ノ出来ル程ニナリマシタト見ヘマス、勿論其時分ハ従前ノ鍛冶大工ノ手テヤル事テコサリマシテ、工事カ捗カ行キマセスト見ヘマス、一口ニ申ト、蘭船ヤ其他ノ絵図面・雛形等ニ依リ、或ハ見取絵図ナトヲ拵ヘテノ製造テコサリマシタカラ、今日ニナリマシテハ話ニナラヌ製造テコサリマス、竜骨ヲ入レルトカ何トカ云フ様ナ事テ、算術上ニ出タ仕方ハ丸テナイトモ申スヘキテコサリマス、現今ノ様ニ開ケタ世ノ眼テハ話ニモナラヌコトテコサリマス、唯外國式ノ三本柱ノ船ヲ作ツタト申ス計リテコサリマス、数百年来ノ大禁ヲ解カレ、手初メニ製造シタト云フノミノ事テコサリマス、之ヲ手初メトシテ連々大小幾ツモ拵ヘマシテ、少ナカラヌ經費モ拵ケテ居リマス、其

処テ俗人ニナリマシテハ、余計ナ事ヲナサル、扨ト言ツタモノモコサリマシタ、私ナトモソソナ俗言ヲ聞ヒタ事モ少カラヌテコサリマス、其ノ後幕府ハ三本柱ノ大船製造ノ制禁ヲ御解キニナリマシテ、俗言モ止ミマシタ、夫レヨリシテ軍艦テナケレハ海防ハ出来ヌ、砲台ヨリ砲撃シテモ、敵ハ出沒シテ頭上ノ蠅ヲ逐フモ同然ノ事テアル、ト云フ建言モ出シタト云フヲ聞ヒテ、皆ナ人感心シテ蔭言モ云ハナイ様ニナリマシタ、其時分水戸侯ヤ其外諸侯ノオ話ニ、幾艘ホト拵ヘル見込カト云フ御尋ニ対シテ、齊彬カ御答ニ、琉球各島ノ往来用、或ハ江戸乗廻シ用等、差向キ大小十五六艘程ノ見込ミタト申シタサウテス、皆様モ大キニ過ル話ノ様ニ仰セラレタサウテス、水戸侯カ阿部殿ニ対シテ御戯レニ、軍艦製造ノ禁モ解カレナクテハナラス、偕テ解カレタ以上ハ薩摩ハ早ヤ軍艦ヲ拵ヘルサウタカラ、浦賀へ乗込ンテ来ル様ナ事カアレハトウナサルカト、御戯レナサレタト云フ事モコサリマシタ、是レハ軍艦製造解禁ノ前ノコト、思ハレマス、其時ノ話ニ、此レハ附會話カ知リマセヌカ、島津ハ幕府ニ対シテ、關ヶ原ノ戦ヒノ遺伝テ、敵愾心カアルカラ、軍艦ヲ造リテ、何

カ為ス底心タト、幕役中ニ其ノ辺ノ思想ヲ抱イタ人モアリシトノ事モコサリマシタ、水戸侯モ其辺ヲ御聞キ及ヒテ、右通り御戯レニナツタテハナイカトモ申シマシタ、又故水野越前守殿ハ内心齋彬ヲ御嫌ヒテアツタ様子デ、其レモ關ヶ原ノ遺恨ヨリ國中皆ナ敵愾心カアル、殊ニ薩摩守ハ賢イカラ油断カ出来ヌ、徳川ニ讐ヲ為スハ薩州タト、其他外様大名ト心ヲ合スル事ニナルカモ知レヌト、ケ様ナ事ヲ越前守殿カ阿部殿ニ申サレタソウテス、阿部侯ハ春嶽公(松平慶永)ニ話サレ、夫レヲ春嶽公ハ齋彬ニ御話シナサレ、春嶽公ハ齋彬ト御懇意テコサリマスカラ、阿部殿ニ対シテ齋彬カ思想ヲ御弁解ナサレルニ、薩摩守ハ決シテ其様不軌ヲ凶ル様ナ人テナヒ、懇意ニスルカラ能ク其処ハ存シテ居ルト、御弁解ナサレタト云フ事テコサリマス、此ノ御話ハ私モ明治二十一年カト思ヒマス、目白台ノ御屋敷ニ出マシテ、色々ナ御話ノ末御直話ニ伺ヒマシタ、春嶽公ハ齋彬ト御懇意テ、齋彬カ言行ナト毎々御直話ヲ伺ヒ、或ハ御書キナサレタ物ニモ其様ナ御書面モコサリマス、則チ迭事(逸力)史補ト題セラレタ御書ノ中ニモ、齋彬カ言行モ記サレテコサリマス、サウイウ所カラ、水戸侯モ右ノ通り阿

部殿ニ御戯カアツタテハナイカト存シマス、春嶽公ノ御話シト照シテ見マスレハ、果シテ水野侯サウ思ヒ居ラレタテアラフト考ヘマス、又關ヶ原敗戦ニ就テハ国人ノ感情ハ敵愾ノ遺伝ニナリテ居リマシタカラ、幕府モ始終嫌疑カアツタデアリマシタカ、然レトモ追々開ケテモ参リ、幕府ニ於テモ外国ノ為メニ迫ラレ、旁時勢ニ伴フテ、大船製造解禁ノ前頃、琉大砲船製造ノ稟請モ聞届ケラレ、而シテ輿論モ軍艦製造ノ必要ヲ喋々スルニ至リテ、遂ニ解禁セラレタ統キカト存シマス、又琉大砲船製造ノ稟請ハ、琉球在留外国人ノ警備ヲ專ニシテ、一年ニ一遍シカ往来ハ出来ヌ、海防ノ為メ人数差渡スニ就テ、緩急不弁云々ノ言ヲ以テ稟請シ、許可ヲ得マシタ、其時ハ最早ヤ伊呂波丸ト名ツケテ三四艘ハ打立マシタ後テ、随分名高クナリマシタカラ、右ノ通り稟請致シタ次第テコサリマス、序ニ御話申シマス、前ニ御話シ致シマシタ幕府御詔船昇平丸・大玄丸及ヒ藩用ノ軍艦モ、皆ナ夫々大小砲ヲ備ヘマシタニ就テ、火薬庫ノ製式ハ嘉永七年ノ夏、長崎ハ使節カ参リマシタ和蘭軍艦スウーヒンクノ製式ニ模擬シテ造リマシタ、其造法ハ私其時分伝習ノ為メ長崎ニテ、図面又

ハ製式ヲシラヘテ婦リマシタ、窓カラス・甲板ノ明窓用ノカラスハ、硝工四本某ト申ス者ニ拵ヘサセマシタ、同時頃ニ蒸汽船ノ雛形ヲ、田町邸内ニ於テ製造シマシタ、之レモ日本テ雛形ヲ製造シタ創始テコサリマス、専ラカヲ尽シマシタハ、肥後七左衛門・宇宿彦右衛門・梅田市藏・岩切仲左衛門ト申ス儕テコサリマシタ、此肥後・宇宿ノ兩人ハ工芸家テコサリマシテ、職工ニハ梅田・岩切テコサリマス、蘭學者ハ河本幸民ト杉田成卿テ、此二人ヲシテ洋書ノ翻譯ヲ為サシメ、或ハ凶面ニ抛リテ小ヒ雛形ヲ拵ヘマシタ、可也運轉カ出来マシテ、田町ヨリ大森辺マテハ行ケル様ナ小雛形テ、黒田（宿傳）、伊達侯（宿傳、八戸藩主）、南部侯ナト、度々試運轉モナサレタト見ヘマス、後安政四年ノ春鹿兒島ニ廻シマシタ、機関ハ取毀テ、大廻リ船ニ積ンテ下シマシタ、船ハ伝馬舟ノ如ク引カシタサウテス、同時ニ鹿兒島デモ同シ位ノ雛形ヲ拵ヘマシタ、皆江戸ニ於テノ模式テコサリマシタ、其關係ニハ船奉行折田八郎兵衛ト申者ヲ初トシテ、中原猶助及ヒ私ニモ其末ニ加ハリテ居リマシタ、職工ニハ坂本與市・山下左衛門・木佐貫源介ナト申ス輩テコサリマシタ、右様江戸又ハ鹿兒島ニ於テ拵ヘマシ

タカラ、當時随分名高ヒ事ニナリマシテ、幕府ヨリ軍艦ト一緒ニ蒸汽船雛形モ御詔ニナリマシタケレトモ、蒸汽船ハ製造方研究中云々ノ趣ヲ以テ御断リ申上、軍艦ノミ御受ケ致シマシタ、如此未開ノ事業モ初メマシタカラ、自然名ノミハ高クナリ、或ハ嫌疑ニモ巨ル様ナ説ヲ受ケマシタ、其評説ト申スハ、薩摩ハ密ニ琉球ニ於テ貿易ヲ開キ、外国ノ船工ヲモ呼ンテ軍艦ヲ製造シ、或ハ蒸汽船ヲモ造ラセナト、様々ニ唱ヘラレマシタサウテス、全国一般未開ノ時分テコサリマスカラ、ソナナ説モアリシナラント存シマス、序ニ御話申シマス、佐久間修理ハ有名ナ人テ、皆サン御承知通りテコサリマス、此人ニ依頼シマシテ、田町邸内ニ砲台ヲ築キマシタ、其繩張ナトモ佐久間テコサリマシタ、其砲台ハ廢藩ノ頃マテ残りテ居リマシタ、其時分和蘭式百五十斤ノボムベカノンモ全人ニ指揮致サセ鑄造シマシタ、當時日本ニテ最大新式テコサリマス、其鑄造方モ田町邸テコサリマシタ、其製造繪図ナトハ家老末川近江ト申ス者方ニテ見マシタコトカアリマス、其子孫カ所持シテ居リマス、此大砲ハ大森テ試験ノ時破レマシタ、其話カコサリマス、二三発打ツトヒガカ生シマ

シタサウテス、其処テ鹿兒島テ拵ヘタノヨリモ劣ツテ居ルト、佐久間ヲ輕蔑シタ事カコサリマス、其時薩摩テ拵ヘマシタ百五十斤ト八十斤ノカノンハ丈夫ニ出来テ居リマス、然ルニ佐久間ノ下知テ出来タノハ、二三発ノ後ヒ、ガ生シマシタカラ、遂ニ不用トナリテ拵下ケニ致シマシタ、其レヲ山師共ハ取繕ヒテ幕府ニ売上ケマシタサウテス、薩摩テハ物笑ヒニナリマシタ事テコサリマス、幕府テハケ様ノ事モアリテ、現今支那風ノ事ト同一タト思ヒマス、田町邸内ノ砲台ハ江川・佐久間杯ニ依頼シテ、品川沖台場ノ模形タト申ス事テコサリマシテ、大砲大小六門備ヘテコサリマシタ、斯ク邸内ニ砲台ヲ拵ヘルハ齊彬カ見込アリテノ事テコサリマス、嘉永六年ニ浦賀ニ米船ノ参ツタ時ハ、天下大騒動テ、若シ内海ニ乘入りタラハ火消屋舗ノ半鐘ヲ叩クト云フ布令テ、之ヲ相図ニ各藩ハ受持ノ場所々々ヲ固メヨト云フ事テ、薩摩ハ高輪・田町辺ノ警衛ヲ命セラレテコサリマス、然ルニ經費カ沢山掛リマスカラ、其後願立テ、田町邸ハ海岸テコサリマスカラ、邸内ニ砲台ヲ築キ、警衛シタイト願ヒマシタ処カ、異議ナク御免ニナリマシテ、拵ヘマシタ、是ヨリ經費カ格別減シ

タサウテス、邸内ナラハ人数モ格別増サスニ濟ミマシタサウテス、且取締モ届キ、他ニ陣屋ナトヲ置クトスレハ、三分一カ、四分一テ濟シタサウテス、又汽船雛形ハ長サ凡六七間ノ小サナ雛形テコサリマシタ、昇平丸ヲ品川ニ乗廻シマシタ頃ハ、田町海ニ浮カヘテ、可ナリ運転カ出来ル様ニナツテ居リマス、其時伊達侯・黒田侯ナトヲ御招待申シテ乗込シテ、大森辺マテ乗試ミマシテ、大井村ニ小サナ屋敷カコサリマシタ、其処ニ行ツテ遊シタト云フ事モコサリマス、或ハ水戸侯カ藤田虎之助ナト御召連レテ、軍艦昇平丸御見物ニ御出テノ時ハ、此小蒸氣船ニ御乗セ申シテ、本艦マテ送ツタト云フ事モコサリマス、右通り御見物ニ御乗込ノ御約束ニナリマシテ、当日ハ齊彬モ乗込ミ御案内申上ル準備モ整ヘ置キマシタ処ニ、当朝卒然公義ヨリ御三家方ト御取会ハ成規上相成ラヌトノ事テ、差止めニナリマシタカラ、如何トモ致シ方ナク、家老島津豊後ト申ス者ニ御案内致サセマシタサウテス、水戸侯ハ藤田誠之進ヲモ召列ラレ、御見物ナサレマシタ次第ハ、藤田氏カ後日戸田忠太夫氏ニ送ラレタ書簡ヲ見マシタ、只今写カコサリマス、其次第ハ島津家ニハ伝ハリマセヌ

ケレトモ、藤田氏ノ書簡テ概略ヲ知ル事ヲ得マシタ、又齊彬ハ右ノ通り御接待申ス事モ出来マセヌカラ、雛形蒸汽船テ大森マテ参リ、夫ヨリ大井村ノ別邸ニ参リ、夜ニ入りテ帰ツタト云フ丈ケハ、其時供シタ者ノ話テコサリマス、其時分迄ハ幕府ノ成規ト云フハ如此ノモノテ、今日ノ話ニハナラヌ事テコサリマス、又序話ニ嘉永寅年ニ長崎ニ和蘭ノ使節船スーピングト申シマス（後觀光丸ト唱ヘマス）此船カ参リ、英国船モ貿易通信願ヒニ使節カ一艦隊ヲ率イテ参ツタ年テコサリマス、〔其時船製造彼此ノ伝習方ニ長崎ニ出ヨト云フ事ヲ、私ヘ江戸ヨリ申付ケ越シマシタカラ、直クニ職工数名ヲ召連レマシテ、用人ノ三原ト云フ者ト一所ニ参ツテ、先ゾ職工等ヲ指揮シテ、船ノ見物トカ、或ハ質問トカ云フ事ヲ始メマシタ、其時ハ幕府ハ江川ノ手付柏木・望月ナド、水戸侯ヤ其他各藩ヨリモ伝習ト云フ事テ続々御出シニナリマシタ、鹿児島デハ之ヲ伝習ト云フ事ノ始メデゴザリマシタ、各藩モ初メテノ様デゴザリマシタ、其時和蘭ノ使節カ参リマシタ、其ノ軍艦ハスーピングト云フ軍艦デ、将官ヲフアービユスト申シマシタ、同時ニ例ノ和蘭ノ商船モ一艘参リ、其船ヨリ小サナ鉄製ノ小蒸汽、漸ク六七間モアツタカト思ヒマス、其レヲ和蘭人ガ持ツテ来テ幕府ニ

売上ゲマシタ、器械ハ長崎デ組立テ、始メハ港内ノミヲ運用致シ、後ニハ海外マデ乗出ス事ニナリマシタ、其レガ日本ニ蒸汽ノ備ハツタ開始デゴザリマス、〕実ニ嘉永七年七月ノ事テコサリマス、其時右ノ和蘭軍艦スーピングヲ幕府ヨリ御所望ニナリマシタケレトモ、船長ノ独断ニモ出来マセス、殊ニ使節ト云フ訳デコサリマスカラ、一遍シヤガタラマテ引取テ、本国ニ照会ノ上テナケレハナラヌト云フ事デ、其船ハ同年九月退港シマシテ、翌年夏和蘭国王ヨリ献上ニナリマシタ、是レカ日本ニ蒸汽軍艦ヲ置カレタ開始テコサリマス、幕府ハ觀光丸ト名ツケラレマシタ、其初メニ鉄製蒸汽船ノ機関、其他ノ絵圖^面ヲモ見、或大軍艦ヲ見テ大ヒニ覚リマシテ、製鉄器械モナク、従来ノ鉄工ヲ以テ迎モ实用ノ蒸汽船・帆前軍艦ヲモ造リ得ル事ハ出来ルコトテナイト感シマシテ、和蘭人ニ抛テ買入ルノ得策ナルノ意見ヲ、婦リマスト直クニ述ヘマシタ、一般モ其論ニ婦シマシタ、其レヨリ蒸氣ノ雛形製造ハ止メテ仕舞ヒマシタ、軍艦モ同様テコサリマシタケレトモ、打立ニ掛ツテ居ル分ハ成功セネハナラヌトテ、落成サセマシタ、其レ限りニ買フ方カ便利ト云フコトテ、帆前軍艦ノ製造モ止メマシタ、

ソレハ安政三年ノ事テコサリマス、是レカ昇平丸ノ粗
 図デコサリマス(此時繪図ヲ示サル)、安政三年十一月二
 十五日齊彬ハ御手ツカラ御刀拝領致シマシタ、之レハ
 昇平丸献上ノ御賞美テコサリマス、

岡谷君 薩摩カラ琉球ニ年ニ一度ノ往来テコサリマシタ
 カ、余リ少イモノテハコサリマセヌカ、

市來君 二月比北風テ彼地ニ渡海シ、五六月南風ノ時分
 ニ帰リマス、其レカラ臨時差遣ハス事ハ十月ノ小春ニ
 遣ル事モコサリマシタケレトモ、翌年マテ琉球ニ越年
 スルテコサリマシタ、冬分帰航カ出来ステコサリマシ
 タ故ニ、北風テ行テ、南風テ帰ル様ナ訳テコサリマシ
 タ、名高ヒ七島原ト唱フル、波荒キ潮行キ悪シキ沖中
 ヲ、不完全ナル日本船テ往来スル事テ、甚タ困難ナ航
 海テコサリマシタ、其時分ヨリ外国人モ難航路ト申ス
 話モコサリマシタ、此一冊ハ先刻御話申シマシタ寺
 師カ祖父、私カ実父カ伊呂波丸ト申ス洋式模擬ノ船製
 造ノ大概ヲ、私カ話シマシタ速記録テコサリマス、御
 覽ニ入レマス、

如斯段々ト開ケテ参リマシテ、蒸氣船製造モ、軍艦製
 造モ到底実用ニ供スヘキモノヲ製造シ得ラレマセヌカ

ラ、外国ヨリ買フノ得策ナリト云フ事ニナリマシテ、
 安政四年ニハ琉球在留ノ佛人ニ依頼シテ蒸氣軍艦、同
 シク商売船各一隻ヲ買入ル、事ヲ私共ヘ命ジマシタ、
 此事ハ此内御話申シタ速記録ニコサリマスカラ略シ
 マス、尋テ安政五年ニナリマシテ、勝麟太郎氏(勝伯旧
 名)ニ依頼シマシテ、蒸氣軍艦・同商船各一隻ヲ和蘭人
 ヨリ買フ事ニナリマシタ、其引合等ノ為メ松木弘安(寺
 島宗則旧名)、及ヒ江夏十郎(義正)ノ兩人ヲ長崎ニ遣シ
 マシタ、勝氏ハ当時長崎ニ於テ海軍伝習ノ為メ出役中
 テコサリマス、同氏ハ其前頃蒸氣軍艦觀光丸(旧名ス
 ービルク)ニ乗組、近海運用伝習中鹿兒島灣ニ兩度参ラ
 レ、齊彬ト親シク談話セラレマシタ末テコサリマス、同
 氏ハ厚ク尽力セラレ、右兩人ニ示諭セラレ、都合モ宜シ
 カリシニ豈図ラン、同年七月齊彬病没シマシテ何事モ
 水泡ニ帰シマシタ、大略ケ様ナ統テコサリマス、精細
 ノ事蹟ハ、事柄ニ就テ可ナリ史伝ニ記シテコサリマス、
 茲ニハ軍艦製造ノ因テ起ル処ヨリシテ、遂ニ外国ヨリ
 買入ル、事ニナリマシタ続キノ概略話テコサリマス、

一 寺師正容君小伝附正容君ノ生立

同君幼ニシテ聡敏、好テ文武ヲ兼修セラレシ事

同君豪邁ニシテ人ニ下ラス、詩歌ヲ克セラレシ事

同君船舶改良ヲ熱衷シ頗ル之ニ研究ヲ積マレシ事

同君弘ク群書ニ涉獵シテ渙象論ヲ著サレシ事

同君漂流ノ舟人宅間某ニ就キ造船ヲ研究アリシ事

同君創製ノ船舶ヲ伊呂波丸又渙象丸ト号セシ事

藩主齊彬公正容君ノ遺書ヲ其子孫ニ求メラレシ事

遺子宗道・廣貫兩氏君命ヲ墓前ニ告ケ、遺書數十

卷ヲ献上アリシ事

齊彬公安政四年始メテ外国式船ヲ模造セラレシ事

同公幕府ニ請ヒ琉大砲船ヲ創製セラレタル事

同公幕府ノ命ニ仍リ、昇平丸・大玄丸ノ二艘ヲ製

造アリシ事

薩摩ニハ特ニ明時館ト称ヘ、天文館設置アリシ事

正容君門人磯永某ト俱ニ鹿兒島曆ヲ改定セラレシ

事

同君手工ニ巧妙ニシテ、珍奇ノ器具ヲ作り、人之

ヲ賞セシ事

同君記録所ニ勤仕シ、家史・地誌ノ再撰ニ執筆セ

ラレシ事

同君ノ死去ハ匆卒ノ発病ニ因セシ事

同君藩命ヲ乞ヒ、硫黃島ニ安徳天皇ノ御陵ヲ搜檢

アリシ事

齊彬公西洋式造船ハ正容君ノ遺式ニ則リ、參酌ア

リシ事

正容君倜儻不羈ノ性質ニテ、人ノ下風ニ立ツヲ潔

シトセサリシ事

同君出水郷ニテ早鐘ヲ鳴シテ衆ヲ集メ、藩ノ譴責

ヲ受ケラレシ事

同君式風ニ泥マス、為メニ俗吏ノ嫉視ヲ受ケラレ

シ事

同君胆力ヲ以テ内ノ浦番所ノ妖怪ヲ鎮メラレシ事

久光公世評ヲ聞キ玉ヒ、正容君ノ造船檢覽アリシ

トノ事

藩庁ハ従前造船奨励ノ為メ、官金ヲ貸付、木材ヲ

下与セシ事

皆吉鳳徳ノ話

市來君(四郎) 廣貫カ実父寺師次右衛門ハ、実名ヲ正容

ト呼ヒ、幼名ヲ伊太郎、後次右衛門正容ト改メマシタ、

或ハ玄明渙象堂トモ唱ヘマシタ、天明七丁未八月九日

鹿兒島城南字新屋敷ニ生マレタ者テコサリマス、父ハ次郎左衛門正和、母ハ星野氏、弟ヲ次郎太ト申シマス、二十余年テ病死シマシタ、次右衛門カ姉ハ母ノ里ナル星野氏ニ嫁シマシタ、兄弟三人テ、子ハ兄宗道ト四郎、即チ私ト二人テコサリマス、正容ハ幼年ノ頃カラ聡敏ナ兒ト云ハレタサウテス、讀書ヲ好ミ、又ハ画ヲ楽ミマシタサウテス、橋口杏庵先生等ニ從ツテ程朱ノ学ヲ修メ、丁年頃ヨリ和漢ノ歴史ヲ讀ミ、二十四五歳ノ頃ニハ博覽ノ聞ヘカコサイマシタサウテス、武芸ハ大刀流大脇氏ニ学ヒマシタサウテス、性質豪邁テ、人ノ下風ニ立ツヲ好マス、詩歌ヲ弄ヒ、或ハ地理・天文ノ学ヲ修メマシタサウテス、薩摩ハ全国第一ノ海国テアルカラ、船舶ノ製造ニ心ヲ用ヒ、琉球其他ノ往来ニ就ヒテ、年々風波ノ災ニ遭ヒ、ソレカ為メ人命ヲ損シ、貨物ヲ棄損スル事、実ニ夥シク、故ニ船舶ハ国家経綸ノ大本テアルト考ヘマシテ、熱心改良ニ心力ヲ竭シ、和漢洋古今船舶ノ製造、或ハ航海術ヲ講究スル事数年ニ及ヒマシタサウテス、殊ニ天文・測量ノ学ヲ修メ、外国船ノ遠洋航海ノ術ヲ学ヒマシテ、文政五六年頃藩庁ニ請フテ、外国形ノ大船製造ノ許可ヲ得テ、着手致シタ

サウテス、其間ハ只管ラ和漢用古今大小船舶ノ製造ニ就テ、歴史或ハ其他ノ書ニ就テ講究シ、二三ノ書ヲ編纂致シマシテ、「渙象論」又造船彙稿ト名ケマシタ、冊数凡ソ五十卷余ニ成リテ居リマス、之ニ附屬シタル大小船舶図数十枚ヲ製シマシタ、楮其書ヲ著ス迄ニハ大小船舶ノ製造ニ係ル書類、或ハ長崎ニ往復シテ、和蘭陀船ノ造式ヲ講究シ、或ハ水引郷船間島ノ舟人宅間喜三左衛門ト申ス者、外六七名カ魯西亜堪察加ニ漂流シマシテ、遂ニ莫斯科府ニ護送セラレ、数年ノ間此処彼処ニ居リマシテ、彼ノ国ヨリ和蘭陀国ニ依托セラレ、帰朝シタモノニ就テ研究致シタサウテス、此喜三左衛門ト申ス者ハ元來舟人テアリマスカラ、外国船ノ製造、又ハ航海ニ心ヲ用ヒ、彼国テ研究致シタサウテス、此者カ帰朝致スト聞クヤ、直ニ父正容ハ船間島ノ近地京泊ト申ス所ニ在勤ヲ願ヒ、右喜左三衛門ニ交リヲ結ヒマシテ、造船ノ法ヲ聞キ、或ハ航海ノ術ヲ質問ナト致シタサウテス(質問筆記数冊ニナリテ居リマス)、如斯研究数年ニ亘リマシテ、文化五六年^(後カ)ニ申シタ通り、藩庁ニ請ヒ、外国船模造ノ許可ヲ得マシタサウテス、其前ヨリ製造ノ調ヘハ可ナリ就テ居タサウテスケレト

モ、何分ニモ資金カ出来マセンカラ、数年起工スルコトカ出来ナカツタサウテス、然ルニ同志ニ皆吉鳳徳・山口守藏・西村角次郎(鹿兒島上町ノ商人)ナト申ス人々ト語ヒ、資本ヲ拵ヘ、或ハ藩庁ノ補助ヲ請ヒ、製造所ヲ鹿兒島大門口ノ海辺ニ開キマシタ、現今料理店ナトノアル地テコサリマス、其製式ハ日本從來ノ製造ト違ヒマシテ、内部ノ構造ハ全ク外国船ニ擬シテ、即チマキリカハラ、或ハ竜骨ナトノ組ミ立テ、帆柱ハ三本、帆ハ三段ニ掛ケルナト、或ハ矢帆、或ハ舵ノ製造ナトハ丸テ外国船ニ擬セタモノテコサイマス、悲哉、時世未タ開ケマセンカラ、鉄具ナトハ外国船ノ様ニ出来マセナンタサウテス、大凡一年有余テ落成致シマシタ、即「伊呂波丸」又「渙象丸」トモ称ヘマシタサウテス、是カ鹿兒島テ外国形ノ帆前船ヲ造リマシタ嘴矢テコサイマス、幕府ハ治世以來三本柱等ノ大船製造ハ禁セラレ、製造スル事ハ、全国一般出来マセナンタカラ、琉球船模造ノ名ヲ仮リテ幕府ニ届ケ出タサウテス、尤モ航海ノ術ニ於キマシテハ、今ヨリ見マスルト、兎戯ニ均シヒテアリマスカ、未開ノ時勢テ止ムヲ得ナイ事テコサイマス、併シ乍ラ帆前ノ操リ、或ハ綱梯子ノ工合、

其他甲板或ハ舵ノ運転、或ハ羅針盤ナトハ皆外国ノ式ニ擬セタモノテアリマス、其製造ノ詳カナル事ハ私モ能ク存シマセン、前ニ申シマシタ造船書則チ渙象論ト云フ書ハ、嘉永四年ノ夏頃藩主齊彬公外国式ノ軍艦ヲ製造セント、百方調査セラル、ニ方リテ、父正容カ前年伊呂波丸ヲ製造シタ事ヲ聞知サレマシテ、実兄宗道ト私ニ父カ著シタ書ヲ見タイト内示サレマシタ、其処テ父正容カ多年苦心致シタ著書「渙象論」ト図式其他一切ノ書類ヲ、齊彬公ノ御手許ニ奉獻スルヤウニトノ懇命ヲ蒙リマシタ、私共兄弟ハ亡父カ積年ノ事蹟茲ニ於テ世ニ顯ハレ、藩主公ノ御聞ニ達シ、其上大業ヲ起サル、ニ就テ、参考トセラル、訳テ、感泣雀躍シテ奉呈致シマシタ、初メ達シノ取伝ハ御側役堅山武兵衛テコサイマシタ、其時宗道ト私ハ亡父カ墓參致シマシテ、君命ノ辱ナイ事ヲ告ケ、「渙象論」五十卷余ノ図式數十枚奉呈致シマシタ、其時ノ紹介者ハ堅山武兵衛ト御小納戸ノ山田壯右衛門兩人テコサイマシタ、其後数日ニシテ齊彬公ハ父カ昔年辛酸ヲ嘗メ、日本開基ノ事跡ヲ賞賛セラレマシテ、靈魂慰祭スヘキ旨ヲ以テ、黄金若干ト布帛トヲ下サレマシタ、是ハ嘉永四年六月ノ初テ

コサイマス、偕斯様ニ恩賜ヲ受ケマシテ、私兄弟ハ亡父カ積年苦心致シマシタ功蹟ノ顯レタルヲ喜ヒマシテ、祭典ヲ行ヒマシタ(父カ死日ハ六月十四日テコサリマシテ、此日祭式ヲ行ヒマシタ、歿後凡ソ廿四年ニ当リマス)、ソレカラ齊彬公ハ同年ノ秋鹿兒島磯ノ別館近傍ノ海浜ニ於テ、「伊呂波丸」ト申ス外国形ノ大船一艘ト、外国製模擬ノ御舟二艘ノ製造ヲ開カレマシタ、此ノ時ニハ長崎ヨリ船大工三四名ヲ雇ヒ、或ハ舟手方ノ職工ヲ用イマシタ、其製造ハ素ヨリ父正容カ造リマシタ伊呂波ヨリ一層構造モ開ケ、外国ノ製造式モ大略ハ分リマシタ故、前キニ製シマシタ「イロハ丸」トハ最モ精巧ニ進ミマシタト思ハレマス、其船ノ長サハ凡廿二三間位テ、内部ノ構造ハ外国式テ、外部ノ裝飾ハ日本形ニ装ヒテ、所謂カキタチナトヲ付テアリマシタ、是ハ未タ幕府カラ外国形ノ船製造ヲ禁セラレテアル故テコサイマス、素ヨリ三本柱テ帆前ノ操リ、其他一切皆外國商売船ノ式ニ倣ヒテ製造セラレマシタ、是レ齊彬公カ外國船模擬製造ノ嚆矢テ、或ハ日本ニ於テ外國船模造ノ權興トモ云ツテ不可ナカランカト存シマス、齊彬公カ知政ト共ニ、海防ノ必要經濟ノ根本ナル事ヲ認ラレマシテ、

大船製造ヲ開カレマシタハ、實ニ日本ノ嚆矢テコサイマス、是ハ今ニシテ一般ノ知ル処テコサイマスカラ多言ハ致シマセン、ソレカラ齊彬公ハ幕府ニ建言セラレテ、「兎角日本ハ海國テアルカラ、船舶ノ製造カ開ケナクテハナラナイ、或ハ海防ニ於テモ軍艦カナクテハナラン、今日ノ有様テハ海防ニ於テモ唯砲台ヨリ打チ破ルトカ何ントカ云ツテ居テハ、頭上ノ蠅ヲ掃フヤウナコトテ、決シテ安心シ居レナイ」ト云フ意味ノ建言ヲ致サレタテコサイマス、這ノ建言書ハ普ク衆ノ知ル所テコサリマスカラ、茲ニハ申シマセス、此ニ於テ幕府モ悟ル処カアツタト見ヘ、大船製造ノ禁ヲ解レマシタ、解カレマスルヤ否ヤ齊彬公ハ軍艦大小十五艘ヲ製造シタイト云フ御届ヲ致サレマシタ、其時諸藩ニテモ薩摩ハ氣強イ事ヲ云フ、軍艦十五艘ハ中々ナ事テナイナト、云フ論評モアリ、或ハ水戸様ナトハ御戯レニ、薩摩カ軍艦ヲ製造シテ浦賀ヨリ内海ニ出シタラハ、則チ外國船ノヤウナ訳テ、恐ル可キコトタ」ト仰シヤツタサウテス、其処テ一般ノ説ト云フモノハ中ニハ喜コブ人モアリマシタケレトモ、亦誹毀スル者モ沢山アツテ、種々ナ風評ヲ致シタテコサイマス、然レトモ幕

府ハ外国ノ刺戟カ年々甚シクナツタカラ、夫故禁制ヲ解カレタト見ヘマス、右届書ヲ出ス前ニ齊彬公ハ閣老阿部伊勢守殿ト御内談致サレテ、以前ノ伊呂波丸ヨリ一層進ンテ、外国式ノ大船二艘程ノ製造ヲ始メテ居リマシタ、然レトモ幕府ニ対スル嫌疑モコサイマスカラ、「琉大砲船」ト名付ケマシタ、ソレハ琉球ノ船式ニ擬シタト云フ名義ヲ仮リテ、マサカ軍艦ト云フ事ハ其時分迄ハ云ハレナイカラテコサリマス、其後ニ至ツテ禁ヲ解カレマシタカラ、公然軍艦製造ト云フ事ニナリマシタ、其時ハ幕府ヨリモ御所望カコサリマス、即チ薩摩ニ於テハ軍艦ヲ製造シ、或ハ琉大砲船ヲ拵ヘルサウタカラ、蒸気船ノ雛形ト軍艦二艘トヲ御詠ヘナサレ、費用ノ如キハ御下ケニナルニ由ツテ製造シテ差上ケヨト云フ、閣老ヨリ表立テ御達シニナツテ居リマス、其内一艘ハ献上致シマシタ、則昇平丸ト名ケテ献上致シマシタ、一艘ハ大玄丸ト名ツケ代価御払ニナリマシタ、其後水戸様モ外国船ニ擬シテ御製造ニナリマシタソウテス、然ルニトウ云フ訳カ進水ノ時顛覆シタトノ説ヲ聞ヒタコトモコサリマシタ、然シテ齊彬公ハ続ヒテ製造モ致サレマシタ、其時蒸気船ハ雛形研究中テコサイ

マスカラ、ソレタケハ御猶子ヲ願ヒ、尚講究致シテ御用立ツヤウニシマシヨウト、差向キハ御断リ申上タソウテス、軍艦ハ不東ナカラ製造中故出来ノ上差上ケマシヤウト御受致シマシテ、ソレカラ一兩年立チマシテ製造ヲ終リ、一艘ハ御詠ヘノ如ク相当ノ代価ヲ以テ御用ニナリマシタ、一艘ハ献上致シマシタ、其時表立テ御刀拜領シマシタ、ソレカ幕府ニ洋式模倣ノ軍艦御備ニナリマシタ嚆矢テアロウカト考ヘマス、ソレハ歴史上明ラカテコサイマスカラ、委シク申シマセン、倍其ノ原因ト云フモノハ右申シタ通り、実父正容カ若年ノ時分ヨリ熱心ニ取調マシテ、文政ノ中頃伊呂波丸ト名付ケタ大船製造致シタカ原因トナリテ居リマス、ソレヲ齊彬公カ嘉永四年ニ製造書ヲ出セヨト命セラレ、殊ニ私ヘハ親父カ志ヲ継ケト内示モ下サレタテコサイマス、其時分私ハマタ若年テコサイマシタ、其余ハ先刻御話シ申シマシタ通り賞誉セラレマシタカラ、靈魂ヲ慰祭致シマシタ、是レカ島津家テ大船製造ノ概略歴史テコサリマス、私モ若年ノ時テコサイマスカラ、其願末ハ記憶セヌ事モ沢山コサリマス、然ルニ実父カ門人ニ磯長孫四郎ト云フ者カ居リマシタ、其弟ニ大山仲兵

衛ト云フ者カ居リマシタ、是ノ兄弟ハ実父カ門人テコサリマシタ、兄ノ磯永ハ天文学即チ曆学者テコサイマス、御存シノ通り鹿兒島ハ、文治ノ頃ヨリ島津家ノ所領トナツテ居リマスル西南ノ僻地テコサイマスカラ、特別ニ天文台ヲ置カレマシタ、其処テ天文方ト云フ役所カコサイマシテ、役所ハ明時館ト唱ヘマシタ、鹿兒島ニ一種ノ曆カコサリマシテ、^{〔タカ〕}其曆ハ伊勢曆ト格別相違ハコサイマセン、唯昼夜ノ時間カ少シ異ナルノミテコサイマシタ、コレハ天度ノ異ナル訳テコサリマス、是ハ各藩ニハ無イテコサイマシヨウ、其処テ磯永ハ世々曆家テコサイマシタカラ、私ノ父ヲ師ト致シタト云フモノハ、父カ天文学ヲ研究シタ所以テコサイマス、夫故寛政改曆ノ際鹿兒島曆ハ、父カ専ラ取調致シタモノテコサリマス、ソコテ天文測量ハ少シハ心得テ居ツタト見ヘマス、航海術モ少シハ研究シテ居タト思ハレマス、其処テ支那ノ曆書ナトハ沢山所蔵致シテ居リマシタ、借磯永ハ曆学ノ家テ、其人ヲシテ父ハ彼レニ筆ヲ取ラセタソウテス、夫故父カ言行事蹟ハ、磯永兄弟及ヒ私カ養父四郎(政直)ト申マシタ、是モ実父正容ト目付役テ同役、且ツ親友テアツタソウテス、此三名カ

毎々話シテ聞セマシタ、船製造ノ事、或ハ言行動作ノコト、モ私トモニ、「御父サンハ斯様ナ人テ斯様テアツタ」ナド、折々聞カシテ呉レマシタ、ソレカ私カ記臆上ノ大体ニナツテ居ルテコサイマス、磯永ノ弟大山ト云フハ、島津家ニ使ハレテ近頃迄生キテ居リマシタ、親父ハ程朱派ノ^{〔脱心〕}「学者テ、後天文学ヲ学ンダ者テゴザイマスカラ、磯永・大山ハ天文学ニ疎フゴザリマシテ、程朱派ノ」学問ト天文学ハ父カ門人テアツタソウテス、斯様ニ種々ナ事ヲ父ハヤツタ者テ、其他ニ少シ細工物或ハ印刷等ヲ好シタト見ヘマス、種々ニ竹ヲ撓メマシテ、机ヲ製ヘルトカ、小サナ屏風ヲ拵ヘルトカ、書架ヲ拵ヘルトカ、種々竹細工ヲ徒然ノ慰ニ致シタソウテス、世ニ云フ黒竹ニテ屏風ヲ造リ、或ハ書棚ヲ造リナト致シマシタソウテス、人々其奇巧ヲ賞シ、親懇ノ者ニ切ニ請フテ、之レヲ求ムル者モアツタサウテス、其他今云フ化学的ノ事モ好キテアツタト見ヘマシテ、一寸シタ薬劑配合等モナシタサウテス、先ツ一口ニ申セハ奇用ノ性質テアツタト存シマス、其他彫刻シタ物モ残ツテ居リマス、夫レハ徒然ノコトテ、歴史学・造船学カ熱心テ、素ヨリ支那風ノ歴史学テハコサイマスカ、日本歴

史モ相応学ンタト見ヘマスル、又考証学ヲ好ミマシテ、三十四五歳ノ頃藩庁ノ記録所ト申シマシテ、修史ヲ掌ツテ居ル役所カコサリマシタ、随分鄭重ニ致シタ一局テコサイマス、是ハ側役ノ管轄テ、即チ父正容モ文政七八年頃此職ノ別局再撰方ト唱ヘマシテ、五代直左衛門(秀堯)ト申ス者ト、其別局ノ長ヲ云ヒ付ラレタサウテス、五代直右衛門ト申ス者ハ当時記録奉行テ、彼ノ五代友厚カ親父テコサイマス、是モ鹿兒島テハ有名ナ学者テ、詩文章モ有名ナ人テコサイマス、此人ト同僚テ記録方ノ再撰、鹿兒島名勝志・三陵考ナト、云フカコサイマス、其三陵考ト云フノハ則チ彦火々瓊々杵尊・彦火々出見尊・鸕鷀宇葺不合尊ノ御陵カ、薩摩大隅ノ間ニコサリマス、皆人ノ知ル所テ国史上ニモ記シテコサリマス、是等ノ古蹟・名勝等再撰ノ目的テ、再撰方ト云フヲ設ケラレタサウテス、名勝志ト云フノハ数十冊アリマシテ、其等ヲ調査ノ為メ、或ハ島津國史ト云フカアリマス、是ハ島津家ノ歴史テ、ソレヲ再撰スル為メノ局テコサイマス、ソレノ総理ヲ致シマシテ種々ナ事ヲ遣ツタテコサイマス、或ハ硫黄島ニ安德天皇ノ御事蹟カコサリマス、這ノ取調モ右ノ五代ト実父カ

専ラ担当シタト見ヘマス、勤役中ニ卒中風ニ罹リマシテ斃レマシタ、四十二歳テ、即チ文政十一年戊子六月十四日デコサイマス、自宅ノ隣リニ少々地所ヲ持ツテ居リマシテ、朝起キ抜ケニ、兄宗道ハ其時五歳テコサイマシタヲ脊負ツテ、植ヘ置イタ茄子畑ヘ行キマシタ処テ、兄貴ヲ脊負ヒナカラ卒倒シテ、其俣テアツタソウテス、死ンテカラハ随分人ニ惜マレタト見ヘマシテ、私ナトニ親ノ友達カ申聞テ呉マスルニ、船製造ノ事ニ精神ヲ尽シ、是非精工ナル船ヲ拵ヘナクテハ止マナイ、又考証学ニ就ヒテモ島津家ノ歴史ハ不完全ナル点カ多イカラ、精確ニ調査シナクテハナラント云ツテ、朝暮此事ニ心勞シテ居ツタカラ、心痛ノ余リニ発シタ病テ、今テ云ヘハ肺炎トカ腦充血トカ何トカ申シマシヨウ、精神ヲ勞シテ卒倒シテ仕舞ツタト云フ事ヲ、話シテ聞カセマシタ、今少シ生キテ居リマシタラ、船製造ノ事ハ尚モ熱心ニ遣ツタテコサイマシヨウ、修史・考証種々様々ニ調ヘタ草稿モ多クコサリマシタ、其調査書ノ残ツテ居ルハ安德天皇ノ御事蹟テコサイマス、天皇ハ薩摩国河邊郡硫黄島ニ御潜居遊ハシテ、其処テ崩御遊ハサレタト云フ口碑ニ均シキ説カコサイマス、

其硫黄島ニハ陵カアルトカ、或ハ御書キ物カ遺ツテ居ルトカ云フ事ハ今日テモ申シテ居リマス、其時分迄ハソノ事ノ調査モ届カス、唯口碑ニ伝ツタ位テコサイマスカラ、ソレヲ五代ト親父カ藩庁ニ申立テ、調査ヲ致シタテコサイマス、ソレカラ硫黄島ニ伝ヘテ居ルタケノ事ハ、筆記ニモ載ルヤウニナリマシタ、其事ハ後日御話致シマシヨウ、唯履歴ノ一端テコサイマスカラ、今日ハ其大概ヲ申シマス、其時分ハ一体世ノ有様ハ幕府アルヲ知テ、朝廷ト云フカ有ルカ無イカノヤウナ世風テコサイマスルニ、父ハ幕府ノ驕奢僧上ノ事ヲ段々記シタモノモコサイマス、ソノ事ハ処カラシテ、安徳天皇ノ御事蹟調ヘニモ掛カツタテアロウト考ヘマス、ソレニ就テハ今日ニナツテ見マスルト、硫黄島ニ伝フル処ハ口碑ニ残レル位テ、他ニ伝フル処ト較ヘテ見マスルト、最モ薄弱ナル説テコサリマス、平家カ亡ヒタ後ニ平氏方ノ人ハ彼方此方ニ散在潜居セラレ、其時分ノ高貴ナ人ノ事蹟テモアロウカト思ハレマス、是モ安徳天皇ノ御事蹟ナト、ハ信ヲ措キカネマス、是レハ先ツ別ノ事トシテ宗家ヨリ出サレタ物モアリマスカラ、唯此処テハ親父カ履歴上斯様々々ニ種々ナ事モ遣リマシ

タ、其中テ名ノ残ツテ居リマスノハ大船製造ノ事テ、日本ノ嚆矢トハ私カ口ヨリハ申サレマセンケレトモ、鹿兒島テハ嚆矢テコサリマス、是モ公平ニ論シマスルト、幕府カ外国形ノ船ヲ造ル事ヲ禁セラレタラ、嘉永七年ニナリテ禁ヲ解カレ、ソレ迄ハ密ニ名ヲ替ヘ、形ヲ変シナトシテ製造シマシタケレトモ、外国船ノ模造ニ違ヒハコサリマセンカラ、日本ノ嚆矢トモ云フヘキカト考ヘマス、是レハ私ヨリ口ニハ申シカネマスケレトモ、鹿兒島テハ嚆矢テ、親父カ第一着ノ仕事テ、人ノ称ヘル処テコサイマス、然シテ齊彬公カ其書類ヲ出セヨトノ御言テ、参考ニハ幾分カナツタテアロウカト思ワレマス、其書類ヤ絵図ヲ御取ナサレ御覽下サレマシタヲ見マスルト、全ク無関係ナモノテモナイカト考ヘマス、夫レ故善ヒ書ヲ著シテ置ヒタト云ツテ、祭祀料ナト下サレマシタ、先ツ簡短ニ申シマスルト、ソレカ基礎ニナツタト云フヤウナ訳テコサイマス、其他書イタモノモ沢山コサイマスケレトモ、専ラ船ノ事ト歴史考証トノ二ツテ、是レハ沢山コサイマス、次キニハ地理学ト天文学トヲ研究シタト見ヘマス、幼年ノ頃ハ画ヲ好ンテ、世界図ノヤウナモノハ沢山残テ居リマシ

タ、ソレハ齊彬公へ出シマシタ外ニ残ツテ居マシタ、種々ナ書類ハ去ル明治十年ノ兵火ノ際、兄宗道ト宗徳ハ東京ニ居リ、跡ニハ宗徳カ母ト女ノ子供タケテコサイマシテ、乱ヲ避ケルニ就イテ、ソシテ書類ナトハ皆地ヲ掘ツテ埋メテ置キマシテ、鎮乱後六七十日過キマシテ掘リ出シマシタ^(分脱カ)、過半ボロ／＼ニナリテ用立タヌヤウニナリマシタ、遺憾ナ事テコサリマシタ、父カ^(字カ)研究スル時分ハ、外国ノ事・天文・地理学ナトモ今カラ見ルト、茫漠タル事テハコサイマスケレトモ、支那書ニ拠リテ調ヘタ地理書モ少シハアリマシタ、其他漂流人ニ依ツテ話シテ聞ヒタ書モアリマシタ、其中ニ取ルヘキ事モ無イテハアリマセン、彼レ是レト随分苦心シテ調ヘタト思ハレマス、就中天文学ハ研究シタト見ヘマシテ、曆学ハ局外テ師匠ニナツテ居タト見ヘマス、從ツテ算術ハ日本算テハコサイマスカ、随分心得テ居タト見ヘマス、性質ハ私ナトノヤウニ極ク気促者テ、少シ氣ニ食ハヌ事ハ直ク遣ツケルトカ、論責スルトカ云フヤウナ性質テ、人ノ下風ニ立ツヲ嫌ヒデアツタト見ヘマス、家産モ破リ、死ヌ時分ニハ余程貧窮ニ迫ツテ居タサウテス、其勉テ私共兄弟ハ父カ卒然ニ死シ

マシタカラ、タツタ兩人ノ兄弟テ私ハ当歳、兄ハ五歳テコサイマス、ソレニ祖母ハ生テ居リマシタ、稍孤独ニ均シキ有様テコサリマシタ、父カ事蹟ハ、書イタ者ト門人ナトカラ聞イタノテ、概略ノ事ヲ記憶スル位テコサリマス、畢竟氣促者テ、時勢ニハトシテモナイ企ヲ遣ツタ者テコサイマスカラ、身代モ何モスツカリ潰シタテコサイマス、其氣促テ人ノ下風ニ立タヌ氣象ノアツタ事ヲ、父親ノ友人ヨリ聞キマシタ事カコサリマス、或年勤役ニテ薩摩国出水^(肥後国境ニ在ル一郷)ト申ス所ニ出張シテ、在勤イタシテ居リマシタソウテス、其郷ノ役人共ニ向テ親父ノ申シマスルニハ、治世ニ乱ヲ忘レヌト申スハ武士ノ心得テアル、今日治世トイトモ、一國守衛ノ道ヲ忽ニシテハナラス、特ニ出水ハ隣国肥後ニ接シタル処ナレハ、一日モ守衛ノ心掛ナクテハナラス、在住郷士ノ面々平日ノ心掛ヲ試メサムトテ、遽ニ早鐘^(コノ鐘ハ外城毎ニ地頭飯屋ト唱ヘマシテ、一郷ノ役所テ、今テ申ト郡役所ノ如キテコサリマス、其処テハ必ラス時報鐘カアリマシタ、非常ノトキ鳴ラシマスル、コレヲ早鐘ト申シマス)ヲ鳴ラシテ衆ヲ集メタコトカアツタソウテス、鹿兒島ノ藩、夙ニ事変アリテ士衆ヲ集ムルトキ

ニハ、役所ニ釣シアル鐘ヲ鳴ラスヲ相図ト致シテ、急装シテ出ツルノ定メテアリマス、斯ク急ニ衆ヲ集メルトキハ鐘ヲ乱打シテ間断ナキコト、一寸東京辺近火ノ際ニ半鐘ヲ鳴ラスト同様テアリマス、之ヲ早鐘ト称ヘマス、治世ニナリテカラ久シク早鐘ヲ鳴ラスコトモ絶ヘ居タト見ヘ、又嘉永以降兵備拡張ノ事ヲ令シタルヨリハ毎々テ、人々モ怪シミマセヌカ、文化・文政ノ比ハ旺盛至治ノ世テアリマスレハ、親父カ早鐘ヲ鳴ラシテ士衆ヲ集メタト申ス事ハ、大ニ世聴ヲ驚カシタ事ト見ヘマス、此事後日藩庁ニ聞ヘテ、親父カ一存テ治世ニ非常ノ早鐘ヲ鳴ラシ、士衆ヲ集メシハ穩当ナラストノ事ニテ、遂ニ其咎ヲ蒙ラサレテ役ヲ免セラレタソウテス、親父ハ固ヨリ覚悟ノ上ニテ為セシ事ニモアリマスレハ、別ニ愕キモ致シマセス、出水ヲ立テ鹿兒島ノ家ニ帰りマシタ、此時親戚故旧ハ、或ハ其無謀ヲ譏リ、或ハ不穩ノ挙動ヲ責メマシタトカ聞キマス、然シ親父ハ固ク己レノ信スル処ヲ執テ動キマセス、其事ニ付別ニ陳謝ニ及ヒマセナント申シマス、親父ノ友人磯永孫四郎・其弟大山仲兵衛ノ兩人ハ、親父ノ出水ヨリ帰リマシタ夜ニ訪問シ、酒肴ヲ贈リテ慰メマシタト申シ

マス、親父ハ平然トシテ更ニ悔ミマセス、トウセ我等ノ如キ武骨者ハ今日ノ軟弱者流中ニ容レラレス、然シ屈シテ職ヲ奉センヨリ寧ロ氣楽タト申シマシタトカ、是ヨリ久シク役ニモ就キモセス、文墨ヲ楽ミ、又ハ文事ヲ研究シテ世ヲ終リマシタ、又一話カコサリマス、出水ニ在住ノ際ニモ親父ノ認メテ出シマスル公文類ハ概ネ文句モ普通ノ俗調ニ泥マス、一種ノ特色ヲ以テ認メタソウテス、其時上役ノ者、君ノ文句ハ余リ嚴格ニ過キ読ミ難シ、今少シ柔カニ書キテ貰ヒ度ト申シマシタトカ、ソコテ親父ハ普通ノ文句ノ体ヲ失ヒタル点ヲ指摘シテ、之ヲ弁シ、反テ役員ノ無識ヲ叱責シタサウテス、斯様ニ人ニ屈セス、気恨モノテアリマシタカラ、実ハ上役モ御シ難キ処ヨリ、親父ヲ種々擯斥致シタサウテス、又一種ノ怪談カアリマス、然シ矢張親父ヲ評スル一事テアリマスカラ、老母杯ヨリ聞キマシタ話テコサリマス、大隅国内ノ浦ト申ス所ニ海岸ノ番所カアリマシテ、出入ノ船舶ヲ改ムル番所テ、近來ハ場所ヲ替ヘテ、矢張番所ハ設ケテアリマシタ、旧番所ノ地ハ墓所ヲ潰シテ設ケタ処ト申シマス、ソコテ其番所ニハ夜々怪妖カ出ツルト申シテ、人々甚タ恐レタ処テアリ

マス、ソレ故鹿兒島ヨリ藩士ノ在番交代アル毎ニ、妖怪ニナヤマサレテ、定番ノ期限通りニ勤メタ人ハナカツタト申シマス、親父一人ノミカ期限通りニ勤メタト申ス事テアリマス、其話ヲ聞キマスルニ、多少神経モアルニハ相違アリマセス、番所ノ内番士カ詰ムル座敷ニ、深夜ニ及フト若キ女ト坊主ノ姿トカ現ハレ、臥シタル番士ノ夜具ノ上ヨリ押ヘ付クル事カアリシト申シマス、其恐シサト畏ハサニ堪ヘタル人モナカツタト申シマス、親父ハ平然之ヲ堪ヘマシタソウテス、初ノ夜ニ現ハレテハ消ヘ、消テハ現ハレ、六七度ニ及ヒシカ、便所ニ行ケハソコニ付キ来リ、纏ヒ来ル様ナ氣味テ、親父ハ更ニ動セス、平然トシテ起卧シテ願ミサリシト申シマス、翌夜ハ六度、翌々日ハ五度ト、夜毎二度減ニカ七日間ニ及ヒシモ、親父ハ更ニ意トセス、七日間ヲ過コシマシタ処カ、八日目ニハ何事モナクナツタソウテス、其後ハ毫無怪異ノ出ツル事モナク、無事ニ期限ヲ了ヘタト申シマス、実ハ此ノ番所ハ妖怪出沒ノ評聞世ニ名高キ処テ、人々行クヲ好マヌ場所ト聞キマス、ソレ故此番士ニ申付ラル、人ハ、武芸力量人ノ評判ニ上ル位ノ者ヲ撰ヒ申付クルノ風アリシト、親父モ此撰ニ

当リタル者テアリマスカ、親父ノ外ニ番士トナリシ者モ、皆尋常ノ士ニハアラサリシモ、此妖怪ニハ堪ヘ切ラスシテ、多ク逃ケ出シタモノト見ヘマス、或人ノ如キハ驚キノ余リ寢床ヲ改メ、遙カ隔リタル小使等ノ臥スル処ニ逃ケテ卧シ居リシニ、妖怪此処ニ現ハレ来リシトテ、終ニ神経ヲ狂シタリトノ話モアリマス、従前多クノ番士モアリシカ、期限通ニ過シタリシハ親父一人テアツタトテ、当時勇胆ナリシヲ賞シタ事テアリシト申シマス、コレハツマラス妖怪談テアリマスケレトモ、親父ノ氣質ヲ察シマスルノ一ツトシテ序ニ御話致シマス、其処テ船製造ノ事ハ、近頃私ハ久光公ニ歴史上ノ話シヲ聞キマスル序ニ、久光公ノ御話ニ、予カ十二三ノ時分珍ラシキ船造リカアルトテ觀ニ行ツタ、能クハ分ラナカツタカ、平生ノ日本船トハ違ツテ居タコトヲ覺ヘテ居ル、海ニ浮ヘテカラ乗込シタカ、帆ハ三段ニナリ、船先ノ方ニモ三角ヤウナ帆ナトカ横ニ張リ出シテアツタ様タ、其頃珍シヒ船タト見物人カ多カツタナト、申サレマシタ、其時分ハ皆吉鳳徳カ造リシト（船脱カ）ノミ聞ヒテ居タト申サレマシタ、親父貧乏デコサイマシテ、製造ノ資本カアリマセンカラ、皆吉ハ医者テ学

問モアリ、奇人物ノ名モアツテ、薩摩テハ鳳徳先生ト申シテ、医者ノ先生テ奇人ノ部類ノ人テコサイマス、身代モ善ク、常ニ船舶ノ便ヲ開クカ経済ノ本源テアルト云フ事ヲ、父及ヒ同志者ト主張シテ居リマシタ、素ヨリ親父ト同論テ、他年ノ間親父ト共ニ研究シタト見ヘマス、其人カ資本ノ主トナリテ、製造方ハ親父カ引受テアツタサウテス、資本家ノ今一人ハ西村覺次郎ト云フ男テ、是ハ鹿兒島城下上町ノ商人テ、是レカ又一奇人テ随分資本モアツタサウテス、名義ハ此西村カ名テ藩庁ニ願ヒ出シタサウテス、藩庁ハ大船製造ノ禁令ニ就ヒテ異様ナ船テアルカラ、幕府ニ届ケナクテハナラシ、ノミナラシ全体琉球其他諸島運送ニ用イル船カ数多アリマス、是ハ皆商人等ノ持チ船テ、ソレヲ琉球其他ノ島々ニ向ツテ商品ノ運輸ヲスルノテコサイマス、其船ヲ製造スルニハ藩庁ヨリ、今テ申スト親船テ一艘ヲ製造スルニハ、金千両宛無利息十ヶ年賦テ貸シ渡ス規則テコサイマス、其時分千両ト申スト今テハ三四千円ノ数テ、ソレカ資本テ、材木ハ杉テモ松テモ無代価テ与ヘマス、其処テ其材木ヲ伐ツテ製造場迄持ツテ来ルニ、其千両ノ中テ願人カ負担スル事トシ、材木代ハ

無イカラ船一艘ハ其位ノ入用テ、材木代モ殆ント千両モ掛カリマス、先ツ二千両位テ悉皆出来ルモノト考ヘラレマス、其処テ右伊呂波丸ヲ拵ヘルニモ其例ニ倣フテ、材木ハ無代価又金二千両ヲ借ルコトヲ、右商人ノ西村カ名義テ願ツテ、其処テ藩庁ハ貸シテ遣リマシタサウデス、ケレトモ始メテ異様ナ船ヲ拵ヘルニ就イテ、帆ハ三段ニ、舵ハドウスル、何ハコウセネハナラスト云フヤウナ訳デスカラ、始ント三千両モ費シタト見ヘマス、二千両ハ材木代ヤ何ヤテ、余ノ千両程ハ皆吉ト西村トカ出シテ造ツタ、其帳簿ナトハ遺ツテ居リマシタ、ソウ云フコトテ伊呂波丸ヲ製ヘテ、琉球ヤ其他ヘ運搬ノ為メニ二三回航海シタサウテス、三回目トカ能クハ知レマセンカ、七島灘デ難風ニ遭フテ、其時皆吉カ船長ノ場テ乗ツテ居タサウテス、親父ハ其折病氣テ乗ツテ居ナカツタサウテス、前ニ申シマシタ通り、皆吉ハ奇人テコサイマスカラ、難風ニ遭ツテ今ニモ覆ヘルカト云フ時テスカラ、皆髻ヲ切ツテ神仏ニ願ヲ上ルトカ、何ントカ騒ヒテ居リマスノニ、皆吉ハ矢張り寝テ居テ高ラカニ詩ヲ吟シテ居タサウテス、ソレヲ見テ船頭カアナタモナンゾ御願テモ御上ゲ下サレ、船中ノ

者ハ皆髪ヲ切りテ御願ヲ上ケテ居リマスト申シマスルト、成程ソウカソレチャ御願ヲ上ケヤウト云ヒナカラ、其処ヲ這ヒ出テ、何カ煙草入レヨリ出シテ海ニ投ケケンダサウテス、ソウシテ暫ク御辭儀ヲシテ居ツタソウテス、暫クスルト不思議ニモ波カ静カニ成ツテ穩カニナリマシタカラ、船頭等カ云フニハ、アナタ何カ龍宮様ニ御上ケナサレタヤウテスカ、定メテ御大切ナモノデコサイマシタロウト尋ネマシタ処ガ、然テアツタ、中々大切ナ物テアツタ、アレハ拙者カ先年江戸テ貰フタ珠テアル、ソレニハ何カ仔細テモコサイマスカ、オ、然ウタ、先年江戸ニ修業ニ參ツテ居ル時分、日影町テ十六文ニテ買ツタ水晶ノ珠タト云ツタソウテス、ソレカラ又船頭カ御願ハソレキリテアツタカト申シマスルト、サレハ此船カ無事ニ助カツタラハ、金テ華表ヲ打ツテ上ケヤウト申シ上ケテ置イタ、次キニハ終身唐茹ハ食ヒマスマイト申シタト云ツタサウテス、船頭等モ呆レテ実ニ斯ウ云フ大胆ナ人ハアルマイ、其処テ船頭等カアナタハ金テ鳥居ヲ打ツテ上ルトハ大變ナ事テコサイマスマナト、オ、然フシヤ是レハ安イ事タ、只今テモ直ク出来ルト云ヒマシタ、トウナサル積カト云フ

ト、拙者カ一文入ラス丸テ鳥居ヲ撫テ、モ打テ、モ上ルコトサト申シタサウテス、此様ナ随分奇戯ヲ云フ剛胆ナ男テコサイマシタソウテス、是レハ先ツ彼方ニ行ク時ノ話テ、其婦ル時ノ難風テ船ハ破壊致シタソウテス、是レハ文政九年七月ノコトタト承リテ居リマス、偕此伊呂波丸ノ事ハ一ツノ歴史譚ニナツテ居リマス、此船ハ從來ノ大船ヨリモ余程航海ニハ迅カツタソウテス、風ノ順逆ニ構ハス、便宜テアツタソウテス、夫等ノ事ヲ齊彬公カ聞召シテ、第二ノ伊呂波丸ヲ持ヘラレタデコサリマス、其後齊彬公カ此船ノ製造ニ擬セテ、伊呂波丸形ト云フヲ造ラレテカラ、商人等カ又夫レニ擬シテ三四艘モ製造シテ、琉球諸島ノ運輸船ニ用ヒマシテ、風順ニ関セス航海スルコト、ナリマシタ、其他親父ノ事ニ就ヒテ種々ナ話モコサイマスケレトモ、今日ハ大略コレテ後日又御話申シマシヨウ、

〔史談會速記録(相川得壽編)にて補訂〕

安政5年(1858)

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政五年

目次

齊彬公福岡公へ御密簡

全上

全上

福岡季連所藏書画

勝義邦記事鈔

齊彬公豎山武兵衛へ賜書

豎山武兵衛へ賜書

水戸中納言へ賜書

参考 安田助左衛門日記鈔

参考 井伊家公用方秘録鈔

岩元六右衛門柴山良助へ与フル書牘

白石日記鈔

〔職名〕
〔忠祿君〕

飯泉喜内履歴書

福岡侯宇和島侯往復書第一号

全上第二号

全上第三号

全上第四号

齊彬公水戸藩戸田忠太夫へ与ル御書

福岡侯宇和島侯へ与フル書簡

齊彬公伊達公へ御書翰

近衛忠濂公及僧月照鎌田出雲へ御内書

参考 寺島宗則自記鈔

青蓮院法親王御謹慎達書

堀田正信論

勝野豊作正道青蓮院宮ニ上ル書(安政五年八月)

西郷吉兵衛日下部・堀内氏ニ与ル書(安政五戊午九月十七日)

西郷吉兵衛国事ニ関シタル三件

飯泉喜内略歴中路延年筆記

僧月照事蹟黒田家々紀鈔

疑獄人名（近衛家蔵書写前卷ニ記スモ伝写ノ誤アラム）

参考 白石正一郎日記鈔

故岩山敬義君カ齊彬公ノ御近習奉職中職務上俱ニ事ヲ執リ或ハ交際ノ事実粗記臆スル処ヲ録ス

参考 三條實萬公事略

鎌田出雲日記抄（江戸藩邸在動中）

橋本左内武田伊賀ニ与ル書第一号

全上第二号

一四六 齊彬公福岡公へ御密簡

○この文書の見出しは誤りなり、本文書は安政五年四月十一日付伊達宗城宛島津齊彬書翰なり。

〔包紙ウハ書〕

〔宇和嶋公閣下〕

齊彬拜

〔封紙ウハ書〕

急ぎ

齊彬

以急便致啓上候、暖和之節愈御清安奉賀寿候、然は一

昨九日京都家来より以急便内々申越候趣、別紙之とを

りニ御座候、右を以て考候へは、西丸之義被仰出候事

と奉存候、其御地之光景如何ニ御座候や、相同道候、

且また諸大名所存再応御尋之被

仰出も有之よしにては、關東之御様子如何ニ候哉覽、

西城被仰出は至極ニ候得共、夷人之御所置は乍恐可歎

事かと奉存候、当時必勝之見居へ無之打払ニ相成申候

ハ、たとへ一兩度は打払候とも、根強成性質之異人

ゆへ、度々可致出没は必定、左候得は国中之疲弊は勿

論、内乱も難計、其上和親ニ相成候へは、

御国威は益衰へ可申、只今異人之事実ニ暗く、血氣無

謀之面々の申立、又浪人等立身の為ニ申族も不少と存

候処、夫らの事御取用ひニ相成申候ては、誠に以の外

成御事ニは無之哉、夫よりは先々十五年之御約条にて

御差免ニ相成、其内武備嚴重ニ被仰出、富国強兵之御

所置被為在候上にて、如何程も御計策可有之と奉存候、

如何之御賢慮ニ御座候や、早々同道、小子は御尋も候

ハ、前条之意味にて可奉言上心得ニ御座候、又一ツ

考候得は、京地にても実に打払之 思召ニは無之候へ

共、余り是迄 關東より之御仕向如何ニ付、能機會の

叡慮にて十分ニ御威光を被示候て、其上御差免ニ相成

候御計策か、此両条何分難解、右之とをりニ候へは、

随分好機會ニも可有之哉と奉存候、右之御賢慮も相伺

度奉存候、前文之御様子伺候ては、何分安心不相成候間、和戦ニ無構、手当第一かと奉存候、未タ評議中ニ御座候へ共、台場・大砲・軍船之手当可取計哉之内存ニ御座候、何卒閣老江御逢之上口気伺度、且万事之光景伺度、極急便を以て申上候、越前江も書通と存候へとも、出立も難計、貴答迄申上候間、宜敷御通達可被下候、早々、恐惶謹言、

四月十一日

齊彬拜

(伊達宗城、宇和島藩主) 宇和嶋賢公閣下

猶々、時氣御自愛專一奉存候、此節はさそく關東は御混雜之義と奉遠察候、且又不静世上ニ御座候間、此後之様子ニより密事は以隠頭墨申上候義も可有之、尤本文は墨にて一通り之義申上、書面之内〇星御座候へ、隠頭と被思召、火ニ御当テ可被下、用心之為申上置候、以上、

(宇和島伊達事務所所藏文書にて校訂)

一四七 全上〔安政元年四月十二日〕

○この文書は「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第二巻収載の第五九七号文書(安政元年四月十二日付黒田吾浦宛島津斉彬書翰)と同文重複により略す

一四八 全上〔嘉永六年五月頃〕

○この文書は、全上(齊彬公福岡公へ御密簡)とあるも、実は嘉永六年五月頃半田歳典宛島津斉彬書翰であつて、既に「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第一巻に第四七四号文書として収載済により略す

一四九 福崎季連所藏書画

一 仁風

源惟敬十三歳書

一 鷹ノ図

源齊彬

一 竹ノ図

右三幅福崎季連所持也、

一 牡丹ノ画印アリ一軸

右富山宗吉所藏ニテ、祖母齊彬ノ乳母ナルヲ以テ賜所トス、

一 大黒天ノ字印アリ一軸

右山崎拾ナル者近侍セシ時、請ニ依リ書ンテ賜所ト

云、

一五〇 勝義邦記事鈔

○この文書は、本文第一三六号文書と同文重複により略す

一五一 齊彬公豎山武兵衛へ賜書

○この文書は、本文第八号文書（安政五年二月十二日付島津齊彬書翰）と同文重複により略す。

一五二 豎山武兵衛へ賜書

両度ノ書面相達候、愈無事珍重ニ候、扱御暇ノ儀申遣候処、亦々出府ノ由、大儀ニ存候、先日以来三度申越候間、〔早脱カ〕最御聞濟ニ相成候ト存候、八月御立（齋興公）ニ相成候へハ御病後ニテモ宜敷ト存候、此節ハ追々御願ノ手数モ始リ候事ト存候、

一 大坂借入金ノ事ハ先便鳥渡申越候通ユへ、借入宜敷ト存候間、其方へ向ケ可取計候、

一 黒木ノ事（島津豊後ヲ云）未タ家老へハ不申聞候、其方着ノ上ト存候、周防（久光公旧名）へ計リ内々申聞候処、玉里（齋興公）一辺ノ処却テ不宜ト申候間、左候ハ、書付ニテ申聞候様申置候処、一昨日別紙書付出シ申候、同人考モ我々考ニモ同様ノ事故、先家老方へハ不申聞候、〔休之丞、玉里側役〕永江へ内々可申談候、此上モツレ候テハ不宜候間、其心得第一ニ候、

一 周防咄シニモ、トカク人氣ムツカシク申居候（人望離ル）、又承候へハ山吹ノ間（大身詰所ヲ云）辺ニテ黒木サ

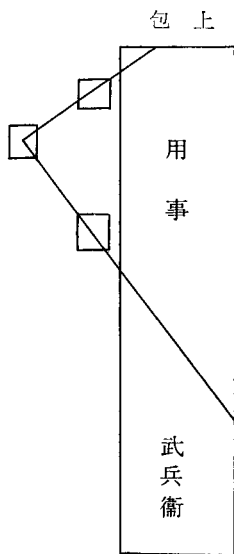
へ何事モ無之間恐敷事ハ無之ナト、申人有之ヨシ（萬延元年申〔マカ〕月新納駿河ニ与ル書参看）

一 アメリカ一条、關東ノ様子、早川（五郎兵衛）等申遣候処ニテハ左程ニモ無之候へトモ、

京地実ニムツカシキ御様子、此節 近衛家ヨリ御直書（近衛家日記参看）モ被下候処ニテハ、中々御聞濟ニハ相成間敷御様子、シカシ第一ハ江戸（幕府）ノ御請次第ノ事故、無手抜聞合候様ニ、半田〔江戸留守居〕（嘉藤次）・早川へモ可申付候、サテ弥御破談ト相成候テハ以ノ外ノ事、手当モ第一ニ候間、内々下總（島津）・駿河（新納）へ色々申談候事ニテ、実ニ心配此事ニ候、何卒無事ニ相濟候様ニト存候、以上、

四月廿五日

猶々、此間郷兵衛（川上）へモアメリカノ事委細申遣候、何分不容易時節到来ト存候、



一五三 水戸中納言へ賜書(水戸家所蔵烈公御寫)

ノ本ニ依リテ廿四年九月九日寫ス)

先般墨夷仮条約無余儀次第ニテ、於神奈川調印使節へ被渡候儀、猶又委細間部下總守上京被及言上之趣候得

共、先達テ

勅答諸大名衆議被

聞食度被

仰出候詮モ無之、誠

皇国重大之儀、調印之後言上 大樹公

叡慮御伺之御趣意モ不相立、尤

勅答之御次第ニ相背輕卒之取計、大樹公賢明之処有

司心得如何ト御不審被

思召候、右様之次第ニテハ蛮夷之儀ハ暫差置、方今御

国内之治乱如何ト更ニ深被惱

叡慮候、何卒公武御実情ヲ被尽御合体永久安全之様ニ

ト偏被

思召候、三家或大老上京被

仰出候処、水戸・尾張両家慎中之趣被

聞食、且又其余宗室之向ニモ同様御沙汰之由モ被

聞食及候、右ハ何等之罪状ニ候哉難被計候得共、柳

宮羽翼之面々当今外夷追々入津不容易之時節、既ニ人

心之帰向ニモ可相拘旁被惱

宸衷候、兼テ三家以下諸大名衆議被

聞食度被

仰出候ハ、全永世安全公武御合体ニテ被安

叡慮候様被

思召候儀、外虜計ノ儀ニモ無之、内憂有之候テハ殊更

深被惱

宸襟候、彼是国家之大事ニ候間、大老・閣老、其他三

家・三卿・家門・列藩・外様・譜代共一同群議評定有

之、誠忠之心ヲ以得ト相正シ、国内治平公武御合体弥

御長久之様 徳川御家ヲ扶助有之、内ヲ整外夷之侮ヲ

不受様ニト被

思召候、早々可致商議

勅諭之事、

別紙

勅諭之趣被 仰進候、右ハ国家之大事ハ勿論徳川家ヲ

御扶助之 思召ニ候間、會議有之

御安全之様可有勘考旨以出格之 思召被 仰出候間、
猶同列之方々三卿家門之衆以上隠居ニ至迄列藩一同ニ

モ

御趣意被相心得候様、向々へモ伝達可有之被 仰出候、
以上、

八月八日

尚々、老中へ之奉書モ今日差出候事、

上封同越前奉書

水戸中納言殿

〔光成、武家伝奏〕
廣橋大納言
〔正房、武家伝奏〕
萬理小路大納言

水戸中納言殿

廣橋大納言
萬里小路大納言

緘 裏封

上封大鷹紙

勅 錠

一五四 参考 安田助左衛門日記鈔

一安政五年戊午正月九日

伊集院神ノ川御建山見分ニ付、坂元彦五郎・龜山甚助
同道差越、翌十日帰府（異国方山林トモ唱フ）

一島津圖書殿（久治）加世田日新寺墓参ヨリ請込、海岸筋
調練并手当向等見置被申度願ニテ、為差引安藤作之丞
同道、三月十二日出立、指宿二月田へ 上様御滞世ニ
付罷出、諸事相伺、同十六日鹿籠枕崎ニテ御逢申上、
順々御廻勤、同廿二日指宿御立、拙者儀ハ 上様調練
御視ニ付相殘候、尤税所七郎右衛門（御軍賦役）・伊勢
仲左衛門・松元喜三右衛門（二名共ニ火薬局目付役）被差
越候、同廿四日指宿・穎娃・山川・喜入・今和泉五ヶ
郷調練御親首尾能相濟、廿六日帰府、

一六月十日

御側役山口直記御取次ニテ、新波戸御台場御築替掛被
仰付（下町海中ニ在リ、御逝去後御遺跡悉ク廢絶、砲台築造
モ廢セラレタリ）候段承知仕、御雛形等御小納戸伊集院
中ニヨリ相渡、諸事引合承り候、左候テ早速ヨリ取付
ノ手当有之、郡奉行地方檢者鑄製方掛伊勢仲左衛門ニ

モ掛被仰付候、上様七月八日九日方ヨリ御痢病ノ御
塩梅被為在候処、十二日十三日ニハ御度数モ御減、御
快方ノ段致承知、益兩日不罷出、十六日二丸調練御式
日罷出候処、御不例ニテ御取止ノ段承知、別テ相驚、
直ニ出殿仕候処、今朝六ツ過被遊、御逝去候段承知、
誠ニ当惑仕候次第ニ候、

一五五 参考 井伊家公用方秘録鈔

六月十五日

御養君之儀京都へ被仰進候、御返答昨十四日迄ニハ是
非着可致之処、此程中雨天統ニテ川々間候故致着不致、
弥着不致節ニハ十八日御発シニ差支候間、御道中奉行
本多加賀守へ被仰渡、此方ヨリ迎ノ人差出、川々突破
リ、御状箱是非共着致候様取計可申旨御達ニ相成、昼
時頃ヨリ早駕籠ニテ手代出立致候由奉伺、

六月廿五日

紀伊宰相様

御養君被 仰出、宰相様ト可奉称、御殿

西丸ト被 仰出、

但當分御本丸御逗留ト被 仰出、

一五六 岩元六右衛門柴山良助へ与フル書牘(柴

山氏藏)

両度ノ御芳翰忝拜見仕候処、益御賢榮被成御座候由、
無此上大慶奉寿候、次ニ野夫ニモ先兎哉角罷暮申候間、
乍憚御心易可被下候、扱水藩ノ者異館ニ忍入(鈴木大日
記参看)候旨被仰聞、誠ニ日本ノ鏡ニ可仰可貴、漸御面
白罷成、是世モ長クハ相モタヘ申マ、私式モコブシ
ヲ握リス、メ、今ヤ、ニ相待申候、一変承申候ハ、
ヲツトリ刀ニテ走登、一寸ノ力ナクトモ可奉添報ト此
而已罷居、我々式ハ早ク破立方何計嬉敷、何レモ先面
白世振リト罷成、就テハ相交ニ身ノ御厭乍憚奉祈候、
細詳尚期春陽ノ時候、御左右荒書謹言、

四月三日

岩元六右衛門

柴山良助様

二白、来ル十五日公義ヨリ御頼ニテ乗与入候蘭人、
長崎ヨリ前ノ濱石燈^(籠カ)下へ乗入、公義御役方ハ勿論、
蘭人共ニモ致上陸、下町下会所ニヲヒテ料理被成、
致一宿、翌日磯ハンシヤカマ(反射鏡)見物イタシ、
翌十七日朝出帆、委細ノ儀ハ尊弟(柴山愛次郎)ヨリ

御書上ノ筈、私モ当日ハ橋口土同道ニテ見物ヘ差越
申候、

御宿ニ於カミサマ待チ、カク／＼折々被成候由、貴
公ニモ晩々御考出ノ筈、

尚乍末筆御宿元御揃無御別条候間、少シモ相掛念被
成間敷候、於其御許桜ノ時分罷成、諸所賑敷罷成候
半、貴公ニモ御見物如何御座候哉、於爰許ハ当月誠

ニ大早ニテ、折々苗植付時分一大ノ事ト皆々相唱事

ニ御座候、今通天ヨリ潤沢無之候テハ災殃差見得、

当御時節御国家第一御弱、如何様神ヲハ御怒共ト可

申哉、既ニ暑ノ頽敗自然相頽、歎息シテ、胸板ヲ破

ル如ク笑止千々々、返ス／＼モ御身ノ御保養奉願

候、

一五七 白石日記抄（安政五年戊午）

正月十五日、廉作薩州行発足、

二月十三日、在筑ノ工藤氏・洋中氏（洋中ハ竹内半右衛門ノ

変名、薩摩ノ井上彌八郎君トモ上下四人来訪、十八日

此四人陸地岩國行、二十六日洋中氏岩國ヨリ帰關、工

藤・井上（工藤ハ井上出雲カ変名、井上ハ藤井カ実弟）ノ両

士上坂、今日薩摩ノ管船（管船トハ唐品商法幕府嚴禁故、

密商ヲ戒メンカ為メ下ノ關其他數所ニ派出セリ、之ヲ管船取締

ト云フ、小舟ニ乘リ各港ヲ巡視スルニ依レル通唱ナリ、此名義

ヲ以テ各藩ノ事情探偵ヲモナセリ）新役高崎善兵衛殿（高

崎善兵衛ハ五六カ実父ナリ、当時監察役、一名横目役ナリ）

来訪、是ハ工藤氏ノ親類ノ由、兼テ承リ、今夜及深更

廉作薩摩ヨリ帰り来ル、在筑ノ北條右門殿（北條右門、

本名木村仲之丞、後村山下總ト唱フ、変名多シ、略ス）同道

ニテ帰關、廿七日北條・高崎・洋中一席ニテ談話、北

條・洋中滞在、

三月二日、薩摩毛利強兵衛（毛利強兵衛、鹿兒島城下加治木

屋町ニ居住ス、有志ノ人ナリ、戊辰ノ役ニ戦死ス）ト云人来

訪、同四日北條・洋中帰筑、二十日工藤・井上ノ両士

上方ヨリ帰り来、同二十八日帰筑、

四月四日、工藤君又入来、同八日帰筑、同十八日工藤君

又々来ル、

五月三日、帰筑、

六月十二日、管船ノ高崎翁入来談有、薩州御産物ノ藍玉

（藍玉ハ国産ノ一ツナリ、鹿兒島ニ一局ヲ設ケテ商法ス、○長

藩ト交易ノ約ヲ結ヒタルハ、先年彼周布政之介専ラ尽力シテ、

堀小太郎ト取組ミタリ、其他米穀・綿・食塩等ヲ以テ、我黒砂糖・藍玉・柞灰等ト交易ノ約定ナリキ)ノ事承リ、六月二十三日薩州ノ藍玉ノ事ニ付、正一郎氏萩^(行廳)、

八月十日、帰宅、薩長藍玉御取組并其外ノ品々御交易事相調フ、

九月十四日、正一郎薩州行発足、同十一月三十日帰宅、十二月一日、薩摩高崎善兵衛殿来訪、江戸行也、

同八日、竹崎目明(目明ハ今ノ探偵吏ノ如シ)仁作申来ル、先達薩行御留守中ニ京都ノ忍向(忍向ハ清水寺ノ僧月照ノ一名ナリ)ト云フ僧ノ事ニ付、京都ノ中座甚介^{目明体ノ者ノヨシ}御口書ヲ乞ニ参リ候段申来候故、程能オサマリ候様相

頼置迄、品物ナド差遣ス、

同九日、中座甚助己へ相对之儀申来候故及相对候、中座勝齊ト云フ者、及馬關ノ目明松屋久吉・竹崎目明仁作ト同道ニテ来ル、中座甚介土産持参候ニ付、大ニ馳走致シ、物ナト遣シ候処、凡無事ニオサマリロニ相成、致安心候、

同十二日、筑前亡命平野二郎入来、止宿ス、

同十三日、工藤君入来、

同十四日、帰筑、

同二十五日、薩州板鼻俊藏(板鼻、鹿兒島城下士、有志者ナリ、早世ス、此時江戸在勤ヲ終ヘテ、帰国ノ途次ナラム)ト云フ人江戸ヨリ帰リ掛ケ立寄ラレ、直様帰薩、

一五八 忠祿君

安政五年五月十八日老中堀田備中守ヨリ申込有之、乍不快中長髪ノ俛ニテ相越対談、同十九日同断、廿一日并伊掃部頭方へ罷越、同廿四日同断、廿七日備中守へ相越、六月十七日掃部頭方へ相越、同廿四日間ノ御機嫌伺出仕、右相濟、掃部頭其外老中へ対談之上、水戸前中納言齊昭卿へ初テ面謁、対話刻ヲ移ス、

六月廿五日、晝丑刻過掃部頭ヨリ不快ニ候得共押テ登城候様申来候処、不快不勝断、内実忠氏妻死去ニ付テナリ、

同日夜丑刻過老中ヨリ明廿六日五時登城候様奉書到来廿六日風邪ニ付御用召断書出シ、同日巳刻若年寄酒井右京亮急御用ニテ相越、公方様ヨリ御尋之次第有之間、唯今登城可致、老中可相越処、御用多ニ付不及其儀、尤内実忌之趣達 上聞御差含被成御免候間、直登城候様老中申聞候ニ付、演舌ニ仍テ即刻登城之処、於

御座間〔忠民、岡崎藩主〕本多美濃守跡京都所司代被仰付候旨上意、

八月一日 公方様温恭院様御症積〔箱カ〕ニ付、出御無之、同

八日薨去、

八月十六日江戸出立、九月三日京着、

十月二日初参 内、

同月廿四日間部下總守并高家由良播磨守同道参 内、

十二月晦日下總守へ御返答被仰出、御暇被下シ〔分セ〕、

一五九 飯泉喜内履歴話（中路延年明治二十四年

九月）

一 飯泉喜内（旧名一藏友輔ト唱フ）常陸土浦ノ藩士ニテ、大
久保要ナト、云フ有志家ト交リ深シ、天下ノ人オヲ知
ランカ為メニ浪人シテ諸国ヲ遊歴シ、奥羽ヲ経テ、江
戸淺草諏訪町裏（今ノ壽町）ニ住ス、延年同人ト懇意ト
ナレル原因ハ、淺草海禪寺内靈梅軒ニ中路勝太郎ト云
者在テ、嘉永ノ初之ヲ尋テ住僧ニ面語ス（此時飯泉ハ台
所ノ方ノ座ニアリテ、中路ト住僧トノ對話ヲ聞キ居タリト云フ
）其時其音声京都ナルヲ聞ヒテ、喜内住僧ニ乞フテ
曰ク、今日ノ客ハ京都ノ音シナリ、願クハ面語シタシ
ト、依テ住僧延年ニ其人トナリヲ語リテ面語セン事ヲ

勸ム、故ニ面接談熟スル処、勤 王一篇ノ赤心、言語
面色ニ溢ル、對話数刻ニ及フモ尚ホ飽カス、延年ヲ壽
町ニ伴ヒ行キ、妻子ニ面会セシム、妻ハ於ユウト呼フ、
土浦ノ産ナリ、一女アリテ石ト呼フ、之レノ婿養子ヲ
春堂ト唱フ、當時一橋殿與御医師ナリ（熱田助ノ門人、
高弟ナリ）

一 右ノ如ク交リシ後ハ、日々夜々延年カ旅宿ニ来テ、京
都ノ御事情ヲ聞テ益振起慷慨シ、京都ニ同伴セヨト乞
フテ止マス、妻子ハ不可トシ歎キテ深ク諫ムレト、肯
ンセスシテ曰ク、苟モ国民トシテ帝王ノ御在所ヲ拜セ
サルハ終身ノ遺憾ナリ、此志ヲ強ヒテ止ルハ不忠ノ至
ナリト云フ、妻ハ離縁シ娘ハ勘当ナリト云ヒ放チテ、
主家ノ暇ヲ取り、靈梅軒ノ閑室ヲ借リテ隱遁ス、由テ
無拋家事ヲ春堂夫婦ニ打任セテ、喜内ハ夫婦ト共ニ延
年ニ從テ上京ニ決ス（此事不決着前ノ談ニ、喜内ノ精神凡
骨ナラサルヲ延年モ大ニ感ス、○右ニ主家ト云フハ淺草藏前ノ
札差伊勢屋四郎、今ノ青地氏、此一家ニテ伊勢市ト云フ店ノ番
頭職ニテ、旧幕時代ハ頗ル刃利ニテ、金銀ノ融通自在ノ身ヲ捨
テ、勤王ノ為メニ此年間ニ上京ナト志ス者外ニ有ルコトナキ時
勢ナリ）

一同伴上京シテ、三條家御家米柳田大隅守ヲ以テ、實萬

公ニ御召仕ヲ願ヒシニ、公其人トナリヲ感シ玉ヒ、召

仕ハル、処トナレリ、喜内ハ是ヨリシテ御府内学文(

御府内学文トハ、幕府内外諸役向ノ吟味、評定ノ諸事ヲ探問シ

其評判等ヲ通報スル事ヲ云フ、喜内ハ諸役人ト交弘キカ故、幕

府ノ機密ヲ探リ、之ヲ関白殿及ヒ三條公等ニ内密上言スルニ大

ニ務メタリ、故ニ罪セラル、ニモ書通一件トハ記シタリ、水戸

殿ニハ鶴飼吉左衛門等ト深ク結ヒタリト云フト云フ事ヲ弁

へ居リ、伝奏御奉職等ノ御用弁一方ナラス、後チ鷹司関

白殿御側ニ召出サレ、御内密御用ヲ弁シ、首尾能ク帰

府ス(之レニ由テ書通事件ノ節、鷹司殿・諸太夫・三條殿關

東へ御用召ニ相成候、近衛殿老女村岡・一條殿諸太夫ノ事件ト

ハ別事ナリ)

一 然ル処幕府ノ嫌疑ヲ受ケ、同人召捕ラレ、書類吟味ノ

件ニ付、曾我家へ御預ケノ上死罪ニ処セラレ、無キカ

ラハ淺草海禪寺内ニ埋ムト云フ、

一 水戸殿御医師熱田氏ハ飯泉父子ヨリ延年カ事ヲ聞キ、

面会セン事ヲ談ラレ、折々尋行ケリ、後諸藩士上京ノ

砌、水藩人ハ京都中長者町通室町西へ入所、香具師高

井十右衛門方ニ在リ、其節モ往來セリ、東婦ノ上病死

シ、家族田舎ニ帰住スト云フ(熱田氏、元ハユウアント云、
此文字ハ忘レタリ、後チ助ト改ム)

右概略御尋ニ任セ、書記シ差上候、尚初中後ノ事多端

ニ候、追々考へ出シ次第可申上候、

廿四年九月廿三日

中路拜

一 淺草海禪寺内靈梅軒

過去帳面

追号 鐵舟院 安政六己未十月七日揚屋
ニテ没ス 飯泉春堂父

眞月常光居士

昨日右宿坊へ立越取調候処、一向可然吟味筋モ無之、

漸過去帳写取候付、入御覽候、草々不具、

九月廿七日

中路延年

市來様(廣貫)

一六〇 福岡侯宇和島侯往復書第一号(四通伊達

家所藏)

一筆致啓上候、寒冷相催候処、弥御安寧奉大賀候、然

ハ為參府追々出立可仕之処、持病之疝邪ニテ何分只今

旅行難仕(御參府)少々延引、快方次第出立之心得ニ候

旨、此元ヨリ

公辺へ御届仕候、此段申上候、

御代替〔家宣公將軍職ヲ襲フ〕御礼モ被為濟候由、恐悅之

至奉存候、間部〔下總守〕如何之様子ニ候哉、最早帰着

〔京都ヨリ〕ニモ相成候哉、万事奉伺候、参府之儀ニ付

先比モ御委敷被仰下、御深切之御事忝奉存候得共、何

分持病十分ニ無之、旅行当時出来不仕候、不悪思召可

被下候、

一 去十八日、

公儀蒸汽御船二艘、為運用領海博多洋へ繋船ニ相成申

候、銘江戸御船乗組〔繪圖、目付〕木村圖書、同伝習方数人、蘭人少

々、銘日本御船勝麟太郎、同伝習方、蘭人少々、諸家伝

習方少々右之通ニ御座候、然処木村初ヨリ対面致度、御

船モ見候様申来候へトモ、疝邪ニテ引入候間断候処、

木村初ヨリ申来候ニハ、幸此節ポンペ〔在崎和蘭医〕へ

モ参居候間、診察相頼候ハ、薬方等見込モ可有之、蘭

人モ不快之儀致承知、殊之外心配仕候由、駕籠ニテ参、

於箱崎逢候事ハ相成間敷哉トノ事ニ御座候、然処右モ、

即今異人登

城モ度々有之候故、城内へポンペ出可申勢ニ付、重役

共モ心配仕、参府延引ノ届モ近来仕候間、如何ト打明、

木村初へ内話仕候処、右不快ニ付、ポンペへ為見候事

ニ付、江戸へ聞へ少モ不苦、木村・勝受合候旨申候ニ

付、箱崎ニテ無抛一寸逢申候、ポンペ診察、其後寛々

旅亭へ薬方等申談候、「ヨヂウムホツタース」・「レ

ールタラーン」相用可然申候由、然ニ「ヨヂウム」

ハ博多ニテ致出来候得共、「レーフルタラーン」是ハ

出来不仕候、持渡モイマタ無之候処、ポンペ所持ニ付、

其内可遣旨申候、大ニ相乗申候、レウマチハ直リ兼候

へトモ、右等用候ハ、相応可致旨申候、旅亭ポンペト

寛々咄仕後学ニ相成候、小子ニモ色々尋度候へトモ、

不快ニ付暫時對話帰申候、蘭人ハ船將大砲方モ参居、

勝モ台場等ハ取調居候人ニ付、領海之儀相談モ仕度候

へトモ、何分其儀短日ニテ出来不致残念ノ事ニ候、然

シ公儀運用ハ不絶有之候間、又来年ニモ可参哉ニモ

難計候、委細ハ下野〔長知〕へ申遣置候間御聞可被下候、

尤運用ハ度々ニ付、一々木村ヨリ届ハ無之、小子ヨリ

モ届ニ不及旨木村申候間、届ニモ不致為念申上候、木

村初所々見物有之候、勝其外伝習方ハ日々馬上所々見

物、蘭人モ馬上、勝付添居候間安心之事ニ候、蘭馬具

モ漸々昨今五通り弊国ニテ製候間、蘭人五人丁度宜敷有之候、廿二日帰り申候、勝之船ハ其夜八時半ニ長崎へ着船之由、爰元出船昼比ニ候、七十里ニ御座候、迅速成事ニ御座候、松本良順モ参リ申候、初テ对面仕候、右ハボンベ直伝ニ付、追々ハ宜敷医者ニ可相成候、委細申上度候へトモ何分取紛荒々申上候、扱又ホドカラヒ(写真術)至テ六ヶ敷、ボンベモイマタ自身ニ致候事無之、彼方ニテモ上手下手有之、中々六ヶ敷由ニ候由、右等之事共申上度、如此御座候、如例大禿毫御海容可被下候、頓首、

十月廿九日

(黒田齊博)
福岡

(伊達宗城)
宇和島明公

二白、時候御厭專一奉存候、蘭人何レモ馬ハ達者ニ御座候、小子ハ見不申候、牛痘針ニマクネート付置候へトモ、付方宜敷、近来於彼方ハ皆付候由、ボンベ旅亭へ咄候由ニ御座候、一ヶ年一度ツ、ハ是非共牛ニ植候方宜敷候由、先ハ此節蒸氣船無滞相済大安心致候、先達ヨリノ風説ニテハ、弊国ヨリ宇和島辺へ参候トノ事ニ候へトモ、先此度ハ弊国迄ニテ帰申候、来年定テ御城下へモ可参奉存候、御受合ハ難申

上候へトモ多分可参奉存候間、御心得ニ内々申上置候、貴君御帰城ノ上ニテ参候へハ、猶更御都合可然奉存候、以上、

緘

宇和島明君

福岡

平安極内用御直披

一六一 全上第二号

一筆致啓上候、残暑強候へトモ弥以御安寧奉大賀候、長崎表へ英船追々六艘入津、内尅艘献上蒸汽船之由、アトミール乗船ハリニー船ニテ、大砲八十挺備有之由、然処四艘ハ致出帆候、右之内献上蒸汽船ニモ出帆、リーニー船并蒸汽船一艘未タ出帆不致候、是モ不遠出帆ト存申候、不残江戸へ参候事ト存候、奉行所応対彼是一向相分不申候へトモ、長崎ニテハ急將不致候間、直江戸へ参候事ト存候、唐国戦争モ相済居、同国軍艦モ未タ唐国ニ可有之候間、此節江戸へ参候英船へノ御挨拶ニ依テ、以直ニ軍船差向候心得ト小子ハ存申候、乍然此度之軍艦引払申候へハ又出候事ハ英国モ大造之事ニ付、宜敷折柄ト存居可申候、其地御取計如何

之御都合哉ト存居申候、黑白此節之夷船(イカ)ニテ可相分奉
存候、其御地之様子御内々奉伺度候、

一先月(六月)廿五日薩州ヨリ内用向ニテ、同方家来西郷

吉兵衛直書モ持参(西郷隆盛福岡へ密使)、直ニ対面仕候
処、書面ニ難認儀同人へ含一々承リ、薩州心配之一件
小子事モ事々同意ニ御座候間、其段直書ニテ薩州へ申
遣置候、右ハ余ノ儀ニモ無之、

京都ト江戸之御都合且又西城之御都合ニ御座候、委細
ハ薩州ヨリ可申上候、右ニ付間違候テハ不宜候間、小
子ヨリハ委細不申上候、為

皇国何分御出精奉願候、日夜心配仕事ニ御座候(ママ)
参照、事由ヲ弁スヘシ

一当秋参府御奉書ノ通り十一月中ト相心得居候処、追々
京都・江戸之御都合等重役共ニモ致承知、致参府候ハ
、定テ二條殿ヨリ召可申哉、(候)左候ハ、罷出候節異国
之都合其外江戸之御都合等御尋候ハ、在之但可申上事
ナカラ、夫ヨリシテ万一間違筋、又ハ江戸へ御難題等
京ヨリ出候節、小子ヨリ二條殿へ申込候故ト申事ニ相
成候テハ以ノ外、其外色々心配仕候間、旁以十一月ニ
相成不快申立、参府不仕候様再三申聞候ニ付、尤之次

第二付内々ハ右之処ニ相聞申候、薩州へモ右之段極内
々申遣置候、乍然此折柄只今ヨリ参府不仕ナト世間ニ
テ申立候テハ不宜候間、表向ハ十一月参府ト申居候間、

何分貴君ニモ其通りニ御心得可被下候、万事御考へニ
モ可相成奉存候間、打明極秘此段申上候、(下野)下野守殿
々申遣置候、其外ニハ何方へモ不申遣候、何卒

公辺御都合宜敷相成候様奉存候、大老初ノ都合内分奉
伺候、弊国迄モ何トナシニ京・江戸之儀、種々浮説申
立居候事ニ御座候(齊彬公御出府御延期ノ事実、第(マ)卷ニ
記ス)

一去廿九日余程大風吹申候、ハロメートルストロム三三
三迄ニ参申候、奇妙ニ大風ノ半時計前ヨリ相分、第一
之宝ニ御座候、

一ミニケウエル為製作、鉄砲職之者長崎へ遣、漸此
節写居候由、写面昨今参候ニ付、不取敢入御覽申候、
図面ニテハ難相分御座候、右ハ控無御座候間、御写相
済候ハ、御返可被下候、

一ハントロン(和蘭人ハントウエーン)秘藏短筒之図モ参申
候間差上申候、右ハ写留置候間御返しニ不及候、右ハ
書入モ無之、猶々難相分、何分入組難書入候由、右モ

鉄砲職之者帰リ候ハ、委細可相分、只今

公辺御用ニテ右之箇蘭人製作仕候間、日々弊国鉄砲職之者、右場所へ出見覚候儀ニ御座候、右図面ハ何方へモ不遣候間、左様思召可被下候、長崎ニテ「ストーンマシーネ」(蒸氣機)追々出来、諸人驚眼候由、来年巡見之節見物可致相楽居申候、佐賀ハ当年見物イタシ候由ニ御座候、

一西洋調練之儀段々引立致出精候処、一旦ハ余程多人数ニモ可相成哉之処、近来又々十分ニ無之、甚以小子一人心配之至ニ御座候、貴君故打明申上候、右之訳合左之通、大調練ハ何ソ小子物好ニテ致候訳ニモ無之、(右之カ)公辺ヨリ追々被仰出、実ニ彼ノ長ヲ取用候事可然事ニ候ヘトモ、重役共初平日心掛薄ク、(祖脱カ)先以来之軍法ニテ十分ト存、異人ハ何モ不弁者之様ニ存居候者不少ヨリ、表向ハ小子前ニテハ相応ニ申居候得共、内心如何ト二ノ足ヲ踏居候者不少処、

京都ニテ異国御キラヒ被成、打払之方御好ミト何トナク浮説申立候間、兼々不相好者共大ニ力ヲ得、種々重役初へ申込候間、弥以重役初世話モ実ハ此節不致位、小子一人ニテ彼是申候ヘトモ、如右候間不申モ疑心不

少、何モコンサツハ無之候ヘトモ、一体出方モ十分ニ無之、当惑仕居申候、右ニ付一統相分候様フレ達モ可致存候ヘトモ、重役共右モ見込無之、返テ人氣立可申ナト申候ト急埒不仕、乍然為

皇国小子事致出精候事ニ付、其内ニハ一統モ可相分、種々浮説申立候ヘトモ、少モ頓着不仕如泰山居リ候事ニ御座候、是非共追々宜敷可仕候ヘトモ、一人ニ付甚以心配仕候間打明奉申上候、何分 御良策モ候ハ、御教示可被下候、何分五大洲之事情不存人々ハハコマリ入申候、色々申談候テモ不相分候、乍然ヒストン之事ハ火繩ヨリハ宜敷ト申事、家中半分位ハ近来相分候哉ト存候、右之位之事ニテ不及是非候、其外申上度事如山候ヘトモ何分長文認兼、如此御座候、又寸暇有之候ハ、万々可申上候、頓首 拜

初秋三日 福岡長薄公

宇和島明公

二白、残炎御自愛御專一奉存候、一体重役共政事向其外共ニ至テ宜敷、昨年改正之主意ハヨク取計居、右ハ安心仕居候得共、西洋調練許ニ御座候、薩州モ琉人召連參府、内実ハ大心配之様子ニ御座候、

宇和島明公

福岡

平安極々秘用御直披

(葛城彦一伝にて校訂)

一六二 全上第三号

一筆致啓上候、大暑之候弥御安寧奉賀候、其後ハ御無音奉恐入候、巫人一件其後如何之御都合ニ候哉、第一京都ト江戸表ト御意味違ニ相成候テハ、〔以之外之事ニテ葛城彦一伝〕此事日夜苦心罷在申候、其御地之模様内密伺度奉存候、種々之風説弊国迄モ有之候、定テ今一応御大老カ閣老間上京ニ可相成哉、右ニテ和戦御決着ニモ可相成哉奉存候、

一長崎ヘモ巫船二艘・魯船一艘參候得共不殘退帆、先々別条無之候、追々英・佛・魯・巫・ヲーステンレイキ五ヶ国之船三十艘計長崎ヘ参リ、都合次第江戸ヘ可参申候旨巫人申候由、極内々承リ申候、唐国ニモ和談相〔安政五年六月、天津条約〕整候由、又々阿片ノ節ノ通りニ候由、年賦金相濟迄南京ハ英國ヘ遣置候由、言語同断ノ事ニ御座候、右ニ付軍艦引払候間、序ニ日本之模様見候為參候事ト存候、弥以火急ニ相成申候、貴君御參府故大ニ安心仕居候、一当年和蘭持渡砲類四百箱・当物類八百箱ト申事ニ御座候、ミニケウエールモ段々参居候トノ事ニ御座候、

当時鉄砲職之者長崎ヘ遣置申候、イマダ写出来不仕候、何分急埒不致候、右丁度暑中御見廻旁如此御座候、頓首、

六月十七日

福岡

宇和島賢公

二白、暑氣御自愛御專一奉存候、色々申上度候ヘトモ何分多用認兼申候、当年ハ九月ニモ出府仕度存候ヘトモ、何分用向不相濟候間、御奉書ノ通り十一月中ニ參府之心得ニ御座候、以上、

緘

宇和島賢公

福岡

平安極密用御直披

一六三 全上第四号

一筆致啓上候、秋暑ノ候弥御安寧奉賀候、然ハ先月廿二日不時登城、巫人仮条約調印相濟候旨御達有之候由、去廿三日相達拜見仕候、此節神奈川ヘ參候魯亞之船ハ、定テ長崎ヘ過日參候船ト存申候、其後同所ヘ英船六艘参リ、〔六艘〕内一艘献上之蒸氣船ニ有之候、最早江戸ヘ参居候事ト

奉存候、内一艘リ一ニ船驚眼候船ノ由、実ニ英佛ハ唐国ニ打勝候勢ニテ、只今戦争ハ不容易御事出来可仕儀ニ付、右ハ調印被仰付候儀、先差当ル御取計ト奉存候、然処

御養君一条右飛脚先月廿四日出ニ候処、其日迄ハ不相分由、然処大坂詰家来ヨリ申来候ニハ、(徳川家茂)紀州様

御養君被仰出、大坂町触有之候由申来、誠以当惑之至御座候、尤紀州様御賢明之由ニハ候得共、御幼年且又(御幼君ユエ)京都ヨリハ一橋様ト御内命有之候処、如何之儀ニテ右

之通ニ相成候哉、両条違
勅ニ相成候事故、

京都ヨリ違

勅之段被仰進候ハ、如何江戸ニテ御答可有之哉、異国ハ闊キ、御国内人心如何可有之、日夜苦心仕事ニ御座候、其上老中進退段々有之、如何之訳ニ候哉、遠国ニテ不能勘弁候、定テ薩州(齊彬公)ニテモ大心配ト存申候、近日委細相談掛合心得ニ御座候、何分江戸表之事一向不相分候間、御内秘何卒以御教示奉願候、且又

京都詰・大坂詰家来ヨリモ種々ノ風説申来候、如此御

時勢ニ相成候ヘハ、古今同様種々ノ悪説申フラシ、京都ニテ江戸老中初ノ事、堂上方御立腹相成候様ニ相聞ヘ、江戸老中初ハ

京都ノ儀立腹イタシ候様ナル事ヲ、佞人共種々工風イタシ、所々ハ流言仕事不少、不容易御時節奉存候、此上ハ余事ハ兎モ角モ、京・江戸御和熟ノ外ハ有之間敷ト奉存候、

(卒)皇国安危之際、何分貴君御骨折偏奉願儀御座候、今日飛脚差立候ニ付、何分右之一件、片時モ心底不安奉存候間、極々秘万事奉伺候、貴答日々相待申候、恐惶謹言、

初秋廿六日

福岡

宇和島明公

猶々以、時候御自愛御專一奉存候、東海筋段々洪水ノ由、貴国ハ如何ト奉存候、弊国モ大風雨之模様ハ段々有之、心配仕候処格別之事今日迄ハ無之、然シ時候不順、

一京都初所々御警衛被仰付候由、下谷大悦ト存申候、如何存居候哉、御内秘奉伺候、

京都之御警衛右ニテ宜敷ト思召候哉、御賢慮内々奉

伺候、

一此節於長崎一種之病流行（虎列羅）、一日ニ數十人死亡、多分ノ日一日ニ六十人死申候、奉行蘭医へ尋候処、コレヲ申病ニ候由、右ニ付蘭医へ療治申付候由之処、全快者段々有之候、其余漢法医ニ掛候者一人モ不殘死亡、右ニ付常日不好蘭人迄皆々蘭医ニ相頼申候事ト相成申候、右流行中平日飲食等之儀、又藥法之儀蘭医御伝長崎ヨリ委細申來候ニ付、江戸迄流行可致モ難計候間、此節戸塚靜海迄申遣置候間、早々靜海へ御尋可被下候、右之書昨今參候ニ付、数冊写候間無之候間、別段差上不申候、何分多用、余事^{本ノマ}ハ其内可申上候、此節騎馬隊蘭直伝依田茂吉儀昨今帰申候、実用軍馬初テ相分感心仕申候、其内委細可申上候、以上、

二白、大急認落字書損可有之候、御一覽後ハ御投火必奉願候、以上、

字和島明公

平安極々秘用御直披

福岡

一ミニニケウエール漸ク写取、先日差上候得共、イマタ木形モ出来不仕候、急埒不致コマリ入申候、然処鑄形

之図取候、

公儀御簡於長崎拜借仕候内、家来尤少々鑄立、昨今參候間、二ツ入御覽申候、尤常之簡込候テハ不宜候、御承知トハ奉存候へトモ、為念申上候、余ハ其内可申上候、以上、

同日

用事 御直披

一六四 齊彬公水戸藩戸田忠太夫^{（トマツ）}夫へ与ル御書

（嘉永六癸丑十一月）

添書申述候、御腹臣ノ面々追々帰參可相成ト欣喜ノ至大悦不過之候、夫ニ付テモ十年來ノ困苦勞役忠魂義胆之程、後世武士之龜鑑ニモ可相成人物ニテ、誠ニ以テ^{（敬感心候之）}感心ニ候、婦役帰參ニ付テモ多年困苦ノ事故、何角差支ノ義モ可有之、何ソト存候へトモ遠路ト申心底ニ不任候間、乍^{（驚駭之）}輕少此三品（何品ナリヤ知ルニ由ナシ）相廻候間、自分（御名ヲ出サ、ル意ヨリト無之、忠臣之内へ進シ度候、誠ニ忠義之程致称美候心計リノ事ニ候、家臣共へモアヤカラセ申度（家臣共へ云々、感スルニ余アリ）^{（上脱カ）}心底ノ人々ニ御座候、宜敷御取計御頼申候、尚又支之^{（候）}

儀^カモ有之候ハ、何成トモ貴公御聞込御知ラセ可被下候、
用事マテ早々頓首、

此御書ハ年月詳ナラス、文旨ヨリ察スレハ嘉永六年癸丑七
月水戸公ヲ起シテ、海防掛ヲ命セラレタリ、仍テ公ハ直ニ
藤田誠之進・戸田忠太夫ノ両氏ヲ起シテ、江戸邸ニ呼ヒ、
事ニ預ラシム、我カ公ハ此事ヲ聞シ召サレ、御書面ノ如ク
三品ヲ贈与セラレ(品詳ナラス)タリ、公ハ御在国ノ際ナ
レハ此報ヲ聞カセラレタルハ、九月ノ頃ナラム、這御書
ハ宮内省御歌所掛谷勤(水戸ノ人)氏ノ所有セリト、出所
ハ戸田忠敏氏^(敬カ)ニ贈リ玉ヒシ御書ナレハ、同家ヨリ谷氏ニ譲
ラレタルモノナラム(明治廿六年十月宮地殿夫ヨリ御本書
示サレタリ)、別ニ候季ノ御挨拶書添ヒタリト云フ、
石巻稿中影写本にて校訂
〔国立国会図書館蔵〕

一六五 福岡侯宇和島侯へ与フル書簡 (齋彬公御)

逝去ニ就テ)

一筆致啓上候、初夏之候弥御安寧奉大賀候、然ハ薩州
ヨリ(齋彬公)早々当月中ニ小子ヨリ貴君へ差上候様ト
ノ事ニテ、十二日ノ日付之書翰十五日ニ長崎ニテ小子
家頼^(敬カ)へ、同方家頼ヨリ相達、直ニ弊国(福岡)へ遣候処、
別段飛脚ニテ可遣之処、幸家来帰リ候者出立之日ニ付、

夫へ相渡候由之処、急々持参ト申事間違候ト相見得、
廿二日ニ相達候間、扱当惑千万、迚モ当月中ニ江戸可
相達様無之、其上急便モ無之、如何可仕存候処、家老
ヨリ江戸家老へ急用有之、明日大早飛脚立候由ニ付、
同^{日外}人薩州ヨリ貴君へ急用之一封差上申候、並薩州ヨリ
小子へ来候別紙一差上候(御書翰御伝達毎々ナリ)、御返
シニ不及候、尤薩州へモ間違ニテ延引氣ノ毒ニ存候、
乍然早便ヲ以可相達、迚モ当月中ニハ不参旨申遣置候、
薩州ヨリ京都御都合(重要ノ点別卷ニ詳記ス)荒マシ小子
へモ申来候、其外下々ニテモ程々風説甚シキ事ニ御座
候、宜敷哉、不宜哉、一向不相分候、然シ
京都余程御手強ク御座候ヨシ、打払ハ何分御時節少シ
早過心配仕候、
皇国武備今少シ整候上ハ不苦、当年ヨリ戦争ハ極々不
安心、如唐国相成候へハ
神州御威光相立チ不申、極々心配日夜苦心、如此節心
配ハ無之候へトモ、如何之御都合ニ可相成哉、別段小
子ハ工風モ無之当惑之至候、其御地之模様堀田掃府之
様子委細奉伺候、最早不遠内黑白可相分、日々御様子
相考居候事ニ御座候、

一先達ハ御委細貴答之趣一々奉詳承候、和蘭陀船用錐類

差上候処、御用立仕候由、大慶之至御座候、去冬為御

捕相成候熊皮一張御惠投被下、殊ニ美事成品ニテ長々

秘藏可仕候、厚御礼申上候、船之事被仰下承知仕候、

ハツテイラ三艘製造仕候計ニ御座候、大船ハイマタ取

カ、リ不申候、

一ミニケウエール之事承知仕候ヘトモ、只今長崎へ写

ニ家来遣候得共、イマタ形モ出来不仕候、急之事ニハ

有之間敷候、出来仕候ハ、可差上、長々以急將不仕候

間、不悪思召可被下候、〔編者注〕佐賀ニテハトウ、右ノ箇一

挺工夫イタシ、蘭人ヨリ所望イタシ申候、至テヨク手

ニ入感心仕候、小子モ手入可申存候ヘトモ、佐賀ニト

ラレ申候、然シ追々ハ数挺可参存申候、

一御別紙極秘之事承知仕候、天下ノ為何分御精勤奉願候、

一京都余リ御手強過候間、万一關東ト御意味違ナトニ押

移リ候テハ、外夷一条ヨリ却テ

皇国極々御不為ニ付、万事心配仕事ニ御座候、何分貴

君御賢慮、万事御都合ヨク相濟候様具々モ奉存候、色

々申上度、如山海候ヘトモ、何分多用、別テ大乱毫落

字書損ハ御高免可被下候、頓首拜、

四月廿五日

福岡

宇和島明公

二白、時候御自愛御專一ニ存候、弊国近来テルモメ

ートル六十ヨリ七十四五度位ニ御座候、薩州〔齊彬

公〕ヨリ定テ申上候事ト存候、同方へ長崎ニ有之

公辺蒸汽船先日ヨリ乗込、大慶之事ト存候、弊国へ

モ近々可参哉之風説モ御座候、右運用ハ宜敷事、是

非共習熟不致テハ難相濟候ヘトモ、夫ニ付内味不宜

事モ可有之哉、風説モ承申候、其内弊国へ参候ハ、

大方様子可相分、其内万々可申上候、

一白金鉞〔大隅国垂水ノ山中ニ類似ノモノ發見セリ〕薩州ニ

テ見出シ、此節ハ無相違ヨシ、小子モ折角心カケ居

申候、薩州製更紗〔永吉村・武村ノ両所、水車機械製ノ

広幅布、極大中美事之事ニ御座候、

一貴君同方ヨリ先頃紅硝子器〔紅瓦羅ノ条参考スヘシ、御

書面ノ如シ〕差上候由、小子モ貰ヒ申候、極自慢之ヨ

シニ御座候、乍然小子見候処ニテハ紅トハ難申、赤

色・暗赤色ノ類ニテ御座候、下地ハ紫金ニ候ヘトモ

火度不宜赤色ニ相成候、火度宜候へハ紅ニ可相成候、

然シ小子方ニテハ赤色モイマタ出来不仕、彼是申候

ニハ無之候得共、紅ハ六ヶ數儀御座候、然シ其内致出来候へハ可差下候、然シ近来垂夷一件中々以右様之沙汰所ニハ無之候、何卒以其御地御様子極々心配仕候間、其内可被仰下候、以上、

緘

宇和島明公

福岡

極秘用御直披

一六七 齊彬公伊達公へ御書翰

○この文書は、本文第一三号文書(安政五年五月二十八日付島津齊彬書翰)と同文重複により略す。

一六七 近衛忠熈公及僧月照鎌田出雲へ御内書

(速記録第 号参看)

^{一六七の1}夷国一条ニ付、關東之処置何共不得其意事共ニテ、今般被仰遣候御次第モ在之、若異変之儀在之候テハ、全体

朝廷甚御手薄之御事故、自然火急ノ節ハ警衛如何ト心痛ニ不堪候、外夷モ近海へ来儀モ難計、何卒急々極密之手当等有之、

朝廷火急非常之警衛等相頼度、其御家格別之由緒辺ヲ

以、其方へ密々頼入候俟、不目立様急々其計在之候様分テ頼入候也、

八月十一日

忠熈

鎌田出雲下ノへ

^{一六七の二}

華翰忝致拝誦候、于誠一昨夕ハ推参寛々得御清話、殊

ニ種々御馳走大慶無限奉多謝候、扱其砌極密御頼被仰

入候一条速ニ御領掌之旨、不取敢昨日左府公へ及言上

候処、殊外御満悦之御事ニ候、昨烏ハ御請書モ御差出、

且不容易御手厚御配慮之次第柄、委々細々市來氏ヨリ

致承知候、則不洩申上候処、乍内密可被為達

天朝ニモ、左候ハ、何程欵

御満足ニ被為

思食候半ト至極御安度被為遊候、將又從此御方粗末御

菓子被下ニ付、御丁寧ニ為御礼御肴糧同千疋 御差上

被成、遂披露候処、御深志之コト深々

御感悦ニ候、此段厚可申謝様被

命候、尚一兩日中ニハ御出立ノ由、仍テ此御品乍輕微

為御餞別被贈下候、此等之儀拙納伏表へ下向ニテ可申

入様ニト

御沙汰被為在候へトモ、時節柄彼是外見深憚候故、乍不本懐市來氏へ具ニ申頼置候間、御承知可被下候、略儀ノ段呉々御海容希候、右貴答為可得芳意如此御座候、書外市來氏ヨリ御聞取可被下候、多忙中乱筆無正体御推覧希候、粗々布字、

八月廿一日

追テ、御家祖鎌田家祖

陽明家へ御由緒有之義逐一申上

候処、寔ニ不思議ニ今度彼様之義貴君へ御頼ニ相成

候事、実ニ先祖正近ト申ス者関ケ原ノ合戦後近衛家ニ就テ徳川家ニ申暢ノ事其外近衛家ノ御用勤メマシタ

ヨリノ御因縁不空、扱々末頼母敷吉瑞ト御感不斜、

偏ニ御力ニ被 思食候、御意味愚毫ニ難伸尽、拝

眉之節方々御物語可申上候、追日秋冷可相増可申候、

節角御旅中御自愛御帰国之程祈上候、呉々国家之御

為御身御用慎伏テ所希候、尚已後申上度義モ出来候

ハ、御文通可申上、此段モ御含置可被下候、

別啓

一金二千疋

右ハ拙納へ御惠贈被下之由不存寄畏入候、元来今度ノ

一義ハ畢竟国恩仏恩九牛之一毛為報謝、彼是乍極内奔

馳仕候事ニテ、決テ御礼等可申受訳柄毛頭無御座候、従是コソ御礼難申尺次第ニ御座候、右様御丁寧之御取

扱ニ相成候テハ唯々恐縮之外無御座候、左府公へモ

此段伺候処同様ニ被 思食、併強テ及辞退候ハ、節角

ノ芳志無下ニ致候様相成候テモ如何ニ候間、今度ハ申

受、已後ハ必々如此御配慮無之様、堅ク御断可申入置

様ニト御沙汰ニ御座候、仍テ於今度ハ忝拜納致候、右

厚謝申上度宜御承知可被下候、扱此品座右ニ有合セ甚

不都合ニ候へトモ、御饒別ノ印迄ニ進上仕候、御叱留

可被下候ハ、本懐之至奉存候、勿々、以上、

廿一日

月照

鎌田様

一五色紙

一五明

一薰物

右

月照

一六八 参考 寺島宗則自記抄

安政五年戊午

齊彬公此年ノ秋琉球人ヲ率ヒテ、東覲スヘキニ決シ、其準備アリ、宗則モ從フテ江戸ニ至ルヘキノ命ヲ受ク、六月公宗則ヲ長崎ニ遣シ、蘭人ニ各種ノ質問ヲ為サシム、七月初旬公病アリ、至急帰鹿スヘキノ命アリ、即時發送^{〔急カ〕}、昼夜兼行、着鹿スレハ二日前公已ニ薨去アリ、嘆声城中ニ滿シ、數日後福昌寺ニ埋葬ス、余及旧侍臣數十日間寺中ノ一堂ニ昼夜更番、弔拜ノ式ヲ行フ、八月余復タ長崎ニ抵ル、此時惡疫「コレラ」始テ長崎ヨリ流行シ、薩地ニ伝染ス、海路長崎ニ抵レハ流行尚盛ナリ、死者甚タ多シ、數月滞崎シテ帰鹿ス、齊彬公ノ弟久光公ノ嫡忠義公ヲ以テ嗣トシ、立君ノ式アリ、余モ其席ニ列ナル、齊彬公ノ父齊興公ハ鹿城ノ西玉里ニ在リ、宗則更ニ其侍臣ニ軫シ、志々目謙受ノ紹介ヲ以テ、齊興公ニ玉里ノ内廷ニ於テ拜謁ス、内謁ト雖モ初ハ公ヲ面視スヘカラサルノ習慣ナルコトヲ聞キ、座間頓首スルノミ、公モ亦一言ヲ發セス、退テ公ノ側室於遊羅君ニ謁スレハ落髮(公ノ命ニ依リテ坊主トナレリ)ナリ、此君ハ齊興公ノ正夫人薨去後ハ寵遇厚シ、先考モ亦之ニ依テ宗則ヲシテ江戸ニ遊学セシムルノ内奏ヲ請求シ、先考没後期

年ナラス、宗則十五歳ニシテ学資ヲ賜ハリ、江戸ニ発スル事ヲ得タリ、是レ先考宗保君平生德行ノ聞ヘ藩中ニ布キ、其旧知碓山將曹・伊集院平・志々目謙受等宗則ノ幼ニシテ父ナキヲ憐ミ、修学ノ補助ヲ加ヘラレ、七年後齡二十二ニシテ藩ノ医職ニ進ミ、之カ為メニ学資ヲ欠クル事ナク、勤勉ノ功ヲ成シ、齡二十五ニシテ幕府ノ徵ニ就クニ至ルモノハ、皆先考ノ余報ナリ、先考没後遺財ナキヲ以テ藩費ニアラサレハ、此ニ至ルコトヲ得ス、実ニ徳ノ流行其嗣ニ及ヘリ、豈余カ子孫モ亦余ト共ニ地下ニ向フテ、先考ノ徳ヲ感佩セサルヘケンヤ、然レトモ余洋学卒業ノ後ハ齊興公ニ仕ヘスシテ、齊彬公ニ仕ヘタリ、公ニ仕フルコト三年、多クハ試験中ノ事業央ニシテ公薨去、尔後公ノ主義ヲ繼クコトナキヲ以テ、残務ハ尽ク廢絶セリ、

一六九 青蓮院法親王御謹慎達書

青蓮院宮(尊融法親王)

關東御間柄ニモ拘候不容易御心得違有之、關東ヨリ申立ノ儀モ有之、深御慎可有様(相國寺内桂芳軒ニ御幽居、^{〔先考尚志〕}其御形況ハ同宮御自筆御日記參看) 関白殿被申伝候事、

一七〇 堀田正信論

大町桂月

(佐倉藩主)

堀田正信ハ果シテ狂セシ乎、將タ狂セザリシ乎、當時既ニ毀譽紛々トシテ帰着スル所ナク、千秋猶未ダ定論スルヲ聞カズ、蟬雨蛮烟空シク未死ノ魂ヲ鎖シテ、孤

島ノ波浪徒ニ鬼哭ノ声ニ和ス、嗚呼コノ血性男子身後猶知己ナキ乎、人皆酈食其ヲ狂生トイヘリ、食其自ラ

曰ク、我ハ狂生ニアラズ、而シテ漢高食其ヲ用ユルニ至リテ、始メテソノ狂生ニアラザルコトヲ知レリ、吾

レ実ニ正信ノ為ニ漢高ナキヲ惜ムナリ、

正信ノ事ヲ説クニ先テ其家系ヲ略述シ、徳川幕府ニ対シテ如何ナル關係アリキヤヲ記スルモ、徒勞ニハアラザルベシ、正信ハ武内宿禰三十五代ノ孫尾張守之高ノ後裔ナリ、之高ノ子尾張守正重尾張国津島ニ住セリ、ソノ孫加賀守正道始メテ織田信秀ニ事ヘス、ソノ子正貞、正貞ノ子正利、正利ノ子正盛、正盛ノ長子ハ即チ我正信ナリ、

正信ノ祖父正利ハ始メ金吾中納言秀和ニ仕ヘ、五万石ヲ領シ、稻葉正成ノ女ヲ娶リテ正盛ヲ生メリ、正成ノ

女ハ即彼春日局ノ生ム所、正盛ハ実ニ春日局ノ孫ニ当ルナリ、春日局ハ三代將軍(家光)ヲ擁立シタル女丈夫ナレバ、家光ノ之ヲ眷遇スルコト至テ厚ク、其子孫ヲモ重ク用イタリ、正盛ハ幼時ヨリ召シ出サレテ家光ノ左右ニ侍シケルガ、意氣相投ジテ股肱ト頼マレ、終ニ老中随一ノ人物トマデナリシ人ナリ、

正利ハ正成ト共ニ金吾家ニ事ヘケルガ、後春日局ノ縁ニヨリテ共ニ將軍ノ御家人ニ帰シ、御書院番衆トナリス、大坂ノ役正利ハ水野忠清ノ軍ニ屬シ、勲功著シカリケレバ、賞トシテ三万石ヲタマハリ、合シテ七万石トナリ、御使番ニ取立ラレタリ、カクテ寛永六年二月十七日長逝セリ、年五十九、世伝ヘテ曰ク、其子正盛ノ次第二立身スルヲ見テ、歡喜措ク能ハズ、老衰ノ身ヲ以テ徒ニ生ヲ貪ルハ正盛ガ立身ノ妨ナリト思ヒテ自害シケルナリト、嗚呼是レ血性ノ極満身渾テ是レ熱血至誠アルモノニ非ラズンハ、決シテ此ニ至ル能ハズ、凡庸人士ノ目ヨリ見レバ、其所為或ハ狂ナラム、而シテ狂名ヲ伝ヘザリシハ蓋至幸ナリ、

正盛ハ元和九年即チ年十六ニシテ始メテ叙爵シ、其ヨリ次第二立身シ、寛永十七年ニハ侍從トナリ、寛永十

九年ニハ下總国佐倉ノ城ニウツリ、十二万石ヲ領スルニ至レリ、カクテ慶安四年四月廿日家光薨シ、正盛之ニ殉死セリ、時ニ四十六、英敏ニシテ潤達ナル好人物ナリシカバ、時人皆痛惜セザルハナカリキトイフ、父ノ血性ヲ伝ヘテ赤誠日月ヲ貫ク者ニアラズンバ、安ゾ能ク此ニ至ルヲ得ンヤ、

此血性ナル正利ヲ祖父トシ、此至誠ナル正盛ヲ父トセル正信ノ素養ハ知ルベキノミ、父ハ更ナリ、祖父以來幕府ノ恩遇ヲ被ルコト此ノ如ク、其レ大ナリ、血性赤誠ノ素養アル正信ガ、正保元年ヲ以テ從五位下ニ叙セラレ、上野介ト称シ、出デ、詰衆ニ列スルニ及ビ、仰イデ主恩ノ大ナルヲ思ヒ、俯シテ父祖ヲ辱シメザランコトヲ慮リ、風雨ノ夜時ニ万感交モ集リ、中心耿トシテ復眠ル能ハザリシナラム、而シテ更ニ此血性ナル正信ノ心中ニ大刺撃ヲ与ヘシ當時ノ天下ノ形勢ハ、果シテ如何ナリシゾ、請フ、余ヲシテ少シク語ル所アラシメヨ、

売家ト唐様デ書ク三代目ノ徳川ノ天下、幸ニ家光ノ豪邁ナルヲ以テ、畜ニ父祖ノ業ヲ墜サマリシノミナラス、父祖ノ業ヲ整頓シ、幕府ノ基礎ヲ牢クシ、三百ノ諸侯

ヲ掌中ニ弄シテ、將軍ノ威光ハ旭日冲天ノ勢モ畜ナラザリシガ、享年長カラズ、幼孤ヲ殘シテ満月ノ影ヲ西山ニ収メシカバ、幕府ノ勢ハ忽チ一頓セシナリ、其薨ズルヤ幕僚相議シテ、喪ヲ秘セムトセシガ、酒井忠勝ノ言ニヨリテ、漸ク之ヲ公ニセシヲ以テ其事情ヲ推スヲ得ベシ、而シテ不思議ニモ此時ノ幕閣ハ、前後三百年間最モ多ク賢良ノ老臣ノ集マレル時ナリシナリ、即〔会津藩主〕安部忠秋・〔小浜藩主〕酒井忠勝・〔川越藩主〕松平信綱ナド皆得易カラザル人物ナリ、殊ニ信綱ノ如キハ智恵伊豆ト呼バレシ人ニテ、幕府三百年間第一等ノ才物ナリ、タトヒ此等ノ人ハ血性赤誠ノ好男兒ニアラズト雖モ、私ヲ營ミ利ヲ圖ルガ如キ奸物ニハアラズ、加フルニ一世ノ才器ヲ以テシタレバ、其政ハ能ク挙リシナリ、サレド家光ガ尊大不遜諸侯ヲ愚弄シ、天下衆生ヲ塵芥視シタル後ヲ受ケテ、而モ当主ハ幼冲ナリ、是ニ於テ小心翼翼タルノ余、其政ハ察々タルニ陥リタリ、水清ケレバ大魚住マズ、楊枝ヲ以テ重箱ノ隅ヲホジルニ至テハ、天下衆生豈ニ能ク之ニ堪ヘンヤ、

由井正雪・丸橋忠彌等ノ一揆起ラントセシモ、実ニ此時ナリ、別木庄左衛門・林戸右衛門等ガ増上寺ノ举起ヲ

ントセシモ、實ニ此時ナリ、由井ト云ヒ、別木ト云フ^レ皆之レ浮浪ノ徒ナリ、而シテ浪士ハ關ヶ原合戦以來幕府ノモテアマセシ所ナリ、浪士不平ノ氣塊^{（魂カ）}ハ一タビ大坂ノ役ニ爆發シ、二タビ天草ノ乱ニ破裂シ、爾來正雪ノ乱ニ発セントシテ成ラズ、増上寺ノ拳ニ発セントシテマタ成ラズ、其鬱積涵蓄スル所終ニ嘉永・文久ノ際ニ全ク爆發シ、破裂シ、磅礴シテ、其勢ノ猛烈ナル能ク三百年ノ幕府ヲ顛覆シテ王政ヲ古ニ復セリ、四代將軍ノ初ハサラデダニ小心翼々タリシニ、浪士ノ拳アリケレバ、更ニ小心翼々トナレリ、從テ威アツテ恩ナカリシナリ、徳川氏モト恩ヲ以テ天下ヲ取レリ、恩ナキニ至テハ天下豈ニ之ニ服センヤ、且ツ明曆ノ大火災ナドアリテ、都下ノ困疲ハ更ナリ、天下一般幕府ノ仁政ヲ望ムコト至テ切ナリシナリ、松平信綱等ガ火災ニ対スル善後策ナド無キニアラザリシガ、猶ホ欠点ハ頗ル多カリシナリ、

正信ハ不幸ニモカ、ル形勢ニ遭遇セシナリ、カ、ル形勢ニ処シテ見識アル者ハ皆憂慮セザルハナシ、況ンヤ血性男子ニ於テヲヤ、徳川氏ノ禄ヲ食ム者ハ皆慨歎セザルハナシ、況ンヤ父祖以來恩遇殊ニ厚キモノニ於テヲヤ、憂慮慨歎ノ余國家ノ為ニ尺サントシテ反テ狂名ヲ伝フ、豈ニ天下ノ遺徳ト云ハザルベケンヤ、

正信國ヲ治ムルノ始メ、配下ノ蒼生苛政ニ苦ンデ、終ニ佐倉宗五郎ノ告訴アルニ至レリ、然レドモ是レ正信ノ知ル所ニアラズ、正信ガ權ヲ老臣ニ委ネテ、未ダ親ヲ政ヲ執ラザル程ノ事ナリシナリ、サルニ此一事ハ血性ナル正信ノ純潔ナル脳髓ニ、非常ナル刺撃ヲ加ヘタリ、彼ハ深ク其不明ヲ悔イシナリ、而シテ銳意善政ヲ施セリ、嗚呼過ヲ知テ改ムルニ憚カラズ、正信竟ニ君子タルニ負カザルナリ、

此刺撃ハ四代將軍初世ノ天下ノ形勢ニ對シテ、正信ノ心中ニ復活セリ、當時天下衆生ノ苦惱^{（惱）}ハ其配下人民ノ前年ノ苦惱^{（惱）}ニ異ナラザルヲ知レリ、マタ松平信綱ノ為ス所、其老臣ガ前年為セシ所ニ彷彿タルモノアルヲ認メタリ、是ニ於テ正信ハ最早黙スル能ハズ、天下万人ノ為ニハ信綱ヲ除カザルベカラズト思ヘリ、大恩アル幕府ノ為ニハ其一身ハ更ナリ、父祖傳來ノ俸祿城地ヲ犠牲ニ供ヘムト決心セシナリ、

正信ハ上書シテ賑恤ノ事ナドス、メタレドモ報セラレサリキ、終ニ萬治三年十月八日東臺山ナル三代將軍ノ

廟ニ詣デ、万斛ノ熱涙ヲ香火ト共ニ墓前ニ捧ゲ、飄然去テ其領佐倉ニ還リス、去ル時一封ノ書ヲ上レリ、其宛名ニ保科正元（之元）・阿部忠秋ノ二人ノミヲ署シテ、松平信綱ヲ署セザリシヲ見テモ、正信ガ信綱ヲ憎クミシ事ヲ知ルベキナリ、

其上書ニハ時弊ヲ痛論セリ、將軍治世十年、輔導其宜シキヲ得ズ、権臣威福ヲ弄シ、天下困弊シテ、怨声海内ニ充滿セリ、区々ノ愚衷謹ンデ臣ガ父祖ヨリ受ケタル領土ヲ献上ス、願クハ之ヲ以テ有功者ニ与ヘ、天下ノ人心ヲ鼓舞セヨ、且ツ倉庫ヲ開イテ天下ノ急ヲ救ヘナド、言々肺腑ヨリ出デタリ、

正信ノ処置ハ忽チ幕閣ノ驚駭ヲ惹起セリ、彼等相会シテ其処分ヲ議セリ、正之等ハタトヒ正信ノ言フ所ハ取ルニ足ラズ、其為セシ所モ法ニ違ヘリト雖モ、父ノ志ヲ継ギ、領土ヲ擲ツテ、君ヲ苦諫ス、其心情ハ察セザルベカラズト云ヘバ、信綱之ニ反シテ狂氣ノ沙汰ナリトイフ、折角ノ忠義ヲ狂氣トハ情ナシト詰ジレハ、忠義ノ心ヲ察スルニ由リテ狂氣トハ云フナリ、其父正義ノ勲勞ヲ思フニ由リテ狂氣トハ云フナリ、君命ヲ待タズシテ恣ニ其領土ニ帰ル、是レ大逆ナリ、正信ノ一身

ハ固ヨリ其三族ヲ誅セザルベカラズ、サレド狂人ハ意識ナキモノナレバ、罪ハ大ナルモ大ニ恩免スル所アルベキナリト云フニ、衆始メテ其意ヲ悟リ、其言ニ從ヒタリトイフ、流石ハ智恵伊豆ナリ、彼ガ父祖ノ功ヲ思ヒ、彼ガ志ノ切ナルヲ察シ、其一身其一家ヲ寬恕セントテ枉ゲテ正信ヲ狂ト呼ビシナリ、然レドモ天下凡庸ノ徒ハ之ヲ知ラズ、一犬虚ヲ吠ヘ、万犬実ヲ伝ヘテ終ニ狂名ヲ千載ニ流スニ至レリ、稗史者流殊ニ佐倉宗五郎ノ事ニ附会シテ、漫リニ屢氣樓ヲ構ヘ、正信ノ真相長ク埋没セントス、知ラズ、松平伊豆ノ一言ハ果シテ恩乎、將タ仇乎、

十一月三日愈処分定レリ、特旨ヲ以テ正信ノ罪ヲ減シテ国ヲ除クニ止マレリ、加之正信ノ子正職ニハ一万石ヲ下シタマハレリ、正信モト四人ノ弟アリ、ソノ長ハ中務少輔安吉ニシテ、脇坂淡路守安元ノ養子トナリタル人ナリ、其次ヲ久太郎正俊トイフ、次ニ虎之助正實、次ニ右馬之助、後ニ南部山城守ノ養子トナリテ内藏介正勝ト称セリ、国除セラル、時安吉ハ既ニ養子トナリ居リタレバ、事ニアヅカラズ、久太郎以下一時其禄ヲ剝ガレタレド、間モナク取立ラレヌ、殊ニ正俊ノ如キ

ハ後日重ク用イラレタレバ、正利・正盛ノ鬼〔魂カ〕ハ長ク餒
エザリケリ、正信國ヲ除セラル、時年正三十三、以後
二十年ハ暗黒ナル生活ヲ送レリ、サレド一片ノ丹心ハ
決シテ寸毫モ銷磨セザリケリ、暫クハソノ弟脇坂中務
少輔安吉ニ預ケラレテ、信州飯田ノ城ニアリシガ、安
吉封ヲ播州龍野ニ移サル、ニ及ビテ、正信ハ若狹ノ小
濱ナル酒井忠直ノ許ニ預ケラレヌ、カクテ延寶五年六
月正信ハヒソカニ男山ノ八幡宮ニ詣テ、奸臣退キ忠臣
進ミ、猶將軍ニ嗣子ノ生レ出デムコトヲ祈リテ帰リケ
ルニ、此事早ク幕府ニ洩レケレバ、忠直ハイタク譴責
ヲ被リ、正信ハ更ニ移サレテ、淡路ナル松平綱道ニ預
ケラレヌ、間ナク綱道ハ死シテ、其子綱矩継キケルガ、
延寶八年五月八日將軍家綱ハ薨ゼリ、其報淡路ニ至ル
ヤ正信ハ剪刀ヲ以テ其喉ヲ切りテ、見事ニ自書ヲ遂ゲ
タリ、蓋シ父正盛ガ家光ニ殉セルニ倣ヒテ、己モ亦同
ジク將軍ノ死ニ殉セルナリ、三代將軍ノ薨ゼシ時殉死
スル者ハ多カリキ、四代將軍ガ恩顧ノ臣モ多カリシナ
ラム、而シテ其薨ズルニ臨ミ禁ヲ犯シテ殉死セシモノ
ハ狂人トシテ斥ケラレタル、正信ノ一人アリシノミナ
リ、

常人ノ眼ヨリ見レバ、正信ハ狂人ナリシナラム、一
身一家ノ損徳〔得〕ノ勘定ヨリ割リ出セバ、正信ハ狂人ナリ
シナラム、サレド一飯ナホ君恩ヲ思ヒ、斥ケラレテモ
天下ヲ憂ヒテ止マズ、八幡宮ニ將軍ノ子アラムコトヲ
祈リ、將軍ノ死ヲ聞テ自書シタルガ如キ何ゾ其心事ノ
可憐ニシテ、玲瓏玉ノ如キヤ、天王神仙其レ下降シテ
赤心ノ本体ヲ示セルニハアラサル乎、若シ正信ヲ狂人
トセバ、余ハ國家ノ為ニ天下ノ人ノ悉ク狂人ナラムコ
トヲ望ムナリ（以下欠冊、他日探求補フヘシ）
正陸ノ伝ナラン、

一七一 勝野豊作正道青蓮院宮ニ上ル書（安政五
年八月）

乍恐以書取愚意奉申上候、

当將軍家（家定）多病ヨリ政事総テ老中ニテ取扱、威權
日々盛ニ相成、漫ニ時勢変革無之候テハ御國威難持張
様ニ唱候テ、有志ノ宗室諸侯之説ヲ一切不取用、遂ニ
勅ニ違ヒ、評議ニモ不及、墨夷ヘ条約調印相渡候迄ニ
至候、尾・水・越前ノ三家并田安・一橋家 勅ヲ重シ
敵數申立有之、其上登城三家ハ廿四日、兩、調判違 勅ノ
卿ハ廿三、四兩日也

旨詰問有之候得共、最早事去候儀ニテ無拠、即日間部(註、唐江藩志)下總守上京ニ決シ、通達出候事ニ御座候、然ル処將軍家六月初ヨリ脚氣水腫ニテ、七月二日御大礼後ニ俄ニ差込、人事ヲ不弁、不容易大病ニ付、万一ノ節ハ幼君ノ義威權宗室ニ帰シ候ハ指見候ニ付、大老初一同密談ニテ惡意ヲ企、擅ニ思召、上意ト称シ、七月五日夜三家ヲ押込、当水戸家・一橋戸ヲ当分登城差留、上下ノ胆ヲ奪ヒ候ニ付、一人言ヲ発スル者無之、翌六日夜ハ將軍病大切ニ相成候、平生ニテモ御承知被為在候通りノ氣質病(痴愚ニシテ疥癬)、大切ノ前日右様ノ義可有之謂無之、為奸計事明白ニテ、最早奸臣忌憚候心ハ無御座候間、下總守上京トテモ必 朝家ノ御為ハ不奉存候、且又此節外夷ノ国々江戸海へ入津候処、惣テ上陸ヲ免シ、応接・条約等墨夷同様ノ義ハ勿論ト奉存候、奸臣共右様夷狄ヲ信シ、宗室ヲ倒シ、幼主ヲ挾テ、權ヲ擅ニシ、言路ヲ塞キ上下隔絶、徳川家ノ危難如此ハ未有之候、不及三家共 天朝崇敬奉リ候至誠ヨリ罪ヲ得候ト、陪臣国命ヲ執リ、將軍家ヲ違 勅ニ隨レ、尚其欲ヲ逞シ候ハ曲直申上候迄モ無之候、右奸臣共御糺明御手延ニ相成候テハ追々党ヲ結、不良ノ計策ヲ工候モ難

計、有志ノ者ハ切齒ニ堪ズ、必内乱ヲ引出シ候様可相成、一度乱緒ヲ開候へハ、再ヒ本へ帰シカタク、然眉ノ場合深恐懼仕候儀ニ御座候、朝廷ノ御威光ニ無之候テハ、宗室ノ厄ヲ解事能ハス、宗室ノ將軍ヲ羽翼無之候テハ、奸臣ヲ退ケ、勅ヲ重シ候儀ハトテモ行届中間敷、乍去宗室トテモ當時無之、微力ニ付外ヲ加へ、早々
勅ヲ以被召呼、違 勅ノ奸臣共除キ、先ツ国家ノ大害ヲ去リ候テ、幼君輔佐ノ御撰被為在候ハ、東西一致上下共ニ 天朝崇敬必然ノ儀ト奉存候、右宗室外藩被召呼候儀、尾州中納言・水戸前中納言・松平越前守(徳川慶徳)等ハ何レモ其任ニ候得共、此節慎中如何可有之哉、一橋家ハ乍若年才徳兼備、方今無比名將ノ器ニ候得共、奸臣共深ク憚リ候ヨリ、其節ニ至リ不測ノ災ヲ醸シ候モ難計、当尾水両家ノ内ニ候ハ、差向故障モ有之間敷奉存候、外藩松平薩摩守ヲ以第一ト仕候へ共、此節大病ト承リ候(此時既ニ死後)、左候ハ、松平阿波守ハ尤將軍家親戚、且ハ有志者此者ノ外ハ無之、松平土佐守・松平美濃守・松平肥前守・伊達大膳大夫等ハ何レモ忠臣不二ノ者ニ候、右ノ内一兩人モ阿州へ御添へニ相成

候ハ、宗室ノ不足ヲ輔ヒ取計十分ニ行届可申、奸臣驅除ニ至リ、輔佐ノ御撰ニハ一橋家ノ外ニ無之候、是ハ先シ候テハ大ニ害ヲ生シ可申、奸臣ノ憚候故ニ候、只今關東ノ危急、

叡慮ヨリ自然持張相成候ハ、皇威ヲ弥増シ、永世安泰ノ御基ニ可被為在、違勅ノ奸臣敵重御除ノ上ハ外夷ノ御所置ハ如何様ニモ

叡慮ヲ被安候様可相成、第一ニ關東ニ勅命ヲ重シ候威權ノ者無之候テハ、幾度被仰出有之候共、只々奸臣同意ノ者党ヲ結ヒ、命ヲ拒候ヨリ外千非後悔ノ者ハ有之間敷、度々ニ及候ハ、自然朝威モ輕ク相成、混雜ノミニテ国家ノ御為ト難申、左候トテ朝威少シモ御挫ケ御座候テハ、千載御引戻シノ時節ハ有之間敷、天下ノ安危徳川家ノ盛衰此時ニ迫リ候間、何卒右ノ者共速ニ被招呼、違勅ノ奸臣御糺明深奉願候、徳川家累代

朝廷ヲ奉崇敬候忠誠ヲ被思召、厚ク御評議ニモ相成候ハ、豈唯徳川家而已ナラン哉、天下万民ノ幸福ト奉存候、卑賤ヲ不憚存込候俟奉申上候、不敬ノ段ハ幾重ニモ奉恐入候、恐惶謹言、

一七二 西郷吉兵衛、日下部・堀両氏ニ与ル書(安

政五戊午九月十七日)

○この文書は、本文第四二号文書と同文重複により略す。

一七三 西郷吉兵衛国事ニ関シタル三件

安政五戊午七月

一 西郷吉兵衛へ近衛公ノ内翰ヲ尾州へ達セシ事、

但シ尾州ニハ右書ヲ其假焼棄タリトノ風説、

一同氏再ヒ撰家方ノ書ヲ尾・水へ持参セシトノコト如

何、

安政五戊午九月

一 有馬新七郎上京之事、

附、当時堀忠(仲ノ誤)左衛門・樺山三圓(資之

等如何ノ計画アリシヤ、

一七四 飯泉喜内略歴中路延年筆記

○この文書は、本文第一五九号文書と同文重複により略す。

一七五 僧月照事蹟黒田家々紀鈔

(上文欠ク、可_レ匿_レ 駅ヨリ飛脚来リテ申越ケルハ、關東ヨ
(隱)リ西郷吉兵衛・僧忍向・北條右門(宋村伸之丞)・平野次郎四人追捕
(月)トシテ来リ候ニ付、内分相知ラスヨシノ書状北條ニ達
(井上登徳)ス、故ニ工藤左門及予春吉新屋敷郡河 楠屋宗五郎別荘
ニ会シ商議ス、先ツ月照ヲ二日市郡御笠 迄下人重助ト俱
ニ立ノカシム、而シテ議シテ言フ、忍向ハ薩州ニ隠ス
ヘシ、然レトモ僧一人ニテ相送ル者ナクテハ薩士ノ思
ハクモ如何ナレハ、誰彼送ルヘシト相議スル所ニ、突
然トシテ平野肥後ヨリ婦リ、楠屋別荘ニ立寄シカハ、
幸ニシテ平野ヲシテ送ラシム、又北條ハ私ニ逃レ難ケ
レハ公裁ヲ受ヘキ者ナレトモ、事急ナレハ有司共ノ長
評議ヲ待間ナシ、寧国公ノ直裁ヲ受クルニシカストテ、
工藤左門ヲシテ格式頭取吉永源八郎ニ至テ直裁ヲ仰カ
シム、其言ニ曰ク、四人追捕トシテ云々ノ次第也、故
ニ忍向ハ薩州ニ逃シ置ス、右門事ハ以前薩州ヨリ逃来
リシ時ノ通り、官ヨリ御カクシ可被下ヤ、又ハ私ニ隠
スヘキヤ、事急ナル故御直判ヲ仰キ奉ルト申ケレハ、
公(長薄)曰ク、此等ノ事取計候面々ハ誰ナルニヤト御
尋有シニ、吉永其ノ姓名ヲ知ラサレハ、又立婦リテ之
ヲ工藤ニ問、工藤曰、某ト予ト兩人ヲ以テ答フ、其旨

申上シカハ、公旧福岡藩主曰、此者共ハ兼テ御承知ノ者
共也、此ノ者共計ヒ候ハ、御安心被遊ト也、又忍向事
ハ国内迄ハイツクヘ行キント、大風ニ(憎ニセス、声ヲ
揚ケテ追カ如シ)追捕ノ者ニ対フヘシ、又北條ハ先之比
私ニ京都ニ至リシ事不屈也、全人儀ハ藩士全様ノ儀ニ
付、官途ヘ願出候上、他国等可致ノ処、其事ナク出奔
ニ相類シ候条、今程勘氣ヲ蒙リ、遠郡ニ罷在リ、住所
知レスト答フヘシ、尤モ右門ハ国内ヲ出スヘカラス、
イカ程心強ク思ヒ、右門・次郎身ニ過チナキ様取計ヘ
トノ事也、於是人々大ニ力ヲ得、忍向并ニ重助、右門・
次郎トモ宰相松尾ニ泊宿ス、十一月三日(十月ノ誤) 關
東ノ捕吏二人・本州ノ捕吏共十余人楠屋別荘ニ来ル、
工藤左門公ノ趣意ヲ以テ相對ス、其ノ日八ツ比ヨリ關
吏二人・本州ノ吏四人宰府ニ至ル、故ニ我儔吏ニ先立
チ人ヲシテ忍向等ヲ終夜ニ上座郡竹内五百都薩人家ニ行
カシム、夫ヨリ忍向ハ次郎ト共ニ薩ニ入り、右門ハ国境
ヨリ引違ヘテ博多ニ歸ル、忍向・次郎カ薩ニ入ニ山伏
ト成リ、柳川ヲ経テ薩ノ境ニ至ル、薩ノ関吏二人荷物ヲ
改メ見ント言、二人姿ハ修驗ナレトモ、修驗ノ具ナケレ
ハ荷物出シ難ク、船ヨリ鹿兒島ニ達ス(阿久根ノ誤)、初

忍向ノ本州ヲ出ル時、先ノ薩土京都ニ全宿スル者三人（西郷・有村・伊地知ノ三名）、右門カ家ニ尋ネ来ル故ニ相約ス、關吏薩ニ入テハ必ス生テ帰ルマシト、於是右ノ三人先ニ陸ヨリ鹿兒島ニ歸リテ居シ故、忍向等無故薩ノ義士ト相計リテ、鹿兒島ニ在任ス、然ルニ關吏ハ薩ノ國境ニ残り、本州ノ捕吏ノミ鹿兒島ニ至リ、忍向・西郷ヲ捕シ事ヲ薩ノ役筋ニ申出、於是薩ノ志相計リ、忍向・西郷全船ニテ日向ノ某島（高岡郷ノ誤）ニ至ラシメ、志士ヨリ密ニ船ニテ他ノ島ニ送り、蹟ヲ滅セント計リ、十二月十四日（十一月十六日ノ誤）二人ノ船櫻島ノモトニツナキ、其夜暁二人密ニ謀リテ相抱入水ス、其音ニ驚キ引アケントスレトモ兩人相抱キテ離レテ、兎角シテ引揚ケシニ、忍向ハ死シ、西郷ハ蘇ス、忍向ノ衣類ノ裡（裏）ニ辞世アリ（歌前）、忍向ノ死骸ハ仮葬ス、擬本州ノ追捕四人死骸ヲ改メ見ムト云シニ、薩人曰、關東ノメシ人ヲ何故福岡ヨリ来リ捕ラル、ヤ、更ニ其意ヲ得ス、關吏ナラハ死骸ヲモ見スヘシ、又薩筑御統ノ間柄故ニ今度ハ無事ニ歸ス也、以後ケ様ノコトアラハ唯ハ婦スマシトテ、誤書物ヲサセテ下人重助ヲ引渡シテ追ヒ歸ス、本州ノ捕吏大ニ面皮ヲ失ヒシト也、若シ關吏薩ニ入ラハ

生テハ帰ルマシキヲ不思議ノ命ヲ助カリシト思ハル、下人重助ハ此時ヨリ伴リテウツケト成リシカ、其終ル所ヲ聞カス（無事帰京ス）、平野ハ鹿兒島ノ旅宿ニ居リシカ、吏來テ国内ヲ送り出サントス、平野思ラク、定メテ山中ナトニテ斬捨ル事モアランカ、蓋是等ノ事薩ノ風俗也ト云、故ニ平野薩ノ義士ニ知ラセマホシク、義士知ラハ竊ニ送リテ右等ノ難ヲ逃ルヘシトヲモヘトモ、知ラサルニ方便ナシ、故ニ宿ニ在リテ急ニ立タス、又吏出立ヲ促ス事数次ナリシニ、宿亭主握リ飯ヲ持来リ、是ヲ食シテ立テト云ヒケレハ、平野曰ク、我モ数十里ノ旅ニ行クコトナレハ門出ヲ祝シテ鱸ナトヲ出スヘキ事ナルニ、斯クスル事甚不恭也トテ、握リ飯ヲ取テ、亭主ノ頰ニ打付（如斯粗暴ノ挙動ヲナシタルニアラス、大久保利通日記及實歷史傳參看）、如何心得タルカト怒リシ故、亭主大ニ恐れ、酒肴鱸等ヲ出シテ謝ス、次郎夫ヨリユルノト立出テ、素袍・侍烏帽子ニ太刀ヲ佩ヒ笛ヲ吹キ、鹿兒島ノ町ヲ緩歩シテ過ク（斯説ハ杜撰）、是ハ全志ノ士ニ我カ出行ヲ知ラセントノ謀也、按ノ如ク薩土忽チ伝聞シテ、其平野ナルコトヲ知り、其夜二人ノ壯士（大久保利通・有村俊齋ナリ、大久保利通日記及ヒ

實歴史傳參証) 窃ニ金七両ヲ持来リ、路費ニ贈リ、且ツ送リノ吏ニ慇ニ致ス様ニ論シテ帰ル、扱国境ヲ出ルニ初メ山伏ノ姿ニテ入ラントセシ関ニ出ツ、此度モ此山伏ト伴リテ通ル、関所ニテ又荷物ヲ改メント云、此時平野持タル荷ヲ投出シテ与フ、吏風呂敷ヲ解クニ侍烏帽子出テタリ、総テ日向国境ノ関ハ田夫ノ如キ郷土ノミニテ、烏帽子モシラヌ程ノ者多シトソ(果シテ知ラサリシナラン)、関吏是ハ何ソト問フ、平野曰、我派ノ山伏ハ如此ノ頭巾ヲ被ルト云、素袍モ出テタリ、平野法衣也トテ引タクリ取、次ニ楽ノ譜出テタリ、是ハ何ト問フ、平野曰、是ハ梵唄也、梵唄トハ何ソト云フ、経ニ節ヲ付テ読事アリ、故ニ頌サンテ有ト云フ、笛出ツ、関吏云、是ハ慰物カト云、平野其通り也、答テ事濟タリ、平野モヲカシク日向ヲ出シ也(薩摩国大口郷小河内ノ誤)、初メ月照ノ高橋屋ノ宿ヲ出ル時兩掛荷ヲ宿ニ残セリ、我輩相談シテ曰、何ソ書類ナトヲトセシ品ハナキヤ、捕吏荷ヲ改見シモ知レ、カラストテ、工藤ヲ走ラシメ荷ヲ見シニ、果シテ一封ノ状アリ、薩ノ老臣島田(鎌田ノ誤)出雲ヨリ近衛公ニ贈ル密書ナリ(鎌田ハ此際大病、死ニ頻セリ、恐ラク誤聞ナラン)、其日果シテ吏

荷物ヲ改ム、其外天下ノ事ニ係ル書類且近衛公ノ身ニアツカル書類一封トシテ、平野京師ニ至リ、公ノ奥女中村岡ヲ尋ネテ渡サントス、然ルニ村岡ハ平野カ至ル三日以前安政六未正月五日(近衛家奥表日記參照)關東ニ捕レテ居ス、依テ粗事ノ由ヲ申候ニ公ノ御簾中(老女ノ誤ナラン、御簾中ハ既ニ薨セラレタリ)出ラレ、其類ヲ受取給ヒシ也、公モ一間先ニ居給ヒシヲ慥ニ伺ヒント也、不思議ニヤンコトナキ御方ノ御簾中ニ見ヘ奉リシモ奇遇ナリト、平野語リキ、月照ハ其体瘦レテ笑語寡ク、眼中スルトク寡黙ノ清僧ナリキ、年ハ四十五六ト見ユ、又常ニ香ヲ焚ク事ヲ好ム、別ニ臨テ餞別ノ歌ニ、「月」
「みな人の心もかゝれまとかにてちりもくもらぬ秋の夜のみ」、忍向・吉兵衛天下ノ大事ニ預ル志アリナカラ、今爰ニ死スル事不審シクテ後知レル人ニ尋シニ、忍向カ死ヲ極メシハ幕府ノ追捕カ、リテハ天カ下身ヲ匿スヘキ地ナク、又士類ノ身ニテモアルナラハ、事迫ラハ追捕ノ人ヲ斬殺シテモ身ヲ全クスヘキニ、忍辱ノ躬トイヒ、且大事ニ預ル才幹モアル身ヲ徒ニ命延シトテ、行ク処ノ諸侯ニ難ヲカケ、至ル所ノ志士ニ災ヲ貽ス、且各国ノ志士我如キノ釋僧一人ヲ助ントテ、方今

天下ノ勢ニテハ大事ニ堪ヘキ士ヲ不測ノ難ニ陥ルコトアルヘシ、斯クアジキナキ世ニ徒ニナカラヘ居ランヨリ、死シテ節ヲ全フスルニ如ストイヒシニ、西郷モ我曾テアラン間ハ覇府ノ追捕カ、リ、且主君ニ難ヲ貽ス也、サラハ俱ニ死ントテ相抱シテ海底ニ入シト也、西郷ハ蘇シテ後薩ノ大島ニ蟄シテ跡ヲ溺死ニ昧マス、蓋薩侯ノ命ニ出ツト云フ、忍向ノ弟信海ハ成就院ノ跡ヲ継シカ、兄ノ事アリ、疑カ、リ、囚獄セラレシカ、獄中ニテ舌ヲ斬リ死ス、兄弟二人朝家ノ為ニ天下ニ先立テ義死セシ事、後世ニ湮滅センコトヲ傷ミ、其概略ヲ記シテ二三ノ士ニ貽スト云(西郷投海始末參看、此書ノ誤膠ヲ弁スヘシ)、

一七六 疑獄人名(近衛家藏書写、前卷ニ記スモ伝

写ノ誤アラム)

(秦岡、川成島藩主)
本郷丹後守

名代

内藤十郎兵衛

勤役中勤方不宜段達 御聴、急度モ可被 仰付処、出格之思召ヲ以、御加増地五千石被召上候、隠居被仰付

急度慎可罷在候、

本郷石見守

名代

本多丹下

父丹後守勤役中勤方不宜段達 御聴、急度モ可被 仰付所、出格之 思召ヲ以、御加増地五千石被召上、隠居急度慎被 仰付、為家督其方へ五千石被下、寄合被 仰付候、

寄合

(政平)
石河土佐守

名代

小倉新左衛門

勤役中勤方不宜段達 御聴、急度モ可被 仰付所、出格之 思召ヲ以、知行之内七百石被 召上、隠居被仰付候、

中奥御小姓

石川豊前守

名代

水野采女

父土佐守勤役中勤方不宜段達 御聴、急度モ可被 仰

付処、出格ノ 思召ヲ以テ、知行ノ内七百石被 召上、
隠居被 仰付、為家督其方へ二千石被下、中奥御小姓
御免、寄合被 仰付候、

寄合

(頼亮)
佐々木信濃守

名代

今井右左橋

思召有之候ニ付、小普請入被 仰付候、

(島津忠義)
松平修理大夫家来

大山正阿彌(綱良旧名)

右如何之儀相聞候ニ付永押込申付候、国元へ差遣シ、
卒爾之義(死ニ至ラシメサル通語)無之様可被致候(当時
奥茶道職、安政四五年江戸御在勤、後三左衛門格之助)

(忠頭、姫路藩主)
酒井雅樂頭家来

菅野 狷助

同文言

(黄直、土浦藩主)
土屋采女正家来

大久保 要

同文言

(信篤、龜山藩主)
松平豊前守家来

同文言

十月廿九日

奥平小太郎

小普請支配へ

小普請組

小笠原順三郎支配

岡 良節

御番遠慮格被成御免候、

(頼胤)

讚岐守(高松侯)元家来出奔人長谷川宗左衛門・同速水

義此度永押込被 仰付、御引渡相成候処、御当地屋敷

向甚手狭ニモ有之、非常等之節へ甚心配仕候間、在所

表へ差遣、嚴重ニ手当申付置度旨、石谷因幡守様へ相

伺候処、嚴重ニ手当申付置度旨、石谷因幡守様へ相伺

候処、勝手次第在所へ差遣不苦筋之旨御指図御座候、

此段御届申上候、以上、

松平讚岐守内

十一月四日

野黄七之助

十一月十六日

〔松平兼全、老中、西尾藩主〕
和泉守宅へ銘々家来呼可渡書付

〔頓基、人吉藩主〕
相良越前守家来江

鷹司殿元家来

小林民部

右不屈之義有之、遠嶋申付候得共、手放難差置者ニ付、越前守江預置候間、在所へ差遣、生漕取籠置候様可仕候、尤引渡方手当向等之義委細松平伯耆守・久貝因幡守・黒川左中へ承合候様可仕候、

十一月十六日

〔高奏、佐伯藩主〕
毛利安房守家来江

水戸殿元家来

鮎澤伊太夫

同文言、

松平鹿次郎

御目通差扣 御免被成候、

組合御門々江廻状

一昨九日夕七半時頃、当御門御櫓潜リ御門柱礎際ヨリ

煙出候ニ付、早速人数差出、水之手相廻シ、御銅物取放相消シ申候、依之向寄御目附松平彈正様へ以使者御届差出候処、昨日御当番御目附中様江為見分、御徒目附兩人・御小人目附方差添被遣候、則拙者致案内御見分之上拙者口上書并番士口上書、小頭見出候者之口書、右何レモ豎紙印形付差出申候、

一右御同人様同人方ヲ以右相消シ、日次并御銅物見出候者追テ御差図有之候迄、入念番人附置可申旨被仰渡候ニ付、豎紙印形居差出申候、右案内可得御意如斯御座候、以上、

雉子橋御門番

大久保四郎太郎内

十一月十一日

淀川雄藏

〔伊達慶邦、仙台藩主〕
松平陸奥守家来

松枝兵衛

黒澤龜之進

押込

安部幸藏

三浦平助

大石彌左衛門

栗野 一平

(マ、ヽ、)

櫻井文五郎

武田 健治

新關 晉藏

清野左衛門

菊地半左衛門

急度叱

右之者共町方御用聞鈴木藤吉郎へ引合候、古米買付等
之一件、御吟味之上始末不埒ニ付押込等被 仰付候、
右之通昨十八日石谷因幡守於御役宅ニ被 仰渡候間、
此段御届申上候、以上、

十一月十九日

松平陸奥守内

木幡松三郎

当十六日越前守ニ被成御預候段被仰渡候鷹司殿元家来
小林民部義、病氣罷在候処去ル十八日於牢内相果候段、
昨日石谷因幡守様御役宅ニテ御達御座候、越前守在邑
ニ付、此段御届申上候、以上、

相良越前守内

十一月廿二日

澁谷得藏

十一月十日

(奉行、若年寄、盤城平藩主)
安藤對馬守江達

水戸殿家来

杉浦仁右衛門

木村三穂助

太宰清左衛門

御同人家来之由

櫻 任藏

右之者共行衛不相知候得共、水戸殿ニテ御探索ノ上、
御手限ニテ書面之通咎御申付被成候様可被取計候事、

水戸殿家来

宇都宮彌三郎

白井織部

鈴木式部

家老鈴木石見守・岡田信濃守・寛河内守隠居被申付ニ
付、右諸大夫被 仰付候様被相願候、此段宜敷御相談
頼入被存候、

右挨拶

御願之趣当年ハ先難被及 御沙汰候事、

右対シ候テ尾崎豊前へ可差出旨相達、御同朋頭ヲ以水戸殿御城附へ渡候、

十二月十六日

御刀

美濃国寿命

代金十五枚

松平左兵衛督(信和)

十二月十三日

(土浦藩主)
土屋采女正(寅直)

病氣快候間本所下屋敷へ折々罷越歩行仕度願、

可為願之通候、

時服三

尾張殿家老

成瀬隼人正

十二月廿四日

(勝茂、越江藩主)
間部下總守

名代

松平織部正

太田運八郎

同文言、
早速罷出御用相動候ニ付、拝領物被仰付候

所可代

御刀

(忠義、小浜藩主)
酒井若狹守

川井山城守

病氣ニ付御役御免之義、猶又御趣意不得止事無扱被

思召候、依之願之通御役御免雁之間席被 仰出候、心

永ニ養生致シ、氣分快節ハ登城、御機嫌相伺、月並ハ

御黒書院、五節句ハ御白書院御目見可仕旨被 仰出候、

十二月廿八日

去秋以来御用向別テ多端ニ候処、格別ニ精入レ取扱彼是心配骨折候義ト被 思召、依之御刀被下之、

寺社奉行

御鞍籠
時服六ツ

(富津藩主)
松平伯耆守(宗秀)

御留守居次席

大目附

金七枚
時服四ツ

久貝因幡守 (正典)

町奉行

金二枚
時服二

中村又兵衛

金七枚
時服五ツ

池田播磨守 (頼方)

飯泉喜内初筆一件品々入組候事柄ニ候処、取扱物等仕、格別骨折候ニ付、拝領物被 仰付之、

御勘定奉行

御勘定組頭格

金五枚
時服三ツ

松平出雲守 (康正)

寺社奉行吟味物調役

御目付ノ節立合御用相勤候ニ付、

小俣稻太郎

御目附

時服二

黒川左中 (盛泰)

常々出精相勤、去秋以来別テ御用多之処、格別精入レ相勤骨折候ニ付、布衣被 仰付、百俵之高ニ御増加被 下候、

飯泉喜内初筆一件(中路延年筆記参看)ノ義ハ品々入組、御意味合モ有之、不容易事柄ニ候処、格別精入レ、吟味モ揃、取別テ骨折候ニ付、拝領物被 仰付之、

御勘定組頭

天障院様御用人

評定所留役

原 彌十郎

金三枚
時服二

吉田昇太郎

金三枚
時服二

奥御祐筆組頭勤役中、飯泉喜内初筆一件ノ義ハ、品々入組候事柄ニ候処、取扱物等仕、格別骨折取扱候ニ付、

金二枚
時服二

寺社奉行吟味物調役

奥御祐筆組頭勤役中、飯泉喜内初筆一件ノ義ハ、品々入組候事柄ニ候処、取扱物等仕、格別骨折取扱候ニ付、

金二枚
時服二

飯島辰五郎

拝領物被 仰付候、

御勘定評定所留役

奥御祐筆組頭

浅野彌一郎

加藤惣兵衛

金二枚
時服二ツ、

高木源六郎

金三枚

上倉彦左衛門

高田彦次郎

時服二ツ、

同断ニ付、拝領物被 仰付候、

銀十五枚
ツ、

御勘定評定所留役当分助

同七兩

山下新次郎

石原 孫助

同断ニ付、度々出格致シ骨折候ニ付、御金被下之、

齋藤 辰吉(後中野
吾一)

町奉行

同断

石谷因幡守組与力

金二十兩

石川治左衛門

金三十兩
ツ、

秋山久藏

同評定所番

高橋吉右衛門

銀十五枚

神尾藤左衛門

同組与力

支配勘定出役

金二十兩
ツ、

服部孫九郎

評定所書物方

三好助右衛門

銀二十枚

本山 太郎

同断ニ付被下候、

同格同書役

同十五枚

中村利三郎

十二月廿九日

同断御用取扱格別骨折候ニ付、拝領物被 仰付候、

能登守元養子

評定所番

永井玄蕃頭(尚志)

銀十五枚

市川市左衛門

市兵衛養子

同見習

岩瀬肥後守(忠震)

同十枚

神尾藤太郎

差扣御免被成之、

御徒目附

玄蕃頭事

金二十兩

朝岡清左衛門

正月九日
名改

永井介堂

同

肥後守事

同 岩瀬 鷗所

民部少輔事

十四日 同 鶉殿 鳩翁

一七七 参考 白石正一郎日記抄

○この文書は、本文第一五七号文書と同文重複により略す。

一七八 故岩山敬義君カ齊彬公ノ御近習奉職中職

務上俱ニ事ヲ執リ或ハ交際ノ事実粗記憶

スル処ヲ録ス

敬義君ハ壯八郎ト呼ヘリ、齊彬公ノ御小姓役タリ、^四郎ハ当時御庭方役ヲ以テ、製煉分析所掛タリ、齊彬公

嘉永四年^{辛亥}二月御家督、全年三月九日芝邸御発途、東

海道・中国・九州路ヲ経テ、全年五月八日鹿兒島城ニ

入ラセラレタリ、之レヲ御初入部ト唱フ、全年七月御

城内外御庭内動植館内(御庭奉行及ヒ御庭方役場ヲ動植館

ト云フ)ニ洋式ノ分析及ヒ製煉術、或ハ鉄鑄造ノタメ

熔鉄炉ノ雛形ヲ試築セラレタリ、宇宿彦^{左衛門}及ヒ四^命

郎奉命、専ラ蘭書ニ抛リ製式ヲ調査ス、蘭学者松木弘

安(寺嶋宗則旧名)及ヒ八木稱平二名カ原書ノ翻譯ニ從

事シ、四郎等ト研究シテ建築セリ、或ハ金屬分析、或

ハ製煉術ヲ開ク、公ハ開物ヲ好マセ玉ヒシ故、政務ノ

余暇ニハ日々全所ニ臨マレ、御指揮アラセラレタリ、

此時御近習井上庄太郎・伊東才藏・堅山八郎・岩山壯

八郎・中山尚之助・谷村愛之助等ノ数名ヲシテ該館ノ

諸事ヲ掌ラレ玉ヘリ、這時分ヨリ伊東・岩山・中山・

谷村ノ三四名蘭学ヲ修ムヘキ旨特命セラレ、本務ノ余

暇或ハ宿直ノ次日・非番日ハ必ス本館ニ出頭シテ研究

セリ、其后嘉永五年^{壬子}ノ夏比右三名ハ各科目ヲ定メ、

伊東ハ兵科、岩山經濟、谷村ハ天文・地理ナト夫々其

器ニ応シテ修学ヲ命セラレタリトテ、其日四郎等勤務

局ニ三名一同来リテ御端書ヲ示サレタリ、然シテ三名

ハ隔日毎ニ製煉局ニ来リ、寺嶋・八木等ニ就テ講習セ

ラレタリ、四郎等全局内ナル故ニ親シク勉強セラレタ

ルヲ親親ス、

該局ハ御休息所即チ大奥御座ノ間ヨリ、外御庭ヲ伝ヒ

動植館ニ至ル僅ニ六七十間百間足ラスノ所ナレハ、当

直日モ間暇アレハ来リテ修学セラレタリ、或ハ当直日

ニハ四郎等へ御用取伝ハ専ラ此ノ人々ナリキ、

井上ハ元来江戸邸定府ニテ、父ヲ井上一作^逸(御側役御小

納戸御留守居役ヲモ兼勤セリト云フ、其長男ニテ前年ヨリ蘭学ヲ修メ、可ナリ横文ノ読ミ書キモ出来タルニ依リ、其時分ヨリ実業ニ従事シ、四郎等ト事ヲ取レリ、公ハ晩景ヨリハ必ス四五名ノ近習ヲ從ヘ臨館シ玉ヒ、分析及ヒ製煉ノ術ヲ覽玉ヒ、或ハ指揮セラレタリ、其時ハ御小納戸一名・御小姓一二名・医師一名・茶道一名、外ニ御草履取一名位ナリキ、時トシテハ女中ヲ召列レラレシコトモアリタリ、

臨館セラレシトキハ、修業ノ人々業ヲ休ムヲ嫌ヒ玉ヒシ故、敬礼セシ后ハ依然修業セラレタリ、折節ニハ修学席ニ就カレ、煙草ナト召上リナカラ、習読ヲ聞キ玉ヘリ、

御手許御蔵書取扱掛ハ単ニ御書物掛ト唱ヘ、和漢洋種々ノ書籍数千部ヲ蔵セル、御庭内ニ三個ノ土蔵アリ、一ハ御宝蔵ト唱ヘ、金銀貨其他貴重ノ物品ヲ納メ、一ハ御書庫、一ハ御道具蔵ト唱ヘ、器物或ハ書画幅掛物類ヲ納メタリ、井上及ヒ伊東・岩山・谷村ハ御書物掛ニテ、其蔵ヲ預レリ、我々御書籍拝借ヲ願フトキハ、其旨上申シテ御蔵出シセラレタリ、

二ノ丸御廓内ニ草木園ヲ置カレ、和漢洋ノ草木栽培ヲ

命セラレ、中ニモ漢洋種ノ草木ヲ長崎又ハ琉球人ヲシテ支那ヨリ御取寄アリタリ、栽培方ハ御庭奉行ハ素ヨリ、御小姓ニハ岩山・谷村ノ二名カ掛ナリキ、然シテ栽培方ヲ指揮スルノミニアラス、諸書ニ照合シテ其性分効能等ヲモ研究セシメ玉ヒシナリ、其事ハ御庭奉行等ノ為シ得サリシ事故、専ラ敬義君・谷村・伊東ノ三名担当ナリキ、

山川・佐多ノ兩郷及ヒ屋久島等ニ在ル御薬園地ニ、昔時御植栽ノ荔枝・龍眼ハ年々成実ノ候ニハ、其果実ヲ蜜漬ニシテ、幕府又ハ諸侯方ニ御贈リニナリタリ、安政四年ノ夏ト覚フ、京都へ御献上ト云フコトニテ數十個ノ蜜漬ヲ命セラレタリ（近衛家ヲ経テ、禁裏へ御内献）、其取扱ハ予等ノ局ニ於テセリ、其時谷村・岩山ノ二氏内命ヲ奉シ特別ノ取扱ヲナセリ、近衛家ニ献セラル、ノ名ヲ以テ、全家ノ御取伝ニテ、禁廷へ御内献ナリシトソ、

安政四年ノ初夏御帰国、其時分ヨリ二ノ丸内ニ文武講習所御設置、造士館書生御呼出シ、学業試験御親試、或ハ洋式操練発火演習モ全所ニ於テ御初メニナリ、御側勤メノ隊長ニハ伊東・堅山・岩山・谷村・須磨（敬

次郎)ナト云ヘル人々五六名ニ教員命セラレタリ、四郎等モ其末ニ加ハリタリ、

伊東・岩山・谷村ハ、江戸在勤中川元幸民ニ就テ蘭学ヲ脩メ、植物学ハ伊東圭介等ノ諸氏ニ学ハレタリト、^{〔安政七年〕}嘉永七年ト覚ユ、石川確太郎ト云フ蘭学者御抱ニナリタリ、此人ハ元来大和国植村藩士ナリ、幼年ヨリ江戸ニ出、杉田成卿ノ門ニ入り、蘭学ヲ修メ、学成リ、勢州津藩ニ雇ハレ、専ラ大小砲製造ニ従事セリ、故アリテ津藩ヲ去リ我藩ニ抱ハレ、鹿児島ニ下リ、集成館ニ於テ大小砲製造ノ翻訳ヲ掌レリ、其時君側ヨリハ井上庄太郎・伊東才藏・岩山莊八郎・谷村愛之助三人ヲ掛リニ命セラレ、四郎等モ全館員ナリシ故、反射砲・鎔鉄炉、或ハ大砲製造等ニ従事シ、安政四年ノ春御帰国后、和蘭新式ノ輕砲・山砲御參觀御備用ニ至急製造ヲ命セラレ、其節ハ井上・岩山・伊東及ヒ四郎等俱ニ事ヲ執レリ、全時御參觀御道中御備用ニ米國新式ライフル(本込ミ銃ト通唱ス)銃ノ雛形、幕府ヨリ御取り出シ、其模製集成館ニオイテ製造命ラレタリ、這ノ小銃ハ嘉永七年ニ米國使節ヨリ幕府ニ獻シタル新式ニテ、幕府ハ之ヲ秘シタルヲ御手入アリテ、雛形ヲ取り、鹿児島

ニ於テ製造命セラレタリ、是レモ同シク従事セラレタリ、

安政五年^{戊午}七月十六日公御薨逝、御葬儀ノ際御側勤仕ノ人、御側役初御小納戸御小姓ノ中四五名ハ剃髮シテ御葬送ニ従事スル例ニ依リ、岩山君モ亦其員ニ在リシト覚ユ、

全年末比^{〔大考〕}若クハ六年春^{〔久松〕}、転役セラレタリト覚ユ、寺社方取次^{〔久松〕}、御勘定方小頭^{〔久松〕}、御勘定方小頭^{〔久松〕}ナリシト記ス、中山尚工奉行ニ、其他膝辺ニ召仕ハレシモノ悉ク転職セリ、當時忠義公御相統日尚ホ浅ク、国老島津豊後・新納駿河等ノ輩專權財政空乏ノ名ヲ以テ、先公御寵遇ノ輩ハ悉ク黜斥セリ、其事情ハ照國公行実又ハ舊邦秘録等ニ詳記ス、爰ニ略ス、

如斯閑散ノ職ニ遷サレタル人々ハ、先公ノ遺志継述セムコトヲ努メ、或ハ奉行修学ノ人々中道ニシテ廃シタルモノアリ、或ハ倍々奮発シテ修学スルモノアリ、岩山氏・伊東ノ如ハ依然石川カ門ニアリテ勉勵セラレタリ、

萬延元年三月井伊直弼外櫻田ニ於テ遭難、尔后天漸

^{〔大考〕}彦根藩主

ク多事ニ赴キ、随テ我藩モ先公ノ遺志継紹セラレルコト、ナリ、専權ノ国老島津・新納ノ輩モ黜ケラレタリ、其比洋学校創設（開成所ト唱フ、^{〔音也〕}照國公費逝前已ニ準備セラレタルモノナリキ）セラレタリ、敬義君モ館員ニ命セラレ、組織調査ニ力ヲ尽サレ、四郎ヘモ先公ノ御遺意談合セラレタリ、而シテ組織就リ開校シテ後役員ヲ辞シ、生徒トナリ大ニ勉学セラレタリ、之レヲ英学ニ転セラレタル時ト記ス、職員ヲ辞シテ生徒ニ下リ、勉勵セラレタルハ、當時有志者ノ感賞シタルコトナリキ、嵯峨根良吉氏ヲ御抱ニナリシ年月等詳記セス、全氏ノ邸宅ハ、鹿兒島清水馬場大乘院坊中ノ廢地ヲ賜ハリタリ、支坊中第一等ノ良地ナリ、大乘院橋ト唱フ、橋詰左側ナリキト覚ユ、

這邸宅地賜給ノ前頃、四郎ハ寺院廢合取調ノ掛員トナリシ故、岩山君ノ依頼アリシコトヲ記セリ、其時分敬義君ハ英学勉強中ナリキ、嵯峨根氏ハ尋常ノ洋学者ニ非ラス、政治思想ニ厚キ人ナリシ故、四郎モ每度訪問、政務談ニ涉リシ事モアリタリ、當時洋学者ハ一種ノ技術家トシテ、政治思想アルハ絶テナキ程ノ風習ナリシカ、嵯峨根氏ハ和漢洋ノ政治談ヲナス人ニシテ、開明

進取ヲ鹿兒島ニ唱ヘタル嚆矢トス、四郎モ敬義君ト俱ニ政治論ヲ聞キシコト数回ナリト記ス、

維新后明治三年比敬義君一小生トナリテ東京ニ出ラレタリ、四郎モ全年春ヨリ（神田橋内、現今紙幣寮所在ノ地、藩邸在勅中ナリキ、初英字学者關新八カ塾ニ入ラレシヲ記セリ、全時市來宗七ト云ヘルモノ四郎カ親類）上京、英学ヲ修メムト、大病院（旧藤堂邸、下谷ニアリ、戊辰戦争負傷者ノ為メニ設ラレ、大病院ト唱ヘタリ）ニ入塾セリ、敬義君モ市來ト同塾ニ入ラレタリ、然シテ明治三年頃農学ニ従事セラレ、牧畜ハ農ノ本ナルヲ感セラレ、洋行ノ志ヲ起シ、大久保利通ニ論述セラレシニ、大久保其志ニ感シ、牧畜修学ノ為メ米國留学ヲ命セラレタリ、當時漸ク文明開化ト云フコトヲ一般唱ヘ初メタル比ナリキ、是ヨリ七八ヶ月許リ前カト記ス、宇都宮三郎氏・赤松大三郎氏カ牧畜書、或ハ牛乳搾取書ノ訳述アリテ、人咸必要ノ事業ナルヲ粗ホ弁シタル時ナリキ、然ルニ敬義君ハ卒先シテ養畜及ヒ農学研究ノ為メ、海外遊学ノ權輿トス、

明治八年ノ夏比ト記ス、敬義君米國ヨリ帰朝、程ナク鹿兒島ニ歸リ、四郎ヘインデコノ種子、オリイフ樹、

及ヒマニラ烟草、或ハ米國産野菜、或ハ大小麦種、或ハ草花ノ種子數十種ヲ惠ヲセラレタリ、全時ニ旧藩主公ヘモ進呈セリト語ラレタリ、之レ四郎カ照國公御在世中俱ニ洋式ノ事業従事セシヲ忘ラレス、適々米國ヨリ携ヘ帰レリト語サレタル、其厚志ニ感シタリ、

以上記ス処ハ敬義君カ照國公ノ膝辺ニ奉職セラレ、殊遇ヲ受ケラレタル一端、及ヒ予ト交際ノ始末概略ヲ記シテ乙夜ノ覽ニ供ス、尚ホ細事ハ他日ヲ期シテ口話ニ譲ル、

明治廿六年六月

市來四郎

關 宗喜様

岩山敬直様

一七九 参考 三條實萬公事略

公諱實萬、(藤原公季)閑院太政大臣仁義公三十二世孫、前内大臣

諱公修子也、光格帝享和二年二月十五日生、幼而穎悟、
挙動如成人、稍長好學名声夙著、文化九年加首服、
任右近衛権少将、仁孝帝文政七年、累進至権大納言、
天保二年公年三十、擢為議奏、蓋異教也、公謂、
先哲有言、學優而登仕、量才居職、今余才短學淺、

恐招曠職之誚、再三固辭不允、公奉職恪謹周密、
率由旧章、除革時弊、作居官規約、奨励僚屬、帝深
寄公、一日上直、帝召御前曰、乃祖所著愚昧記、
藏在内庫、朕今出与卿、以賞卿忠誠不忝乃祖、
卿勉旃、公感泣而退、又待經筵、(侍カ)賜御扇画竹、因
号曰虚中、蓋誌其寵也、天保十一年前内大臣薨、
公居喪衷毀過禮、左右感動、服除復職、帝欲使廷
臣就學、弘化二年創學習所、以公為伝奏、幹
其事、帝崩、孝明帝踐祚、齡甫十六、閑白鷹司政通准
摂政、公居議奏首、竭力転導、居二年転為武家伝
奏、伝奏或目為卑職、清華之家不肖為之、公則
慨然拜命、謂是処公武間、足以為之也、時朝廷
受積衰之余、供御常匱、公卿究困、動輒破廉恥、
公常憂之、於是首建宮中度支廷臣加祿之議、是冬
例使于幕府、因說老中以此事、後數年有獻地增
祿之舉、蓋原公之議也、嘉永七年皇宮火、先是宮
垣南面狹隘、又欠異位一隅、公欲因新造而改其
制、閑白政通、素主省費、公窃与所司代脇坂安宅
謀、使其說政通、政通從之、議即決、癸丑以後、
国事起、物情騷然、幕府起德川齊昭、參海防事、

〔越前藩主〕 松平慶永・〔薩摩藩主〕 島津齊彬・〔土州藩主〕 山内豐信・〔宇和島藩主〕 伊達宗城等、皆為三列

藩之望、公文書往來、多所謀画、大政官下符、銷梵鐘、造銃砲、亦係公贊成、安政四年二月任右近衛大將、為右馬寮御監、辭任奏、五月任内大臣、右近衛大將如故、仍兼外國事務、當是時朝廷大臣、才德器識無出公右者、朝野屬望、尊融法親王以懿親參機務、特推重公、公以身任重、拮据勉不致寧處、五年幕府与米使結仮条約、使老中堀田正睦入朝乞勅准、於是輿論囂々、責幕府失措、公深憂公武乖離内乱随生、上疏乞令幕府徵議列藩以仰聖裁、举朝靡然、同公議、常嘉納、乃伝旨正睦遣婦、三月公辞内大臣右近衛大將右馬寮御監、特命仍知外國事務、既而幕府為米使所迫、未上藩議、而擅締条約、帝慨朝旨不伸、国体頓變、特召公問計、公曰国体之变固為重事、而公武乖離、其患最大、制今之勢在於協和公武、公武協和而後国体可持矣、於是詔幕府、使三家及大老入朝、數奏衆議、以定大計、是時將軍家定薨、嗣子猶幼、井伊直弼為大老專用事、德川慶恕・德川齊昭等論幕府遲勅專決、因獲譴屏居、及詔下皆辞而魯英佛蘭相

踵交換条約、一如米国例、帝震怒召諸大臣曰、大統二千有余年、金瓶無欠至朕躬、一朝誤之、何顏奉祖宗、朕宜遜位以謝其罪、卿等善為後圖、公泣且諫曰、事至於此、臣等之罪、聖諭至敝不知所言、伏願少寬宸念、使臣等効其力、帝意稍积、公乃進奏曰、幕府違勅列藩離心、今也憂不在乎外而在乎内、宜更戒飾、幕府及三家列藩、同心協議、以建整内制外之策、德川齊昭、將家遺老、請別勅齊昭、匡輔幕府、伝諭列藩、帝從之、幕府大駭、命齊昭還其勅、因宣言曰、齊昭將不利于孺子、遂幽之、又使老中間部詮勝入言、彈劾公等、以与齊昭通謀、准后鷹司政通以下、公卿士庶、連座甚多、幕府声威撼動一時、帝不得已解公職、慰諭具至、公退居采邑上津屋村、後又移一乘寺村、幕府尋諷公落飾、帝手詔曰、卿若落飾、即罪屬曖昧、不如任其譴責、以待百載公論也、然落飾身安、譴責身危、卿其挾之、公感泣不禁、遂上牋曰、聖恩广大、臣死有余榮、安危非所問、願無累皇家、而滿朝畏怖、無敢贊帝意者、六年五月公遂落飾、自号澹空、帝念公不已屢下内旨、恩眷甚渥、十月

六日公遽病薨、年五十八、帝聞_レ訃震悼、輟_レ朝三日薨前一日特旨叙_二從一位、赴十三日葬_三小倉山先塋之次、人識_レ与不_レ識、無_レ不_三痛惜_一、文久二年七月積_二鷹司政通以下譴責_一、乃遣_二小納言高辻修長_一、就_二公墓_一贈_二右大臣_一宣曰、故入道從一位藤原實萬、憂_レ國愛_レ民夙夜淬励、忠猷嘉謀、寔朕良佐、而溘焉長逝、哀慕曷極、今贈_二右大臣_一、賞_二厥勲勞_一、今上即位之二年十二月又詔曰、贈_二右大臣藤原實萬_一、乾納_レ之不振、國威之不_レ宣、奉_二事先朝_一、尽_二竭忠猷_一、慨然有_二匡濟之志_一、至_二子實美_一以底_レ有成、其諡曰忠成、公為_レ人外和内剛、事_レ親至孝、樂_レ善愛_レ物、学有_二渊源_一、通_二典礼_一又善_二和歌_一、精_二音律_一兼工_二筆札_一、而持_レ己謹厚、事_レ詳明、歷_二仕三朝_一最受_二孝明帝之知_一、及_二外事起_一其所_レ領皆枢密重事、每召对移_レ漏数十刻献替規画諸大臣多_レ所_レ不知、詔勅制令亦概出_二公手_一、其幽居也、每晨盥漱拜_レ闕、食畢正座左_二右圖書_一、商_二推古今_一諷詠写_レ懷、皆出_二愛君愛國之余_一、遇_レ有_二公事_一、遣_二書今相公_一、指_二陳利害_一、以最_レ之公称_二云_一、

一八〇 鎌田出雲日記抄(江戸藩邸在勤中)
安政五年戊午

五月十六日曇天寅風ハ晴出梅

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一今朝西郷吉兵衛入来ニテ候事、

一今晚西郷吉兵衛・有川七之助・堀仲佐衛門入来、尤吉兵衛明日出立、暫時御国許之様立帰り、又々歸府之筈

ニテ暇乞等イタシ候事、

御国元ニハ十日許リモ罷在、当地ノ形勢是迄打合候成行言上可致旨、深ク相談イタシ候事、

五月十七日雨天卯

一今日四ツ時致出勤候事、

一今日七ツ後日下部伊三次入来密談候事、

五月十八日曇天辰

一今日四ツ八ツ出勤致候事、

一八ツ後堀仲左衛門入来、越前橋本へ申入候事共被申候事、

事、

一京都御警衛之一条越前家へ西郷打合、彼方モ同意ノ由、

西郷歸国跡ハ堀又ハ拙者ヨリ可談旨申置候由共承候事

一今日御国元ヨリ飛脚着イタシ御内書被成下候、御警衛

等ノ諸事ニテ候事、

五月廿九日晴天卯

一今日御書被下候、公私用取込候ニ付、別勤頼合候事、

一七ツ半比越前藩橋本左内来訪、要用向相咄、日入前被
帰候、堀モ入来、先日来之御警衛等之事重々談合候、

西郷ヨリ申置候趣共彼ヨリモ被申聞、彼之御上(越前侯)
(松平重矩)

ニモ極内御同意、殊ニ先年ハ異国船之為御警衛御内願
モ被為在候ヨシ杯ノ事ニテ、此度ハ又別段ノ御警衛等

之御内意ニテ、此御方御趣意ト符合イタン候間、昨日
御書之趣モ粗相咄候、喜悅被帰候、細事ハ堀ヨリ可相

咄申入候事、

五月晦日晴天辰

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一今朝堀仲左衛門要用ニ付入来ニテ候事、

一八ツ後同断ニ付、仁禮雪庵入来、緩々相啗候、夕方堀
仲左衛門要用ニ付、又々一刻入来ニテ候事、

今晚橋本へ参ル由ニテ、今日ハ人数割リ、又ハ場所等

ノ相談ニテ候事、

六月朔日晴天巳

一今日四ツ時大圓寺へ御代参、夫ヨリ高輪へ出殿、当日

之御祝儀申上、直ニ帰宅、供平日ノ挾箱為持、台輪ニ
テ候事、

一夕方堀仲左衛門要用ニ付入来候事、

一七ツ後有川七之助用向ニ付入来之事、

一堀ハ橋本へ談合之成行被申出候、太守様御発駕ハ八月
中旬比御内定之由、疏人モ先比上着ノヨシ、彼是御供
人数上下惣人数モ申入候トノ事ニテ候事、

六月二日曇天ナリ、昼過ヨリ雨

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一先月廿九日之飛脚被相延置、今日差立候、御手許へ書
付差上候事、

一八ツ後仁禮雪庵要用ニ付入来、堀仲左衛門ニモ入来、

又暮過ニモ入来ニテ候事、

六月三日雨天未

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一今晚堀仲左衛門入来、暫時ニテ暫帰候事、

六月十七日晴天七ツ後ヨリ暮前迄雷雨

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一今朝御用ニ付、柘山直八入来ニテ候事、

一八ツ後堀仲左衛門・伊地知龍右衛門用向ニ付入来、堀
(左兵衛)

ニハ又々暮過モ一刻入来ニテ候事、

堀・伊地知ハ御警衛向ニ付、越前ト打合ノ手配共談合候、御国元御内定之事モ有之、其辺猶打合ノ事共談合

イタシ候事、

六月十九日晴天亥今日迄ハセシ

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一今朝桃山直八御用ニ付入来ニテ候事、

一七ツ後日下部伊三次入来、日暮比迄相咄、夜入又々同

入入来、四ツ前迄相咄候事、

一七ツ半比堀仲左衛門入来、日入前迄相咄候事、

一暮前田代孫九郎(御軍役掛書役)異国船入津一件ニ付、

一刻入来ニテ候事、

一御前様ヨリ御菓子并御重之内、御年寄文ヲ以頂戴被仰

付、一文ヲ以御受御礼申上候事、

六月廿二日雨天寅朝五ツ前正廳間々睡(兼田正純日記抄)ヨリ曇後晴

一今日四ツ八ツ致出勤候事、

一八ツ過ヨリ仁禮雪庵入来、堀仲左衛門ニモ暫時入来、

仁禮ニハ日入比退去、夫ヨリ桃山直八用向ニ付入来、

暮過退去ニテ候事、

一六ツ半時分田中利右衛門(御軍役掛書役)御用ニ付、一

刻入来ニテ候事、

一越藩橋本左内江、八重山煮海鼠一籠・泡盛一陶堀仲左衛門(相脱カ)へ頼差贈候事、

堀今晚橋本へ参ルニ付頼送候、今晚談合治定之管候、

御発駕モ程近ク御国元御手当ニモ相掛ル談シ、彼ノ御

方ニモ御同様之御事故、早ク内定致シ、且西郷ニモ御

国許出立不致内々申上度トノ事共ニテ候事、

六月廿三日雨天卯

一今日四ツ早目ニ糺合方へ書記講義式日ニ付、筑州(川

上筑後久封)一緒ニ出席、右相濟八ツヨリ帰宿候事、

一八ツ半過堀仲左衛門用向ニ付入来、昨夜越前橋本へ送

品之挨拶并談合之趣承候、何モ都合能談合調候旨申出

候事、

一明日ハ極急キノ飛脚指立都合イタシ候事(日数十四日ト

六時ノ制限)

六月廿四日雨天辰

一今日四ツ八ツ致出席候事、

一今朝有川七之助用向ニ付入来ニテ候事、

一八ツ後御国元ヨリ(式日中急キ着(兼田正純日記抄))急キ飛脚着、書状等到来候事、

但右ニ付東郷八郎夕方御内書持参ニテ候事(齊彬公御親

書

一 今〔町飛脚相立書状遺候事〔鎌田正純日記抄〕〕日御飛脚差立遣候事、

六月廿六日曇天午後八ツ後晴夜中雨〔ヨリ脱カ〕

一 今日四ツ八ツ致出勤候事、

一 今晚堀仲左衛門入来、越〔堀相咄候事脱カ〕前橋本ヨリ雲丹并奉書到来、

堀氏頼マレ送ラレ候、礼状ハ明日可遣ト存候事、

〔一〕今朝有村俊濟・永山嘉左衛門入来ニテ候事、

一 七ツ後ヨリ有村俊濟用向ニ付一刻入来ニテ候事、

一 川筑州ヨリ西瓜一ツ被贈候付、菓子一箱差贈候事〕

六月廿八日曇天申間々晴夕方雨〔ヨリ脱カ〕

一 今日四ツ八ツ致出勤候事、

一 今朝物頭東郷左太夫入来、勤場ニ付不束之内意承候間、

右之趣急度相達置候事、

一 七ツ後堀仲左衛門・日下部伊三次用向ニ付入来、夜入

五ツ比迄相嘶候、先日ヨリノ事共都合能咄合、越前ニ

モ何モ無異儀旨共ナリ、

橋本ヨリ堀ヲ以彼御方様へ極内被申上候処、御満悦之

趣共被申遣候、近日飛脚ヲ以其段申上ル旨堀へ答置ク

トノ返答モ致置候トノ事、

〔右書寫稿中鎌田正純日記抄にて校訂〔國立国会図書館所蔵〕〕

一八一 橋本左内武田伊賀ニ与ル書第一号

八月廿八日御認之高翰拜誦、時下次第寒冷相加候得共
大厦被為揃愈御勇健被成御起居奉恭賀候、倍ハ兼テ承
及候御国事、果シテ種々姦説・詐言等申触シ候条伝聞
被符合致候、実ニ言語同断之次第、執事御心中モ奉遙
察候、於此表サへ諸有志者何レモ切齒罷在候、近来ニ
到候テハ進毒（慶永公ノ身上）等モ相止候哉如何、此方
へハ何モ相聞不申故、大方少シハ御静謐ニ相向ヒ候ナ
ラント愚推仕居候、何分外部ニ御座候姦根（彦根ヲ云乎）
御手ニ入不申候半テハ、逆モ御安心之場合ニハ難運ト
奉存候、呉々戦兢之御心地、当時御遺失ナク無事之時
ニテモ御探索御禁防御嚴重ニ有之度候、兎角人情少シ
康キ時ハ怠生シテモノニ御座候間、何分些モ御油断ナ
ク敵シク御手当御座候様專一ト奉存候、今般 老公（
水戸老公）ヨリ弊藩へ御書御遣シ被遊、外夷之状况仔細
ニ御申越、小拙モ風ト拝承仕候、諸々不容易之大変実
ニ為国家深憂恐懼罷在候、去月十四五日頃ノ飛脚ニ十
三日附之御書一小藩ヨリ相廻リ、岩瀬監察被罷帰、外
夷之模様中々不輕次第言述被致候旨、端緒申参リ候ニ
付、寡某ニモ不安被存居候処乍、 老御之御書到着、

愈内実分明ニ相成、深ク憂勞被致居候、今ニ至リ候テハ、老御迎モ被成方モ御座有間敷、如何様幕之有司相願御相談等仕候共、兼テ不養生之病人危殆ニ到リ、医者ヲ責候同様之訳、真ニ無益ナル義ト奉愚察候、老御迎モ御別ニ妙手段ナキ義ニ候ヘハ、弊藩ナトニテハ尚更之事、衆寡強弱等料リ候得共、迎モノ外夷ニ可敵算ハ六ヶ數候得共、我累ケ得タル日本魂而已ハ何日何地迄モ貫キ得可申候、但此計聊奉対神州臣子之職分相尽申候義欵ト奉存候、依之方々一獺虜浪華ヘ推寄京師辺乱妨等ニ及候様ノ事モ有之候ヘハ、其節ハ是非々々弊藩ヨリ微力相尽シ(前巻第^(マ)号)、彦根云々ノ事実知ルニ足ル候積ニ一統罷在候、固ヨリ疲弊ノ小邦ニ御座候ヘハ、迎モ志ノ千カ一ナラテハ力不及申トハ被存候得共、臣子之義成敗利鈍ハ預メ可論ニモ候ハスト存込、精々ノ忠勤ハ致候心得ニ御座候、東都之事ハ当年ハ在府ニテモ候ハス、迎モ致方ナク候マ、此義ハ専ラ老御並尾上両御方ヘ奉託候心得ニ御座候、即チ今便尾ヘモ一筆被遊候筈ニ御座候、老御御憂慮ノ程モ被奉察候義ニ御座候故、何レ寡某ヨリ委細心得方ハ可被申上候得共、右等之処執事ニモ能々御含ミ之被下、可然良

工夫御座候ヘハ、御内々御申聞セ被下候様仕度候、偕又東都之義ハ是非十分ニ御尽力被下、御平生之御武徳御輝シ、天晴水藩之御処置ニ依リ、天下左衽之害ヲ免候程之事呉々奉希望候、尚又宜シキ御手筋モ御座候ヘハ、何卒幕ヨリ御勇断之御令相下リ、列藩之疲弊ヲ救カ、兵仗ヲ備、戦鬪之術飽マテ講究致候様、乍遅延モ致度モノニ御座候、

昨年ノ初冬ハ地震後ニテ都下肅索ニ御座候処、当年ハ又々海警、偕々恟懼之至ニ御座候、早々不宣、

十月六日

端元(橋本左内)

舞殿君(水戸武田伊賀)

又白、時下御自愛方々奉祈上候、隨身ノ費用モ御座候ヘハ無御遠慮可仰被下、以上、

一八二 全上第二号

久々御不沙汰申上背本意候、時下嚴寒ニ御座候処、先以御清健被成御奉職奉欣賀候、偕此者横山猶藏ト申同藩同志之人ニ御座候、未夕年弱ニテ未熟ニハ御座候得共、篤志之人物ニテ、此節ハ小拙同居仕居候義ニ御座候、近比方ニ令名之御人ニモ出会致度願意居候付、執

事御盛名ヲモ伝聞仕、何卒一度御高話何度、依小拙ヨ
リ御紹介申上吳候様ニト厚被頼候故、添書仕指上候間、
御尺暇ニモ被為入候へハ、御面談被成遣候様万々奉伏
希候、吳々粗忽ナル事無之者へ、御座候間、其条ハ御安
意被成下度候、倅近況之勢誠ニ痛嘆ニ余リ候事共、今
夕執事ニモ無御心配ト奉拜察候、今之模様ニ御座候テ
ハ縦令一事建議等被相行、一二之善事良策御座候共、
夫ニテ安心ハ仕兼候塩梅、誰ソ回天之力有之人担当幹
旋無之ニテハ唯々逐時累日、次ニ沈溺可申ト窃ニ奉杞
憂居候、何レ不遠中微閑ヲ窃上堂仕、御雅譚奉拜聴度
奉存上、右一応為得貴意候、草々如此ニ御座候、頓首
百拜、

十二月初子

武田君（水戸藩武田伊賀） 喬紀

御直披